The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告
Author(s)	森安, 孝夫; オチル
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20780
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

突厥・ウイグル・モンゴル時代の遺蹟出土瓦とレンガ
Tiles and Bricks from the Sites in Mongolia

三辻利一・村岡　倫
(Toshikazu MITSUJI / Hitoshi MURAOKA)

1998 年度収集記録（村岡　倫） Report on the Collection of 1998 (Hitoshi MURAOKA)

1996 年・ 1997 年の瓦・レンガのサンプル収集については，行動記録を参照されたい．本処では 1998 年度のサンプル収集についてのみ報告する．

各遺蹟の特定の場所ごとに，瓦・レンガの断片を収集した． 1 cm 角のサイコロ型の破片を最低 10 個ずつ（数がそろわないことも多かった），なるべく地中に埋まっているものを採集し，採集した遺蹟と遺蹟内の場所を明記したカードと共にビニール袋に入れて分類し，帰国後，奈良教育大学・三辻利一教授に分析を依頼した．

また，レンガ採集に際しては，白石がカラコルムの遺蹟のレンガのサイズが時代によって異なることを明らかにしている（白石 1998）ことから，厚さによって分類した．白石によれば，カラコルム万安宮では 4.0, 4.5, 5.0, 5.5, 6.0 cm の５種類の厚さのレンガが使用されているので，我々もほぼ 0.5 cm ごとに分類した．ただし，胎土分析の結果，その化学特性と厚さの相違とには相関関係はみられなかった．

①ツァガン=バイシン（８月１日）：村岡が通訳のバトジャルガルに協力してもらい，瓦・レンガを城内と城外周辺に分けて収集した．その他，ツァガン=バイシン南西・南東の角から南へ 37 m の窯跡の焼けカスの断片もいくつか採集した．

②バイバリク遺蹟（８月４日）：全員で手分けして瓦・レンガの収集にあたる．第１城址ではレンガの厚さ・材質によって 11 のタイプに分けて採集，第２城址では５つのタイプに分けて採集，瓦については第１・２・３城址ごとに収集した．

③釈迦院遺蹟（８月６日）：全員で手分けして釈迦院遺蹟内の 13 のマウンドから瓦を集め，マウンドごとに分類した．レンガはマウンドごとではなく，釈迦院遺蹟全体から収集し，厚さ・材質によって７つのタイプに分類した．また，オチル・ダシバトラフがデルゲル=ムレン河対岸の遺蹟の調査の際に，持ち帰ったレンガの断片（厚さ不明）もサンプルに加えた．

④ハルホル=ハン城址（８月８日～ 11 日）：村岡が各城址を回り瓦を収集した．元代に特有の緑釉瓦も多く散乱しており，そのため，ここでは，城址ごと，城址内の特定の場所ごとに分類するだけでなく，さらに緑釉瓦とその他の瓦に分類した．その後，全員で手分けして各城址からレンガを集めた．第１城址とその他の城址に分け，さらに厚さによって分類した．また，第３城址鹿石北西側 100 m ほどに発見された窯跡の焼けカスの断片もいくつか採集した．

⑤カラコルム万安宮跡（８月 16 日）：緑釉瓦とその他の瓦に分けて収集．

⑥バヤン=ゴル遺蹟（８月 17 日）：加藤の報告 (Kato 1997, pp. 23-24) にある城址（C）と新たに発見した城址（A）に分け（この点については松田孝一担当「モンゴル時代遺蹟・遺物現況」を参照），瓦を採集．A 城址では緑釉瓦も見つかった．また，レンガも採集し厚さによって分類したが，A 城址では 4.0, 4.5, 5.0, 5.5 cm の４種類のレンガが採集できたが，C 城址では 5.5 cm のもの１種類だけしか発見できたなかった．

⑦カラ=バルガスン（８月 17 日）：瓦はカラ=バルガスン南の礎石が散乱している場所と北の集落址で発見．村岡が採集した．レンガについては全員で手分けして，城内と城外南側に分けて収集，さらに厚さによって分類した．

⑧ハラティン=ドルベルジン=バルガス（８月 17 日）：中央マウンドに瓦が散乱，レンガは厚さ不明の２断片のみを発見，ともに採集．

⑨ドイティン=バルガス（８月 17 日）：レンガを採集，厚さによって分類．青い釉薬のついたものが多数あり．瓦は発見できなかった．

⑩メルヒー=トルゴイ（８月 18 日）：松田・村岡が瓦とレンガを収集，レンガは厚さによって分類．

⑪カラコルムの東亀趺付近（８月 18 日）：宇野・松川・中村・オチル・ガルサンツェレンが緑釉瓦とその他の瓦に分けて収集．

⑫宣威軍城址，多羅尊廟遺蹟内（８月 21 日）：中村・村岡が瓦・レンガを採集，レンガを厚さによって分類．

⑬オンギ遺蹟（８月 21 日）：オチル・村岡が瓦・レンガを採集，レンガを厚さによって分類．

⑭シャーザン=ホト（８月 23 日）：オチル・宇野・村岡・が瓦・レンガを採集，瓦は緑釉瓦とその他の瓦に分け，レンガを厚さによって分類．

モンゴル瓦の胎土分析（三辻利一）

X-ray Fluorescence Analysis of Tiles and Bricks from Mongolia (Toshikazu MITSUJI)

1）目的

モンゴルには突厥時代（6～8世紀），ウイグル時代（8～9世紀），モンゴル時代（13～14世紀），モンゴル時代以後の遺蹟から大量の瓦片が出土している．これらの瓦の生産と供給の関係を調査研究するため，瓦胎土の蛍光X線分析が行われた．

2）分析法とデータ解析法

瓦小片はタングステンカーバイド製（硬度　9.5）の刃をもつ小型研磨機で表面を研磨し，付着汚物を除去した．こうして処理された瓦小片はタングステンカーバイド製乳鉢の中で 100 メッシュ以下に粉砕された．瓦小片を粉砕するのは試料を均質化するためと，粉末試料を再度固め，一定形状の測定試料を調製するためである．

粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約 13 トンの圧力を加えてプレスし，内径 20 mm, 厚さ 5 mm の錠剤試料を作成した．一定形状の測定試料を作成するのは蛍光X線分析による定量分析は相対分析であり，試料と同質で同じ形状の標準試料（既に，元素含有量が計測された試料で，学会で公認されている試料を使用するのが普通である）の各元素の蛍光X線強度との比較の上に元素含有量が求められるからである．

筆者は岩石標準試料（日本地質調査所で 20 種類近い種々の岩石標準試料が調整されている）のうち，JG-1（Japan Granite, No. 1 の略）を標準試料として使用している．JG-1 は粘土と同様，Al2O3, SiO2 を併わせて 80％以上を含有し，その他の主成分元素の含有量も類似しており，粘土の蛍光X線分析の標準試料としては最適である．

蛍光X線分析には波長分散型（理学電機製，3280 型機）の装置を使用した．この装置には 6 列 8 行，48 個の試料が同時に搭載できる自動試料交換機が連結されている．

分析装置は 3 種類の分光結晶と，比例計数管，シンチレーションカウンターの 2 種類の検出機を有し，Na, K, Ca, Fe, Rb, Sr の 6 元素を選択的に測定できるようになっている．測定，データの打出し，試料の交換がすべて自動化されており，迅速に分析が可能である．48 試料（このうち一個は必ず，JG-1 である）の分析の所要時間は 5.5 時間である．もちろん，バックグラウンドも測定し，全ピーク面積から差し引き，正味のネット強度も打ち出されてくる．

幾種類もの岩石標準試料を使って，前もって，検量線を作成しておき，この検量線を使って未知試料の分析データから元素含有量（％または ppm 表示）を求めるのが普通の分析法である．

しかし，土器の産地問題の研究では大量の試料の分析データが必要なので，標準試料，JG-1 の各元素の蛍光X線強度で標準化した値で十分地域差はみれるので，筆者はいちいち，％や ppm 濃度に変換せず，JG-1 による標準化を使ってデータ解析を行っている．

データ解析は通常，K-Ca, Rb-Sr の両分布図を作成し，大雑把な地域差を確認した上で，クラスター分析や判別分析などの統計学の手法を使ってきちんと整理されるのが普通である．Na, Fe 因子は補足的に使用されているのが現状である．

今回は 1000 点を越える試料を分析した．データ解析にはかなりの時間がかかるので地域差がもっともよくみれる K-Ca 分布図を使用した．各時代ごとの地域差，同時代での地域差を把握することにした．

3）分析結果

一般的に日本の瓦に比べて，モンゴルの瓦胎土には K, Ca, Na 量が多いという特徴がある．とくに，Na 量は多く，日本の瓦の胎土にはこれほど多くの Na 量は含まれていない．これはモンゴルの風土のためで，十分に風化が進んでいない粘土が瓦の素材となったことによると考えられる．つまり，モンゴルの瓦の化学特性は素材粘土がモンゴルのものであることを示唆している．

それにもかかわらず，瓦の胎土の化学特性は年代により，また，地域によって異なっていた．まず，年代ごとに分けて分析結果を説明する．

①突厥時代の瓦

ブグト遺蹟出土瓦の K-Ca 分布図を図 1 に示す．Ca 量が大きくばらつくので，両軸には対数スケールをとってある．一般に，モンゴルの瓦には Ca 量のばらつきは大きい．日本に比べてモンゴルでは岩石の風化が十分に進んでおらず，岩石の破削粒が残存しているためと考えられる．

ブグト遺蹟の瓦の分析値を包含するようにして，A 領域を長方形で描いてある．本来，この領域は試料の分析データを統計学的に処理し，等確率楕円で描かれる．ここでは描き易さを考慮に入れて，とくに，統計学的な処理をせず，全試料を包含するようにして長方形に描いた．したがって，その領界はとくに，統計学的な意味をもたないが，それでも，他の瓦の分布領域との比較は十分できるので，長方形の領域を描いた．

ブグト遺蹟は 6 世紀代の遺蹟であり，今回，これと比較される同時期の遺蹟出土瓦はない．8 世紀代の多くの瓦が分

布する B-1 領域と図 1 では比較してある．Ca 量に明らかな違いがあり，ブグト遺蹟の瓦胎土は 8 世紀代の多くの遺蹟出土瓦の胎土とは異なることがわかる．粘土を焼成しても，化学特性には変動が起こらないことが実験データで確認されているから，瓦胎土の化学特性の違いは素材粘土の違いを示す．そして，一般的に，素材粘土の違いは粘土の産出地の違いであり，多くの場合，瓦の生産地の違いを示すものと考えられている．したがって，6 世紀代のブグト遺蹟の瓦の生産地は 8 世紀の瓦の生産地とは異なると考えられる．

次に，8 世紀代の遺蹟出土瓦の化学特性を逐次説明する．

図 2 にはイフ=ホショートゥ遺蹟出土瓦の K-Ca 分布図を示す．B-1 領域と B-2 領域の 2 ヶ所に分かれて分布する．B-1 領域に分布するのは灰色瓦であり，B-2 領域に分布するのは黒色瓦である．このことは灰色瓦と黒色瓦の生産地は別々であることを示している．さらに，レンガは灰色瓦と同じ領域に分布し，レンガと灰色瓦は同じところで生産されたものであることを示している．

図 3 にはトニュクク遺蹟から出土した瓦の K-Ca 分布図を示す．瓦とレンガがともにA領域に分布することは注目される．8 世紀代の瓦の中にA領域に分布するものは他にない．モンゴル時代の瓦にもない．そうすると，6 世紀代には瓦の生産地は少なく，トニュクク遺蹟の近傍にあり，ここから，瓦をブグト遺蹟へ運び込んだことも考えられる．その場合には何らかの理由で工人がトニュクク遺蹟の周辺に集められ，瓦を生産したものと思われる．もう一つ注目すべき点はトニュクク遺蹟の瓦とレンガの化学特性が必ずしも，ぴたりとは一致していない点である．瓦もレンガもともにA領域に分布し，同じ地域内で作られたものではあっても，同じ場所ではなく，少しずれた場所で作られたものである．そのずれが，図 3 ではA領域内でのずれとなって現われていると考えられる．

図 4 にはビルゲ=カガン廟出土瓦，レンガの K-Ca 分布図を示す．ともに，B-1 領域に分布することがわかる．

図 5 にはキョル=テギン廟出土瓦，レンガの K-Ca 分布図を示す．いずれも，B-1 領域に分布する．図 4 と比較すると，キョル=テギン廟の瓦，レンガはビルゲ=カガン廟のものに比べると，同じ B-1 領域でも，少し右側に片寄って分布しており，もしかしたら，両廟の瓦は必ずしも同じ場所で生産されたものではない可能性がある．しかし，同じ地域内で製作されたという点では相違あるまい．

図 6 にはホショー=ツァイダム第三・第四遺蹟から出土した瓦，レンガの K-Ca 分布図を示す．大部分のものは B-1 領域に分布することがわかる．ここで，第四遺蹟から出土した黒色瓦が B-2 領域に分布することが注目される．図 2 に示したイフ=ホショートゥ遺蹟出土の黒色瓦も同じ B-2 領域に分布した．つまり，両黒色瓦は同じ生産地で作られた瓦である可能性が出て来たのである．

ここで，同じ黒色瓦が出土するオンギ遺蹟のものの分析データを調べた．オンギ遺蹟出土の黒色瓦の K-Ca 分布図を図 7 に示す．オンギ遺蹟の黒色瓦も B-2 領域に分布することがわかる．しかも，オンギ遺蹟には B-1 領域に分布する瓦は出土していない．

これらのことから，もしかしたら，オンギ遺蹟の周辺に B-2 領域に分布する黒色瓦の生産地があり，イフ=ホショートゥ遺蹟やホショー=ツァイダム第四遺蹟へ黒色瓦を供給した可能性がある．他方，B-1 領域に分布する灰色瓦の生産地はホショー=ツァイダム地区内にあった可能性がある．そうすると，イフ=ホショートゥ遺蹟へはホショー=ツァイダム地区で生産された地元産の瓦と，オンギ遺蹟周辺で作られた搬入瓦が供給されたことになる．また，カラコルムから約 350 km も離れたトニュクク遺蹟からはA領域に分布する瓦しか存在していないが，これは在地産の瓦である可能性が高い．

そして，6 世紀には未だ，瓦はあちこちでは作られておらず，トニュクク遺蹟がある地域内で作られた瓦（A領域に分布する瓦）がはるばるブグト遺蹟まで運ばれたと推察することもできよう．6 世紀代の瓦の生産と供給を考えるには，ブグト遺蹟以外に，いくつかの遺蹟出土瓦の分析データが必要である．

これが突厥時代の瓦の生産と供給に関する一つの構図である．今後，さらに徹底して瓦片の分析を進めると，もう一つ別の構図が出来るかもしれないが，ここでは今回分析した瓦のデータからの一試案として提出しておく．

②ウイグル時代の瓦

図 8 にはカラ=バルガスンの宮殿から出土した瓦，レンガの K-Ca 分布図を示す．大部分の試料を包含するようにして C-1 領域を描いた．比較のために，B-1 領域を描いてあるが，両領域は近接することがわかる．もし，B-1 領域に分布した瓦がホショー=ツァイダム地区で作られたものだとすれば，C-1 領域に分布する瓦もそれ程遠く離れていないところ，つまり，カラ=バルガスンの周辺で作られた可能性が高い．図 9 にはカラ=バルガスンの市街区内から出土した瓦の K-Ca 分布図を示してある．C-1 領域に分布することがわかる．

図10 にはツァガン=バイシンの城内，城外から出土した緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す．大部分のものは城内，城外を問わず，C-1 領域に分布し，カラ=バルガスンの瓦と同じ地域内で作られた瓦であることを示している．一部に，B-2 領域とA領域の間に分布するものがあるが，目下のところ，これと同じ胎土の瓦は外には見当らないので，ここでは考察せずにおく．

図11 にはツァガン=バイシン出土の灰色瓦と赤色瓦の K-Ca 分布図を示す．C-1 領域には分布せず，新たに，C-2 領域に分布し，カラ=バルガスンの瓦とは別のところで作られた瓦であることを示している．なお，灰色瓦と赤色瓦の胎

土にはとくに，差異は認められなかった．

以上のことから，ウイグル時代にはカラ=バルガスン周辺と，バイバリク周辺に瓦の生産地があり，前者は C-1 領域に，後者はC-2 領域に分布し，それぞれ，至近距離にある遺蹟に瓦を供給していたことになる．

前述したように，古い時代には瓦の生産地は限定された所にしかなく，遠距離を瓦を運ぶ場合があるが，ウイグル時代（9世紀代）に入ると，至近距離で瓦を生産し，遠距離を運ばなくなる傾向があることがわかる．

③モンゴル時代の瓦

今回分析対象となった遺蹟はモンゴル時代のものが多い．それにもかかわらず，胎土の種類は以下に示すように少ない．

図12 にはカラコルム地区のカラコルム都城，万安宮，バヤン=ゴルの緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す．ここでもモンゴル時代の比較対照領域の一つとして D-1 領域を描いた． D-1 領域は C-1 領域に含まれており，ウイグル時代のカラ=バルガスンやツァガン=バイシンの瓦の胎土に類似する．したがって，これらの瓦もカラコルムに生産地があるものと思われる．**図13** にも，万安宮と東門の亀から出土した緑釉瓦胎土の K-Ca 分布図を示す． C-1 領域に分布することがわかる．

図14 にはカラコルム都城南のメルヒー=トルゴイ出土瓦の K-Ca 分布図を示す． D-1 領域に分布することを示す．

図15 にはカラコルム都城西北のバヤン=ゴル出土瓦の，また，**図16** には緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す．瓦も緑釉瓦も同質の粘土を素材として使ったとみられるが，いずれも，D-1領域の右端領域に分布する．**図12～16** を比較すると，いずれの瓦も D-1 領域にほぼ対応しているが，分布する位置は微妙にずれることがわかる． D-1 領域は C-1 領域に含まれることから，これらの瓦はカラコルム地区で製作したものであることには相違ないが，作った場所は必ずしも，同じところではなく，少しずれたところで別々に作られた可能性があることを示す．

図17, 18 にはシャーザン=ホト出土の瓦と緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す．やはり， D-1 領域に対応するところに分布するが，他の遺蹟出土のものとは微妙にずれた位置に分布することがわかる．メルヒー=トルゴイの瓦とも微妙にずれて分布する．なお，瓦と緑釉瓦の胎土には差異は認められないので，同じところで製作した可能性もある．

次に，カラコルムから 400 km も離れた所に在る釈迦院遺蹟出土瓦の胎土について説明する．

図19 には，釈迦院遺蹟から出土した瓦の K-Ca 分布図を示す． D-1 領域とは明らかに異なるところに分布することがわかる．つまり，カラコルムの瓦とは別のところで製作された瓦である．これらを包含するようにして， D-2 領域を描いてみた．

図20 には，釈迦院遺蹟から出土した瓦と緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す．やはり D-2 領域に分布し，**図19** に示した瓦と同じ胎土をもつことがわかる．さらに，緑釉瓦の胎土も同じであることがわかる．したがって，緑釉瓦の製作には特別な粘土を使用した訳ではないことがわかる．緑釉で瓦の表面を固めるという特殊技術が使われたのである．

次に，カラコルムの北西，約 100 km のところに在るハルホル=ハン遺蹟出土瓦，緑釉瓦の分析結果を示す．

図21 にはハルホル=ハン第 1 城址出土瓦の K-Ca 分布図を示す． D-2 領域にほぼ対応したところに分布するものの，釈迦院遺蹟の瓦とは少しずれて分布することがわかる．このことは釈迦院遺蹟の瓦とは別のところの製品であることを示している．**図22** にはハルホル=ハン第 1 城址出土の緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す． D-2 領域に分布するが，瓦とは少しずれて分布する点が注目される．この場合は瓦と緑釉瓦は別々のところで製作された可能性がある．

図23 にはハルホル=ハン第 4 城址出土瓦の K-Ca 分布図を示す．やはり， D-2 領域に分布する．第 1 城址の瓦と同じ胎土とみられる．**図24** には，緑釉瓦の K-Ca 分布図を示す．その分布位置から，第 1 城址の緑釉瓦と同じ胎土とみられる．

図25 には第 3 城址の瓦の K-Ca 分布図を示すが，第 1 ・第 4 城址の瓦と同じ胎土であることがわかる．**図26** には緑釉瓦の K-Ca 分布図を示すが，これも，第 1 ・第 4 城址の緑釉瓦と同じ胎土であろう．

したがって，それぞれ同じところで製作された瓦と緑釉瓦がハルホル=ハン第 1 ・第 3 ・第 4 城址へ供給されたことがわかった．

最後に，ドイティン=バルガスの緑釉瓦とレンガの K-Ca 分布図を**図27** に示す．いずれも， D-2 領域に分布する．そして，その分布位置から，ドイティン=バルガスの緑釉瓦もハルホル=ハン第 1 ・第 3 ・第 4 城址の緑釉瓦と同じ胎土であるとみられる．また，レンガも第 1 ・第 3 ・第 4 城址の瓦と同じ胎土であるとみられる．したがって，ドイティン=バルガスの瓦と緑釉瓦はそれぞれ，ハルホル=ハン第 1 ・第 3 ・第 4 城址城の瓦，緑釉瓦と同じ生産地の製品である可能性がある．

この結果，モンゴル時代の瓦は大きく分けて 2 種類あり，一つは D-1 領域に，また，他の一つは D-2 領域を中心に分布する．前者はカラコルムの諸遺蹟から出土し，カラコルムに産地があるものと思われる．後者はカラコルムを離れた釈迦院遺蹟，ハルホル=ハン遺蹟，ドイティン=バルガスなどの遺蹟から出土する．したがって，カラコルム以外の地で製作された瓦である．しかし，胎土が 2 種あるとはいえ，2 種類に大別されるというだけで，胎土は遺蹟によって微妙に異なっており，瓦の製作場所はいくつもあったことを示唆している．そして，製品の瓦は至近距離への供給が一般的であったと推察される．

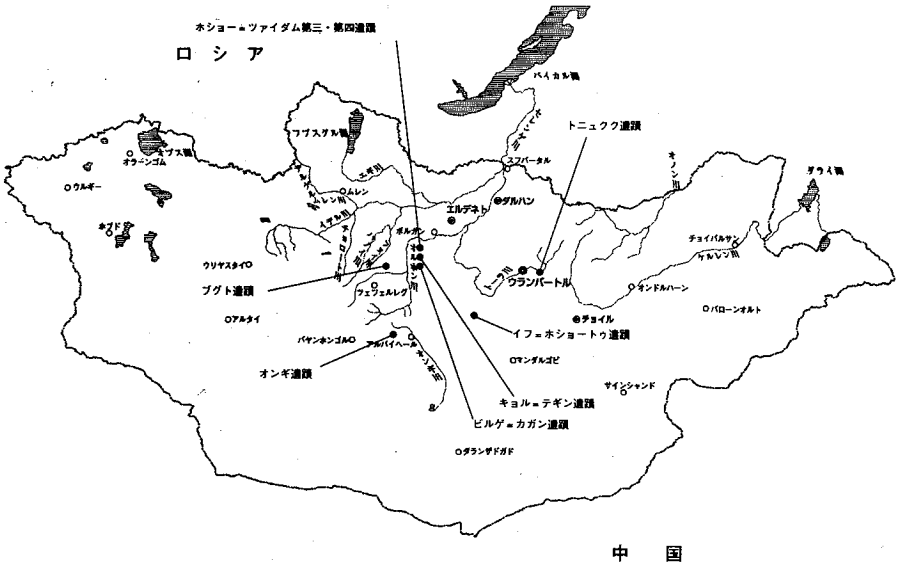
D-1 領域に分布する瓦の生産地はカラコルムにあるものと推定される．これに対して D-2 領域に分布する瓦はカラコルムの北西部のドイティン=バルガス，ハルホル=ハン，釈迦院遺蹟から出土する．したがって，これらの瓦の生産地はカラコルムの北西部にあることはほぼ間違いないが，このような化学特性をもつ粘土がカラコルムの北西部に広く分布しており，これらの遺蹟の近くでそれぞれ，別個に瓦を製作しているのか，それとも，少数の場所，例えば，釈迦院，ハルホル=ハン遺蹟を中心にして瓦を製作しているのか，まだ，判断は下せない．

上述して来たように， K-Ca 分布図での分布の位置の比較だけで十分，瓦胎土の化学特性および，地域差は認められる．

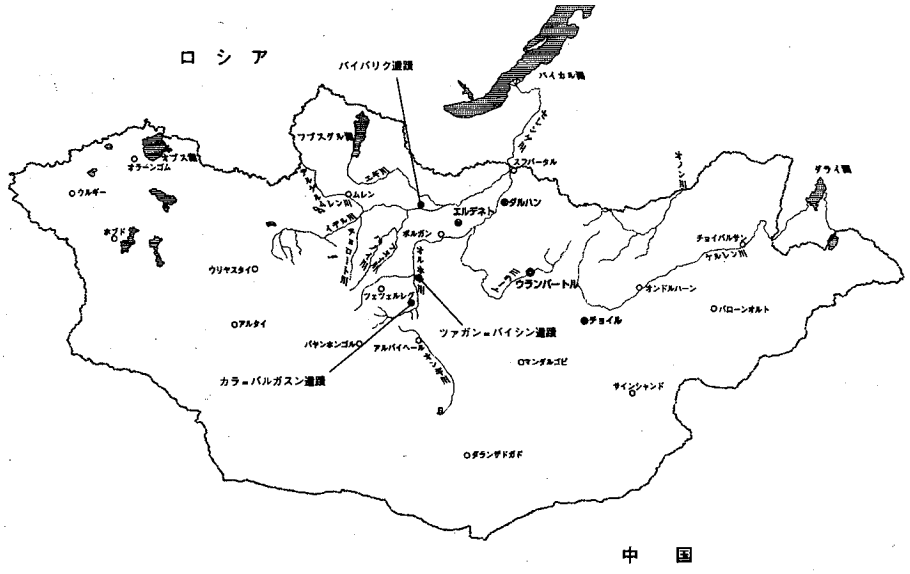
その地域差を地域ごとに，また，時代ごとに分けて整理していくと，モンゴルの瓦の生産と供給に関する情報が得られる．この情報はこれまでに考古学に提示されなかった胎土分析による新しい情報であり，今後，瓦の型式，模様などの考古学的情報とかみ合わせることによって，さらに有効に生かされていくものと期待される．

突厥・ウイグル・モンゴル時代の遺蹟出土瓦とレンガ　参考地図

突厥時代



ウイグル時代



モンゴル時代

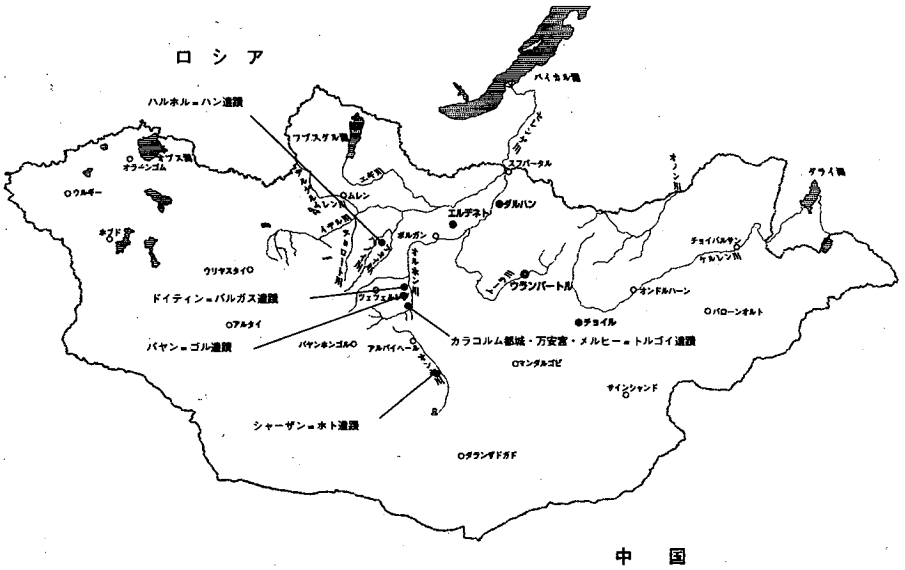


図1　ブグト遺蹟出土の瓦のK-Ca分布図

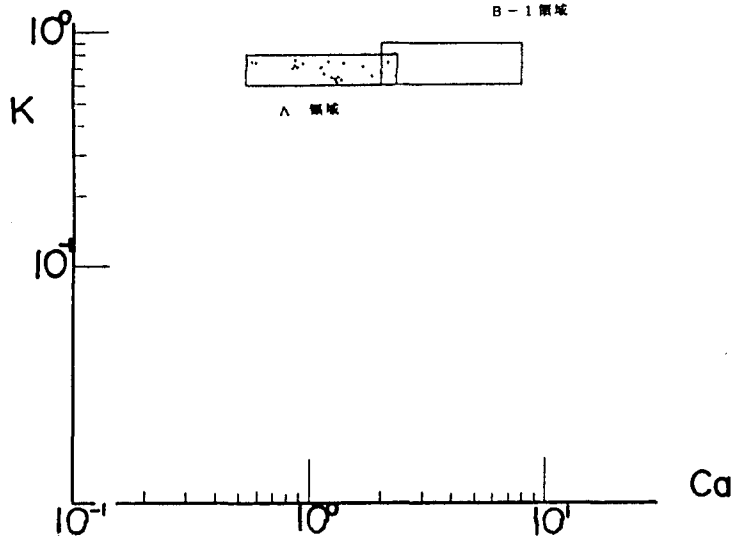


図2　イフ=ホショートゥ遺蹟出土の瓦とレンガのK-Ca分布図

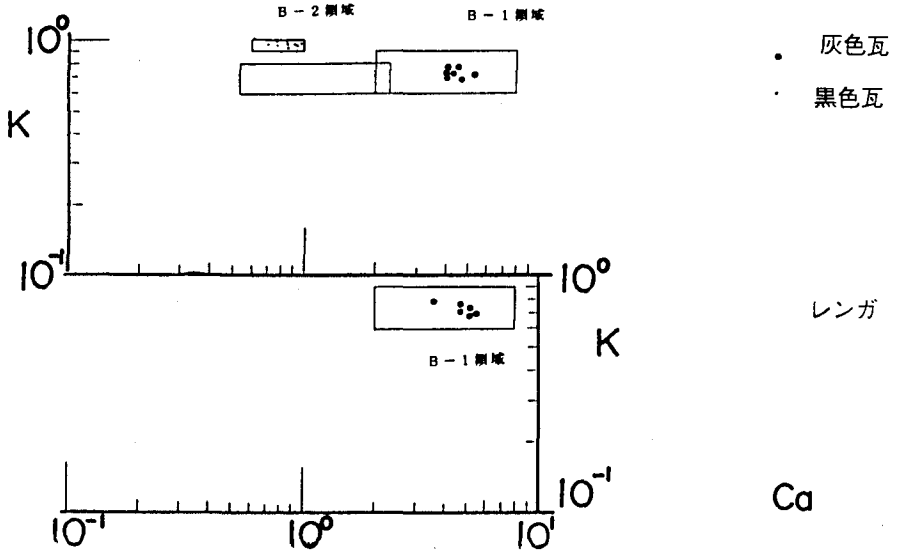


図3　トニュクク遺蹟出土の瓦とレンガのK-Ca分布図

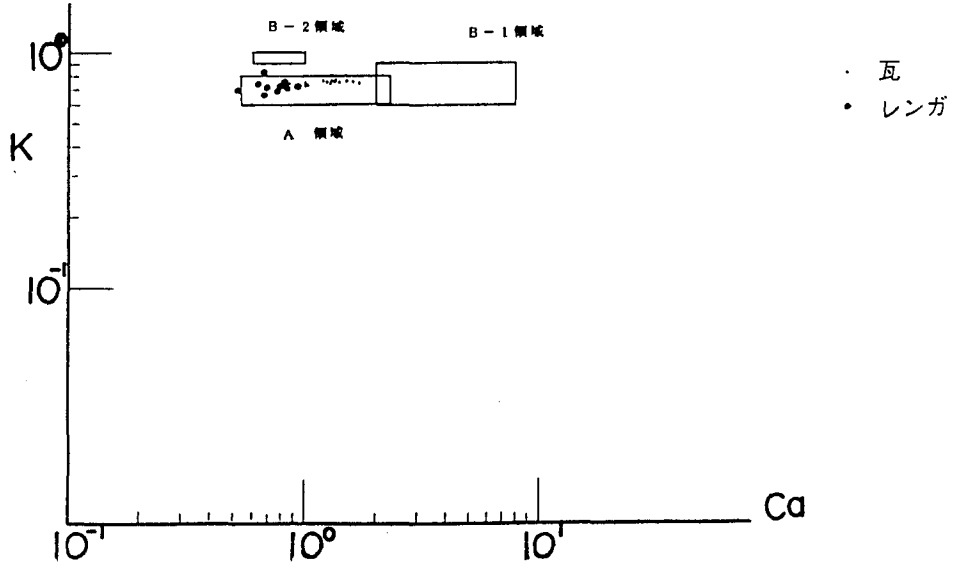


図4　ビルゲ可汗遺蹟出土の瓦とレンガのK-Ca分布図

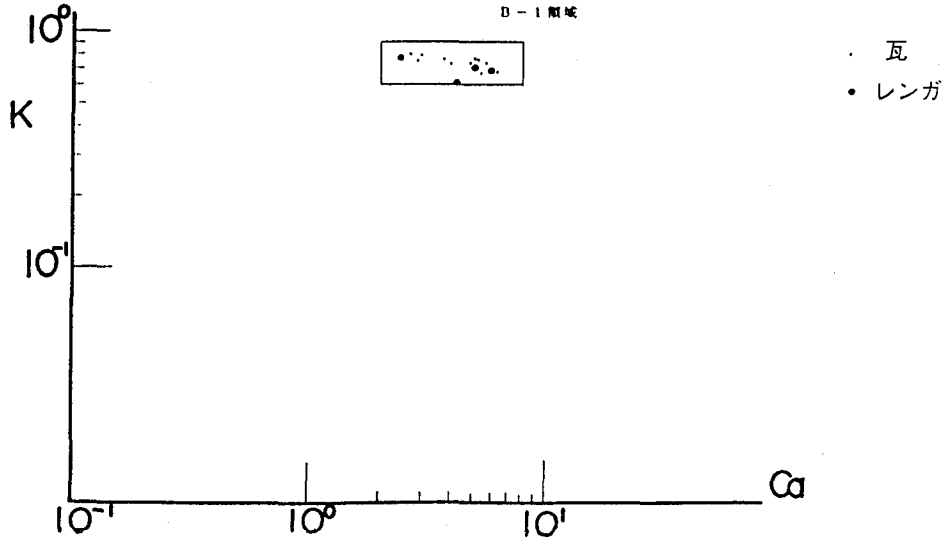


図5　キョル=テギン遺蹟出土の瓦とレンガの K-Ca 分布図

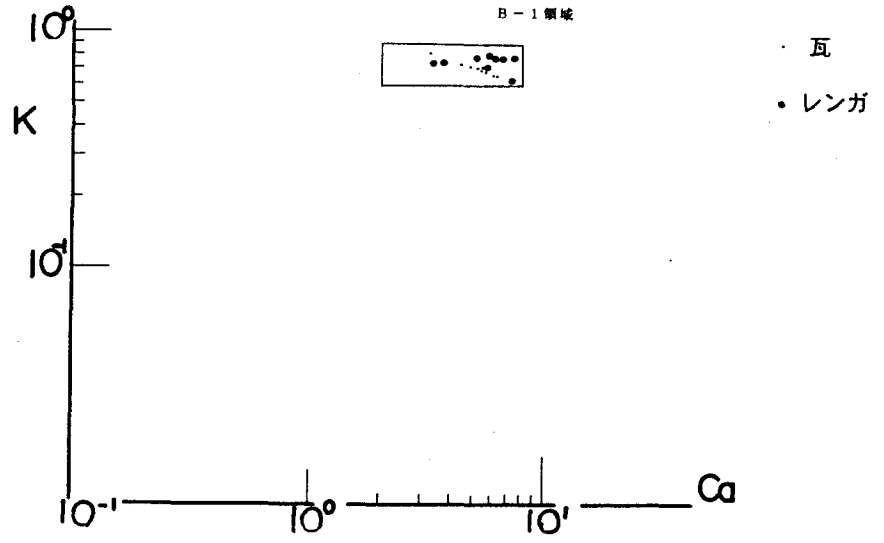


図6　ホショー=ツァイダム遺蹟出土の瓦とレンガの K-Ca 分布図

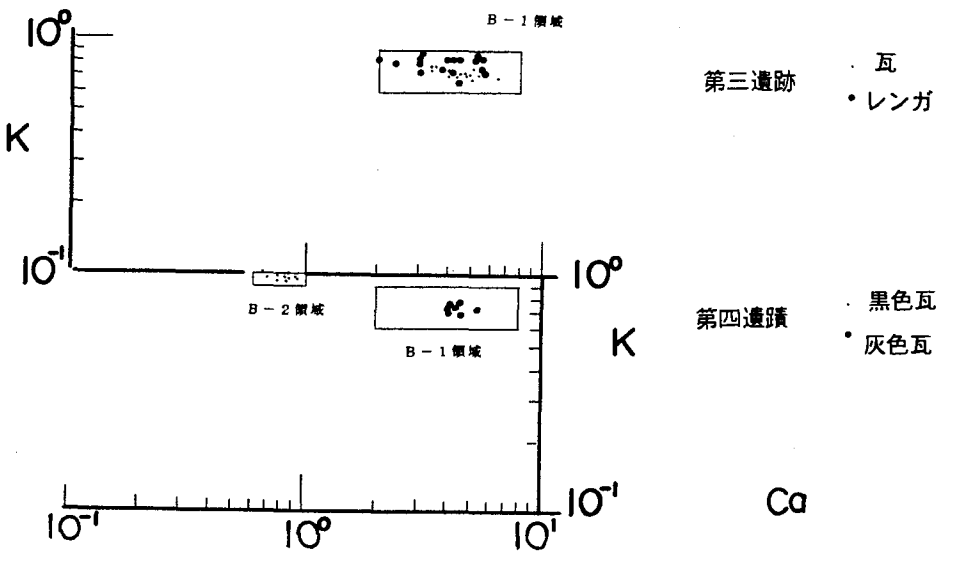


図7　オンギ遺蹟出土黒色瓦の K-Ca 分布図

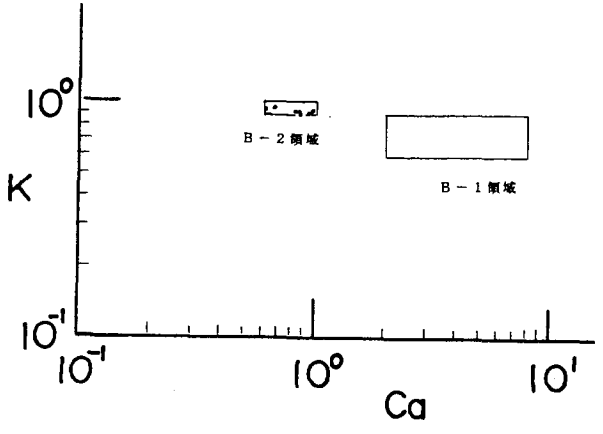


図8　カラ=バルガスン宮城の瓦とレンガの K-Ca 分布図

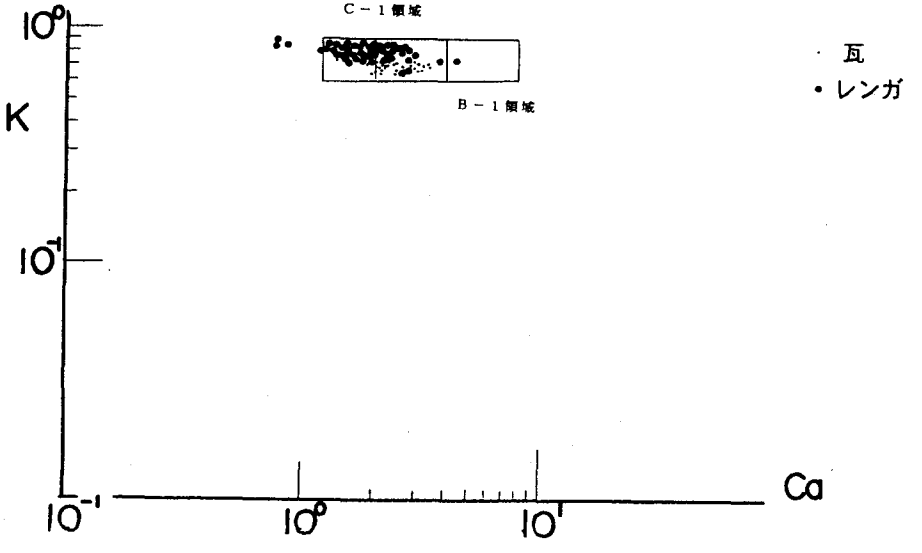


図9　カラ=バルガスン都市遺蹟出土の瓦の K-Ca 分布図

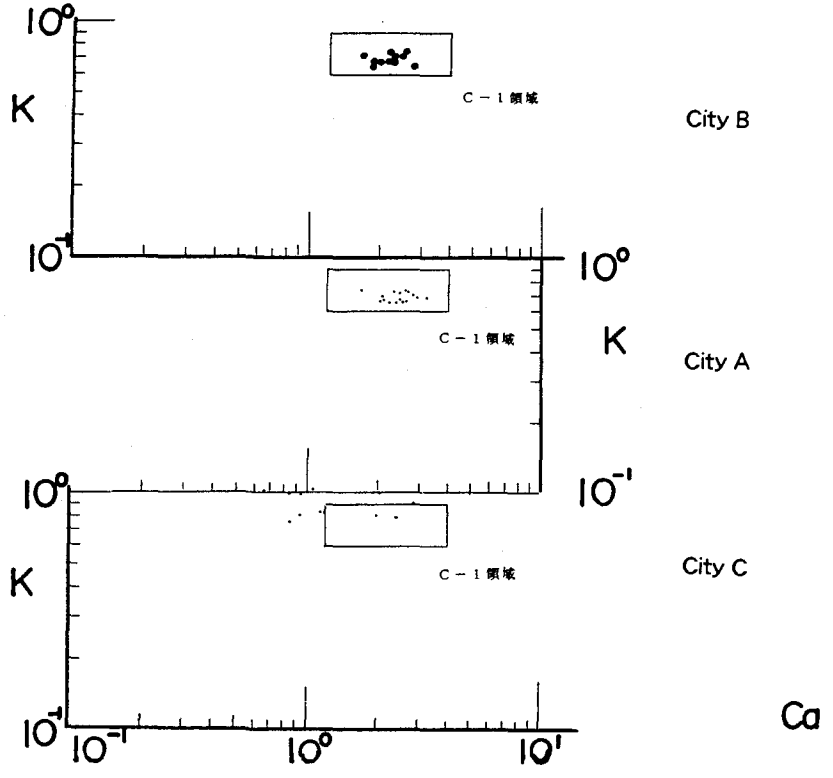


図10　ツァガン=バイシン遺蹟の城外・城内から出土した緑釉瓦の K-Ca 分布図

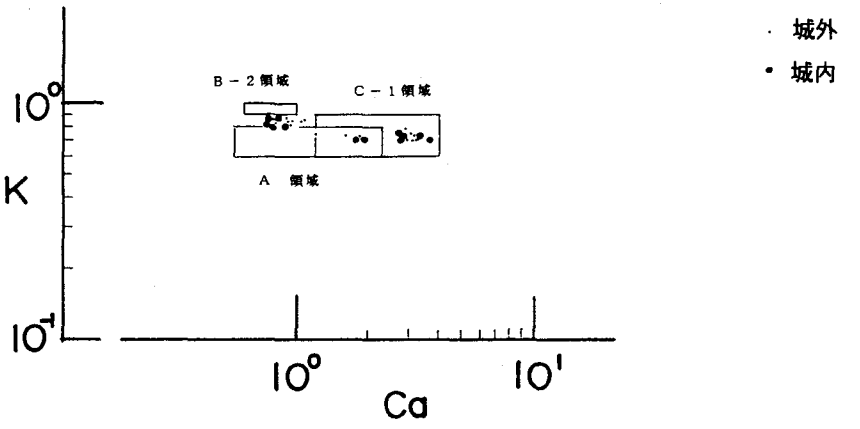


図11　バイバリク遺蹟出土の瓦とレンガの K-Ca 分布図

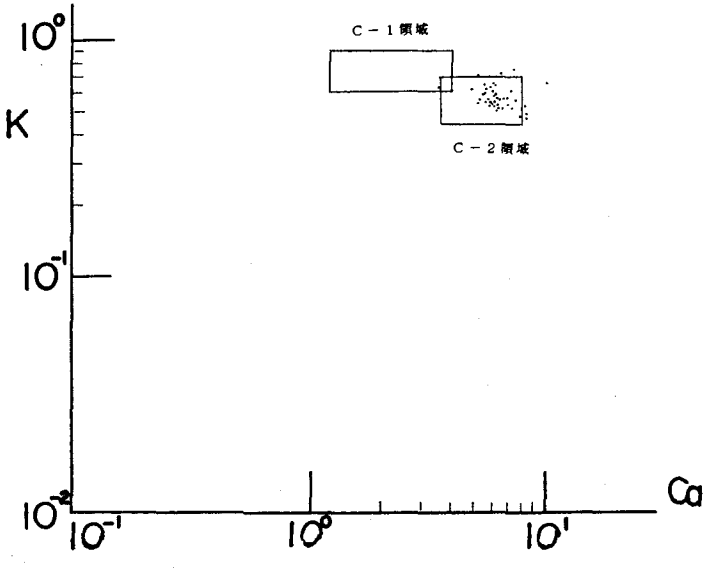


図12　カラコルムの緑釉瓦の K-Ca 分布図

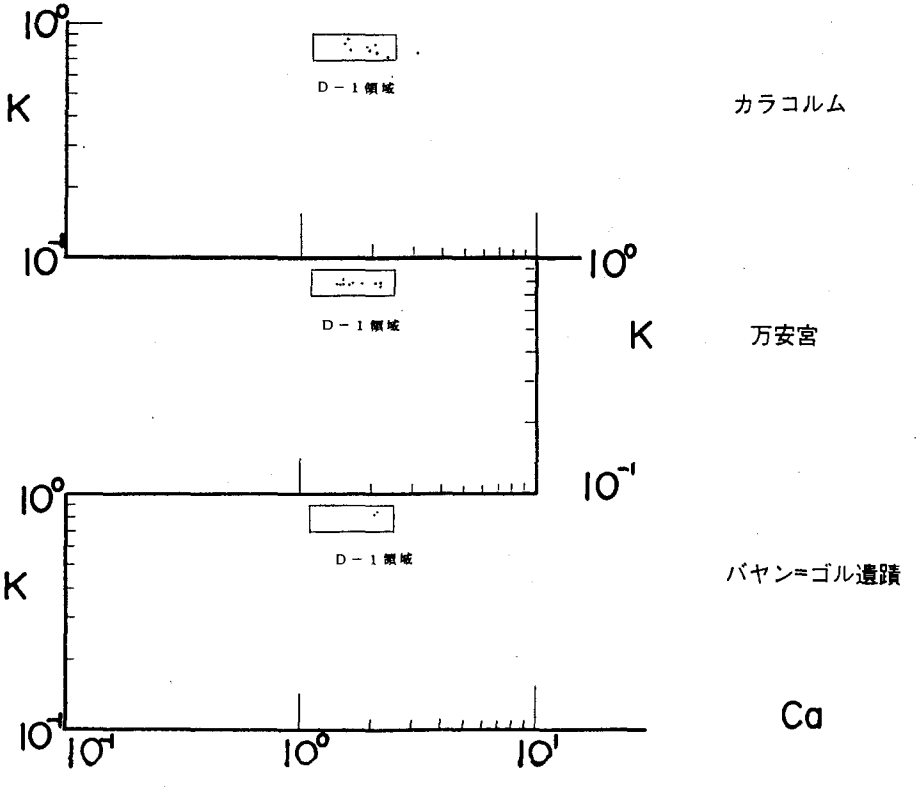
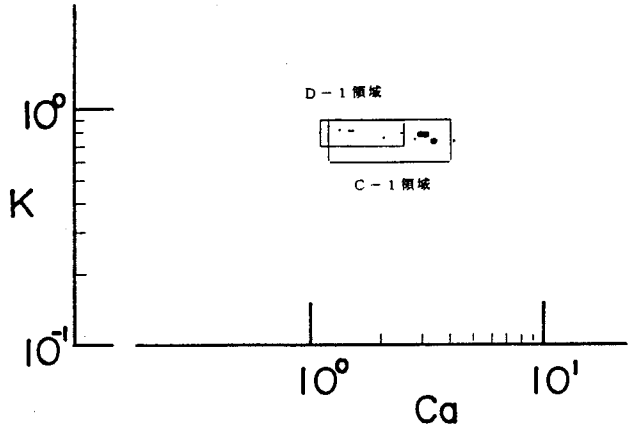


図13　カラコルム万安宮東門の亀趺出土緑釉瓦の K-Ca 分布図



・ 万安宮
• 東門の亀趺

図14　メルヒー＝トルゴイの瓦の K-Ca 分布図

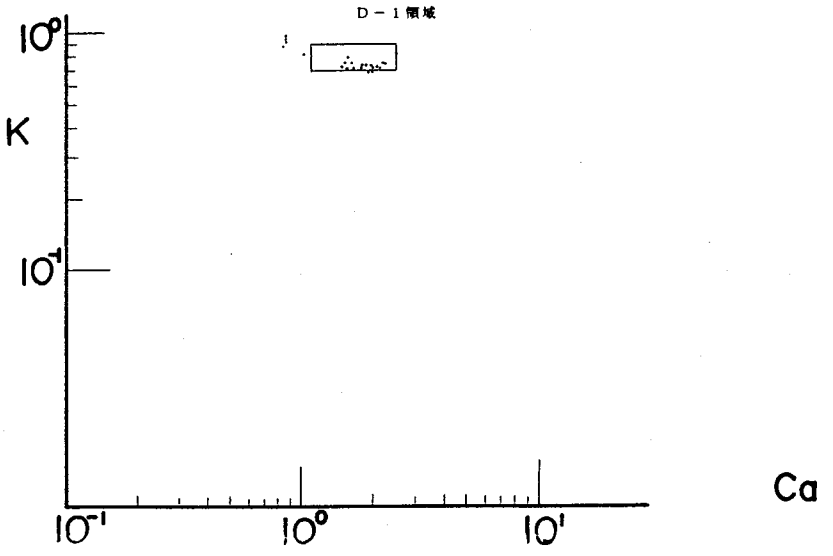


図15　バヤン＝ゴル遺蹟出土の瓦の K-Ca 分布図

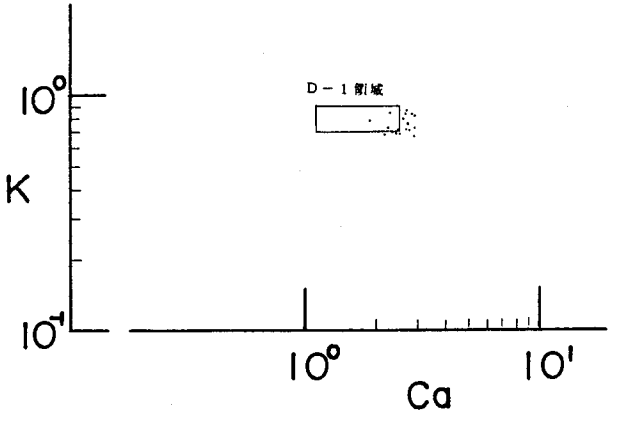


図16　バヤン＝ゴル遺蹟出土の緑釉瓦の K-Ca 分布図

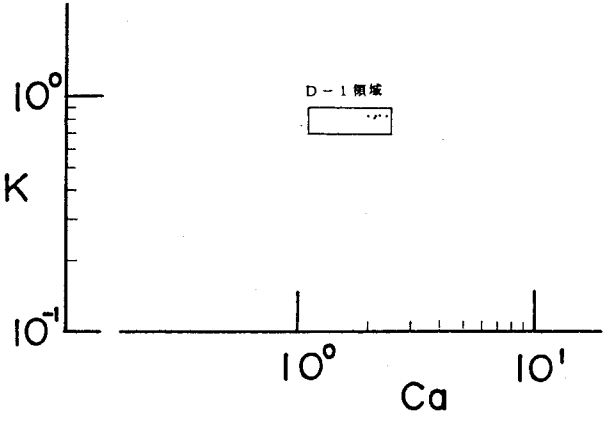


図17　シャーザン=ホト遺蹟出土の瓦の K-Ca 分布図

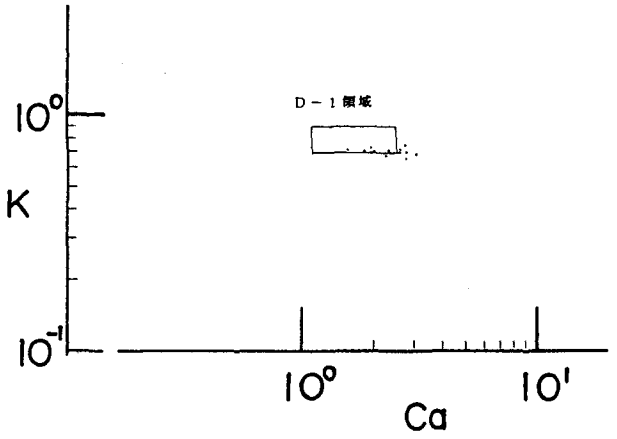


図18　シャーザン=ホト遺蹟出土の緑釉瓦の K-Ca 分布図

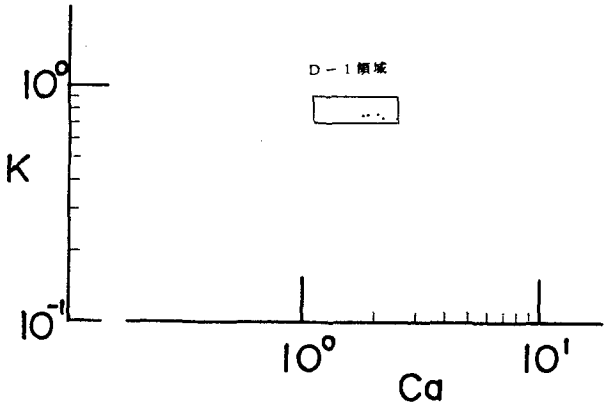


図19　釈迦院遺蹟出土の瓦の K-Ca 分布図

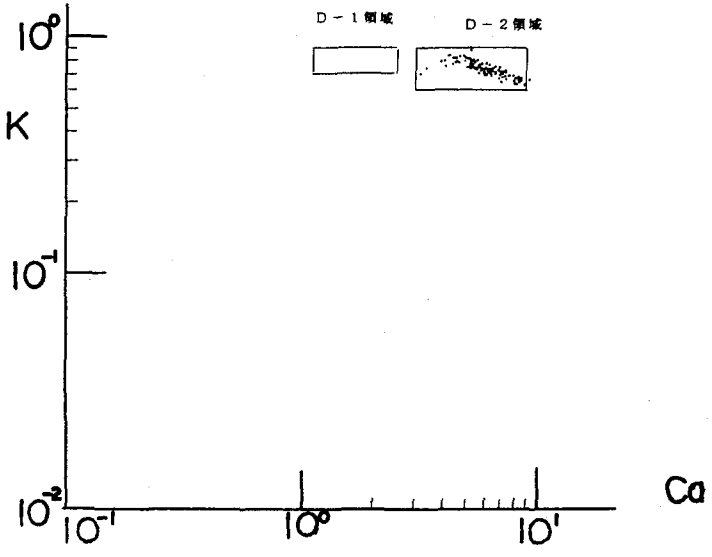


図20　釈迦院遺蹟出土の瓦と緑釉瓦の K-Ca 分布図

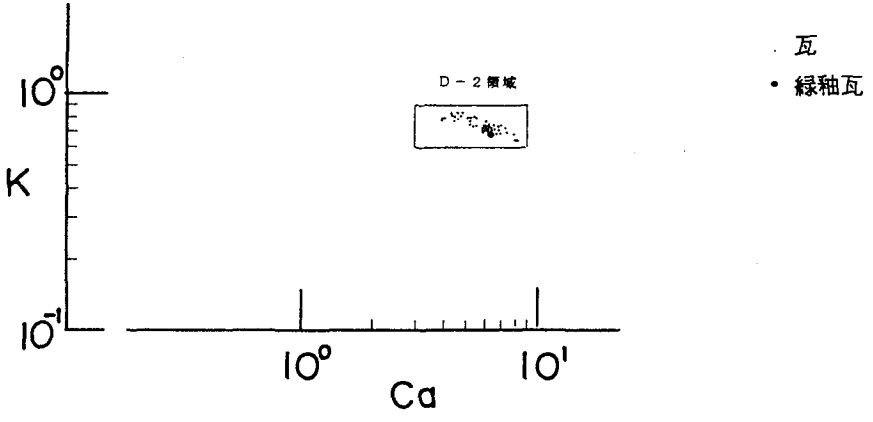


図21　ハルホル=ハン第１城址出土の瓦の K-Ca 分布図

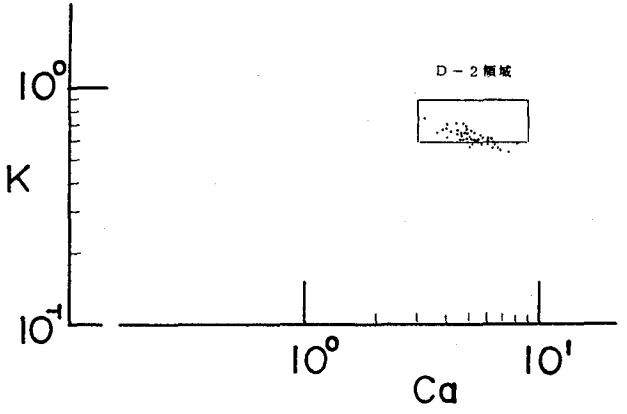


図22　ハルホル=ハン第１城址出土の緑釉瓦の K-Ca 分布図

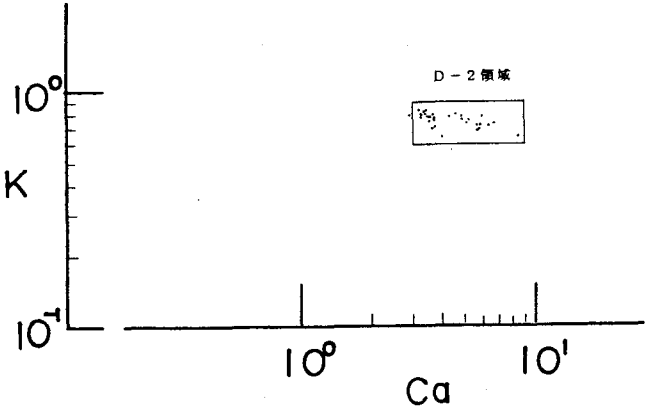


図23　ハルホル=ハン第４城址出土の瓦の K-Ca 分布図

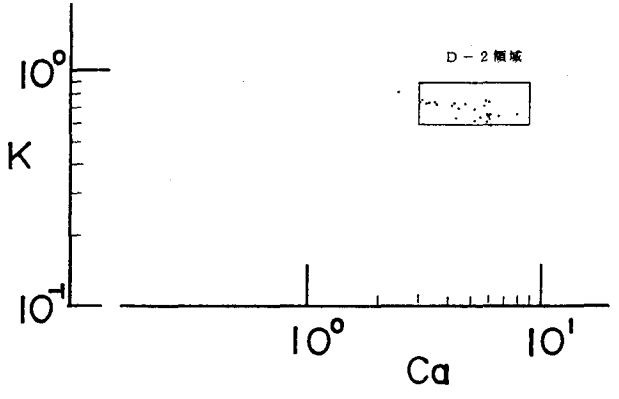


図24　ハルホル=ハン第４城址出土の緑釉瓦の K-Ca 分布図

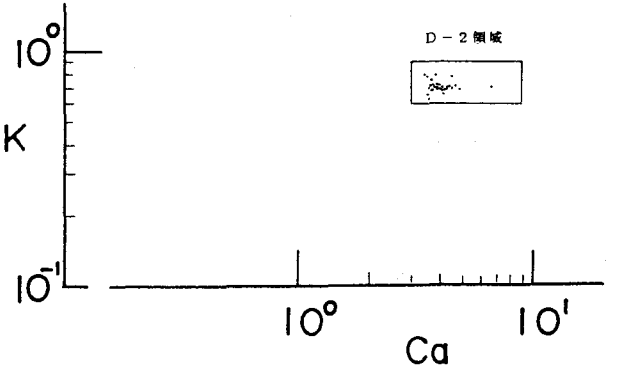


図25　ハルホル=ハン第3城址出土の瓦のK-Ca分布図

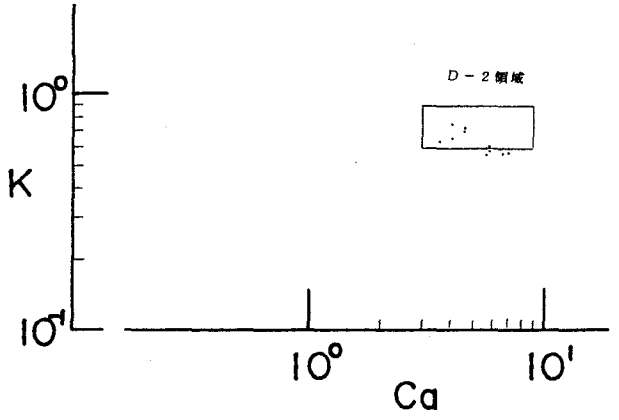


図26　ハルホル=ハン第2・3城址出土の緑釉瓦のK-Ca分布図

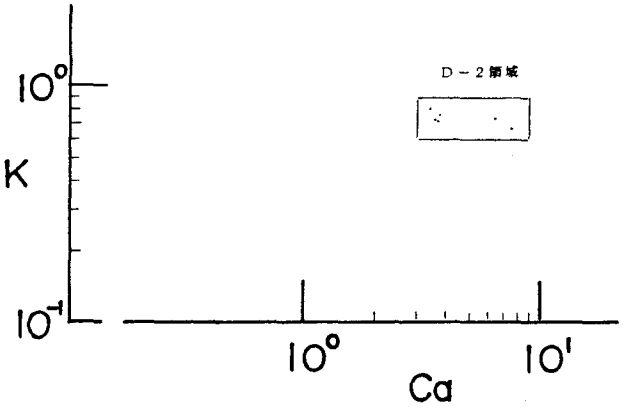
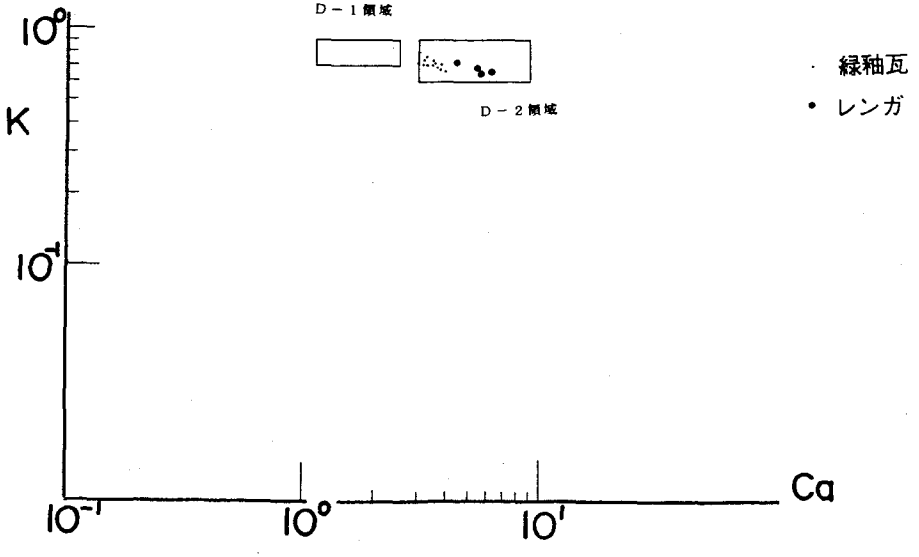


図27　ドイティン=バルガスの緑釉瓦とレンガのK-Ca分布図



ルーン文字碑文凡例
Explanatory Notes on Turkic Texts in Runic Script

翻字 (Transliteration)

本書のルーン文字の翻字は『内陸アジア言語の研究』12, 1997, pp. 44-45 の森安方式に拠る．ただし次の 1 点のみ変更する．すなわち，後舌とみなし大文字で表記した Š を，両舌とみなして š で表記する．

Vowel

front	**double**	**BACK**
	a (for a / ä)	
	i (for ï / i)	
ü (for ü / ö)		W (for u / o)

Consonant

front	**double**	**BACK**
b (for b / v / f)		B (for b / v / f)
	č	
	ič	
d		D
g		G (for γ)
k		Q
ük		uQ
		ïQ
l		L
	lt	
	m	
n		N
	nč	
	ŋ	
	nt	
	ny	
	p	
	up	
r		R
s (for s / š)		S
	š (for Š / S / š)	
š		Š
t		T
y		Y
	z	

転写 (Transcription)

母音 Vowels	a ï o u e ä i ö ü	子音 Consonants	b č d g γ k l m n ŋ ny p q r s š t v y z

テキストの破損・摩滅部分や翻訳に関しては，以下の凡例に従う．

翻字 (Transliteration)

#	碑石が折れているその破断部を明示． Severed point of the inscription.
:	句読点． Punctuation.
[aBč]	完全に破損している文字を推定で補ったもの． Letters wholly restored.
(aBč)	残画が見えるのを補ったもの． Letters partly damaged but restored with certainty.
/ / /	完全に破損している文字． Damaged and illegible letters.
. . .	残画が見える文字． Illegible letters with some traces. Number known, indicated by points.

転写 (Transcription)

#	碑石が折れているその破断部を示すが，１つの単語が２断片に跨がる場合はその単語の後にこれを入れる． Severed point of the inscription (placed after a word when it extends over two fragments).
[aBč]	単語全体が破損しているものを推定して復元したもの． Words wholly restored.
<aBč>	本文に破損はないが，碑刻者が彫り忘れたために脱落したと思われる部分を推定補足したもの． Letters omitted by mistake, but restored by the editors.
/ / /	復元不能の破損個所． Damaged and illegible parts.

※転写テキストの下線部は，それに対する訳注のあることを示す．
Underlining in the transription indicates that the part in question is discussed in the commentary.

翻訳 (Translation)

[aBč]	単語全体が破損しているものを推定して復元したもの． Words wholly restored.
(aBč)	訳文の補足説明． Words not in the text but added to improve the English, or explanatory remarks by the translator.

ブグト遺蹟　Site of Bugut

森安孝夫・林　俊雄
(Takao MORIYASU / Toshio HAYASHI)

調査場所：アルハンガイ=アイマクのイフタミル=ソム，ブグト（ブガト　Бугат）=ブリガド，ハールガティン=アム (Хаалгатын Ам) にある遺蹟名ハールガティン=ヘレクスル．北緯 47 度 49 分，東経 101 度 16 分．

調査日時： 1997 年 8 月 26 日．

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：瓦とフリント石の破片採集．バルバルの数と列の長さの計測．写真・ビデオの撮影．

遺蹟の現況：長方形の土塁は縦横 40 × 50 m くらいで，その内側に周溝あり．中心部のマウンドの高さは 1 m もない．これは突厥第一可汗国時代のものであることが，出土したソグド語の碑文から判明している．遺蹟は道路のすぐ傍にある．

かつてのモンゴル隊ないしロシア隊による発掘の跡が痛々しい．掘りっぱなしという感じ．柱の礎石がいくつも発見されたと言われる中心部は掘り窪められ，その周辺にたくさんの大小の積石や何枚もの板石が散乱している．長方形の土塁と周溝はなんとか確認できる程度．バルバルはかなりよく残っており，吉田と片山が数えたところ，土塁の外側にあるのは 276 個で，そのバルバル列の長さは，約 300 m．おおまかに言えば，やはり東の低いほうへ伸びている．しかし正確に見れば，始めのラインは真東より南へ約 30 度ずれ， 160 m くらいのところに曲がり角があり，それから北へそれている．土塁の内側にもバルバルが 6 個認められ，その列の長さは 9 m である．もしかしたらこれら土塁内部のバルバルは，突厥第二可汗国時代のキョル=テギン廟やビルゲ可汗廟にある臣下たちの石人の先駆かもしれない（ヴォイトフ・メネスや林の意見）．

レンガは見つからなかったが，瓦は大量に散らばっていたので，成分分析用に破片を採集．用途不明の白いフリント石もたくさん散らばっていたので，これも採集．

遺蹟の景観：東西が 5～6 km, 南北が 10～14 km くらいの盆地状草原．草原は緩斜面で，西が高く，東が低い．東の方 1 km 弱のところにバヤン=ツァガン河があり，その向こうに山がある．四方の山にはいずれも森林がある．バヤン=ツァガン河は南流し，後でホイト=タミル河に合流する．ゲル群は西の山方の山の合間にも，東の河方の河に沿っても点在している．

遺蹟の図面・写真： Войтов 1996 に平面プラン (p. 33, fig. 7) と断面図 (p. 105, fig. 64) あり．全体の写真は Kljaštornyj / Livšic 1972, fig. 1.

考察：次節で見るように，ブグト碑文の解釈が従来とは大きく変わることになるので，その碑文のあったブグト遺蹟の性格や主人公についても，クリャシュトルヌイや護雅夫の見方 (cf. 護 1972, pp. 79-83 ＝護 1992, pp. 204-210) を大幅に変える必要が出てきた．しかしこれは大問題なので，今後の課題としたい．ただ少なくとも，突厥第一可汗国のなんらかの記念建造物として，瓦屋根を持つ中国風の木造建築物が，盆地状草原の真ん中に建てられていたことだけは事実であり，それだけでもこれまでの草原帝国に対するイメージが変わるであろう．しかもそこに建てられた碑文は，亀趺を持つ点で中国の影響を示しながら，書かれた文章は漢文ではなく，ソグド文とブラーフミー文であり，碑頭には中国的な龍ではなく，突厥の象徴ともいうべき狼が配されていた．

参考文献： Войтов 1996, pp. 27-30, 104-105. 他はブグト碑文の参考文献と重複するので省略．

ブグト碑文　Bugut Inscription

吉田　豊・森安孝夫
(Yutaka YOSHIDA / Takao MORIYASU)

調査場所：ツェツェルレク市のアルハンガイ県博物館の中庭.

調査日時： 1997 年 8 月 27 日.

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ.

調査方法：拓本を作成するとともに写真・ビデオの撮影を行なう．写真・ビデオは各自が撮影．なお碑頭部の 2 断片を接合した写真も撮影した．拓本はソグド面について 2 セット，ブラーフミー面については下半分のみを 2 セット採拓した.

その後，作成した拓本を使って，クリャシュトルヌィとリフシツの読みと翻訳を確認する作業を行なった．碑文そのものを見ても，彫りが浅く小さい文字を読むことはほとんど不可能であるので，この方法が碑文を読む最も良い方法の一つである.

碑文の計測．バヤル・吉田・片山がスケッチ.

碑文の現況：亀趺を含む全体の高さは 245 cm, 亀趺を除く碑石は高さ 197 cm, 幅 72 cm, 厚さ 19.5 cm．碑文面の高さは 123 cm.

一部破損しているものの，亀趺，碑文の本体，碑頭のすべてを残す比較的に保存状態の良い碑文である．保存状態の良さは地中に埋まっていたことによるが，地表に近かったためであろう，ソグド面を正面と見て，碑頭及び碑文の右上の部分が大きく破損している．残存している 2 断片を合わせても，まだかなりの欠損がある．碑頭には中国風の龍ではなく，牝狼が彫られているのが特徴的である．いうまでもなく牝狼と人とが交わったというのが突厥の始祖説話である．スケッチから分かるように，残存する碑頭部には狼の頭部と胴体の上部のみならず，人間の子供の手足と思しきものが見える．おそらくはこの碑頭部には，牝狼が，自分の生んだ人間の赤子に授乳している場面が描かれていたのであろう.

ソグド面を正面と見て，ソグド語の行は縦書きで，左側面から始まり正面に続き，右側面で終わっている．各面を左側面から順に B-1, B-2, B-3 と呼ぶ． B-1 面には 5 行， B-2 面には 19 行， B-3 面には 4 行のソグド語が刻まれている．ただし B-3 面の第 5 行は空白で，今は破損している碑文の上部に銘文の最後の部分が第 5 行として存在していたに違いない．クリャシュトルヌィとリフシツは， B-3 面の下方に第 5 行の文字が残っているが判読できないとしている．しかしそれは誤りであり，彼らがソグド文字だと考えたのは，実際には花押のようなデザインであるように見える.

B-4 面と呼ばれる裏面には，ブラーフミー文字の銘文が刻まれているが，左から右に横書きされているのではなく，縦書きされている．全体で 24 行あった.

ブラーフミー面は一つ一つの文字が小さい上に，彫りが浅く文字の判読は困難である．また碑文全体について，上方は破損していない部分でも表面の風化が著しく文字の読みを困難にしている.

碑文のスケッチ・復元図・写真：写真は Кляшторный / Лившиц 1971c と Kljaštornyj / Livšic 1972 に別のものがあるので両方とも参照する価値がある．亀趺の写真は後者のみ．今回のバヤルと吉田・片山のスケッチあり **(Plates 1a-1f)**.

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー東洋学研究所；モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部.

考察：碑文の写真と解読及び内容の研究は，クリャシュトルヌィとリフシツによって発表されている．彼らの研究の問題点は，碑文の文字の読みを確認できるほど明瞭な写真あるいは拓本を提供していないことである．クリャシュトルヌィは写真以外にも squeeze moulding をとったと言っているが (Kljaštornyj / Livšic 1972, p. 70), それも利用できるような形では発表されていない．今回，我々は和紙と墨による拓本を作成し，この拓本を精査することによって，クリャシュトルヌィとリフシツによるテキストの読みと解釈にかなりの誤解があることを明らかにすることができた.

なお縦書きのブラーフミー面については，ブラーフミー文字だとするのみで，いっさいの説明がない． Кляшторный / Лившиц 1971c 及び Kljaštorniy / Livşiç 1992 に， B-4 面の部分写真が 1 枚あるものの，それでは決してブラーフミー文字であるかどうか判断できない．従って今なお学界で定説として受け入れられているとは言えない．この問題については「ブラーフミー面について」と題して後で別に考察する.

参考文献：碑文発見の経緯とその後の研究は，クリャシュトルヌィとリフシツによってまとめられている． Rintchen 1968（最初の報告）; Кляшторный / Лившиц 1971c, pp. 121-146（ロシア語による最初の研究）; Kljaštornyj / Livšic 1972, pp. 69-102（英語による改訂版）; Kljaštornyj / Livšic 1978, pp. 37-60; Kljaštornyj / Livšic 1992, pp. 201-241（Kljaštornyj / Livšic 1972 のトルコ語訳）．歴史的背景： Bazin 1975, pp. 37-45; L. バザン 1989, pp. 141- 154; 護 1972 (= 護 1992, pp. 200-215); 護 1976, pp. 208-228; Roux 1982; 林梅村 1994.

ソグド面テキスト・翻訳（吉田　豊） Sogdian Part of Bugut Inscription (Yutaka YOSHIDA)

今回の作業によって先行研究で発表されたテキストを相当改善することができた．そしてそれによって，この碑文の内容の理解に大きな変更を加えなければならなくなった．例えばリフシツらが nwh snk' 'wst 「新しい僧伽藍を建てよ」

と解読したところは正しくは nwm snk' 'wst「教法の石を立てること」である．これまでこのブグト碑文によって突厥第一可汗国に仏教寺院が建てられていたと解釈されてきたが，その根拠は失われた．「教法の石」とは，この碑文自体を指している可能性大．またリフシツらが βγβwmyn γ'γ'n と読んで突厥の始祖「ブミン可汗」に比定したところは，wmn' x'γ'n と読むべきで，漢文史料の「奄羅可汗」に比定できよう．また mγ'n tykyn と読んで「マハン王子」という人物を想定したのも，全くの誤りである．さらに βγ' t'sp'r γ'γ'n「君主他鉢可汗」としたところは，mγ' t'tp'r x'γ'n「莫賀他鉢可汗」である．その他にもあるが，ここではテキストと英訳及び和訳を与えるにとどめる．この訳からでも，クリャシュトルヌイ・リフシツらの解釈との違いが理解されるであろう．

テキスト部分では，[ ] は完全な破損部を，(abc) は部分的な破損部で文字の一部が残っている部分を示す．+ は文字がある程度残っているが判読できない部分の文字の数を示す．しかし (abc) との区別は厳密に行なわれているわけではない．翻訳の部分では，[ ] はテキストの破損部を補った訳であることを示す．英訳の ... ... は比較的に長大な破損部を，... は比較的に短い破損部を，*** は，文字が残っている部分で翻訳ができない語を示す．和訳では・・・は破損部を示すが，長い破損部と短い破損部の区別はしていない．*** の使い方は英訳と同じである．

Text

B-1

1 rty (m)[wn']k nwm (sn)k' 'wst't δ'r-'nt tr-'wkt '(')šy-n's kwtr'tt 'xšy-wn'k
2 'Y-(K)' +m+++ m(wx)'n x'γ'n y'rwk' 'ḪY nw''r x'γ'n 'wr-kwp-'r cr-''cw mγ''
3 t'[t](p)['r] (x'γ'n) wsn wy'(r)[nt] 'ḪRZY nwkr ZK βγy mwx'n x'γ'n 'PZY βγy mγ' t't(p)['r]
4 [x]'γ['n MN xw](r-sny) k'w xwr-(tx)[y]z p(r)[m] prw 'nγt'k 'bc'npδ '(xwš)wy-n'tt wm't['nt]
5 [r](t)y[ ](t) 'Ḫ(RZY) nwkr c'w'nt py-štrw βγy (m)[wx'n x'γ'n]

B-2

1 [ ]y k'w βγy s'r pwr-sty rty nw(k)r k'w +[ ]
2 [ ](c)w mγ' t(')[tp'r x'γ'n ? tk'yn]t š'δp-y-t tr-xw-'nt xwr-x'p-cy-nt tr-δwnt +(wny)[t?]
3 [ ](')n '(n)[ ]+kw (s)[ ]y tw(') xwy-štr 'ḪY mwx'n x'γ'n pr'y-t rty n'[β]
4 ['β](t)kšpw '(xšy-)'t δ'(r)[t ZY n'βc](y)'h šy-r'k p'rtw δ'rt rty ms 'kδry tγw βγy mγ'
5 t('t)[p']('r) x['γ'n]++δ++[ ]+ ty[ ]+ ('β)tkšpw 'nγwncy-δ xšy-' ZY n'βcy-h p'r rty nw[kr]
6 β(γ)y m(γ)' [t]'t(p)['r x'γ'n] m(s) ++[nβ](y-r)''k ptγwštw δ'rt rty xr-(γw)šk srδy (x)wt'w '(kr)[ty]
7 r(ty) XI srδ xšy-(')[t δ'rt](t)mp('r)y[ ]+++ k'w (βγ)y-št s'r pwrst rty py-štrw š'δ-p-y-t tw(++)[ ]
8 xwrx(')pc(y-nt)++++t t++++t '(PZ)Y ++++[ ]'n+(r-)'δtw δ'rnt rty nwkr mγ' wmn' x'γ'n p'δy-š'δ'(t)[w?]
9 δ['](rnt r)t[y](x')γ'n pr(m'tw) δ'r-t (MN) '(B)Y mγ' t'tp'r x'γ'n wsn RB(k')
10 [ ]β++[ ](')krty (r)[t](y) m(s) prm'(')tw δ'r('m) RBkw nwm snk' 'wst rty 'YK nw(m)
11 [snk']+y βγy mγ' t'(t)p'r x'γ'n tk'y-nt 'cw npyšnt cw βrnpyšnt
12 [ ](cw)[š'δ](pyt) cw xwr-(x'pcy-)nt cw (Z)Y wkwrt cw n'βcy-'kh 'Y-K'[ ]
13 [ ]w β'r-'k 'sp'δy-'(n) pr'yw 'βt my-δ '(xš)t δ'r-'n[t]
14 [ ](+ ptxw)stw δ'r-'nt rty cy-w'nt pyštr(w βγ)[y]
15 [nwm sn](k' pr)m'tw δ'r-(nt) '(ws)t rty c'n'w δw' xšywn'k
16 [ ](+)[ ](r'y)tw δ'r-(nt) rty 'sky-s'r n[p]δy m'tnt rty
17 [ ](γrw)y 'yt δ'r-nt rty pr'(+)[++]yδ'n s(r)δ mγ(')
18 [ ](+)' ns(m)y ZY ['n]y wys(pw) 'ytδ'r-n(t) r[ty]
19 [ ]'k δw' x'γ'n šy(+)nw mγ(')

B-3

1 [šyr']('k) γr-'m'k krtk [''β](r)y-(n)t rt[y]
2 [ ]myδ srδ šyr'k γr'mk krtk ''βry-n[t]
3 [ ]+++t 'PZY (+++++++h) mrtx(m')k 'štnt 'ḪRZ-Y βγ (m)[γ'?]
4 [ ]ws myδ βγ[ ]w(++)nt nwm (snk') w(+)n'' 'y-ry mγ['']
5 [ ] BLANK SIGNUM

Translation

<B-1: 1-3> Kings of the Turkish Ashinas tribe have established [this] stone of law when *** Muqan Qaghan's Yaruka-brother (named?) Niwar Qaghan ***ed for the sake of Urkupar Cracu Magha Tatpar Qaghan.

<B-1: 3-4> Then, God(like) Muqan Qaghan and God(like) Magha Tatpar Qaghan were the (two) rulers upon the whole world from the east to the west.

<B-1: 5~B-2: 1> ... ... Then, after that God(like) M[uqan Qaghan] ... ... He returned to the God (= died).

<B-2: 2-5> Then, to ... ... Magha Tat[par Qaghan's prince]s, Shadapits, Tarxwans, Xurxapcins, Tuduns, ... [said to him]: "... Your elder brother Muqan Qaghan passed away. He ruled countrties ... ... the seven continents (= the whole world) and fed the people well. Now, You God(like) Magha Tatpar Qaghan, also [become a ruler and] rule the seven continents in that way and feed the people!"

<B-2: 5-7> Then, the God(like) Magha Tatpar Qaghan also ... ... listened to the consultation (or: took the advice of the consulting people) and became a king in the year of hare. He ruled eleven years. ... (his) body ... ... He returned to the gods (= died).

<B-2: 7-9> Afterwards, Shadapits, Tarxwans, Xurxapcins ... ... ***ed. Then, they made Magha Umna Qaghan a king ... ...

<B2: 9-10> [Magha Umna] Qaghan ordered to buid a great ... for the sake of (his) father Magha Tatpar Qaghan. And he also ordered to establish a great stone of law.

<B-2: 10-14> When the stone of law [was established] ... ... God(like) Magha Tatpar Qaghan's princes, as well as grandsons and great-grandsons, ... and Shadapits and Xurxapcins and relatives and the people, when (they) ***ed for a week (altogether) with ... cavalry ... ... they killed ... ...

<B-2: 14-16> After that, God(like) ... [Qaghan] ... ... ordered to establish [the stone of law]. When the two rulers ... ... ***ed they were in pursuit (after him?) upwards.

<B-2: 16-18> ... ... they took ... ... In the year of *** Magha ... [Qaghan] ... ... (they) took *** and all the others.

<B-2: 18-19> ... ... the two Qaghans' *** Magha

<B-3: 1> ... ... (he?) blesses good wealth (and religious) service

<B-3: 2> ... ... in that year (he?) blesses good wealth (and religious) service.

<B-3: 2-3> ... ... (there) exsist ... and a man of ... And, lord, Magha

<B-3: 4> ... ... day ... the stone of law U...na Iri Magha

<B-3: 5> ... .

和訳

<B-1: 1-3> この「法の石」を突厥のアシナス（＝阿史那）族の王たちが建てた．＊＊＊（である？）ムカン（＝木杆）可汗のヤルカ兄弟（である）ニワル可汗がウルクパル=チュラチュ=マガ（＝莫賀）＝タトパル（＝佗鉢）可汗のために＊＊＊したときに．

<B-1: 3-4> さて，神であるムカン可汗と神であるマガ=タトパル可汗は東から西まで全世界において支配者であった．

<B-2: 5-B: 1> ・・・それから，後になって，神である，ム［カン可汗は］・・・彼は神のもとに帰った（＝死んだ）．

<B-2: 1-5> さて・・・へ・・・マガ=タト［パル可汗のテギン］たち，シャダピトたち，タルフワンたち，クルカプチンたち，トドンたち＊＊＊たち・・・［は，タトパル可汗に申し上げた］：「あなたの兄であるムカン可汗はなくなられた．彼は・・・七州（＝全世界）を支配し，人民をよく養った．今またあなた，神であるマガ・タトパル可汗も［支配者になられよ．そして］七州を支配し，人民を養われよ．」

<B-2: 5-7> さて，神であるマガ=タトパル［可汗］も・・・進言を聞き（入れ）（あるいは：相談役に耳を貸し），兎の年に王になった．そして11年間支配［した．］（彼の）身体・・・神々のもとへ帰った．

<B-2: 7-9> その後，シャダピトたち，タル［フワンたち］，クルカプチンたち，・・・は＊＊＊した．さて（それで），マガ=ウムナ可汗を王位に就けた．

<B-2: 9-10> ［マガ=ウムナ］可汗は（彼の）父であるマガ=タトパル可汗のために大きな・・・を作るように命令した．そしてまた，偉大な「法の石」を建てるように命令した．

<B-2: 10-14> 「法の［石が］・・・したとき，・・・神であるマガ=タトパル可汗のテギンたち，孫たちも，曾孫たちも，・・・シャダピトたちも，クルカプチンたちも，親族たちも，人民も，（彼らが）・・・騎馬の兵士とともに7日間＊＊＊したとき，彼らは・・・を殺した．

<B-2: 14-16> その後で，神である・・・彼らは［「法の石」を？］建てるように命じた．二人の支配者が・・・したとき・・・（彼らは）＊＊＊した．そして上の方へ追いかけて行った．

<B-2: 16-18> そして・・・彼らは・・・を取った．そして＊＊＊の年にマガ・・・[可汗を]・・・（彼らは）＊＊＊と他のすべてを取った．

<B-2: 18-19> そして・・・二人の可汗（すなわち）＊＊＊・マガ・・・

<B-3: 1> ・・・［すばらしい］財産（と宗教）儀式を［彼は祝福する］．そして

<B-3: 2> ・・・この年に，すばらしい財産（と宗教）儀式を彼は祝福する．

<B-3: 3> ［そして］・・・及び＊＊＊の人がいる．そして主よ！［マガ・］

<B-3: 4> ・・・の日＊＊＊「法の石」を（？）ウ・・・ナ=イリ=マガ=

<B-3: 5> ・・・

ブラーフミー面について（吉田　豊） Brāhmī Part of Bugut Inscription (Yutaka YOSHIDA)

ブラーフミー面については，今回のチームの中に専門家がいないために，いかなる解釈も提出することができない．はじめ肉眼で見たときには，この面（B-4　面）におよそ碑文が刻まれているかどうかすら判然としなかったが，拓本を採ることによって，縦書きされた文字が 24 行あることが判明した．そしていちいちの文字は読むことができないものの，ブラーフミーとして解釈できる文字が，いくつか確実に存在することも分かった．

同じ結論に，クリャシュトルヌィとリフシツも到達していたわけだが，彼らは明瞭な写真などによって根拠を示していなかったために，十分な信頼を置くことができなかったのである．またボルコフ (B. B. Волков *apud* Войтов 1996, p. 5) によれば，モンゴルの別の場所（モゴド=ソム）で，同じように縦書きのブラーフミー文字碑文が見つかっているという．このことも，ブグト碑文の B-4 面の文字が縦書きされたブラーフミー文字であることの証左となるであろう．非公式ではあるが，ワシントン大学の R. Salomon 教授が来日されていた折りに，ブラーフミー面の拓本を見ていただき，ブラーフミー文字であることを確認して下さった．同様に非公式にではあるが，ベルリンの L. Sander 教授や創価大学の岩松浅夫教授も，ブラーフミー文字であることを確認して下さった．なかでも Sander 教授は，書体が 6 世紀頃のものであろうとも言っておられる．

B-4 面がブラーフミー文字で書かれていたとすると，内容はサンスクリット仏典であった可能性が高い．そしてソグド面で，この碑文が「法の石」と呼ばれていることと考え合わせると，この「法」とは，ブラーフミー面に彫られている内容そのものであると推論することができる．吉田は仏教の教えをこの 24 行の碑文にまとめてあるのではないだろうかと推測する．単なる推論ではあるが，仏教の教えのエッセンスを説く短い経典として『十二因縁経』が知られており，サンスクリット面はそれではないかと考えている．この経典に関しては，敦煌からは漢文とサンスクリット文の経文を刻んだ碑文が，トゥルファンからは漢文の経文だけを記した碑文（どちらも 5 世紀）が発見されているので，この経文を記した碑文を作ることが一般的であったことが知られる（『砂漠の美術館――永遠なる敦煌――』朝日新聞社 1996, pp. 126-127; 『トゥルファン古写本展図録』朝日新聞社 1991, 図版 2 及び説明）．『隋書』の突厥伝によれば，北斉の恵琳という仏僧が，佗鉢可汗に十二因縁と因果応報の理を説いたという．また『唐高僧伝』巻 2 では，この可汗のときにインドから来た仏僧ジナグプタが彼のもとにいたとも言う．すでに，バザンはクリャシュトルヌィとリフシツの説をふまえ，ブグト碑文のサンスクリット面はジナグプタに帰せられるだろうとしている (Bazin 1989, p. 147).

この推定が正しいとすれば，碑文の正面は B-4 面ということになり，上で訳出したソグド面はその成立の背景を説明したものということになる．実際，解読された部分の内容はその推定と矛盾しないし，ソグド語銘文が側面から始まっているという事実はむしろそれを支持するように思われる．

なおサンスクリットの経文を縦書きした理由は分からない．漢文あるいはソグド文が縦書きであることから，「碑文では文字は縦に刻む」ということが暗黙の前提であったのかもしれない．ただし上でも述べたように，現在までのところその言語がサンスクリットであることが確認されたわけではない．横書きされていた経典を縦書きするときに，中国語の方式に従って，本来左から右に進む文字を右から左に進んでいると解釈した可能性も考慮するべきかもしれない．

オンギ遺蹟　Site of Ongi

大澤　孝・片山章雄
(Takashi ŌSAWA / Akio KATAYAMA)

調査場所：ウブルハンガイ=アイマク，オヤンガ=ソム（から南方へ約 17 km: 車で約 30 分の地点）．北緯 46 度 20 分，東経 102 度 11 分，高度 2005 m．

調査日時：1996 年 8 月 20～21 日．計測日は 8 月 21 日．

調査者：森安，片山，大澤，松田，松川，松井，オチル，ボルド，バットルガ．

調査方法：各自がビデオと写真撮影．遺蹟の規模及び東方のバルバル石の間隔と寸法を松田，大澤，松川，バットルガがメジャーで計測する．またバルバル石の北側への湾曲度を磁石で計測．その間，他のメンバーはマウンドの石堆から瓦と赤と黒の煉瓦を採集する．また森安，片山，松井とボルドは碑頭部の両面のタムガ及び右脇の横書き小銘文の拓本を 2 部ずつ採拓し，写真撮影する．またオチルは本来石槨のあったマウンド西方の一地点を試掘し，板石断片を確認する．森安は，バルバル列石の距離をジープの走行距離で 3 回計測し，その平均値をメモ．また遺蹟のマウンド東辺とバルバル列最東端の地点の高度差を高度計で計測する．

遺蹟の現況：遺蹟はオンギ河とその支流のタリマル河の合流点近くの場所，マニト河右岸から約 300 m 南方のあまり広くない谷間の真ん中に位置する．谷間の北側はマニト=オラ山，東側がホシュ=オラ山に遮られている．東西軸が長い長方形のマウンドを周溝と外塁がとり囲む．但し，マウンドの裾野・周溝・土塁の幅が不鮮明な所があり，計測値にもブレが生じる原因となる．マウンドのやや南方に石人 4 体・石羊 2 体・石槨断片・碑頭・亀趺の前部断片・砕石の集積があり，マウンドの東端とマウンド北東隅に灰白色の立石断片あり．上記の遺物はいずれも花崗岩製（遺蹟と遺物の配置状況や寸法は **Plates 2a-2c** を参照せよ）．

石槨板石：石槨は本来遺蹟のマウンド西方に位置し，現在その箇所は直径 8 m の穴の中に含まれ，現在深さ約 60 cm 掘られている．オチルとボルドはこの片隅から石槨の四辺隅で板石を支える補強石（高さ 57 cm, 両翼の長さはそれぞれ 26 cm と 22 cm, 挿入箇所の深さ約 40 cm）と唐草文様のある石槨断片を掘り出す．またマウンド中央からやや南側にある 4 体の石人の西後方には唐草文様の縁取り部分をもち，内部に方形状の二重界線 (77 × 77 cm) で区切られた円花文様が浮き彫りされた板石断片（横 190 ×縦 133 cm, 厚さ 10～13 cm）が表面を上に横倒しされている．また石人東方の石堆箇所からオチルはの四辺隅で石槨を支えていた補強石の 2 断片を見つける．

亀趺：堆石東方には亀趺の顔部断片（縦 62 ×横 75 cm, 厚さ 11～14 cm）と亀甲文のある背中断片（縦 58 ×横 41.5 cm, 厚さ 12～15 cm）が放置されている．

石像：マウンド中央部のやや南よりの箇所に 4 体の石人が置かれている．また堆石群には 1 体の石人が頭部，胴部，脚部に分断されて置かれていた．石堆の東方には頭部を欠く二対の石羊像がある (cf. Войтов 1989, p. 41, fig. 3; Баяр 1997, pp. 128-129).

石人 No. 1: 頭部を欠く胡座像．右手は肘から下はなく，左手は肩下から腕上までの箇所を欠き，腕先を左膝に置く．三角状の襟が両側に開いている．右脇と背中の左よりの腰には丸い革袋状のものが見られる．高さ 84 cm, 肩幅 60 cm, 厚さ 60 cm.

石人 No. 2: これはヴォイトフ等により 1987 年に石堆中から発見された．頭部を欠く．両腕を胸元で組む．帯はない．小型の正座像．高さ 56 cm, 肩幅 33 cm, 厚さ 30 cm.

石人 No. 3: 頭部を欠く．右腕と左腕を欠く．胸元で両腕を組んでいたのだろう．正座像．高さ 63 cm, 肩幅 42 cm, 厚さ 47 cm.

石人 No. 4: これはヴォイトフ等により 1987 年に石堆中から発見された．積頭部，胴部，脚部が切り離されていた．右手を欠き，左手が胸元にあてられている．おそらく正座像．接続した状態での高さ 55 cm, 肩幅 20 cm.

石人 No. 5: 頭部を欠く．左腕と右肩下部を欠く．腹部に大きく突出した物体を両腕で抱える正座像．この物体は先端がややしぼんだ形状である．これと同じ物体を抱える石人はイフ=ホショートゥ遺蹟の石人にも確認できる (Баяр 1997, p. 107, fig. 43)．おそらくは遊牧民の生活に密着した馬乳酒を発酵させる革袋であろう．高さ 63 cm, 肩幅 40 cm, 厚さ 47 cm.

なお Atlas, pl. XIV; MSSP, p. 131, pl. 80 に見られる右から 2 つ目の右手を胸において，左手を左膝に置く頭部を欠く 1 体の石人と Atlas, pl. XIV-5 からうかがえる雄ヤギ型タムガを中央部にもつ上部から斜めに切断された石人らしき石柱は，今回の調査では確認できなかった．

石羊 1：頭部を欠く．前脚と後脚を腹部に折り込んで臥した像．頭部までの高さ 43 cm, 全長 64 cm, 厚さ 28 cm.

石羊 2：頭部を欠く．前脚と後脚を腹部に折り込んで臥した像．頭部までの高さ 50 cm, 全長 66.5 cm, 厚さ 31.5 cm.

バルバル列石：マウンド東端中央部から約 16 m 離れて東方に約 900 m（ヴォイトフ等の調査では 980 m）にわたり，157 個（ヴォイトフ等の調査では 166 個）立っている．バルバル列の方向は真東から約15度北側に傾いて最東端には円形マウンドがある．東の土塁の外側にある第 1 バルバルと第 2 バルバルの間，第 2 バルバルと第 3 バルバルの

間，第14バルバルの周りには円形のくぼみがある．碑頭正面にある雄ヤギ型タムガと釣り針形タムガは，第10（今回の新発見）に確認される．第 16 （新発見）には雄ヤギ型タムガ，第 28 （新発見）には蛇形タムガ，第 83 （新発見）にも線形タムガがある．なお第 11 バルバルは現在は正面がかなり剥落して銘文やタムガは確認できないとはいえ， Atlas, pl. LXXXIII; MSSP, p. 132, pl. 83 で示されたルーン文字小銘文（「イシュバラ・タルカンのバルバル」）とその左に雄ヤギ型タムガと釣り針型タムガが刻まれていたバルバル石とは撮影場所の情景と寸法が一致することから同一視することが出来る（森安による 1996 年 8 月 21 日の行動記録）．現在は小銘文と 2 つのタムガが刻まれた南面部分は剥落して，確認出来ない．なお松田，大澤，松川，バットルガのバルバル計測作業は 91 個目までで終了．バルバル先端部の高度は 2030～2035 m, 主廟の高さは 2040 m で，その高度差は約 4～10 m である．また主廟からバルバル石先端までは約 1 km ある．マウンドの外側にある第 1 番目と第 2 番目のバルバルのみ灰白色の花崗岩製である．残りは黒にやや黄色っぽい色の交じったケイバン岩製である（バルバルの石質は Козлов 1949, p. 117 の記載による）．まま倒壊したり，横にはみ出したものもあるが，多くは建造当初の位置に存在する模様．バルバルの計測値は付表 (**Plate 2-d**) を参照せよ．但しヴォイトフのいう平たい亀趺 (Войтов 1989, p. 37, fig. 2-7) や小碑文の石柱断片 (Войтов 1989, p. 37, figs. 2-1) や，ヤドリンツェフの報じた雄ヤギ型タムガをもつ石柱断片 (Atlas, XIV-3) は確認できなかった．

遺蹟の図面・写真：遺蹟の図面は MSSP, p. 64; Войтов 1989, p. 35, pl. 1; Tryjarski 1968, fig. 25; Войтов 1996, p. 41, pl. 16 を参照．また遺蹟の写真・スケッチは Atlas, XIV; MSSP, p. 131, pls. 80-81, p. 132, pls. 82-83; Tryjarski 1968, figs. 11-15; Tryjarski 1971, figs. 14-21; Tryjarski 1972, p. 418, pl. 1a, 1b, p. 420, pls. 4-5; Tryjarski 1991, pls. 50, 54, 77.

遺蹟の景観：森安担当（行動記録 1996 年度を参照）．

考察または解説：以下，大澤の考察を記す．

（1）先行調査の経緯：本遺蹟はオルホン調査隊に参加したヤドリンツェフにより 1891 年に発見される (Ядринцев 1901, p. 43)．ラドロフはヤドリンツェフから送付された拓本・写真・調査結果をもとに 1893 年に Atlas, pl. XIV に遺蹟の外観と付属遺物のスケッチと図版解説を掲載する．同じ 1893 年にはクレメンツ隊が現地を訪れ，遺蹟の多数の写真を撮るが，未発表のままである (cf. ATIM, p. 244)． 1909年にフィン・ウゴール協会のラムシュテットとパルシが同地を訪れ，遺蹟の規模や配置状況や遺物の寸法を調査し，発表する (MSSP, p. 63, 64, p. 130, pl. 79, p. 131, pls. 80-81, p. 132, pls. 82-83; ラムステッド 1992, p. 229)．マウンド中央の地中から亀趺及び煉瓦の層を掘り出し，その穴の西端から羊骨を発掘している． 1926 年にコズロフ隊がここを訪れ，花崗岩製の石人 3 体と石羊 2 体が破損して墓に立っていること，彼の訪問より以前に掘り出されて穴に放り込まれた花崗岩製石板の縁をみたこと，平らな所で保存状態の良い花崗岩製の装飾板石が横たわっていること，東方にケイバン岩製のバルバルが東方に延びていることを述べている (Козлов 1949, p. 117; Войтов 1989, pp. 36-38)．但し彼がその時撮った遺蹟の写真は今日まで未発表である． 1962 年にポーランド・モンゴルの両アカデミーの相互協定に基づきトリヤルスキ隊が現地を訪れ，遺蹟の規模を測量し，配置図を発表し，またマウンド中央付近の石人 3 体と石羊 2 体の写真撮影と計測調査を行っている (Tryjarski 1966, pp. 166-168, figs. 11-14, 23-25; Tryjarski 1972, pp. 37-39, pl. 1a, 1b, 4, 5)．但しトリヤルスキがナムハイダグワから聞いた所では，本遺蹟は 1909 年から 1962 年まで，特に 1920 年代にラマ僧らが遺蹟を盗掘し，破壊が進行したとのことである．当時，銀板，馬の頭骨，馬具や土器片が発掘された．また 1962 年より少し前にはナムハイダグワ自身，オンギ遺蹟の装飾板石の下で，黒灰色の陶器破片 37 点を見つけ，アルバイヘール博物館の陳列品に加えたことも述べている (cf. Tryjarski 1966, p. 167)．現在マウンドに残る 8 つの穴は先の時期の盗掘跡であろう． 1969 年にナムハイダグワとリンチェンがルーン文字碑文の 2 断片の写真をトリヤルスキに送付する． 1987 年にヴォイトフとバヤルが遺蹟の綿密な再調査を行なった (Войтов 1989).

（2）従来の報告や論文 (ATIM, p. 244; MSSP, p. 63; Tryjarski / Aalto 1973, p. 417; p.418, fig. 3; Войтов 1989, p. 36) ではバルバル列石の先頭（第 1 番目）に立つと記されてきたタムガとルーン銘文入りバルバル石は今回の調査の結果，土塁から外側に続く第 11 番目に位置することが明らかになった．大澤は本バルバル石は地面に固く固定されていて，移動させられた形跡は見いだしにくいという印象を持った．そもそも，小銘文とタムガ入りのバルバル石がバルバル列の先頭にあると記した最初期の記録はラドロフの「全バルバル石の第一番目にあった小碑文」 (ATIM p. 244) という記載に遡る．しかしラドロフは同上書の引用項の前で述べているように，オンギ遺蹟や碑文情報はすべてヤドリンツェフのそれに負うている．こうした点からみて，大澤はこの銘文入りバルバル石の発見当時の場所をめぐる問題については，そもそもヤドリンツェフの報告が誤っていて，これをラドロフがそのまま記載したためか，何らかの事情でラドロフが第一番目と記したために生じた誤解と考えておきたい．その後の研究者も彼の記述を踏襲したものと理解される．例えばヴォイトフはその調査の際，「銘文とタムガ入りのバルバル石を発見する事ができなかった」 (Войтов 1989, p. 39) と述べるが，彼もまたラドロフ以来の記載をそのまま踏襲してしまったということができよう．

（3）かつてアトラスやパルシ報告書から判読されていた「イシュバラ=タルカンのバルバル」なる銘文と雄ヤギ型と釣り針の 2 種類のタムガをもつ（我々の調査では第 11 番目の）バルバル石の意味については，イシュバラ=タルカンは本碑文に本遺蹟の被葬者の息子の一人としてその名が挙げられているイシュバラ=タムガン=タルカンなる人物に比定されること，またこれを補うようにバルバル石には本碑文の碑頭両側にある 2 種類のタムガと同じタムガが刻まれていたことからみて，このバルバルは葬儀に際して，息子たるイシュバラ=タルカンが犠牲石として墓石に捧げるべく立て

させたものと大澤は考える (cf. Кызласов 1964; Кызласов 1966).

（4）石槨部分はラムシュテットとパルシが調査した 1909 年時点には既に打ち壊されていたこと，また石槨が本来配置されていた地点には石槨の隅を補強する石が立っていたことが知られる (MSSP, p. 63).

（5）ヤドリンツェフが本遺蹟を発見した当時，亀趺に関しては「碑文は南を向いて立てられている……石碑の基部には埋め込まれていた板石が見え，石碑自身は花崗岩製の，亀の形と推測できるような台石の上に立っていた」(Ядринцев 1901, p. 43; Войтов 1989, pp. 34-35)．大澤は発見当時の碑文の向きについて，次のオンギ碑文の考察（9）において，碑文は南向きであることから，亀趺は南北方向に向いていたことを述べた．しかしパルシ等が訪れた 1909 年当時には，本来の碑文が立っていたと彼が考えたマウンド中央部で，碑文を掘り出そうとした際，地中から，真ん中に方形のほぞ穴をもつ完全に正方形の亀趺を掘り出した際，亀は頭を西方に向けられていたと述べている (MSSP, p. 63)．つまり，亀趺は発見当初からパルシの訪れた年までの間に碑文が3断片に割られて横倒しになっていたのと時を同じくして，その向きも変えられていたことが判明する．それ故，建造当初の亀趺の向きは各報告書の記載に引きずられることなく，突厥時代の亀趺の頭の向きと比較しつつ考察する必要があろう．大澤自身は東方を前方と見なす古代トルコ人の方向観から見て，亀趺は頭を東向きにしていたと見なしておきたい．

参考文献： Atlas, pl. XIV,explanation of plate; ATIM, pp. 243-244; MSSP, pp. 63-64, p. 130-132, pls. 79-83; ラムシュテット 1992, pp. 228-229; Pälsi 1911, p. 83; Козлов 1949, p. 167; Tryjarski 1966, pp. 158-173, figs. 1-27; Tryjarski 1971, pp. 121-135, fig. 1-26; Tryjarski 1972, pp. 35-43; Tryjarski 1974, pp. 629-630; Tryjarski / Aalto 1973, pp. 413-420; Войтов / Баяр 1989, Войтов 1989, pp. 34-50; Войтов 1996, pp. 28-29, 32, 41, pl. 16; Войтов 1986; pp.118-136; Ядринцев 1901, p. 43; 林 1991, pp. 171-173, 179; 林 1996, pp. 212-213; Баяр 1997, pp. 128-129.

オンギ碑文　Ongi Inscription

大澤　孝　(Takashi ŌSAWA)

調査場所：ウブルハンガイ=アイマク，アルバイヘール市郷土博物館.

調査日時：1996 年 8 月 15 日.

調査者：森安，片山，大澤，ボルド，バットルガ.

調査方法：森安，片山，大澤，ボルド，バットルガが 3 断片を各 2 セットずつ採拓する．また森安，片山，大澤，ボルド，バットルガがビデオ・写真撮影する．なおオンギ碑文の碑頭部は博物館にはなく，オンギ遺蹟にある．これについては現地で碑頭両面の雄ヤギ型タムガとその左に配された釣り針型タムガの拓本と碑頭右側の横書き銘文は片山とボルドが各 2 セットずつ採拓し，写真撮影する．

碑文現況：オンギ碑文から切断された小断片（銘文は正面に 3 行，縦の長さ 11.5 cm, 横幅 16 cm, 厚さ 8.5～10 cm），中断片（銘文は正面に 4 行，縦の長さ 24～30 cm, 横幅 15.5～16.5 cm, 厚さ 19.5～22 cm），大断片（銘文は正面と右側面に各 4 行，縦の長さ 77～80 cm, 横幅 19 cm, 厚さ 20.5～22 cm）がある．オンギ碑文のラドロフ拓本と照合し，本来の位置を同定する．ヴォイトフはいずれも別の碑文の一部とするがこれは誤り．またオンギ遺蹟での碑頭（表面の中央の高さ 40 cm, 裏面の高さ 33 cm, 底辺の横幅 40 cm, 厚さ 17～18.5 cm）の正面の右側面には横書き小銘文 7 行の一部がかすかに確認される．

碑文のスケッチ・復元図・写真：本報告書 **Plates 3a-3c** を参照.

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー言語学研究所サンクト=ペテルブルク支部；フィンランド国フィン・ウゴール協会アルヒーフ部 (No. 220), モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部.

考察または解説：

（1）先行調査の経緯：本碑文は 1891 年にヤドリンツェフのオルホン調査隊によって発見された．ラドロフは 1893 年にヤドリンツェフから送付された拓本とその図版解説を Atlas, pl. XXVI-1, 2 に発表した．同 1893 年にクレメンツが現地を調査して採拓し (Клеменц 1895b, pp. 246-258; cf. Войтов 1989, p. 35), また多数の写真を撮った (cf. ATIM, p. 244) が，今なおその拓本や写真は未公表である． 1895 年にラドロフは碑文の印刷テキストと最初の訳文を ATIM, pp. 246-252 に発表する．また翌 1896 年にはヤドリンツェフ採取の碑文とバルバル石の碑文とタムガの原拓本と修正拓本を Atlas, pl. LXXXIII に掲載する． 1909 年にフィン・ウゴール協会のラムシュテットとパルシが同地を訪れ，分割されていた碑文 3 断片の拓本を採取する (MSSP, p. 63; ラムステッド 1992, p. 229; Halén 1987, p. 99)．しかしその拓本の質はヤドリンツェフの拓本よりも悪いとされる (Aalto 1971, p. 107)．1926 年にコズロフ隊が当地を訪れ，遺蹟の現況を調査し，多数の写真を採る (Козлов 1949, p. 117; cf. Войтов 1989, pp. 36-38) が，なお未発表である． 1962 年にポーランド・モンゴルの両アカデミーの相互協定に基づき，トリヤルスキ隊はアルバイヘール市郷土博物館で碑文の 1 断片（小断片）を調査し，写真を撮り，銘文の残存状況を調査する (Tryjarski 1966, figs. 15, 26)．また現地を訪れて碑文の 1 断片（中断片）を発見し，銘文の残存状況を調査する (Tryjarski 1966, fig. 27)．再び博物館に戻って館長のナムハイダグワに通報する．館長は後日これを博物館に移す旨を表明する (Tryjarski 1966, p. 160)．また現地では上部が半円形の断片の片面の雄ヤギ型タムガをスケッチする (Tryjarski 1966, fig. 23, 23b)．彼はこの断片を主碑の頭部と見なし，その側面にはラドロフが記す銘文が記されている可能性を指摘している (Tryjarski 1966, p. 167, n. 17)．更にバルバル石上の銘文の残存状況を再調査する (Tryjarski 1973, pl. 3)．但し遺蹟は 1909 年から 1962 年まで，特に 1920 年代にラマ僧らが遺蹟を盗掘し，破壊が進行した模様である．銀板，馬の頭骨，馬具や土器片を発掘．現在マウンドに残る 8 つの穴ぼこは当時の盗掘跡であろう． 1969 年 3 月 10 日に ナムハイダグワが遺蹟を探索した際，新たな碑文断片（大断片）を発見し，リンチェンがこの碑文の 2 面の写真をトリヤルスキに送付する (Tryjarski 1974)．トリヤルスキは既発表のオンギ碑文と比較検討する (Tryjarski 1974, p. 630)．1987 年にヴォイトフとバヤルが再調査を行い，詳細な検討がなされた (Войтов 1989).

（2）碑文の解読研究については，ラドロフ以後は，彼の修正拓本と翻字に基づき，オルクン，マロフ，小野川等が各自転写，翻訳，訳注（小野川の場合は歴史的考察を含む）を発表した (ETY I, pp. 127-132; PDPMK, pp. 7-11; 小野川 1950, pp. 431-451)．一方，クローソンは，ラドロフによる修正拓本に疑問を抱き，主碑文を中心にラドロフの原拓本から再度，独自の翻字，転写，翻訳と歴史的考察を行った．なお，碑文の一部の字句をめぐる解釈について触れた論考は多数にのぼる．参考文献を参照せよ．

（3）建造当初のオンギ碑文の数について， 1909 年にラムシュテットと共に本遺蹟を訪れたパルシは次のような報告を残している．「土塁の東辺には，本来そこに立てられていた碑文の下端部（高さ 56 cm）があり，碑文の他の残片は 2 断片（碑文中間部の高さ 154 cm; 碑文上端部の高さ 104 cm）に分かたれている．‥‥ロシアのコズロフ[1]が採拓できた石碑は現在，地下深くに埋まっている．碑文を掘り出そうとした際に，実にその礎石――中央に 1 つの方形穴をも

---

[1] 大澤注：管見ではコズロフが本遺蹟を訪れたのは 1926 年であり，パルシ等以前に本碑文を採拓し公表されたものとなるとヤドリンツェフ以外には考えられず，ヤドリンツェフの誤りであろう．

つ方形の花崗岩板石１つ――が現れた．その下には，石柱が煉瓦の敷石層に続いていっている．地下の西縁で，板石と壁の間からは羊骨が掘り出された．‥‥その礎石には様式化された亀の画像が彫られ，顔を西に向けていた」(MSSP, p. 63)．他方，ラムシュテットはこの時のパルシの調査状況を以下のように彼の日記に書き留めている．「直立している石碑もあったが，往事の刻銘は風と気温のためにすっかり風化して，何も残っていない．‥‥別の所で基石を見つけたが，石柱は見あたらない．基石は大きくて立派だった．パルシが土台がどのようになっているかを調べたいというので，わきを掘ってみると，基石の下にれんがの層があった．棒を数本，見つけてきて反対側から基石を持ち上げようとした．パルシは基石の下に何か貴重な物があるに違いないと確信していた．ところがちょうどそのとき，男が近づいてきた．‥‥急いで基石を元にもどそうとしたときに，パルシは足を痛めてしまった．基石を持ち上げようという無謀な企ては徒労に終わった」（ラムステッド 1992, p. 229）．この両者の記載をそのまま受け取ると，本遺蹟の東の土塁には別の碑文の下部が地面に立っていて，その近くにこの上部の部分に当たる２つに折れた石碑断片が横倒しになっていたこと，さらに遺蹟の中央付近には本来の碑文が地中に埋められていたと解釈されかねない．しかし彼らの記載を点検する機会は，彼ら以後に現地調査を行う研究者がなく，また彼らの調査後は現地人による遺蹟・遺物の破壊が進んだため，永遠に不可能とされてしまった．それ故，従来の研究者（クローソン，トリヤルスキ，ヴォイトフ）は，ヤドリンツェフ報告に基づくラドロフ拓本には２つの石碑の存在はどこにも見あたらないにもかかわらず，ラムシュテットとパルシの報告に従い，オンギ遺蹟には碑文が大小２つあったと考え，第１石碑（主碑），第２石碑（小碑）と分けて考察してきた (cf. Войтов 1989, p. 43)．以下，この点について，考察してみたい．

（A）特にヴォイトフは石碑が２つあったことの根拠として，現在，残っている碑頭には広い面の両側には雄ヤギ型タムガと釣り針型タムガがそれぞれ刻まれており，この形状がラドロフ拓本での碑頭でのタムガ記号と異なっていること，更にトリヤルスキが 1962 年に本遺蹟を訪れた際に方形の亀趺以外にもう一つの亀趺を見つけたことを挙げた．前者の根拠については現在残る碑頭の両面の調査結果では，ラドロフ拓本に見られる雄ヤギ型タムガの両足にある釣り針型タムガは，縦筋に走った傷跡であり，本来のタムガ刻線とは区別されるべきものであることが判明した（**Plate 3a**, 碑頭部のスケッチを参照）．また後者の根拠については本遺蹟を発見した際のヤドリンツェフの報告を受けたラドロフのスケッチになく，またその後，本遺蹟を調査したラムシュテットやパルシの報告書や旅行記，さらにはコズロフの旅行記にはその存在については何も記載がない．おそらくはトリヤルスキが見つけた第２の亀趺は彼が訪れた 1962 年より少し前に何者かが別の遺蹟から持ち運んだものと見なすことができる．以上の理由から，ヴォイトフの挙げた２つの根拠は排除されるので，碑文は建造当初からただ一つのみ存在したとみなしてよい．

（B）パルシは東の土塁に立つ石柱断片を第２の石碑下部と見なし，その付近に倒れていた２断片をその上部と見なす．しかし大澤は Atlas 掲載のオンギ拓本と我々の調査した大，中，小の各碑文断片とを照合して，その比率に基づき本来の碑文の寸法を試算した結果，最低でも刻銘されていた箇所の長さは 271 cm（幅約 40 cm, 厚さは碑頭が 18.5 cm で碑文下部が 22 cm）となる．一方，パルシの述べる横倒しになっていた碑文の中間部 154 cm と上部 104 cm の２断片の長さの和 258 cm に，さらに東の土塁近くに立つ下部 56 cm を加えると第２の碑文は全長 314 cm もの長さになる．彼の見解に従えば，これ以外に主碑が地中に埋まっていたことになるが，筆者にはこのような想定は到底不可能である．何となれば，もしこれほど大規模な碑文が２つも立っていたなら，この遺蹟を発見したヤドリンツェフは必ず報告したに違いないからである．彼が報告していない以上，碑文は１つしかなかったとみるべきなのである．さらに，トニュクク碑文のように２つの石碑の東西南北すべての面が刻銘されているのとは異なり，本碑文では東面と北面のみに刻銘されていることも，別の碑石を立てて刻銘しなければならないようなスペース上の問題は生じなかったことを推測させる．

またパルシは亀趺を見つけた際，その下にあたかも碑文石柱があるかのように記しているが，これはラムシュテットの記載から窺えるように，掘り出された訳でもなく，パルシの「思い込み」であった可能性は高い（但し，その石柱が本来の石碑の下部断片であった可能性までは否定できない）．その際，大澤はパルシが報告した横倒しになった２断片の碑文こそが，本来の碑文の一部であったと考える．

（C）それでは，パルシが土塁東辺にある石碑下部と見なした石柱断片は何であったのだろうか？ラムシュテットはこの石柱断片を石碑下部と考えたようであるが，その上の文字は既に見えなかったことを付け加えることも忘れていない．大澤はこの石柱下部が本来の碑文の下部として，本来建造された箇所から土塁東辺に動かされて立てられた可能性も否定できないと考えるが，現状ではかなり疑問を抱いている（その当否はラムシュテット等が採拓したフィン=ウゴール協会所蔵の本碑文３断片の同定作業から今後，明らかになろうが，現時点では不可能なため今後の課題とせねばならない）．今回の我々の調査でも土塁東辺の箇所には固く埋め込まれた花崗岩製の石柱断片（高さ約 22 cm）を確認する事ができたが，パルシ等が訪れた時よりも上部は更に破壊されていて検証のしようもない．一方，ヴォイトフはこの石柱下部断片を彼のいう第２の石碑の下断片と見なして自説を補強しようとしている．しかし大澤は 1997 年度の調査においてイフ=ホショートゥ遺蹟並びにトニュクク遺蹟でもマウンド内部の東辺には未加工石のバルバル石が複数存在していたことを確認した（本報告中のイフ=ホショートゥ遺蹟の項目を参照）．特に前者のバルバル石は固く固定されており，これが建造当初よりマウンド内部に位置していたことが明らかである．以上の状況からすれば，上述２つの遺蹟と同時代に相当する本遺蹟マウンド内部の東辺にもバルバル石が配置されていたとみても何ら差し支えない．以上から大澤はパルシ等が第２の碑文の下部断片と記し，ここから自説を補強しようとしたヴォイトフのいう第２の碑文下部と

は実はマウンド内部に建造されたバルバル石の下部断片と見なすのが至当であると考える．

（4）ラドロフはヤドリンツェフから送付された拓本 (Atlas, pl. XXVI-1, 2) を解説した際，その拓本図版2を碑文の下端で，「5本の罫線で分けられた水平の行」という説明を与えているが，これは誤りである．実際のこの下部断片の正確な位置は Atlas, pl. LXXXIII- (Oa) で示されているように碑文の右側面の切り離された下端断片に相当し，そこには3本の罫線しか窺えない．我々が今回調査した本碑文の大断片の右側面はこの箇所を含んでいて，その正しい位置が今回，改めて確認された．さらにラドロフはヤドリンツェフの報告から「碑文は石の基部までは達しない」と述べつつも，下端には上記の刻銘箇所があることを記していて，その下端断片を数 cm の空間を開けて推測して右側面 Oa の下部に置いている．しかし今回の大断片中での下端断片の位置から明らかにされた空白箇所の長さは，最上部の欠けた箇所から測定して約 40 cm あったと見なすべきであろう．またこの下端断片の最終の文字の箇所は完結した字句で終わっていないことから見て，本来の刻銘場所はさらに下端にまで延びていたに相違ない．こうした刻銘状況から見て，大澤は正面の下端にも右側面の下端と同様の箇所まで（おそらくは碑文の基部近くまで），文字は刻まれていたに相違ないと考える．ただラドロフが述べているように，既にヤドリンツェフの採拓時点では碑文の下端部はかなり損傷や摩滅が進行していたために，Atlas ではただ文字の確認された箇所のみを掲載したものと判断できる．

（5）1962 年にトリヤルスキが現地で発見した2つに分かれた「真ん中の長めの石」(71 × 34 × 15 cm: Tryjarski 1966, p. 16) をヴォイトフは，これを上記の見解と結びつけて第2石碑（小碑）の地中に埋め込まれた断片とみなしている (Войтов 1989, p. 43)．しかし第2石碑の存在の根拠が否定された以上，この見解は排されるべきであろう．ヴォイトフの調査時には確認されなかったこの断片の行方は現在も不明なままである．

（6）石碑の小断片（長さ 19 cm, 幅 16 cm, 厚さ 9 cm）は 1968 年にナムハイダグワによりオンギ遺蹟から 300 m 地点で拾われてアルバイヘール市郷土博物館に移された．ヴォイトフはこれを幅や文字の寸法，文字の間隔や行の間隔といった面から別の遺蹟に属するとする (Войтов 1989, p. 43)．しかしこれは我々の写真・拓本とラドロフ拓本との照合の結果，オンギ碑文の広い面の碑文の，判読できない第5行の一部と，第 6, 7, 8 行の書出し部の断片であると断定できる．

（7）もうひとつのアルバイヘール市郷土博物館所蔵の石碑の中断片（長さ 29～30 cm ×幅 21 cm ×厚さ 16 cm）をトリヤルスキはオンギ碑文広い面の一部とみて，約 20 文字を確定し，これらを本来の碑文正面の第 5, 6, 7 行目断片に同定する (Tryjarski 1974, pp. 167-168, figs. 15, 26, 27)．大澤もこの見解に賛成であるが，さらに今回の写真・拓本との照合によれば，ラドロフ拓本ではかなり損傷を受けてはいるが，8行目の冒頭にも文字は刻まれていることから，本来は4行あったものの，本中断片の8行目の箇所は既にヤドリンツェフが採拓した 1891 年時点には摩滅していたとみなすべきと考える．これに反してヴォイトフは中断片と大断片2つはただ上部と下部だけ叩き割られただけで，側面はもとのままと考え，しかも中断片の発見地は不明とされていることから，これらを未知の碑文の一部とみなしている (Войтов 1989, pp. 43-44)．しかし中断片は先に論じた如く，間違いなく，オンギ石碑の本文一部に該当する．また大断片については博物館の調査や写真・拓本の照合結果，上下のみならず，左側側面は刃物等で削られた形跡があり，本来はもっと広い面からなっていたことが判明し，中断片と同一には論じ得ない．以上より中断片についてはヴォイトフ説には従えず，トリヤルスキの見解が正鵠を得たものといえる．

（8）アルバイヘール市郷土博物館所蔵の大断片については，その写真をリンチェンはトリヤルスキに送付したが，ヴォイトフはこの大断片（高さ 79 cm, 片方の刻面幅 18～22 cm, 他方の幅 18 cm, 滑らかな面は 16～18 cm と 20～22 cm）をも未知の碑文の一部とみる (Войтов 1989, p. 44)．しかし実際の調査及び，写真と拓本とラドロフ拓本の照合の結果，この大断片は本来の石碑の広い面の第 1, 2, 3, 4 行目の本文と，他方の面は本来の石碑の狭い面（側面）の第 1, 2, 3, 4 行に相当することが判明する．従って，大断片に関するヴォイトフ見解には従えない．

（9）碑文の面の名称問題について．ラドロフはヤドリンツェフ拓本 (Atlas, pl. XXIV) の図版解説では「正面の上部にはハンの印がある．右側面にはさらに正面の行と同じ高さから始まる垂直の行がある．これらの上に，ハンの印と同じ高さに，さらに水平の7行がある」と記し，また解読の前書き部分 (ATIM, p. 244) では正面8行，その右側に4行あるというように両面の位置関係を正しく述べている．また彼はその後の拓本と修正拓本箇所 (Atlas, pl. LXXXIII) 及び解読の前書き部分 (ATIM 1895, p. 244) では正面の垂直8行の碑文面を (O), その右側の垂直4行の碑文面 (Oa), 同じくこの4行碑文の上部での，平行に走る7行銘文を (Ob), そして雄ヤギ型タムガと釣り針型タムガのあるバルバル石の小銘文を (Oc) と命名したが，各碑文面が如何なる面に当たるかについては何ら記していない．因みに Clauson 1957, p. 177 では (O) を前面，(Oa) を側面というのみであり，GOT, pp. 291-292 でも (O) を前面，(Oa) を右側面と正しく表示している．ところが我が国では，小野川 1950, pp. 442-444 がラドロフの (O) を東面に，(Oa) を南面に，また (Ob) を南面上部と記して以来，何の疑問もなくそのまま踏襲され，碑文正面には「東面」，側面には「南面」という名称が与えられてきたが（沢田 1983a, p. 54; 沢田 1983b, p. 79; 沢田 1984, p. 94）これは訂正されるべきである．事実，本来の碑文は広い面とその右側の面の2箇所に刻まれていたことは現存する大断片の刻面状況からも明らかである．しかも MSSP, p. 130 の図版では亀跌のほぞ穴の寸法は頭部－尻方向の長さが 43 cm で，横幅は 28 cm であることことからみて，碑文の広い面は亀の頭か，尻の方向を向いて立てられていたことは明らかである．また 1891 年にヤドリンツェフの調査日誌では「碑文は南を向いて立てられていた」(Ядринцев 1901, p. 43; cf. Войтов 1989, p. 43) とある．そうであれば，発見当初，碑文は広い方の刻面を南側に，側面の刻面を東側にして立っていたと推測される．それ故，発見当初の碑文は広い方の刻面を「南

面」に，狭い方の刻面を「東面」にして立てられていたのであろう．しかし，筆者は発見当初は碑文が南面していたとしても，それが建造当初のままとみなしてよいかどうかは，なお検討の余地があると考える．というのも，マウンド東端は細い切りこみ部分があり，マウンドの西方の主廟に向かう参道らしき道があって，碑文もオルホン廟の如く，東面にルーン文字が彫られていて，広い方の刻面が東面を向いて立っていた可能性が排除できないからである．この見解にたてば，碑文の広い刻面は東面に，側面は北面と規定することも可能である．本碑文の建造当初の向きについてはなお検討の余地あるも，本報告では広い方の刻面を「東面」に，側面の刻面を「北面」として記載しておく．

(10) 本碑頭の表と裏の両面に刻まれたタムガの形状がホショー=ツァイダム碑文に彫られた雄ヤギ型タムガ以外の要素（釣り針型タムガ）を含んでいることの背景には，この碑文の主人公の属する家系が阿史那一族には属するものの，ビルゲ可汗やキョル=テギンとは別の家系に属することを伝えていると見なすべきであろう (cf. 小野川 1950, p. 432; 沢田 1984, pp. 94, 96).

(11) これまで本碑頭では雄ヤギ型タムガとその左に釣り針型タムガが注目されてきた．しかし，ラドロフ拓本にも確認されるように，半円形の碑頭上端に沿ってカマボコ形の線刻が施されているのが確認される．その詳細についてはこれまで触れられてこなかった．しかし，東突厥の復興・発展に功績のあったトニュククやキュリ=チョルといった，非阿史那家出身の宰相や高官の石碑では，その碑頭は単に四角形に切断された粗形で，かつ亀趺に立てられていないことを想起すれば，本碑頭で半円形に加工された上，その内側には左右対称の装飾線が引かれていることは，まことに注目すべきである．このカマボコ形の表現こそは，生前の被葬者が阿史那一族の王侯であったことを証するために，突厥第二可汗国期の王侯クラスの碑文頭部に左右に配された双頭竜の簡略表現とみなすことが可能であろう．またこの簡略化された形状は本碑文のかなりデフォルメされた稚拙な亀趺の像とタイアップするものといえる．

参考文献：Atlas, pl. XIV, 2-4, 26; ATIM, pp. 243-256;ETY I, pp. 127-132; Айдаров 1971, p. 30; Bazin 1964, pp. 201-202; SCMT, pp. 152-161; Болд, pp. 74-77; Clauson 1957, pp. 175-192; Clauson 1962, p. 82; Pälsi 1911; Pälsi 1949; MSSP, pp. 63-64, 131-132; Katona 1925, pp. 414-415; Клеменц 1895, pp. 246-258; Козлов 1949; PDPMK, pp. 7-11; Раджабов 1966, pp. 79-85; Раджабов 1970, pp. 33-43; Ramstedt 1978, p. 210; Rinčen 1968, p. 44; Сэр-Оджав 1970, p. 46; GOT, pp. 255-256, 291-293; Tryjarski 1971, pp. 121-135, fig. 1-26; Tryjarski 1972, pp. 35-43; Tryjarski 1966, pp. 158-173, figs. 1-27; Tryjarski 1974, pp. 629-630; Tryjarski 1991; Tryjarski / Aalto 1973, pp. 413-420; Войтов / Баяр 1989, Войтов 1989, pp. 34-50; Войтов 1996, pp. 125-126; Войтов 1986; pp.118-136; Ядринцев 1901; 小野川 1950, pp. 431-451; 沢田 1983a, pp. 52-73; 沢田 1983b, pp. 79-94; 沢田 1984, pp. 94-110; 林 1991; 林 1996. Hamilton 1974a; Кляшторный 1964, p. 63.

テキスト・翻訳　Text and Translation

以下，翻字 (Transliteration) はボルドとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は大澤の責任で提出する．

翻字・転写　Transliteration and Transcription

Our investigation requires the revision of Radloff's naming of the front (O) and right (Oa) sides into the Eastern (E) and Northern (N) sides respectively.

E1 ////////////

yavïz/ /-m ter ermiš amtï /

E8 Q(ŋ m). /:. . . . . /
qaŋïm /:. . . . . /

N1 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

//////////// Heaven ////////////////////

Short inscription on the head-stone

1 ////// (stone) [inscription]
2 ////// eternal (stone)
3 my //////, my (dear) father
4 ////// dear father, [in the year of] Dragon (lü)
5 /////wise,
6 ////// warrior, good qa[n]
7 my dear father /////

和訳

E1 //潰えた（滅びた）．/////////////

E2 //タブガチ（中国）へ，北方へは（山林へ）

E3 //と上方でテングリが言（った）

E4 //［タル］カン，同族に属する65人の我が兄達（または叔父達）や甥達（または孫達，または従兄弟達）

E5 ////////////////////////////////////となった．我が父はバガ=（テングリケン）//////////////////////////////////////

E6 テングリケン//////////////////////////////そこで与えた．就任した時に//////////////////////////////////

E7 悪い//////////////////////////////と彼は云った．現在の//////////////////////////////////////

E8 我が父//////////////////////////////////.....//////////////////////////////////////

N1 //私は～した//////////////////////////////////

N2 //私には奉仕したい気持ちがあった，確かに．彼らが攻撃したので，//////////////////////

N3 //そのように私は忠告した．東方へ行かんとする者は行った．その後////////////////

N4 //を私は獲得した．//////////////，テングリ//////////////////////

碑頭上部の横書き銘文

1 /////////石碑を////////
2 /////////永遠なる（石碑）//////
3 私の/////，私の親愛なる父///////
4 //////////，私の親愛なる父，タツ
5 （の年に）///////賢明な//////////
6 ////////////戦士，善きカン
7 私の親愛なる父//////////

訳注

E2, yïrïya: Atlas, pl. LXXXIII-2 での修正拓本では Y i R a y a とあり， ATIM, p. 247 では yïraya と転写された．しかしその後，同じくラドロフ翻字に依拠しつつも，yïraya (PDPMK, p. 8) と並んで yïrïya (ETY, p. 8) と転写方法は分かれている．一方，クローソンはアトラスの原拓本から新たに当箇所をY i R y a と翻字して， yïrya と転写するが，一方でクローソンの翻字を採用するテキンは yïriyä と転写している (cf. GOT, p. 255)．問題は第4文字であるが，我々の拓本では第4字目の母音は確かに存在し i と判読できそうである．また大澤は本語句での第5字目 y が前舌系の文字で示され，母音調和していないにもかかわらず，第1音節の母音が後舌音であることから，第2音節，第3音節もこれに従い，後舌系の母音を補うのが自然であると考え，見出しの如く読んだ．ただし四方位の中で「北方」に関する表記は，翻字通りに転写した時， yïrïya （トニュクク碑文第1碑西面第7行）， irin （シネウス碑文東面第7, 11行）のように母音調和して

表記される場合もあれば，本例や yirïγaru（キョル=テギン碑文南面第２行；ビルゲ可汗碑文北面第２行），yirïya（ビルゲ可汗碑文南面第１行），yirïdïnta（トニュクク碑文第１碑南面第４行），yiriyaqï（トニュクク碑文第１碑南面第７行）の如く，母音が不調和の場合も散見される．ルーン文字碑文では本来なら後舌音 Y で表記さるべき箇所に，前舌音 y で記されたれ単語は数例知られる (GOT, p. 40) が，こうした綴りに揺れが見られる背景については不明である．なお yir(i) ＋与格をめぐる表記の検討については Tekin 1996, pp. 331-332 も参照．

E4, aymaγlïγ: 従来この字句は yumγïlïγ (ATIM, p. 247; PDPMK, p. 9), yamγïlïγ (ETY , p. 128) と転写する説と aymaγlïγ (Clauson 1957, p. 185, 188; GOT, p. 255, 291) と転写する説がある．しかし前者の読みに対しては本字句には第一音節中には円唇母音が表示されておらず，表記上無理がある上に，これまで yomγï / yumγï「すべて」(CTD, p. 165; ED, p. 935; DTS,p.279)に-lïγ（名詞から名詞・形容詞を形成する語尾）の付加された語が在証されていないことから支持できない．他方，後者の転写を主張するクローソンは aymaγ を「部族連合か，それに類するもの (tribal confederation or the like)」と解すべきと主張するが，この意味で aymaγ が使用された例を同時代資料からは見いだしえない．大澤は Atlas, pl. LXXXIII-2 での修正拓本から窺える本語の前後の文脈では被葬者の生前の官職名や彼の息子達の名前，その親族が列挙された箇所に相当することから見て，yamaγlïγ, yamγalïγ, yïmγalïγ と読んで直前に官職名が示された人物の名か，あるいは官職名である可能性も排除できないと考えるが，確証はない．それ故，現時点では aymaγ「部族；氏族；一族 (Stamm)」(TMEN, I, pp. 182-186, Nr. 61)＋ -lïγ（出身や帰属を示す Denominal Noun / Adjective を形成する語尾）と見て，具体的には本碑頭に刻まれた雄ヤギ型タムガと釣り針型タムガから窺われるように本被葬者が「阿史那の傍系一族に所属していた」という意味に解しておきたい．なおテキンはクローソンの転写を採用した上で，現代トルコ語の soylu < soy「家，血統」に -lu が付属して「名門の」を意味するという例を引いて aymaγ "clan, family" に所有を表す出名名詞形成語尾 -lïγ が付された形とみて疑問符を付しながらも「高貴な，名門の (noble, of high lineage ?)」という意味に解している (GOT, p. 105).

E4, beš yetmiš äčim atïm: クローソンは本箇所を Atlas, pl. LXXXIII-2 から独自に翻字・転写して，[. . el] etmiš, [atïm, t ? 10 to 14 words missing] と疑問符を付しつつ，"my name is (Alp ?) El-etmiš of the aymag of" と翻訳した (Clauson 1957, pp. 182-183). しかし，我々の拓本からはラドロフの読みが支持できることが確認された以上，クローソンの読みには従えない．クローソンは「65 人」という数字がこのような箇所に見られることは奇妙と見た．しかし大澤は「65 人の我が弟達や息子達」という表現は，同じ行での本語句の前の箇所では，被葬者の一族の名前や官職名を列挙していることから，その葬儀に参列した一族や親族や彼らに仕える人々の総数が 65 人にのぼったことを指すと考えている．こうしたことはトゥヴァ共和国のイェニセイ河上流で発見されたエレゲスト碑文第２行にも「100人の男系親族，有能である故，100 人と 50 頭の雄牛によって，（この碑文を運んで）立てた」(Tekin 1995, p. 20-23) ことが記されていることも，この際参考になろう．なおäčiとatïは単数形ではあるが，翻訳の際には複数と解した．古代トルコ族の親族名称にはなお多々議論がある (cf. Baştuğ 1993). äči は「自分の父よりも年下の男系親族，または自分より年上の親族，即ち父より年下の叔父，または兄」を意味し (ED, p. 20), atï は「自分の弟の息子，または自分自身の息子の息子，つまり年下の甥か，孫」(ED, p. 40b) の他，従兄弟を意味することもある (Baştuğ 1993, pp. 9-10). ただ大澤は，本碑文の正面の第１行目冒頭での äčümiz apamïz が「我らの祖先」(cf. GOT, p. 291) を意味する二語一意 (Hendiadys) として解されるように，äčim atïm も二語一意 (Hendiadys) として，主人公であるエル=エトミシュの属する父兄親族集団を指しているのかもしれないとも考えている (cf. Baştuğ 1993, pp. 14-15).

E6, boltuqda: bol- は「になる，就任する；即位する；支配する」などと文脈により様々な意味をもつ．碑文史料ではこの語は通常，可汗の即位を示す際に常用されるが，それ以外にシャドなどの高官が就任した際にも用いられている．本碑文の直前には官職名が示されてはいないものの，また本断片からは確認できないとはいえ Atlas, pl. LXXXIII-2 での修正拓本からはその直前の箇所に主人公がシャド職を授けられたことが記されている (ATIM, p. 248). それ故，本箇所もシャド職への就任を述べた表現と見なせよう．

E7, amtï: Clauson 1957, p. 182 は本語を m[än] と翻字しているが，我々の拓本では，やはりラドロフの翻字が正しいことが確認できる．ATIM, p. 249; GOT, p. 255 はいずれも matï と転写し，それぞれ「優れた，優秀な (trefflichen)」「忠実な (faithful)」との訳語を与えた．一方，ETY, p. 128; PDPMK では amtï と転写して，「現在の」と翻訳する．この語は今は失われた前後の文章との関係から明らかにされるかも知れない．その場合，本語は生前の主人公が君主に忠誠で，敵に向かって進軍しようと，配下のベグ達に呼びかけた回想場面で使用されている (cf. ATIM, p. 248; GOT, pp. 291-292) . なお amtï (or matï) baglär の語句はビルゲ可汗碑文南面第 14 行にも見られ，可汗が即位した際に参集した場面で使用されているが，その読みと用法はなお不明といわざるをえない (cf. 片山 1992, p. 155, n. 9). 成案もないので，amtï の読みを採用しておく．

N2, bersägim bar ärmiš ärinč: テキンは bärsägim の語形成を ber- + -sä +g +im とし，動詞語幹 ber-, 願望を表す動詞形成語尾 -sä, 名詞形成語尾 +g, 一人称所有語尾 +im からなると説く (GOT, pp. 116, 111). しかしエルダルは，古代トルコ語の願望形はウイグル仏教文献及びマニ教文献で通常は -(X)gsA の形で，極めて稀には ＋sA の形で見られるが，この願望形はルーン文字史料では在証されないと述べ (OTWF, pp. 525-526), また -sä / -sa の願望用法がオンギ碑文にあったとするテキンの見解は誤りで，かつ不可能であると述べている (OTWF, p. 527, n. 147). 一方，Кононов 1980, p. 127 では -saγ /

-säg を「不足や比較」を示す語尾 -sa ～ -sï ＋動詞から形容詞を形成する語尾 -γ / -g から構成されたものと考え，同様の機能をもつ語尾 -sïq の音韻的対語に当たると見なす．そしてこの用例は本箇所にしかみられぬものとして「私には（自分のカガンに）労力を捧げたいという願望があった」と翻訳している．確かに材料が本例しかないこともあり，ルーン文字史料での願望形の存在の当否については，更なる検討を要する．ただ大澤は本箇所が本来は b r g s m と刻まれるべきところが，g と s が逆に刻まれてしまった可能性も否定できないと考える．この可能性を含め，大澤は今のところテキン，コノノフの見解に従い，+sA 願望形の異形として解釈しておきたい．

N2, tägdükin üčün: この形では -dük 動名詞の意味上の主語は不明であるが， Atlas, pl. LXXXIII-2 修正拓本からは当該箇所の後続には不明な数文字分の後に [yï]γdïm （打ち勝った）と解する ETY, p. 130 の読みによれば， tägdük「攻めた」側の人物は「私」に敵対した人々と理解される．それ故，翻訳では「彼ら」を意味上の主語と見て補った次第である．

N3, ilgärü barïγma bardï: 従来の読みではいずれも冒頭の字句を kärü と判読している．中には「退却せんとする者は行った」と読み (cf. GOT, p. 292), 主君から離反せんとする者を味方につけたことを意味し，ひいては主人公の功績に転化された箇所と解釈する者さえいる（沢田 1984, p. 109, n. 46）．しかし，我々の拓本では冒頭には Y 字の上部右側が摩滅していて，次の箇所にはオンギ碑文に独特の g 音を示す文字の一部である下半分が判読できる．それ故，ここは「前方に，東方に」と訳されねばならない．また barïγma は「行く」を意味する動詞語幹 bar- ＋介入子音の ï ＋動詞から名詞（形容詞）を形成する分詞で，ここでは「～する者」を表す -γma から構成される (ATG, p. 77; GOT, p. 176)．実はこの箇所と同様の ilgärü [barïgma] bardïγ qurïγaru barïγma bardïγ といった表現がビルゲ可汗碑文東面第 19-20 行に見られ，カプガン可汗の時期に突厥の部民がオテュケン山から東西に遠征して周辺諸族を服属させた際の様子を述べた時の表現として使用されていることを付け加えておきたい．

碑頭の右側面の横書き小銘文：

3, atačïm: かつては Tačam と人名に見なされていたが， 1953 年にガバインが ata 「父」に指小辞・愛称形の -čïm が付属した形と提唱して以来定説化してきた (cf. ATG, p. 59; Clauson 1957, p. 183; GOT, p. 104; Кононов 1980, p. 96)．ただ 8 世紀前半での碑文では qaŋïm が「我が父」を意味する常用語であり，オンギ碑文第 5 行目でもそのように刻まれている一方で，ほぼ 11 世紀初頭頃に qaŋ に取って代わられるとされる ata の存在が本当にこの時期に使用されていたのかを疑問視する向きがあったことは否めなかった (Sims-Williams / Hamilton 1990, p. 68, G5. 2)．それ故，我々の拓本からこの字句の存在が確証されたことの意味は大きい．なおルーン文字碑文のなかで，イェニセイ碑文のウィバート第 3 碑文 4 行目 (Atlas, pl. XCIC; ETY III, p. 145; Малов 1952, pp. 63-64) やホイト=タミル第 9 碑文 2 行目 (ATIM, pp. 266-267; ETY II, p. 114; PDPMK, pp. 52-53) で Tačam と転写されてきた語も， atačam と訂正されなければならない．

4: lü: 我々の拓本からは冒頭の L 字のみを確認できる．なお本碑文における lüi / lü （~ uig. luu < chin. 龍）の表記をめぐる議論については Clauson 1957, p. 187; ED, p. 763a; Hamilton 1974a, pp. 300-302 を参照せよ．

イフ=ハヌイ=ノール遺蹟・銘文　Site and Inscription of Ikh-Khanui-Nor

大澤　孝　(Takashi ŌSAWA)

調査場所：アルハンガイ=アイマク，エルデネマンダル=ソムから東南約 5 km の地点．東方に約 5 km 行くとイフ=ハヌイ=ノール湖岸に達し，南南西約 10 km の地点にハルホル=ハン遺蹟が位置する．北緯 48 度 29 分，東経 101 度 22 分，高度 1595 m．遺蹟の地図としては Войтов 1986, p. 74, fig. 1 を参照．

調査日時： 1996 年 8 月 29 日．

調査者：森安，片山，大澤，ボルド，バットルガ．

調査方法：遺蹟・碑文共に森安，片山，大澤，バットルガがビデオ撮影，森安，片山，大澤，ボルドが写真撮影．また遺蹟の東方に置かれた石人 2 体の寸法を計測．また遺蹟を取り巻く土塁の寸法及び石槨板石の各寸法をメジャーで計測する．東面板石上の左右の銘文の拓本を各 2 部ずつ採る．

遺蹟の現況：本遺蹟は塀に囲まれた耕作地内にある．本来，東西に並んだ 2 つの石槨を中央にもつやや隆起したマウンドとその周りを周溝（その外側部分の寸法は南北 11 m ×東西 22 m）が取り囲み，さらにその外側を土塁（その外側部分の寸法は東西約 35 ×南北約 30 m, 高さは約 30～40 cm）が取り巻く構造になっている．なお 1909 年にここを訪れたパルシが 2 つ存在したと記す (MSSP, p. 62) ところの西側の石槨板石のあった地点には掘り返された痕跡を残すのみで，石槨はすべて消失してしまっている．東側の石槨板石は四面とも部分的に残存しているが，どちらかと言うと粗い作りである．その東側の板石の上部には円型にくりぬかれた穴の下半分が確認される．穴の上部箇所は欠けている．残った穴の直径は約22cmである．その穴を挟んで左右対称に板石正面の右側と左端にルーン文字銘文断片が刻まれている．この板石の地面からの高さは最長で 135 cm, 横幅は 218 cm, 厚さは 14 cm である．ヴォイトフはこの板石の寸法は直径 3 m あったと見なしている (Войтов 1986, p. 83)．北側の石板の高さは地面から 87 cm, 長さは 180 cm, 厚さは 7 cm, 西側の石板は地面からの高さが 106 cm, 長さ 170 cm, 厚さ 11 cm, 南側の板石は地面からの高さが 84 cm, 長さ 180 cm, 厚さ 11 cm である．クレメンツ発見当時には石人 2 体が石囲いの中にあったという．その後，フィンランド隊のパルシが訪れた 1909 年当時には 1 体が東側の石槨内部に配され，もう一つが石槨の東北に置かれていた．現在，石人は 2 体とも東側板石の前方に置かれている．頭が半割れ状態の石人は地面からの高さは 133 cm （ヴォイトフの計測値では 145 cm），肩幅 53 cm, 厚さ 50 cm である．もう一つの頭部が欠けた方の石人は地面からの高さは 76 cm （ヴォイトフの計測値では 95 cm），肩幅 54 cm, 厚さ 30 cm である．またバルバル列石はない．もともとなかったものか，もしくは耕作地とされた際に除去されたのかは現在のところ不明である．

遺蹟の図面・写真： 1909 年にフィンランドのラムシュテットとパルシが本遺蹟を訪れた際の写真は MSSP, p. 128, pls. 72,73 を参照．また遺蹟の図面は MSSP, p. 61, fig. 5; Войтов 1986, p. 83, pl. 9; Войтов 1996, p. 58, fig. 37を参照．なお本報告書では，遺蹟の現況図を **Plate 4a**, 推定復元図を **Plate 4b**, 遺蹟の規模については **Plate 4c** として提示する．

遺蹟の景観：森安担当（1996 年の行動記録を参照）．

碑文の現況：東面板石の正面での左右（南北）両端に刻まれている．右側（北側）の銘文は上側から下に楕円を描き，また上方へと戻る方向に左向きに刻まれている．左側（南）側の銘文は，上方から下方へ左向きに刻まれている．右端及び左端の文字の寸法は 4～6.5 cm である．また本銘文には 2 点からなる分離記号は使用されていない．

碑文のスケッチ・復元図： Бамбаев 1927 (cf. Кляшторный 1978, figs. 1a, 1б); MSSP, p.128, pl. 73; Войтов 1986, p. 79, figs. 6-5; Болд, p. 38.

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト=ペテルブルク支部；モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部．

考察または解説：

（1）調査の経緯：本遺蹟は， 1891 年にクレメンツとドゥディンのオルホン調査隊により発見された． 1909 年にはフィン=ウゴール協会のラムシュテットとパルシがエルデネマンダル遺蹟を訪れ，その中に含まれるイフ=ハヌイ=ノール遺蹟を調査して，遺蹟図面や写真撮影を行っている (MSSP, pp. 61-62, fig. 5, p. 128, pls. 72-73)．また同年には，フランス政府の後援のもとド=ラコスト隊も本遺蹟板石上での銘文を観察したり，石槨や石人 2 体を調査して，その 1 体の写真を発表している (De Lacoste 1911, p. 115, pl. 25)．その後， 1927 年にモンゴル・タンヌ=トゥヴァ調査委員会の民族・言語班の研究員バンバエフが本遺蹟を調査し，東方の石槨の東面板石上の 2 つの銘文の採拓とスケッチを行ったりしている (Бамбаев 1927, p. 2, cf. Кляшторный 1978a, pp. 241-242)．その後，遺蹟は 1977 年に蒙ソ合同歴史文化調査団碑銘班のクリャシュトルヌィ等により再調査され，さらに 1980 年には同じ調査団のハヌイ遺蹟調査班のヴォイトフ等が詳しい調査を残している (Войтов 1986b, pp. 74-89; Войтов 1996, pp. 50, 58, fig. 37)．

（2） 1891 年に本遺蹟を発見したクレメンツはラドロフ宛てに次のような遺蹟の状況を書き送っている．「イフ=ハヌイ=ノールの北端から近くで 2 基の王侯墓がある．モンゴル人はこれらの墓を hoyur-oron 『2 つの寝台』と呼んでいる．墓は変成頁（けつ）岩からなる一組の板石で囲まれている．石囲いの内側には頭のないかなり粗末な作りの石像がある．板石の外側にはホショー=ツァイダム遺蹟のそれと同じ一連の，連続した六角形文様が施されている．この墓の

板石の一つに小ルーン文字銘文が彫られていたので，当然，私はさっそく採拓した」 (Клеменц 1892, p. 17; cf. Войтов 1986, p. 82). その後クレメンツは，彼が採拓した北側の銘文を含めて本遺蹟に関する重要な情報を新たに補足している．即ち「この湖の西岸に，岸から約 200 サージェン (= 427 m), 廃墟から北へ約 3 ヴェルスター (= 3.2 km) のところに，5 フィート (= 152 cm) 離れて 2 基の石の墓がある．‥‥西側の 1 号墓は，東西の長さが 8 フィート (= 244 cm) で南北の幅が 5 フィートである．墓は 4 枚の接した板石によって囲まれていたが，そのうち多かれ少なかれ残っていたのは，西側と南側の板石である．北側と東側の板石は，地面からわずか数インチ出ているに過ぎない．残っている板石の高さは 2.5 フィートで，長さは南の板石が 5 フィート，西側の板石が 4 フィートである．板石は薄層状の，より適切にいえば，中が水晶によって分離される縞状構造の種類からなる．板石の外側には水平方向に六角形が並ぶ列の装飾が刻まれている．南側の板石の西端には，両端が S 字形が垂直方向に並ぶ縁飾りが残っている．石囲いの中の墓は平らで，そこに両腕を胴体につけた普通タイプの粒の細かい花崗岩製のカメーナヤ=バーバがある．右腕は肘を曲げて手を上につけた普通タイプ状となった装飾を伴う垂直に続いていっている縁飾りの痕跡が残っていた」 (Atlas II, クレメンツの解説メモ， pl. LXXIII, fig. 2 (J.)).

（3） 1927 年にバンバーエフは，ハルホル=ハン遺蹟から北西に 3 ヴェルスターの地点で，テュルクの埋葬地を見つけ，次のように書き記している．「‥‥これらは昨年，現地のモンゴル人によって財宝目当てに掘り返されている．かなり大きな石が深さ約 1.5 サージェンの穴に投げ込まれていたり，地中に埋まっている」 (Бамбаев 1927, p. 2). また彼は写真撮影と拓本及びスケッチをしたと記すが，現在はただスケッチのみ残されている．なお彼の証言からは，本遺蹟は 1926 年に盗掘を受けた際に，西方の遺蹟は破壊されたことが判明する．

（4）ラドロフはクレメンツから送付された拓本を Atlas, pl. LXXIII-2a に，その修正拓本を 2b に掲載してはいるものの，原拓本の質があまりよくないために，その修正拓本から窺える各文字は，今回我々が採取した拓本から窺える文字とは大幅に異なっていて，そのまま利用する事は危険である．むしろ，パルシが撮影した写真から窺える銘文は極めて鮮明であり，この箇所についていえば今日までそれほど損傷を受けていないことが窺える．またバンバエフの採った拓本は現在，行方不明であり，ただ彼の銘文スケッチのみウランバートルのモンゴル科学アカデミー歴史研究所に収められているようである (cf. Кляшторный 1978b, p. 243).

（5）ラドロフは本銘文の字体がボルガン県イヘ=アスヘテ（またはフル=アスヘテ）碑文のそれと同じとみなしている (ATIM, p. 259). またクリャシュトルヌィは本遺蹟とルーン文字銘文の年代を Bain Davan-ye-aman やイヘ=アスヘテ遺蹟と同様に 8 世紀とみなす (Кляшторный 1978a, p. 241). 碑文の文字数は右側の銘文が 29 字，左側の銘文が 9 字．2 点の分離記号は使用されていない．文字の高さは，右端・左端の銘文とも約 4〜6.5 cm である．

（6）南側の銘文と北側の銘文は同じ板石に彫られ，無関係ではないと思われる．そのことは文字の形や寸法の点で異なる点はなく，各語句の間や末尾には 2 点の分離記号は使用されず，代わりにイェニセイ碑文に特徴的な悲嘆の感情を示す感嘆語 a が刻まれていることから支持されよう．おそらく板石での文字の進行方向は現在は破損して存在しない板石の右端上部から始まり，右側の銘文に続き，その末尾部分から今度は上方に向かい，その後再び旋回などして，左端の銘文へと繋がっていたと考えられる．その点ではイヘ=アスヘテ第 2 碑文の刻文状況に類似していたということができるかも知れない．本碑文で注意すべきは，板石右端の銘文の動詞語尾は 2 人称で記されているのに，左端銘文は 3 人称で記されていることである．その原因は何に由来するのだろうか？銘文末尾の下にはなお余白があるのに，何も記されていない点から見て，一連の銘文はここで終わったことが知られる．こうみてくると，本銘文は一連の銘文の最末尾に位置していたに相違なく，その場合に考えられるのは通常の碑文の書式に照らして，刻銘者自身の行為に関する箇所とみなすことができる．動詞 yarat- の前は欠けていて，作ったものが何なのかは不明であるが，大澤はこの末尾の文章の冒頭には本銘文を含む遺蹟や遺物の作成者の名前が記せられていた可能性は高いと考える．

参考文献： Atlas, pl. LXIII, explanation of fig. 2 (j), pl. LXXI, 1-4, explanation, pl. LXXIII-2a, 2b, explanation; ATIM, p. 259; Клеменц 1892; Dudin 1892; De Lacoste 1911, pl. 25; Бамбаев 1927; MSSP, pp. 61-62, fig. 5, p. 128, pls. 72-73; ETY II, p. 103; Болд, pp. 38-39; Kljachtornyj 1976, pp. 51-54; Кляшторный 1978a, pp. 238-255; Кляшторный 1978b, pp. 575-576; Санжмятав 1993, p. 49, fig. 124; Tekin 1964, p. 139; Войтов 1986a, p. 129; Войтов 1986б, pp. 74-89; Войтов 1996, pp. 50, 58, fig. 37; 林 1991,p.176; 林 1996, pp. 203, 261.

テキスト・翻訳　Text and Translation of Ikh-Khanui-Nor Inscription

以下，翻字 (Transliteration) はボルドとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は大澤の責任で提出する．

翻字と転写　Transliteration and Transcription

（東側の板石の北端上部の銘文）

(z γ) a s z k y n a b d z ŋ z n a B W N ča Q z G N W a b r / / / / /

/ / / / äsiz käyin a bediziŋizin a bunča qazγanu a ber[tiniz]

（東側の板石の南端上部の銘文）

///YRTibrtia
///yaratï berti a

Translation

[Inscription on the northern side of the eastern sarcophagus]
Alas! What a pity! O, you acquired your ornaments as this in the rear, alas!
[Inscription on the southern side of the eastern sarcophagus]
He (or They) constructed (///), alas!

和訳

（東側の板石の北端上部の銘文）
ああ！悲しい！後方に，ああ，汝等はこのように汝らの模様を獲得してやった．ああ！
（東側の板石の南端上部の銘文）
彼（彼ら）は作ってやった，ああ！

訳注

a äsiz: ETY II, p. 103; Кляшторный 1978a, pp. 243 では冒頭の箇所を siz と，また動詞語幹 ber- の所で切断された後に続く動詞人称語尾を -iniz（汝等は）と補っている．それは bediz の後に 2 人称複数形の所有語尾 -iŋiz が付されているからであろう．しかし大澤は本銘文の切断された最初の 2 文字が既にラドロフが翻字したように，z γ で始まっていることに注目したい (ATIM, p. 259). この 2 文字が如何なる単語の末尾であるかは知る由がないとはいえ，少なくとも動詞語尾でないことは明らかである．つまり a s i z の前の語も，その後に続く銘文字句と共に連続した文章の一部に相当すると考えられる．そうであれば，文が完結してもいないのに，人称代名詞の siz が挿入されることは考えにくい（冒頭の字句はz で終わる単語に対格語尾 -γ が付された形と見ることは可能であろう）．以上の理由から大澤は冒頭部の a s i z については人称代名詞 siz ではなく，イェニセイ碑文で多く見られる挽歌形式の碑文で常用される感嘆語 äsiz と解するテキンの解釈 (Tekin 1964, p. 139) を採用したい（なおテキンはその前の語を ? ačïγ と記し，ここでも悲嘆の言葉に解しているが，次にも äsiz という悲嘆の語がくることからすれば，意味が重なり採用できない）．次に本銘文の末尾箇所について ETY, p. 295; Кляшторный 1978a, p. 243 は ber[tiniz] と，Tekin 1964, p. 139 もほぼ同様に ber[diniz] と補っていて，大澤も賛成である．本銘文は悲嘆の語を各単語間に挿入して，死者に対する悲しみを訴えていることが知られる．この場合，追悼の対象となっているのは bediz の後に 2 人称複数形の所有語尾 -iŋiz で示されているように亡くなった「汝（等）」である．この銘文は生き残った者達が死者を 2 人称の形で呼びかけた形式からなる．死者達が自身のために bediz を得たことを述べるが，実際の所は生き残った死者の親族等が，死者達の葬儀の際に多くの bediz を作り与えたことを死者の側から表現したと解釈できよう．

käyin: ATIM, p. 259 では冒頭の字句と 1 語のように sezkeyin < sez-k-(e)yin と取って「私は追悼したい」と翻訳したが，sezke- という動詞の在証例はない．他方，ETY II, p. 103 では ekeyin と転写するものの，訳していない．Tekin 1964, p. 139 では käyin! と転写して，「悲しい！」と訳したが，既にКляшторный 1978a, pp. 243-244 で批判されたようにそのような用例はない．ここは素直に「背後で；後方で；後で」の意味を持つ keyin / kedin (ED, p. 704b; DTS, p. 293, 295) と見るべきで，bediz が作られた（彫られた）場所を指していると大澤は考える．

bediz: 先行研究では bediziŋizin を「汝等の仕事でもって」(ATIM, p. 259),「汝等の装飾を」(ETY, p. 295),「汝等の勢力でもって」(Tekin 1964, p. 139) と様々に解釈されてきた．ただし，この語の本来の意味は「模様；装飾」(ED, p. 310a; DTS, p. 90b) であり，少なくともテキンのいうような意味は在証されていないし，ここでの -in を具格と見るには文章上無理があり，やはり対格と見なすべきであろう．クリャシュトルヌイ (Кляшторный 1978a, pp. 244-250) は bediz の意味を各種の文献や，ルーン文字史料から博捜分析して，その意味の一つに「石像」があることを明らかにし，ここでも石像と見なすべきことを主張する．ただ本銘文の場合，自身の bediz を keyin「後方で」，即ち本銘文の記された板石よりも西方のある場所で，得たという文脈で使用されている．その場所とは具体的には本来西側にあった石槨板石か，東面の石槨内部である可能性は高い．さらに bunča「このように」「これほど多く」(ED, p. 349a) を意味する語は，本銘文では動詞の qazγan- を修飾する副詞であり，質量面で bediz が優れていたことを強調している．大澤はこうした状況から見て bediz とは西面板石に彫られていた花柄模様や格子文様を指すか，クレメンツの発見当初の報告や MSSP, p. 128, pls. 72-73 で示されているように東方の石槨内部に置かれていた石像のいずれかを指していると考える．ただ本遺蹟の建造当初から石像が石槨内部に置かれていたかどうかは不明で今後の検討課題である．それ故，現在の所は bediz を文字通り，「模様」と解釈しておきたい．

qazγanu a ber[tiniz]: 既に上で述べた理由で，ber- の後には -tiniz を補った．ただその場合，動詞 ber- は前置された動詞 qazγan- に連用形語尾 -i を付けて，「直ちに；確かに」といったニュアンスを付帯させる補助動詞としての機能を持つことが知られる (cf. ATG, p. 131). それ故，ここでは「汝等は（直ちに，または確かに）獲得した」というニュアンス

で訳すことも可能であるが，ここは「獲得してやった」と補助動詞の意味をもたせて訳しておく．

yaratï berti: ATIM, p. 259; ETY, p. 295 では本箇所の銘文については全く言及していない．しかし MSSP, p. 128, pls. 72-73 にははっきりと左側の銘文が確認されていて，我々の拓本と比べても遜色はない．一方クリャシュトルヌィはモンゴル国ウランバートルの歴史研究所でバンバエフの取った銘文のスケッチ（クレメンツの拓本よりも上質とされる）をもとに解読を進めたが，その際，彼は最初の文字をY字ではなく，B 字と見なして bartï berti[niz] と読み，「彼は（自分の）容器 (сосуд, кубок) を与えた」と解釈してしまった (Кляшторный 1978a, p. 244)．しかしここは我々の拓本からみてもまた MSSP, p. 128, pls. 72-73 からみても明らかに Y 字で記されている．それ故，クリャシュトルヌィ説は受け入れがたい．ここは「作る」を意味する動詞語幹 yarat- に連用形語尾の -i がついた形＋補助動詞 ber- に過去形 -ti のついた形で，「作ってやった」と訳せよう．

シヴェート=オラーン遺蹟　Site of Shiveet-Ulaan

林　俊雄・森安孝夫
(Toshio HAYASHI / Takao MORIYASU)

調査場所：ボルガン=アイマク，バヤン=アグト=ソム，湾曲したハヌイ河に南からフヌイ河が流れ込む地点のすぐ北にある比高差 55 m の岩山の上の，東に向かって低くなる尾根上に位置する．アルハンガイ=アイマクのハイルハン=ソムから北へ 27 km, ジープでハヌイ河を渡って約 45 分． Aalto 1966, p. 16 に概略地図あり．

調査日時： 1997 年 8 月 23 日．

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：林，吉田，片山，大澤が巻尺で長さを計測．また北にある別の小山の上から側面図をスケッチ（**Plate 5a** 参照，高さは誇張されている）．写真・ビデオ撮影．片山がチョークで石獅子の側面にあるヤギ型のタムガを浮き上がらせた．ただし，それについては既に指摘があり，その図版も発表されている (cf. Харжаубай 1982, pp. 118-119, figs. 10, 11).

遺蹟の現況：西側の高いところに崩れた方形の積石塚があり，その中央部は盗掘のために凹んでいる．積石塚の東斜面とその下に石人・石羊・石獅子が並んでいるが，原位置ではない．2 つの石獅子の左後脚にヤギ型タムガが刻まれている．現在石像の一部はハイルハン=ソムの文化センターやボルガン=アイマクのエルデネト市の博物館に置かれている (Баяр 1997, p. 95)．遺蹟全体は単純に石を並べただけの石列で囲まれ，四隅と各辺の途中に石堆があり，あたかも城壁とその張り出しを模しているかのように見える．東端の石堆の上には，石碑のための長方形の礎石がある．礎石の上に立っていたと思われる石碑（文字はなく，タムガが多数刻まれている）は現在ハイルハン=ソム中心の寺の境内に五体投地用の板石として置かれている（林 1996, p. 208）．

遺蹟の景観：森安担当「行動記録」参照．

遺蹟の図面・写真： Aalto 1966, pp. 5-6 にラムシュテットによる遺蹟全体の推定復元図あり．しかしこれはあまりに大胆で，にわかに信じがたい．これに対して Войтов 1996, p. 36 にあるプランは信頼がおけるようである．我々の現地での簡単な測量に基づいて作成した **Plate 5a** もほぼこれに近い．

我々が 3 箇所に分置されているのを確認したシヴェート=オラーンの石彫は，石人が 9 体，石獅子が 4 体，石羊が 6 体であった．今回はそのうちの石羊 6 体，石獅子 3 体，石人 8 体について，バヤルの手になる **Plate 5c-5l** を掲げる．

Ramstedt / Granö / Aalto 1958, pp. 82-90 には，この遺蹟の一部の写真や，遺蹟に属していた石彫などの写真があるが，編者自身が？マークを付している pp. 87-90 にある 4 枚のうち pp. 88-89 にある 2 枚は本当にシヴェート=オラーン遺蹟のものかどうか極めて疑わしい．とくに p. 89 の 1 枚は，鹿石とキルギス=フールであるらしく，全く別の遺蹟と断定してよかろう．一方， pp. 84-86 の 3 枚の写真に見える石羊・石獅子・石容器（革袋？）は，現在はハイルハン=ソムの文化センターに保管されており，石羊はバヤルのスケッチの Sheep No. 6 に，石獅子はバヤルのスケッチの Lion No. 3 に相当する．これに対して pp. 82-83 に見える 2 体の石人については，頭部はいずれも現在行方不明であり， p. 83 の石人の身体部も行方不明である．かろうじて p. 82 の石人の身体部のみ，現地で確認できたが，ラムシュテットの写真は裏焼きであるので，注意されたい．

考察： 1912 年に最初にラムシュテット隊が調査している (Ramstedt / Granö / Aalto 1958, pp. 77-90)．立地と構造は，突厥・ウイグル時代の墓廟とかなり異なり，ユニークである．ヴォイトフは，遺蹟全体が東西方向に長く，西部に積石塚があるという点では第一突厥の遺蹟（ブグトやイデル）に似ているとみなしているが，それらとは異なってここには石人が存在することから，第二突厥に属すると判断している (Войтов 1996, p. 30)．1977 年にここを調査したクリャシュトルヌィはこの遺蹟が第二突厥初代のイルテレス可汗（骨咄禄）のものとみなしたが，その根拠は示さなかった (Кляшторный 1978b, pp. 575-576)．この説を受け継いだヴォイトフは，石碑に刻まれたタムガの数が，イルテレス可汗の最初の同志の人数である 70 にきわめて近いということを論拠としてあげている (Войтов 1996, p. 88).

我々も実際に確認したように，石獅子の側面にヤギ型のタムガがある事実によって，この遺蹟がもともと突厥の阿史那氏ゆかりのものであったことは確実と思われるが，ラムシュテットらの報告 (Aalto 1966, pp. 4, 8) によれば，「ウイグル」「可汗」という語を含むルーン文字銘があったらしいので，注意が必要である．そもそもラムシュテットはこの遺蹟を，突厥ではなくウイグルのものと考えていた．積石塚のみに着目すれば，確かにシネウス遺蹟とよく似ていてその方が理解しやすいが，逆に突厥王族の象徴であるヤギ型タムガの説明がつかなくなる．

林は，石人の細部の表現や技法は，ビルゲ可汗廟やキョル=テギン廟など突厥時代の遺蹟の石人に似ているという印象をもった．また森安は，ラムシュテットの写真 (p. 82) に見える人物の頭部は，中国で出土する唐三彩のラクダや馬を引く胡人像の顔とよく似ているので，ソグド人とみなして差し支えないのではないかと考えている．

参考文献：Доржсүрэн 1957; Ramstedt / Granö / Aalto 1958, pp. 77-90; Rinčen 1959, pp. 291, 294 (plate); Aalto 1966, pp. 3-9; Aalto 1971, p. 107; Кляшторный 1978b; Харжаубай 1979, 1982; Войтов 1986a, 1996; 林 1991, 1996; Баяр 1997.

シヴェート=オラーン碑文　Shiveet-Ulaan Inscription

林　俊雄・森安孝夫
(Toshio HAYASHI / Takao MORIYASU)

調査場所：アルハンガイ県ハイルハン=ソムのガンデン寺境内.

調査日時： 1997 年 8 月 23 日.

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ.

調査方法：拓本採取．採拓中に写真撮影.

碑文の現況：境内に五体投地用の板石として置かれている（林 1996, p. 208）．タムガばかりたくさんあって，文字はない．上端はカマボコ型で，なんの模様もない．下端にはホゾがわずかに残っていて，本来のホゾの幅は 55～60 cm くらいと推定され，シヴェート=オラーン遺蹟にあった礎石のホゾ穴の大きさと矛盾しない．全体は縦 224 cm, 横幅は上方で 80 cm, 下方で 84 cm, 上方の厚さは 22 cm．玄武岩らしい．五体投地用に使われているため，表面のタムガはかなりすり減っており，かつ本堂に近い方の上端がわずかに持ち上がっていて，地面との間に隙間がある．裏は荒削りのままの凸凹状態で，文字もタムガもない.

碑文の写真： Ramstedt / Granö / Aalto 1958, p. 81. ただしこの写真はリタッチされているようで，あまりにはっきりしている.

碑文スケッチ： Aalto 1966, p. 7; Войтов 1996, p. 89.

碑文拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー（？）；モンゴル科学アカデミー歴史研究所.

考察：碑面に刻まれた多数のタムガを一次的なもの，即ち本来これらのタムガを描くために本碑文が立てられたとするのが一般的な考え方ではあるが，それにしてはタムガは余りに雑然と並んでいる印章を受ける．もしかしたらこの碑文は本遺蹟建設の由来を書くために用意されたものであるが，なんらかの事情で放棄されたものであり，そこに彫られたタムガは二次的なものかもしれない.

参考文献： Ramstedt / Granö / Aalto 1958, pp. 77-81; Aalto 1966; Aalto 1971, p. 107.

カラ=バルガスン第二碑文　Qara-Balgasun Inscription II

大澤　孝　(Takashi ŌSAWA)

調査場所：モンゴル科学アカデミー歴史研究所（ウランバートル）の前庭.

調査日時：1996年8月13日.

調査者：森安，片山，大澤，松田，松川，松井，オチル，ボルド，バットルガ.

調査方法：参加者全員が写真撮影，森安，片山，大澤，バットルガがビデオ撮影，銘文面と左右側面の箇所の拓本を2部ずつ採る．石柱の寸法をメジャーで計測する.

碑文の現況：銘文は，最上部の所で真ん中にはへこみがあり，後方はでこぼこであり，上から下へいくにつれてすぼんだ灰白色の花崗岩製柱状の磨かれた面に右から左へ横に 12 行刻まれている．なお銘文，花柄模様の上から重なるように描かれている．なお花柄模様は正面のみならず，両側面にまで描かれている．また正面の左右の角は滑らかに削られている．我々の調査によれば，地上から出た石柱の高さは 137 cm で (1975 年に本碑文を調査したシネフー論文 Шинэхγγ 1979, p. 301 によればこの石柱の全長は 170 cm), 最上部の幅は 26 cm, 側面の幅は正面の縁取り部分を除いて上部の出っ張り部分は42 cm（シネフーによれば30 cm），下部の最小箇所は29 cmであった（シネフーによれば25 cm）．なおシネフーは花柄模様と銘文の刻まれた正面の幅を17 cmとする．我々の計測では縁を除いた正面幅が約15 cmであったことからすれば，彼の計測値は正面の両側の縁取り部分も含めた横幅であると思われる．なお正面の左端縁取りの幅自体は約 5.5 cm, 右端縁取りの幅自体は約 5 cm である．なお Шинэхγγ 1979, p. 301 によれば石柱頭部のへこみ部分の幅は 15 cm, 高さ 12 cm, 深さは 10 cm である．銘文の下には釣り針型，その下には雄ヤギ型タムガが刻まれている．これもシネフーによれば，釣り針型タムガの長さは 15 cm, 雄ヤギ型タムガは高さ 15 cm, 横幅が 10 cm で，彫りの深さは 0.5 cm である．ルーン文字の彫られた箇所の寸法は高さ約 37 cm であり，碑文全体の4分の1強である．また本来刻まれていた当初の文字数は2点の分離記号も含めて，1行目に3文字，2行目に11文字，3行目に11 文字，4行目に10文字，5行目に10文字，6行目に11文字，7行目に11 文字，8行目に11文字，9行目に11 文字，10行目に12 文字，11行目に12 文字，12行目に12 文字となる．個々の文字の高さは約 2 cm, 文字の彫りの深さは 2～3 mm である．但し，銘文の両端は縁取り線上及び花柄模様に重なって刻まれた上，現在では摩滅した箇所もみられ，判読を困難にしている．碑文の彫られている表面の範囲は縦 37 cm, 横約 16 cm である.

碑文のスケッチ・復元図・写真：Шинэхγγ 1980, p. 44 にスケッチ．本書では計測結果を **Plate 6** として掲げる.

拓本所蔵機関：モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部．フィンランド国フィン=ウゴール協会.

考察または解説：

（1）発見調査の経緯：本碑文は 1973 年にアルハンガイ県のカラ=バラガスン城址から北へ 8 km の地点，ジャランタイ (Жарантай) 河左岸で，アルハンガイ県ホトント=ソムの（8年制）高校の歴史教師ミャグマルジャウ (Мягмаржав) により発見され，高校に搬出された．その後 1975 年に，シネフーを含む蒙ソ歴史文化合同調査団碑銘班がこの石柱を調査した際，この石柱に銘文が刻まれていることが判明する．翌 1976 年に，ウランバートルの歴史研究所に移管された (Шинэхγγ 1979, p. 301; Шинэхγγ 1980, p. 42; Болд, 126).

（2）ボルド，片山，大澤，バットルガは 1996 年8月 25 日にカラ=バルガスン城址を訪れた際，現場に現れた牧民から，現在のジャランタイ河は城址から 2 km 先に流れているということを聞き知った．またボルドによれば，かつてのジャランタイ河は埋め立てられてしまい，碑文が発見された頃の面影はなく，碑文の当初の位置は現在では不明で，また発見当初，そこには白い石碑と黒い石碑があったということでであった.

（3）なおポッペ及びバンバーエフは 1926 年7月 29 日にカラ=バルガスン城址から西北 1 km の地点で四角形の断片を発掘調査した際，以下のような報告を残している．即ち，「蒙古人等はこの石碑の附近に，ハラ・バルガスン廢墟の反對の側に，も一つ長方形の石が地上に横つてゐることを教えて呉れ，そしてそれは бі'ч'ік'т'ē ч'улӯ（ビチクテ・チュルー）即ち「銘文ある石碑」であると斷言した．踏査の結果，實際碑文ある碑石があつた．碑石には數行に亙り甚だ細かい (1～1.5 cm.) 古代トルコのルーン字體 (rune) で碑文が彫刻してある．石碑の長さは 121 cm., 幅 25 cm.. 銘文は一面の一半だけに書かれてゐる．惜しい哉，石碑は非常に損傷し，かつ碑文も非常に保存が悪くなつてゐる．けれども石摺りは撮つた．この石碑はオルホン學術探險の際に發見されたか，またこの碑文はその時撮影されたか決定し兼ねた．何となれば碑文はこれを通讀することが出來るかどうかと言へば，通読することは全然絶望であるものとして，『古代蒙古古跡集』に収録されなかつたかも知れないからである．この石碑は廣い草原にころがつてゐて，そこには墳墓の跡もまたは石像も全く見當たらないことを附記して置く」（ポッペ 1942, p. 227）．「エルデニ=ズウに歸著してから私はポッペと共に更に北方ハラバルガスンに旅行した．ハラバルガスンの附近で二本の石柱を發見したが，その一つにはオルホン文字の銘を刻した」（バンバーエフ 1941, p. 77）．ポッペの報告にいう石碑は長さが121 cm, 幅25 cmであり，シネフー計測による全長 170 cm, 幅 17 cm とは食い違いがみられるが，その発見場所及び「銘文が一面の一半にだけに書かれている」という状況からみて本碑文のことを指している可能性は高い．またバンバーエフの報告にも2つの石柱が発見され，その1つにオルホン文字が刻されたと報告されたものも本碑文に相当すると考えられる．またバンバーエフのいう

２つの石柱という表現は，上記（２）で述べたごとく，発見当時には「白と黒の２つ碑文があった」という伝承とも一致する事は興味深い．更にポッペ報告ではこの碑文が広い草原に転がっていて，墳墓や石像の近くになかったという点も，本碑文の建造状況や性格を考える上で重要な示唆を与えてくれるものといえよう．

（４）シネフーは本石柱が本来カラ=バルガスン宮城の建築資材であったが，花柄文様の上から碑文及び雄ヤギ型タムガと釣り針タムガが刻まれていることから，石柱はその後碑文を刻むために再利用されたと見なした．つまり本碑文は東ウイグル可汗国時代９世紀中頃に年代づけられるとして，両唐書ウイグル伝その他に東ウイグル国の滅亡期にその名が挙げられた将軍の句禄未賀を，碑文冒頭に見られるクンチ=ブイクキに同定できるとして論を進めている．しかしながら彼の時代決定の根拠となる銘文第３～５行目の解釈には問題があり，また最後の人物比定については既にフデャコフが否定したように (Худяков 1990, p. 87), 音韻面から見ても到底受け入れられない．ただ本石柱が最上部に窪みをもち，かつ石柱の正面や両側面にはもともと入念に陰刻された花柄文様のある面の上から銘文やタムガが陰刻されていることから見て，石柱は碑文のために再利用されたと言う見方は正しいと考える．現在までの所，本碑文の発見場所付近に突厥時代の建造物や城址が見つかってはいないという現状からすれば，本石柱がカラ=バルガスン城址の一部であった可能性は高いと思われる．また碑文と同時に彫られた２つのタムガはおそらくは碑文の主人公が所属する氏部族のタムガであるが，これは８世紀前半の突厥第二可汗国期に属するオンギ碑文やそのバルバル石，またホショー=ツァイダム第三遺蹟のマウンド内部の石像に見られることから，本碑文の主人公が突厥の可汗氏部族たる阿史那王家と何らかの繋がりを有していた可能性も考慮すべきである．一つの推定として，本碑文は離散した旧突厥部族の一部が東ウイグル可汗国内部で活動していたことを物語る一史料といえるのかもしれないと大澤は考えている．

参考文献： Шинэхγγ 1979, pp. 301-305; Шинэхγγ 1980, pp. 42-43, 56-57, 66; Болд, pp. 38-39; Санжмятав 1993, p. 50, fig. 128; Худяков 1990, pp. 84-89.

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー言語学研究所；モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部.

テキスト・翻訳　Text and Translation

以下，翻字 (Transliteration) はボルドとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は大澤の責任で提出する．

[From top to bottom]

	Transliteration	Transcription
1	Q W nč	qunč
2	B W Y Q uQ i : r d(m) :	buyquqï ärdim
3	ü ŋ t n g : T i D R:	öŋtünig tïdar
4	(i)t m : k i d n g:	ittim kidinig
5	(i)d r ü r : r t m :	idärür ärtim
6	k ü k:t ŋ r ḍ i d a :	kök täŋridä
7	Q W T m :Y W Y q a :	qutïm yuyqa
8	B W L T i :Y G i z :	boltï yaγïz
9	y r d a:Y W L[i m:]	yerdä yolïm
10	Q i S G a:B W (L)[t i]	qïsγa boltï
11	t(g m)k a :B W (L)[t i:]	ätigimkä boltï
12	B W(Q)a :W G L m [t i]:	buqa oγlïm atï

Translation

1-2: I was Qunč Buyquqï.

3-5: I protected and shoved the peoples of the eastern areas.
I used to pursue after the peoples of the western areas.

6-10: In the blue Täŋri, my happiness turned out to be slight.
On the brown Earth, my way(i.e. life) turned out short,

11-12: Buqa, my son's name was worthy of my act.

和訳

1　私はクンチ=
2　ブイクキであった．
3　東方（の諸族）を私は防ぎ，
4　押しのけたものだった．西方（の諸族）を
5　私は追ったものだった．

6 蒼き天において
7 我が幸運は薄く
8 なった．褐色の
9 大地において我が道（人生）は
10 短くなった．
11 我が行為に相応しかった．
12 ブカなる我が息子の名は，

訳注

1-2, qunč buyquqï: シネフーは翻字では後者の単語の第4番目の文字を Q と判読するにも関わらず，転写及び翻訳ではこの文字を R になおして「ブユルク」と読む．おそらく後舌系の Q 字は後舌系の R 字とは左側の跳ねたストロークが上に延びるか下に延びるかの違いしかないため，R字に変えたに過ぎない．にも関わらず，彼は「クンチ=ブユルク」というように人名として読むが，もしそうであれば，この単語の最後に付された -i についてはどのように説明できるのか，何ら説明がない．彼のように「ブユルク」と見れば，最後の -i は3人称所有接尾辞と解され，「クンチのブユルクであった，私は」と訳すべき所を，彼はそのようにはせずに，両者とも人名扱いであるのは奇妙と言うほかない．我々の拓本からは問題の文字はやはり Q 字と見るのが至当である．それ故，ここはクンチ=ブイクキと言う人名で，本碑文の主人公と解すべきと考える．

3, tïdar: シネフーはこの語を atïdar と転写し，次行の冒頭の語 it(d)im と併せて「避難所を与えた；かくまった (приютил)」と露訳した (Шинэхγγ 1979, p. 302)．しかし atïdar なる語の在証例を見つけることはできない．大澤はそれ故，「妨害する，防ぐ (to obstruct, restrain)」を意味する動詞語幹 tïd- (ED, p. 450) に現在形の動詞語尾 -(a)r が付加された形であり，次行の動詞 ittim と併せて一連の行為を示していると考えた．その際， -tim は前者の動詞には繰り返しを避けて省略されており，またアオリストに過去形が付した形で過去の回想表現を指し示している．なお ittim については ettim と転写して「私は組織した」と訳出できるかもしれない．

5, idärür: シネフーはこの語を itärür と転写し，次の ärtim と併せて，「押しのけた (оттолкчыл)」と訳す (Шинэхγγ 1979, p. 302) が， itär- にはそのような意味はなく，「追いかける，追跡する (to pursue, to follow)」という意味である (ED, p. 67, edär-)．そしてここも先の tïdar ittim の対語的表現として理解され，過去の回想表現と見ることができる．

9, yolïm: シネフーはこの語を「我が足取り (моя цудьба); 我が歩み (походка)」と訳す (Шинэхγγ 1979, p. 302)． yol は "road; way" 以外に「旅；時；方法」など様々な意味があるが，大澤は「道」を後続表現と併せて「人生行路」，もしくは人生の残り時間が少なくなったことを意味する隠喩表現と解釈している．

11, ätigimkä boltï: シネフーは tägimkä の語を tägmäkä と転写し， boltï と併せて「滅びた (стало гибныть)」と訳すが (Шинэхγγ 1979, p. 302), tägmäkä の語構成や，なぜそのような意味になるのかについて全く説明しない．古代トルコ語では与格語尾は通常 -kä /-qa であるから，そうなると tägmä は「～ずつ (every); すべての (any)」を意味する語か，「至る，攻める，触れる，関心がある，価値がある」を意味する動詞語幹 täg- (ED, p. 476) に動名詞形成語尾の mä が接続した形か，もしくは「話す」を意味する動詞語幹 tä- に「～する人」を意味する分詞形 -gmä の付した形しか考えにくいが，いずれの場合でも「滅びる」という意味を引き出すことはできず，シネフーの解釈には従えない．そうなると可能性ある転写は① tägimkä boltï, ② ätigimkä boltï のいずれかとなろう．①の tägim は「称号や資格が与えられること；相応しいもの，受けるべきもの (entitlement, what is due)」 (ED, p. 482) いわゆる「価値あるもの」を意味したり，「返報を得ること，獲得物 (то, что доцтаетця, приобретение); 取得，利益 (der Erwerb)」 (VWTD, p. 1037) の意味を持つ．もしこの意味ならば，全体の文章は「価値あるものに相応しかった」という意味になる．因みに与格語尾 -kä / -qa は「代価，等価」の機能を持ち，動詞 boltï と併せて「～にぴったりだ；～に見合う；～にふさわしい」の意味を持つ（現代トルコ語での，与格語尾 -a / -e ＋動詞 oldu の構文に相当する）．しかし，これでは意味が不明瞭という印象を免れない．それ故，私は先の② ätigimkä boltï を採用する． ätigim は動詞 ät- に動詞から名詞を形成する語尾 -g の付いた形で，「仕事，動作，行動，成功」を意味する (cf. ED, p. 50, Tekin 1995, p. 26)．これだと全体の意味は「我が行為に相応しかった」となる．ätigim「我が行為」とは本碑文の第3～5行目で述べられたような主人公の数々の軍事的功績を指すものと見てよいであろう．ではこの文の主語は何かといえば，シネフーが考えたと同様に，次行にくる「主人公の息子の名前」と見なすべきと考える．全体の意味としては，余命幾ばくもない主人公の優れた功績に対して，彼の息子に Buqa という名前（成人名，または称号）が主君や部族長から授けられたことを述べた箇所と大澤は解する．

12, Buqa oγlïm atï: 最後の atï の文字は我々の拓本からは確認できない．シネフー等が読んだ時期以降に，現地から碑文が搬出された際に文字が摩滅してしまった可能性は十分にある．またシネフーが言うように本碑文の文章構成は前半3連，後半3連からなり，後半の文末では韻が踏まれる形態となっている．その意味でも末尾に boltï の -tï と同じ韻を踏む atï が来ることは何ら差し支えはないであろう．それ故，ここは補って訳出しておくこととする．

ムハル遺蹟の亀趺　Tortoise-Shaped Socle from Site of Mukhar

大澤　孝　(Takashi ŌSAWA)

調査場所：トゥブ=アイマク，ゾーンモドのトゥブ県博物館の前庭．北緯 47 度 42 分，東経 106 度 59 分，高度 1560 m.

調査日時：1997 年 9 月 14 日（日）

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：写真・ビデオ撮影．亀趺の計測と，脇腹の左右両面のタムガの簡易拓本作成．

亀趺の現況：もともと本亀趺はトール河左岸，トゥブ県ウンジュール=ソムにあるムハル（またはムクル）遺蹟のマウンド東方に置かれていたが，後年に本博物館に搬送された．亀の全長は 176 cm, 高さ 58 cm, 中央のほぞ穴のある台までの高さは 52.5 cm. 亀趺は肩の付け根の箇所で 2 つの部分に割れていたのが接合され，底には長方形の底石にセメント付けして固定されている．後方からみると，左側にやや傾いている．頭部はやや上方にもちあげられ，左目は摩滅のためか確認されない．甲羅の下の窪みから両手，両足が浮き彫りで描かれている．甲羅の中央を横断する細長い台（横 79.5 ×縦 19.5 ～24.5 cm）には横長のほぞ穴（横 51.5 ×縦 9.5 cm, 深さ 17～18 cm）が彫られ，ここに碑文のほぞを挿入する構造になっている．亀のちょうど脇腹にあたる，台の左右の張り出し部には動物のタムガがひとつづつ浮き彫りされている．台の左側には漢字の「巳」を想起させるヘビ型タムガが刻まれている．但し，現在ではヘビの真ん中から頭部はその痕跡が僅かに確認される程度である．高さは 16 cm で底辺の長さは 19 cm である．一方の台の右側には内側にやや窪んだ菱形の頭部とその一隅から上に細くのびた角をもつ雄ヤギ型タムガが刻まれている．高さは 18 cm, 口先から尻尾までの長さは 18 cm である．なお吉田による両タムガの乾拓及び大澤によるスケッチと計測値も参照 (**Plates 7a-7c**).

遺蹟の図面：今回はムハル遺蹟での調査はできなかった．但し亀の本来の位置を示す意味で Войтов 1996, p. 41, fig. 15 を転載しておくこととする．

考察：

（1）調査の経緯：本遺蹟は 1891 年にヤドリンツェフにより発見され (Ядринцев 1892a, p. 29; Ядринцев 1901, p. 12), 彼の撮影した写真に基づくスケッチが Atlas, pl. XIII に掲載された．その図版説明によれば，ラドロフはこの背中の穴に差し込まれていた碑文は既に見当らないことから，「おそらくはモンゴル人が近くの僧院のひとつに再利用したのであろう」と述べている．その後，1925 年夏にはコズロフがここを訪れ，遺蹟の中央付近で発掘を行なった (Козлов 1949, pp. 87-90). 同年やや遅れてボロフカが遺蹟の発掘調査を行ない，石人の調査や亀についての記述を残した (Боровка 1927, pp. 12, 79). その後 1983 年には蒙ソ合同調査団考古碑銘班が本遺蹟のプランや石人の計測調査を実施する．なお亀趺がいつ頃，トゥブ県博物館に搬送されてきたのかは残念ながら不明である．

（2）クリャシュトルヌィは亀台の右側の雄ヤギ型タムガの特徴から，本遺蹟が突厥第二可汗国期の阿史那氏族のカガンに属するものとみなす．また台の左側のヘビ型タムガは，当時の十二支獣法で蛇年を示していて，本遺蹟の被葬者の葬儀がなされた年と解釈し，この条件に見合う人物として，716 年に死んだカプガン可汗を想定する (Klyashtornyj 1977, p. 588). またヴォイトフもこの見解を支持している (Войтов 1986, pp. 123-124; 林 1991, p. 170; Войтов 1996, p. 32; 林 1996, p. 225). 確かに遺蹟の大規模なことや屋根付き追悼建造物の存在を予想させる瓦やレンガの存在，石人の形態，亀趺などの存在からみて本遺蹟の被葬者が第二可汗国期の可汗クラスに属することは動かないとは思われる．しかし，ヘビ型タムガを卒年を意味するものと解して，被葬者をカプガン可汗に比定する点には疑問が残る．というのも突厥第二可汗国期に属する遺蹟の中にはヘビ型タムガも平行して刻まれているものも知られているからであり，これらの遺蹟もヘビ年に葬儀の行なわれたものということになりかねないからである．むしろ大澤はオンギ碑文碑頭両面やバルバル石の幾つかに刻まれたタムガが雄ヤギ型タムガと釣り針型タムガの 2 つから構成されることからその被葬者が傍流阿史那家に属すること考えられているように（オンギ遺蹟の項目を参照），本ムハルの亀趺のタムガも，この遺蹟の被葬者が雄ヤギとヘビの 2 つから構成されたタムガで示される傍流阿史那家に属したことを示していると考える．この観点からすれば，本被葬者がカプガン可汗である可能性は否定されないにしろ，彼に特定するには遺蹟をさらに検討することが必要である．

参考文献：Ядринцев 1892a, p. 29; Ядринцев 1901, p. 12; Radloff 1894, pl. XIII; Козлов 1949, pp. 87-90; Боровка 1927, pp. 12, 79; Klyashtornyj 1977, p. 588; Войтов 1986, pp. 123-124; 林 1991, p. 170; Войтов 1996, p. 32; 林 1996, p. 225; Баяр 1997.

キョル=テギン亀趺銘文
Epitaph on the Tortoise-Shaped Socle of Köl-Tegin Inscription

片山章雄　(Akio KATAYAMA)

調査場所：アルハンガイ=アイマク，ホショー=ツァイダム，キョル=テギン遺蹟内．キョル=テギン碑文の東数mのところに断片，同碑文の北約10mのところに亀趺本体がある．

調査日時：1996年8月23～24日．

調査者：森安，片山，大澤，ボルド，バットルガ．

遺蹟・碑文の現況：遺蹟の現況については，行動記録の該当日を参照．

調査方法：まずキョル=テギン碑文の近くにあった2断片のうちの1断片が，形と文字の行数から同碑文の一部としては接合しないことが判明したので，断面の形や石質から亀趺本体に接合するだろうと推測し，両者の間を何度も往復して確認の上，モンゴル側の助力を得て断片の方を亀趺本体のところに運び接合した．後に確認した先行研究にある写真やテキストを検討すると，銘文のある断片の状況は以前からそれほど劣化していないようである．現地で計測および写真・ビデオ撮影（8月 23 日），銘文部分の採拓，拓本の写真・ビデオ撮影，その後断片は元の位置に戻しておいた（8月24日）．

考察・解説：現地調査の時点では Базилхан 1969 論文を知らなかったため，断片と本体の接合，亀趺に銘文があることを発見と思い込んでいたが，ともに指摘があったことが判明している．この断片が亀趺の一部らしいことについては，Jis1 1960c, p. 69; Tryjarski 1966, p. 170 も参照．今回の調査の意義は，断片と本体を接合させた写真を撮影できたこと，接合させながら亀趺の寸法計測をしたこと，そして Rintchen 1968 において拓本のように掲載されているもの（下記では「不完全拓本」と表現した）が，例えばその2～3行目を採取した拓本の同所と比較すると，隣接行中の文字の位置関係が正しくないことが判明したこと，等々があげられる．銘文のテキスト研究としては，読める行でも1～3単語しか確定できないため，なお十分ではない．先行研究の中では Matuz 1972 が比較的よいと考えられる．分担者は拓本と写真に依拠して下記のテキストを作成した．

図面・写真・模写等：銘文部分については， Rintchen 1968, pp. 40, 69 （以上，不完全拓本）； Базилхан 1969, p. 253; Matuz 1972, p. 22, fig. 7; Болд 1990, p. 52 （以上，模写）．亀趺全体の写真については， De Lacoste 1911, pl. 18; Jísl 1960c, Taf. 3, Abb. 2; Санжмятав 1993, Таб. 109. 本書では拓本写真からトレースした図 (**Plate 8**) を掲げる．

拓本所蔵機関：モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部．

参考文献： Jísl 1960c; Rintchen 1968, pp. 40, 69; Базилхан 1969, pp. 253-255; Matuz 1972, pp. 21-24; Болд 1990, pp. 52-53.

テキスト・翻訳　*Text and Translation*

以下，翻字 (Transliteration) はボルドとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は片山の責任で提出する．あまりに断片的なため，注を付し議論を展開することは避ける．

	Transliteration	**Transcription**
1	B W D N	bodun
2	[b]g l r:B W D N . . .	[bä]glär bodun / / /
3	. y i:k ü l t i g n:b i r	-yi(?) köl tegin bir
4	G T m N:/ s D m:(nt)(G)	/ / / atamïn basadïm antaγ
5	(k) ü z m:. / / G:. .	közüm / / / / / /
6	. ü l ü	/ ölü-
7	. . .	/ / /

	Translation	**和訳**
1	people	民
2	*bägs*, people, / / /	ベグたち，民， / / /
3	/ / Köl Tegin, one (?)	/ / / / キョル=テギン， 1 （？）
4	/ / / I led my fahter. Thus	/ / / 我が父を，私は導いた．そのように
5	my eyes / / / / /	私の目 / / / / / / / /
6	/ / being killed	/ / 死ん
7	/ / /	/ / /

イフ=ホショートゥ遺蹟とキュリ=チョル碑文
Site of Ikh-Khoshoot and Küli-Čor Inscription

林　俊雄・大澤　孝
(Toshio HAYASHI / Takashi ŌSAWA)

概　観（大澤　孝）

調査場所：トゥブ=アイマク，デルゲルハン=ソムから北へ約 30 km のイフ=ホショートゥに位置する．北緯 46 度 55 分，東経 104 度 33 分，高度 1560 m．遺蹟の地図としては Clauson / Tryjarski 1971, p. 9; Tryjarski 1962, fig. 22 を参照．

調査日時： 1997 年 9 月 4 ～ 5 日．

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：写真・ビデオ撮影．9 月 4 日には瓦やレンガを拾集．翌日には碑文の拓本作業に並行して，大澤が石人と石槨周辺の遺蹟データを先行調査の数値と突き合わせつつ，スケッチと計測値をメモ．林も石人の簡易計測を行なう．バヤルは石人の詳細なスケッチと計測を行なう．バルバル石の距離や湾曲状況についてはジープの走行メーターで計測．

遺蹟の現況：本遺蹟は東西軸に長い隅丸方形の土塁で取り囲まれている．ただ本遺蹟の場合，オンギ遺蹟やトニュクク遺蹟に認められるように，土塁を築いたときにできる内堀は風化のためか，痕跡がわずかに認められるにすぎない．また土塁自体も極めて低く，外側の地面との識別は困難である．土塁の寸法が東西 40 ×南北 30 m （コトヴィチ計測値），53 × 35 m （ヴォイトフ計測値）と計測者により一致しないことも土塁の識別困難なことを物語っているが，筆者は現時点では後者の数値を採用しておく．土塁幅は約 5 m である．

土塁に囲まれたマウンドの西方には直径約 12 m の円形の土堆がみられ，その中心には直径約 7 m に亘り円形に表面が削られた跡が確認された．さらにこの内側には東西 2 ×南北 3.1 m の方形のくぼみ跡が確認され，西北隅と西南隅には板石断片が一つずつ置かれていて，本来ここに石槨がひとつ配されていたことを推測させる．石槨は土塁の西辺から約 10 m の所にある．

またこの窪みの西方と東南方には，石槨の側板石断片が模様のある方を上に横倒しされている．このうち，西方の側板石断片はやや黄色っぽい花崗岩製である．縁から約 22 cm 内側には二重の内線が引かれている．もともと縁取り箇所には唐草文様が描かれていたようであり，その残画が微かに認められる．さらに内線の内側には蓮華の花弁と突起形の植物文様が描かれ，これを挟むように 2 羽の両翼を拡げた鳳凰像が太い線で陰刻されている．筆者の計測では大断片の寸法は最も突き出た箇所で縦 96 ×横 116 cm, 厚さは約 12 cm である．これはコトヴッチによる縦 96 ×横 116 cm の計測値とほぼ一致する．1962 年時にこの石槨断片を写真撮影したトリヤルスキはコトヴィチ撮影の石槨断片とを示しつつ，かなり破損が進んでいることを指摘している (Tryjarski 1972, p. 38, figs. 2, 3)．またトリヤルスキはこの断片の寸法を 97 × 130 cm と記す．縦の長さについては問題ないが，横幅については，彼が計測の際，大断片を右上断片と右下断片，左下断片と接合させた計測値をだしているためである．もしトリヤルスキの数値をもとに横幅を復元するならば，内線の枠内の横幅はその中央の植物の茎から端までは約 1 m はあるから，これに縁取り幅 22 cm を加えて約 240 cm はあったであろう．またこの大断片に左側にも，もとは一断片を構成していた 10 個ほどの破片 (43 × 50 cm, 厚さ 14 cm) が散在している．その一つには左側の鳳凰の脚にあたる箇所の残画がみられる．また大断片の右側には約 8 片の砕石があり，ここでも右側の鳳凰の脚か左羽の残画が確認される．その大きさは約 65 × 85 cm である．

一方，石槨の窪みからやや東南方にもやや灰色っぽい花崗岩製の板石断片が 2 片あり，左側の方は横 60 ×縦 71 cm, 厚さ約 14 cm, 右側の方は横 110 ×縦 92 cm, 厚さは 14 cm であった．縁取り幅約 22 cm の内部には渦巻き文様の一部が認められる．両断片の内線から内部には左右対称に箒のような湾曲した模様が 5 本浮き彫りされている．その主部にあたる箇所は損傷が激しく，復元は容易ではないとはいえ，かつてコトヴィチが述べたようにここには獅子が刻まれていたのであろう．先の湾曲した浮き彫り線は石槨板石中央で頭をむけた一対の獅子の尻尾とみなせよう．

さて，この方形窪みの東辺から東方へ約 7 m の地点には寸法が東西 5 ×南北 6 m の方形の高まりが確認され，その中央付近には長い細く掘り返された発掘跡が確認された．またこの高まりの西側付近の一角には先の丸瓦や平瓦，レンガの大小破片が集められており，また掘り返された箇所の中央付近には黒灰色の石柱断片が 2 つ置かれていた．その形状から，あるいは石槨の隅に置かれた補強石が想起されるが，オンギやトニュクク遺蹟では石槨とその補強石は材質及び色のいずれの点でも石槨の側板石のそれと同じであったことからすれば，これは別の箇所から運ばれてきた石片である可能性が高く，その場合には東方のバルバル石の一断片であった可能性も考えられる．なおこの周辺で採取した軒瓦断片のひとつは厚さが 1.8 cm, 横幅が 18 cm, 丸瓦断片（バヤル採取）のひとつは厚さ 2.5 cm, 直径約 14 cm であり，縁飾りとして円形突起状の装飾が施されていた．またレンガの断片のひとつは横 16 cm で厚さは 6 cm, 縦は破損部でも 16 cm あることよりすれば実際はそれ以上であったろう．石碑は，土塁の東辺から 8 m の地点に立ち，2 つの平たい花崗岩製の方形板石が接合された台石の中央部に東西に広い面を向けて立っている．高さは台石の地点から突き出た部分で 194 cm, 幅 60 cm, 厚さ 18 cm である．2 つの台石は中央の所で割れており，間隔はトリヤルスキによれば約 7～8 cm である．

石碑の前から土塁の東端までは石人 6 体，石獅子 3 体，石羊 2 体，円錐形の石片 2 つが横倒しになったりして散在す

る．第2バルバルを挟んで置かれた一対石羊や石獅子は原位置に置き直してあろうが，それ以外は不明である．石人・石獣いずれも頭部を欠く．

石人 No. 1: 大きな腹部をもつ．頭部や手は破損．高さ 73 cm, 肩幅 51 cm, 底辺の幅 51 cm, 腹部での厚さ 36 cm.

石人 No. 2: 大きな腹部をもつ．頭部や手は破損．高さ 78 cm, 肩幅 55 cm, 腹部での厚さ 30 cm.

石人 No. 3: 大きな容器（樽か皮袋）を腹で両手で抱えている．頭部はない．高さ 59 cm, 肩幅 46 cm, 腹部での容器を含む厚さ 39 cm. なおこれと同種の樽（皮袋）を抱える姿勢のものはオンギ遺蹟やシヴェート=オラーン遺蹟にも確認される．

石人 No. 4: 帯より上部箇所が現存．両手を胸元で合わせている．高さ 56 cm, 肩幅 40 cm, 腹部での厚さ 20 cm.

石人 No. 5: 頭部はなく，胸元で両手を合わせた上半身像．帯がみえる．高さ 47 cm, 肩幅 41 cm, 胸元での厚さは 22 cm.

石人 No. 6: 頭部はなく，恐らく胸元で両手を合わせているが，胴部は破損が激しい．高さ 45 cm, 腕の両肘間の長さは 33 cm, 腹部での厚さ 20 cm.

石獅子 No. 1: 頭部を欠く下半身像．前脚を腹下に折り畳みつつも後方は下げられて座った姿勢．高さ 42 cm, 長さ 60 cm, 両前脚の長さ 40 cm. 首を上に延ばしている様子から獅子像と判断される．

石獅子 No. 2: 頭部を欠く下半身像．前脚を立てた状態で後は下げて座った状態．高さ 41 cm, 長さ 51 cm, 幅 41 cm. これも前方が上方に伸び上った姿勢を保っていることから獅子像と判断される．

石獅子No.3: 頭を欠く下半身像．側面からは後脚が確認され，後方では尻尾が反り却っている．また頚部には垂れ下ったたてがみ跡が確認される．

石羊 No. 1: 頭部はなく，後脚が腹下に折り曲げられている．後方には短い尻尾 (10 cm) が確認される．頭部での高さ 52 cm, 長さ 75 cm, 幅 25 cm.

石羊 No. 2: 頭部はなく，前脚と後脚が腹下に折り曲げられている．頭部の高さ 38 cm, 長さ 79 cm, 幅24 cm.

円錐形石片 No. 1: 高さ 46 cm, 上部の幅 19 cm, 下部の幅 28 cm. ヴォイトフはこれを石人の破片とみる．筆者としてはこれと同様の形態の石片がシヴェト=オラーン遺蹟にも確認され，皮袋と見なされる事から，これも同じく皮袋と推察しておきたい．

円錐形石片 No. 2: 高さ 53 cm, 下部の幅 21 cm. ヴォイトフはこれも石人断片（胴体部）とみる．筆者はこれも 先の No. 1 石片と同様の理由で，皮袋とみなしておきたい．

なお本遺蹟の石人中，樽（皮袋）を腹部で抱える石人 No. 3 はオンギ遺蹟，シヴェート=オラーン遺蹟の石人にも存在することが確認されている．

さらに土墨東辺の中央より僅かに内側，円形に表土が露出した箇所の真ん中には黒っぽい花崗岩製のバルバル石柱が完形で固く地中に固定されている．高さ 109 cm, 南北 23 ×東西 26 cm. またこの石柱から石碑の方へ約 2 m 内側にも高さ約 25 cm ほどの石柱断片が地中 に固定されている．ここに第 2 の石碑がたっていたとは考えにくく，バルバル石柱とみなすべきである．この見解はヴォイトフの本遺蹟プランにも同様の記載があり確認される (Войтов 1996, p. 47, fig. 17). そうであれば，この石柱断片こそが第 1 バルバルで，従来ややもすると第 1 バルバルとみなされてきた土墨東辺の中央より僅かに内側のバルバルは第 2 バルバルとみなさねばならない．この第 2 バルバルから土墨を挟んで約 7 m の地点に倒れた第 3 バルバル，そこから約 4 m はなれて倒れた第 4 バルバルがあり，東方へ続いている．長さは約 1 km で，約 165 個に及ぶ．またこの先端部では北側に湾曲している．

遺蹟の図面・写真：図面としては 1983 年の蒙ソ合同調査団考古碑銘班による調査に基づくヴォイトフ作成の図面 (Войтов 1996, p. 42) と，遺蹟の現状を示す意味で今回，部分的に計測した数値に基づく大澤作成の参考図面 **Plate 9a** を参照せよ．また遺蹟の写真としては Kotwicz / Samoïlovitch 1928, pp. 65-67; Tryjarski 1971, pl. 26; Tryjarski 1972, p. 419, pls. 4,5; Болд, p. 40; Tryjarski 1991, fig. 49; Sertkaya 1995, p. 180, fig. 4 を参照.

遺蹟の景観：森安担当「行動記録」1997 年 9 月 4 日（木）～5 日（金）の項参照.

考察：

（1）発見・調査の経緯：本遺蹟は 1912 年にコトヴィチにより発見され，彼による調査報告がなされた．また碑文は拓本に基づきサモイロヴィチが解読を公表している (Kotwicz / Samoïlovitch 1928). ポーランドとモンゴルの両科学アカデミーの相互協定に基づき，第一段階としてトリヤルスキ隊が 1962 年 9 月 30 日と翌朝に同遺蹟を訪問し，遺蹟の保存状況について調査する (Tryjarski 1962). その後は碑文を目的に数多くの研究者が同地を訪れてはいるが，遺蹟については特筆すべき情報は乏しい．近年では 1983 年にヴォイトフらが加わった蒙ソ合同調査団碑銘班が同地を訪れ，詳しい遺蹟データや遺蹟図が公表されている (Войтов 1986; Войтов 1996, pp. 28-29, 32, 42, fig. 17).

（2）本遺蹟の位置付け：この遺蹟に属する石碑には，突厥第二可汗国期の阿史那氏に属する王侯たちの石碑（キョル=テギン碑文，ビルゲ可汗碑文，オンギ碑文など）に刻まれた雄ヤギ型タムガ，螭首や亀趺は見当らない．このことは本遺蹟の被葬者が阿史那氏族出身ではなかったことを示す．それは，本遺蹟にはそれほど寸法の大きくない石槨が一つしかなく，また土墨の規模や高さ，さらには石人の寸法といった点で上記の可汗クラスの遺蹟より劣っているという点からも支持される．ヴォイトフの遺蹟分類 (Войтов 1986, p. 126) でもそうであるように，可汗クラスの第 1 型式に次

ぐ第２型式の遺蹟に位置付けられよう．

（３）石槨の鳳凰像や獅子像：古代テュルクの遺蹟で鳳凰像や獅子像の表現をもつものはそれほど多くはなく，ましてや本遺蹟の如く鮮やかな筆致で描かれたものは稀である．従来報告された遺蹟中では鳳凰像はホショー=ツァイダム第Ⅰ遺蹟の著名なキョル=テギン石像の王冠正面，ホショー=ツァイダム第四遺蹟の石槨，エルデネマンダル第Ⅱ・Ⅲ遺蹟の一つの石槨に描かれ，また獅子像はシャタルチョロー遺蹟の石槨に頭を向かいあうように対にして描かれているのが知られている．突厥第二可汗国期のモンゴル高原ではこうした動物像が王侯や上層貴族のための墓廟遺蹟を飾る文様として流行していたことが窺える．そもそもこうした動物像は歴代中国王朝では支配者層の墓廟や建造物に権力のシンボル像として常用されてきたことを想起するならば，本文様も当時の唐王朝との人的交流を背景を抜きにしては考えられない．このことは本遺蹟のマウンド中央に散乱する丸瓦，軒瓦やレンガの砕片から推定される瓦葺きの屋根付き建造物（廟）の存在や早くにラドロフが Atlas, XIV の図版解説で「中国人の制作」と推測したオンギ遺蹟の石彫と同様の立体感溢れる石雕と同類の石人が本遺蹟にもみられることからも支持されよう．

（４）本遺蹟の第２バルバル石は石碑から６m 離れて，土墨の東辺内側に立っている．さらに第一バルバル石はここから石碑の方に約２m ほどのところに確認される．通例ではバルバル石はマウンドの東方外側に並んで配されているものとしてあまり気にも留めてこられずにきたが，本遺蹟ではあきらかに土墨の東辺に近いマウンド内部にもバルバル石が複数確認されたことの意味は大きい．このことは同時代のオンギ遺蹟やトニュクク遺蹟にもいえ，土墨の東辺に近いマウンド内部にも２つの未加工立石が確認され，これもバルバル石であることが判明する．ここから我々は突厥第二可汗国期の遺蹟では土墨の東辺からマウンド内部にかけてバルバル石が複数存在していた事実に気付かされる．今後は同時代の遺蹟についても土墨東辺の内側にバルバル石柱が立っていた可能性があるという視点をもって，石彫タイプの石人以外の立石を機能面から再検討してゆく必要がある．なお，土墨東辺よりマウンド内側にバルバル石がある構造は何も突厥第二可汗国期に限られない．というのも今回，調査したブグト遺蹟を始め，イデル遺蹟やギンディン=ブラク遺蹟といった突厥第一可汗国初期に属する遺蹟にも確認されるからである (cf. Войтов 1996, p. 33, fig. 7; p. 34, fig. 8; p. 35, fig. 9)．今後，突厥第一可汗国と第二可汗国における葬法の類似・差異に留意しつつ，このマウンド内部のバルバル石のもつ機能とその系譜についても更なる考察を要しよう．

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー言語学研究所サンクト=ペテルブルグ支部；ポーランド科学アカデミー (cf. Tryjarski 1966, p. 166); モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部

解説：1912年に遺蹟をコトヴィチが調査し，碑文の拓本（厚手の紙を押し込んで文字の凹凸を浮き上がらせたもの）をとった．その拓本を利用してサモイロヴィチが解読し，両者の連名で 1928 年に専論が発表された（Kotwicz / Samoïlovitch 1928: 以下，K / S と省略）．それに基づいていくつかのルーン文字の書き起こし，転写，翻訳が発表されている (ETY I, pp. 133-151; PDPMK, pp. 25-30; GOT, pp. 257-258, 293-295; Айдаров 1971, pp. 334-338)．これに対し，1962 年にトリヤルスキが現地で新たに拓本をとり，クローソンと共同研究して，書き起こし，転写，翻訳を発表した（Clauson / Tryjarski 1971, pp. 7-33: 以下，C / T と省略）．従って今回の我々の拓本は３つ目ということになる．

西面に 12 行，東面に 13 行，南面に４行（C / T は３行とする），さらに西面最下部に水平に１行ある．石碑の上部は欠損しており，各碑文の行頭の文字数は不明である．最もよく残っている行は西面で５，６行目，東面で９行目である．C / T はこれらの行の冒頭の不明文字数を x とし，それ以外の行はそれからさらに何文字分読めないかを推測して具体的な数字で表わした（たとえば西面２行目の冒頭は x + 7）．私もこの方式を踏襲するが，＋α の α は数字ではなくスラッシュの数で表し，またその数は必ずしも C / T と一致しない．行末では，もはや次の単語を刻むスペースがない場合，多少のスペースは空けたまま改行しているので，各行末はやや不揃いである．なお北面にも文字を刻んだような跡が散見されるが，文字であるとしても文章を構成するとは思われない．

なお，この碑文の主人公については，キュリ=チョルが２人なのか３人なのか，名称はキョリ (Köli) =チョルと読むべきではないかという議論もあるが，本稿ではこの問題には触れない．この問題を含めて，最近，内藤みどり (1998) が本碑文の内容に関する研究を発表しているので，参照されたい．

碑文の文字は，トニュクク碑文の文字と１字を除いて同じ，キョル=テギン，ビルゲ可汗碑文とは２字を除いて同じだが，オンギ，シネウスで使われている文字とはあまり似ていない．

参考文献：Котвич 1914, pp. VI-VII; Kotwicz / Samoïlovitch 1928, pp. 60-107; ETY I, pp. 133-151; PDPMK, pp. 25-30; Tryjarski 1966, pp. 160, 165, 172; Clauson / Tryjarski 1971, pp. 7-33; Tryjarski 1971, p. 134, fig. 26; Айдаров 1971, pp. 334-338; Tryjarski 1972, pp. 38, 419, figs. 2, 3; Hamilton 1974a; Hamilton 1974b; Войтов 1986, pp. 126-127; Болд 1990, pp. 40-43; Tryjarski 1991, figs. 49, 57; 林 1991, pp. 172, 174; Войтов 1996, pp. 28-29, 32, 42 = fig. 17; 林 1996, pp. 225-226, 280; Баяр 1997; 内藤 1998.

参考：**Котвич 1914, p. VII**（訳：林　俊雄）

Ⅳ

サモイロヴィチが先の報告に補足して，コトヴィチが発見したオルホン文字をもつ石碑に関する予備的報告を行なった．西面と東面に２つの大きな碑文があり，南面に小さい碑文がある．石碑がひどく傷んでいるために，碑文は大部分読むことができない．新たに発見された石碑の文字はその形から見て，トニュクク碑やその他の初期オルホン碑の文字に近い．新たに発見された石碑は罫線で行を分ける点でもそれらと近い．西面と東面の碑文はシャダプット=タルドゥシュのキュリ=チュルの軍事的功業の記述にあてられている．キュリ=チュルはビルゲ可汗碑文の中に知られており，そこでは彼はビルゲ可汗の父がハン位に即くさいに参加した貴人の中にあげられている．おそらく２つの大きな碑文は１つにまとめられるものであり，その場合テキストは西面に始まり，東面に終わるのであろう．小さい碑文はキュリ=チュルの葬儀の記述と石碑が彼のために作られたという記述にあてられている．作者の名前は読み取れない．葬儀の参加者の中にはキュリ=チュルの息子であるイェゲン=チュルがあげられている．

このように，コトヴィチによって発見された石碑は一連の初期オルホン碑の中に入るものであり，歴史だけでなく言語学の上からも興味をひく．碑文にはオルホン河谷の石碑にはまだ見られないいくつもの単語が含まれている．

キュリ=チョル碑文テキスト・翻訳（林　俊雄）

Text and Translation of Küli-Čor Inscription (Toshio HAYASHI)

以下，翻字 (Transliteration) はボルドとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は林の責任で提出する．

翻字・転写 (Transliteration and Transcription)

W1　x / ü č ü[n]:p[a]:[T R Q N]:č i Q N T W N Y uQ uQ:a T G:b r m s / / / / / / / /
x / üčün apa [tarqan] čïqan tonyuquq atγ bermiš / / / / / / / /

W2　x / / / / /(T D Q)D[a]:y ü g t ü r m s:i š B R a č i Q N ük ü l i č W R:B W L m s:č . . / i L . p:/(ü) l(s) / /:T W N[Y]uQ uQ / / / / / / / /
x / / / / / -tduqda yügtürmiš ïšbara čïqan küli čor bolmiš / / / / / / / / / / / / / / tonyuquq / / / / / / / /

W3　x / / / / Q G N:l i n t a:Q R i p:d g ü b ŋ i:k ü r[t]i:W L G:ük ü l i č W R:s k z W N:Y S p:Y uQ B W L[T i]
x / / / / qaγan elintä qarïp ädgü bäŋi körti uluγ küli čor säkiz on yašap yoq boltï

W4　x / i:ü z l ük i:B W z T:r t i:k d m b / / / / / / /:(L)p i r d m i:nt a ük ü k d i:(t)ü r k:B W D N Q a:W/ / / / / / / / / / /
x / / özlüki boz at ärti kädim / / / / / / / alpï ärdämi anta kükädi türük bodunqa / / / / / / / / / /

W5　x S G R č W L W G N:Y G i T uQ D a[:ük ü l](i)č W R:/ / / / / / / /[p]:[S]nč p:ü l r p:W G L i n:k i s i s n:B W / / / / / /
x saγïr čoluγan yaγïttuqda [küli] čor / / / / / / / / sančïp ölürüp oγlïn kisisin bu / / / / / /

W6　x　B W /(z)l g:T W T D i:y r ü z / / / / / / / / / / /:r t i:[ük]ü l i č W R:t ü r k B W D N:b[g l]r / / / / / / / / / / /
x / / / az elig tutdï yer öz / / / / / / / / / / / / ärti küli čor türük bodun [bäglär]/ / / / / / / / / / /

W7　x / / / / / [Q]G N i ŋ a:l (i) / / / / / / / / / / / / b l g a s i n ü č ü n:L p i n r d m i n[ü č ü]n:Q [z G]nt i:Q / G / / / / / / /
x / / / / / qaγanïŋa eli / / / / / / / / / / / / / bilgäsin üčün alpïn ärdämin üčün qazγantï / / / / / / /

W8　x / / / / / / / / / / / r / / / / / / / / / / / / / /[l]/ /:i S B R a b l g a ük ü l i č W R:k i s i:(i)/ . .:b m d ük i[Y]uQ/ / / / / / /
x / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

G z Q a:y t i s[ü]ŋ s:s ü ŋ s d ük d a

x / / / / / / / / / / / anta kärü barïp yinčü ögüzüg käčip tämir qapïγqa täzikkä tägi / / / / / / / / qazγantï toquz oγuzqa yeti süŋüš süŋüšdükdä

E5 x / / / / / / / / a:t ü[k]d i:Q i T ny:T T B i:/ / / / / / / / ük d a:b s:s ü ŋ s:s ü ŋ s d k d[a]:[ük l i č]W R:nč Q: b l g a s i:č B s i r t i: L p i: b ü k s i: r t i

x / / / / / / / / / tökdi? qïtany tatabï / / / / / / / / beš süŋüš süŋüšdükdä [küli] čor ančak bilgäsi čavïšï ärti alpï bökäsi ärti

E6 x / /[ük ü]l i č W R:y t i Y š i ŋ a:y g r:ü l r t i:[T W](Q z:Y š i ŋ)[a]:z G L G:T W ŋ[z]:[ü]l r t i:[Q R L]uQ:Y G i T uQ D a:t z d a s ü ŋ s d ük d a

x / / küli čor yeti yašïŋa yegär(?) ölürti toquz yašïŋa azïγlïγ toŋuz ölürti qarluq yaγïttïqda tezdä süŋüšdükdä

E7 x / / /(a):[ük] ü l i č[W R]:nt a k s r a:Q R L uQ Q a:y m[a]:s ü ŋ s[d k]d a:i d l / / n:b i n p:W p L Y W: t g p: S nč a:i D p:T W p L W:ü n t i Y N a:G T p

x bilgä(?) küli čor anta kesrä qarluqqa yemä süŋüšdükdä idil(?) / / / binip oplayu tägip sanča ïdïp at upulu önti yana aγïtïp

E8 x / / / / s ü s ü r t i:Q R L uQ G:k č g n t / /:S nč D i:Q R L uQ:T p a: / / / / / / G l i: B R(p):z N r g:Y N a:b i ŋ a:s ü[ŋ]s:k i g ü r t i:Q R L uQ:T L nt i:a nč a s ü n

x / / / / sü sürti qarluqïγ / / / / / / / sančdï qarluq tapa / / / / / /-γalï barïp azïn ärig yana äviŋä süŋüš kigürti qarluq atlantï anča *sön*

E9 x [Q]R L uQ:y g r n:r m l g:R Q a S i n:s i Y W:W R T i:Q R L uQ:N i n:T W R W [p]/ / / / / G:l t b r:ü z i k l t i:s i r:i r k n:W G L i:y i g n č W R:k l t i

x qarluq yägrän ärmäläg arqasïn sïyu urtï qarluq anïn turup / / / / / / eltäbär özi kälti šir irkin oγlï yegän čor kälti

E10 x / / / / / / / / / / / / / / / G L i s ü l d i:s ü ŋ s p:s ü s i n:S nč D i:l i n:L T i:W G L i n:k i s i s i n:B W[L]N(D) / /(Q)G(N). / a:i S B R a:b l g a:ük ü l i č W R

x / / / / / / / / / / / / / / / /-γalï sülädi süŋüšüp süsin sančdï elin altï oγlïn kisisin bulunad[ïp]/ / qaγan / / / ïšbara bilgä küli čor

E11 x / / / / / / / / / / / / / r ü k a: T W S W B W L[Y](n):ü d i:ü l g i:nč a r m s r nč:Y G i Q a:Y L ŋ W s:W p L Y W t g p:W p L W k i r p:ü z i ïQ i S G a k r g k B W lt i

x / / / / / / / / / / / / /-rükä tusu bolayïn ödi ülügi anča ärmiš ärinč yaγïqa yalŋus oplayu tägip upulu kirip özi qïsγa kärgäk boltï

E12 x / / / / / / / / / / / / n:Q G N:i n s i:l č W R:t i g n:k l p:W L Y W(t ö r)t:t i g t:k l p:i S B R a:b l g a:ük ü l i č W R G:Y W G L T i:b d z i n:b d z t i:W L R T i

x / / / / / / / / / / / / / qaγan inisi äl čor tegin kälip ulayu tört tegit kälip ïšbara bilgä küli čoruγ yoγlattï bädizin bädizätti olurttï

E13 x /(i)n:B W. . ./ /. .m:Q z G nt i:R T uQ:Y i L Q i G:i g t i

x / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

W5 x When Saγïr Čoluγan (personal name(?)) was hostile, [Küli] Čor / / / / / / / / stabbed, killed and [captured(?)] their children and women. / / / / / / / /

W6 x / / / he took the Az tribe people. The land / / / / / / / / / / / / / Küli Čor [****ed(?)] the Türük people / / / / / / / / / / / / / /

W7 x / / / / / the people to the **** Qaγan / / / / / / / / / / / / / because of his wisdom, his toughness and his manliness he succeeded. / / / / / / /

W8 x / / / / / / / / / / / / / / Ïšbara Bilgä Küli Čor / / / / man / / / / without not hurrying / / / / / / /

W9 x / When there was a battle, he marshalled the troops. When hunting, he was like a (huge?) hawk.

W10 x / he stabbed. At Käčin he fought against an army of ten thousands men. Küli Čor attacked with a war cry and / / / his army / / / /

W11 x / / / / / / / six / / / / / / / / / / / / / / / / / / / When he fought four battles at Beš-balïq, Küli Čor attacked with a war cry and disordered / / /

W12 x / fought so much against the Chinese and gained so much fame because of his toughness and manliness.

E1 x / making the children and women to follow (him), taking (them), organizing and taking a land

E2 x / Bilgä Küli Čor organized the Tarduš people, ordered and ruled (them).

E3 x / / / / / / / / / / / / / / / / mounting his saddle-horse / / / / / stabbing three men / / / / / When ****ed, Küli Čor mounted his chestnut saddle-horse

E4 x / / / / / / / / / / / from there going westward, crossing the Pearl River, reaching as far as the Iron Gate and the (land of) Tajiks, [fought(?)] and conquered. When fighting seven battles against the Toquz Oγuz,

E5 x / / / / / / / / / [poured(?)]. When / / / / / / / fought five battles / / / / / / the Qïtanys and the Tatabïs, [Küli] Čor was thus his Counsellor and Army commander, and his brave man and hero.

E6 x / / / / / / Küli Čor at the age of seven killed a young wild she-goat(?). [At the age of nine] he killed a wild boar with tusks. When the Qarluq became hostile, and when he fought (against the Qarluq) at Tez,

E7 x / / / / After that when [Bilgä(?)] Küli Čor fought against the Qarluqs again, mounting [his saddle-horse Idil(?)], attacking with a war cry, stabbing, routing, and his horse was crushed, he stood up. Again pulling [it] up,

E8 x / / / / he led the army. He / / / / / / / and defeated the Qarluqs. Going to / / / / / / against the Qarluqs , he / / / / / / / again a war into their home place. The Qarluqs mounted. So much long time

E9 x he broke and hit the back of the Qarluq chestnut swift horse (?). The Qarluqs therefore stopped. / / / / / / The Eltäbär himself came. Yegän Čor, the son of Šir Irkin came.

E10 x / / / / / / / / / / / / / / / / in order to / / / / he campaigned. He fought and defeated their army. He took their land. He made (his followers) captive their children and women / / / / / Ïšbara Bilgä Küli Čor

E11 x / / / / / / / / / / / / / / / / he thought (thus): "May I become a benefit for / / / / / /." He was perhaps so destined. He alone attacked the enemy with a war cry, was crushed, entered, and his life ended up short.

E12 x / / / / / / / / / / / / / the younger brother of **** Qaγan, Äl Čor Tegin came. Furthermore, four tegins came and held the funeral for Ïšbara Bilgä Küli Čor. They had statues sculptured and had them erected.

E13 x / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

W3 x////可汗の国で，彼は老いて良いめを見た．大キュリ=チョルは80歳で亡くなった．

W4 x//彼の乗用馬は灰色の馬であった．（彼の）衣裳は///////彼の勇敢さ，彼の男らしさはそのとき有名となった．テュルクの民に//////////

W5 xサグル=チョルガンが敵となった時，［キュリ=］チョルは////////刺し，殺して，その子供たち・女たちを［捕虜にした（？）］////////

W6 x///彼はアズの部民を得た．土地は//////////////であった．キュリ=チョルは，テュルクの民，////////

W7 x/////＊＊＊＊可汗にその民を//////////////彼の賢さのゆえに，彼の勇敢さ，彼の男らしさのゆえに，彼は成功した．///////

W8 x///////////////イシュバラ=ビルゲ=キュリ=チョルは女たち////急がないことなく/////

W9 x//////////////////////////////////戦いとなる時には，彼は軍隊を招集するのであった．狩りを行なう時には，彼は（大きな？）鷹のようになるのであった．

W10 x//////////////////////////////彼は刺した．彼はケチンで何万もの軍に対して戦った．キュリ=チョルは鬨の声をあげて突撃し，彼の軍隊////

W11 x/////// 6 ////////////////////ビシュ=バリク（北庭）で4回戦いを行なった時に，キュリ=チョルは鬨の声をあげて突撃し，混乱させ，

W12 x//////////////////////////中国人に対してこれほどに戦って，彼の勇敢さ，彼の男らしさのゆえに，名声をこれほどに得た．

E1 x//子供たち・女たちを随わせ，得て，まとめ，土地を得て，

E2 x//////////////////////////////////////ビルゲ=キュリ=チョルはタルドゥシュの民をまとめて，指図し，支配した．

E3 x///////////////彼の乗用馬にまたがって，///// 3人の男を刺した．///// した時に，キュリ=チョルは自分の乗用馬である栗毛の馬にまたがって，

E4 x//////////そこから西へ行って，真珠河を渡り，鉄門にまで，大食にまで達して，//////征服した．トクズ=オグズに対して7回戦いを行なった時に，

E5 x/////////一掃した（？）．契丹・奚（タタビ）////////// 5回戦いを行なったときに，［キュリ］=チョルはこのように彼の参謀・軍司令官であった．彼の勇者・英雄であった．

E6 x/////////キュリ=チョルは7歳のときに若い雌ヤギ（？）を殺した．［9歳の時に］牙をもつ猪を殺した．カルルクが敵となった時に，テズで戦った時に，

E7 x////キュリ=［チョル］がそのあとでカルルクに対して再び戦った時に，［イディルという彼の乗用馬に（？）］またがって，鬨の声をあげて突撃し，刺し，追い散らし，馬がつぶれて，立ち上がった．再び［馬を（？）］立ち上がらせ，

E8 x////彼は軍隊を率いた．彼はカルルクを///////打ち破った．カルルクに対して////// するために行き，//////////再びその本拠に戦いをもたらした．カルルクは乗馬した．それほどに長い間，

E9 x彼はカルルクの栗毛の駿馬（？）の背中をたたき打った．カルルクはそのため止まって，////// イルテベル自身が来た．シル=イルキンの息子，イェゲン=チョルが来た．

E10 x///////////////するためにC彼は出征した．彼は戦って，その軍隊を打ち破った．彼はその部民を得た．（彼は）その子供たち・女たちを捕えた．/////イシュバラ=ビルゲ=キュリ=チョル

E11 x///////////////彼は，「私が//// のためになろう」と考えた．彼の運命はおそらくそのようであったらしい．敵に向かって一人で鬨の声をあげて突撃し，倒され，入って，彼の生命は短く終わった．

E12 x//////////＊＊＊＊可汗の弟，エル=チョル=テギンが来て，さらに4人のテギンが来て，イシュバラ=ビルゲ=キュリ=チョルの葬儀を行なわせた．彼らは像を彫らせた．据えた．

E13 x//彼は成功した．彼はより多く畜群を飼育した．

S1 xテギンが来た．////////// チョルの息子，イェゲン＝チョルが来た．

S2 x//////のゆえにこれほど多くの人々が［集まって（？）］とむらった．私はベンティル（？）である．

S3 x//（人が）知らない知識を，私が知っていたことを，私が憶えていたことをこのように碑文として刻んだ．

W Horizontal

xチョルはまとめて，そのとき得た．

訳注

W1, üčün: この前にC/Tは [alpïn ärdämin] と推定して補う (C/T, pp. 13, 21).

W1, atïγ: これにマロフは l を補い， at(l)ïγ とするが，意味はやはり「名前」と考えており (PDPMK, 27-28), それならば l を補う必要はない．

W2, yügtürmiš: C / T は bögtürmiš とするが (C / T, p. 13), 最初の文字は b ではなく y と読める．

W2, bolmïš: つづく文章の冒頭を C / T は Inča と読むが (C / T, p. 21), 冒頭の文字は č と読める．

W3, qaγan: この前に C / T は Qa[p]γa[n] と補い (C / T, p. 14), サモイロヴィチ，マロフ，テキンは [Eltäris] と補う (K / S, p. 102; PDPMK, p. 27; GOT, 257). 現状では残画がわずかに見られるのみで，文字を特定して復元することはできない．しかし残画だけではあるが，それをカプガン，エルテリスのどちらに読むこともできない．

W4, kädim: このあとにテキンは b[äŋizi(?)] と補うが (GOT, p. 257), それでは字数がまだ 2 字ほど足りない．

W4, kükädi: サモイロヴィチとマロフは kükdi(?) と転写して意味不明とするが (K / S, pp. 102, 105; PDPMK, pp. 27-28), テキンは kükädi と読んで「名声を得た」と解釈する (GOT, pp. 257, 293)．一方， C / T はこれが tükädi であることは明らかであるとし， tükä- が Ïrk Bitig で若鳥の羽が「生えそろう」という意味があることからここでは「完成した」という意味に解釈した (C / T, pp. 14, 21, 29). ただしクローソン自身はそれ以前にここを tökdi と転写し，「ほとばしらせた (poured out)」と解釈していた (ED, p. 477). 現状では最初の文字は t とは読めず， ük の可能性が高いので， kükädi と読んでおく． kükä- という動詞は他に例がないが， kü には「うわさ」とか「名声」という意味があるので，テキン説も成り立つかもしれない．

W5, saγïr: マロフは aγïr と転写するが，明らかに S が読み取れる (PDPMK, p. 27).

W5, čor: このあとに C / T は [? u p l y u tägi]p と推測して補う (C / T, p. 21).

W5, kisisin: このあとにサモイロヴィチは bolun(?) qy(?) と補い (K / S, p. 103), テキンは bulun qï[ltï?] と読み (GOT, p. 257), C / T は bulna[dïp] とするが (C / T, p. 21), 現状では BW までしか読めない．

W6, az: この前を C / T は bolup とするが，そのようには読めない (C / T, pp. 15, 21).

W7, qaγanïŋa: C / T は [?Xa]γan aŋa とするが，N のあとは a ではなく i と読める (C / T, pp. 15, 21).

W8, evmädüki: k の前に， C / T は [d]üki を入れるが，現状では読めない (C / T, pp. 15,21). なお C / T は evmädüki yoq を "without hurrying" と訳すが (C / T, pp. 15, 29), mä も否定であるから，二重否定に訳すべきであろう．テキンは "in hurrying" と訳す (GOT, p. 293).

W9, ärmälä: テキンは äräm älä と 2 つの単語に分け， "a huge hawk (or, eagle?)" と訳すが (GOT, pp. 257, 293), äräm という単語はほかに知られておらず，il quš がカーシュガリーに「ハゲタカ (vulture)」という意味で出てくるにすぎない (ED, p. 123). C / T は ärmäli と転写し，トハラ語 B の ramer / rmer「すばやい (swift)」に由来して "swift horse" を意味するのではないかと推定する (ED, p. 232; C / T, pp. 16, 21). 最後の文字は明らかに a と読めるので ärmäli とは転写できないが，トハラ語 B の ramer / rmer に由来する単語である可能性は残る．

W10, käčin: これをハミルトンは姑臧に比定し (Hamilton 1974, pp. 294-297), 内藤が補強している（内藤 1998, p. 24）．

W10, tümät: C / T は tümän とするが (C / T, pp. 16, 21), 最後の文字は t と読める．

W10, oplayu tägip: この表現はキュリ=チョル碑文に少なくとも 4 回登場するほかに，キョル=テギン碑文にも 6（ないし 7）回現われる． täg- は「襲う」という意味の動詞であるので，その前の opla- を動詞と見て全体で「opla- しつつ襲う」という意味になることは容易に想像がつく．問題は opla- の意味である．クローソンは uf が一種の擬音語でキルギズ語では「ため息」，オスマン語では「短気あるいは軽蔑」を表し，さらにオスマン語で ufla- が「uf と叫ぶ」という意味があることから，全体で「怒りであえぎつつ襲う (to attack panting with fury)」 (ED, p. 11), あるいは「いらいらして襲いつつ (attacking impatiently)」 (C / T, pp. 16, 29, 32) ではないかと推測している．マロフは opla- を「急襲する」と解し (PDPMK, pp. 28, 101), テキンも全体で「突然襲った (suddenly attacked)」 (GOT, p. 293) と訳している．これに対しハミルトンはカーシュガリーに yab yub（発音はおそらく短母音で yap yop）で「術策，人を欺くこと (ruse, tromperie)」という意味があることから，全体で「策略によって（敵に）襲いかかる」と解釈している (Hamilton 1974, pp. 112-113, 117). 語頭に y が付いても付かなくても同義であるかどうかという問題もあるが，それよりも意味の点で私には納得がいかない点がある．あとで見るように東面 11 行目では「（キュリ=チョルが）敵に向かって一人で oplayu tägip して突進し，突入し，彼の生命は短く終わった」とあり，この場面では勇敢ではあるが無謀な単騎突入を表していて，とても「策略によって襲いかかる」とは解釈できないのである．そこでもう一度クローソンの説の原点である uf が擬音語というところに立ち戻って考えてみたい．日本語でも急にこみ上げてくる胸のつかえなどを「うっ」とか「うっぷ」と表現することがある．無意識のうちに突然口をついて出てくる擬音語，そして攻撃の直前に出てくるという 2 つの点を考慮すると，それは攻撃直前の興奮状態の中で発する叫び，すなわち鬨の声と解釈することもできるのではないであろうか．

W11, altï: C / T は ï(t)tï と転写する (ED, p. 21).

E2, bilgä: この前にテキンと C / T は ïšbara を補う (GOT, p. 258; C / T, pp. 16, 21).

E3, özlükin: マロフは語末の n をとって özlüki とする (PDPMK, p. 27). この単語の前の Y z G を C / T は .yïγ とするが (C / T, p. 22), i ではなく z のように見える．

E3, üč ärig: この前にサモイロヴィチ，テキン， C / T は o[playu tägi]p と補うが (K / S, p. 103; GOT, p. 258; C / T, p. 22), 現状では語頭の W は見えない．

E3, -tdükdä: サモイロヴィチは t --- [sü]ŋüsdükdä と読み (K / S, p. 103), テキンはそれからさらに推定して t[ümätkä?] süŋüsdükdä とするが (GOT, 258), -dükdä の前は s ではなく t である．C / T はそれを t として tü[rgäš bodun(?). e]tdükdä と復元する (C / T, p. 22). 現状では最初の t のあとは判然とせず，そのあと読めそうな文字は t の可能性と，y と s の 2 文字からなる可能性とが考えられる．

E4, käčip: マロフは käčä と復元する (PDPMK, p. 27).

E5, beš: この前に C / T は tapa qaγan sülädükdä と推定復元するが，これではやや短すぎ，かといって tapa と qaγan との間に bilgä を入れると長すぎる．

E5, bilgäsi čavïšï: マロフは bilgä äsi čab äsi とする (PDPMK, p. 27).

E6, azïγlïγ: C / T は "wild" と訳すが (C / T, pp. 29-30), ここは文字どおり「きばをもつ」と訳してよいだろう．

E6, tez: テキンは ätiz とするが (GOT, pp. 258, 294), これは tez，すなわち現在のテス河のことであろう．

E7, binip: この前にテキン， C / T は aqïn を入れる (GOT, p. 258; C / T, pp. 18, 22).

E7, at upulu: テキンは topulu とする (GOT, p. 258).

E8, sančdï: マロフは sïmadï とするが (PDPMK, p. 28), そのようには読めない．

E8, azïn: ベルタはその前に母音 W があったとみて，uzun とするが (Berta 1995, p. 12), z の前に文字を入れるスペースはない．

E8, äviŋä: ベルタは bïŋa と読んで軍の単位，あるいは位階の名称と考えている (Berta 1995, p. 14).

E8, süŋüš: C / T は süsi とするが (C / T, pp. 19, 22), 最後の文字は i ではなく s のように見える．

E8, sön: これをテキンは「時間 (time)」と解釈しているが (GOT, p. 369), ここ以外の例を挙げていない．マロフは anča を含めて「そのような軍隊とともに」と訳す (PDPMK, p. 29). C / T は，このような単語はほかに見られないが，おそらく sö に具格の語尾 -n が付いて副詞的に使われているのではないかとみなし， sö については södä とか söndä，söki という表現でウイグル文書にしばしば登場する sö すなわち「長い間」と考え，anča sön を「それよりかなり前に (rather before that)」と解釈している (C / T, p. 19). 一方， DTS はウイグル文書の söndä を「昔から」と訳し (DTS, p. 511), ハミルトンは南シベリアのサガイ語に sö 「長さ」という単語があることなどから，「長い間」と解釈している (Hamilton 1971, pp. 36, 81).

E9, arqasïn: マロフは arqasïp とするが，同書のルーン文字による記述では n となっているので，p は n の誤植であろう (PDPMK, pp. 26, 28). アイダロフも誤植のままである (Айдаров 1971, p. 338).

E9, turup: このあとに C / T は [?ičginti] と補うが (C / T, pp. 19, 22), 最後の文字だけかろうじて G のように見える．

E9, šir irkin: マロフは äsi äri ärkin と転写し，ここからあとを「仕事と男らしさの点で彼の友であり，エルキンの息子であるイゲン=チュルも来た」と訳すが (PDPMK, pp. 28-29), 相当に無理がある．一方クリャシュトルヌィはこの部分を「シル族のイルキン」と訳し (Kljaštornyj 1988, p. 76), 「シル」とはトニュクク碑文にも登場する「シル」と同じで，薛延陀のことであり，突厥からウイグルに政権が移ってからはキプチャクと呼ばれるようになったとするが，この議論の展開にも相当無理がある（本ビチェース報告書，シネウス碑文訳注 N4 参照）． C / T は語頭に š が来るのは借用語であろうという判断から，ソグド語の šyr 「良い，美しい」から来ているのではないかと推測し， šir irkin で固有名詞と解釈している (C / T, pp. 19, 29).

E10, -γalï: この前を C / T は Qarluqïγ sa[nč]γalï とするが (C / T, pp. 19, 22), 現状では判読困難である．

E10, bulunad[ïp] / / / qaγan: サモイロヴィチは bu . . . --- qaγanïŋa(?) とし (K / S, p. 104), テキンは bu[l n] ad[ï ant]aγ [b]asa とし (GOT, p. 258), C / T は bulnadtï taγ üzä と推測する (C / T, pp. 20, 22).

E11, -rükä: C / T は [?sükä] とするが (C / T, pp. 20, 22), s ではなく r のように見える．

E11, tusu: テキンは tat[ar] とするが (GOT, p. 258), そのようには見えない．

E11, bolayïn: この語の前半は BWL と後舌であるが，語尾は残画ではあるが前舌の n のように見える．これでは母音調和に反するが，このような例外がいくつか知られている．一人称願望をあらわす接尾辞 -ayïn もその1つである (GOT, p. 59).

E11, oplayu tägip upulu kirip: エルダルは oplanu tägip oplanu kirip とするが (OTWF, p. 608), N ではなく，Y に読める．

E12, qaγan: この前を C / T は，文字は読めないものの年代から見て bilgä であろうと推測するが (C / T, p. 20), サモイロヴィチとテキンは qaγan の直前に見える 1 文字を n の前舌と判断しており (K / S, p. 104; GOT, p. 258), 我々の観察でも n の前舌と見え，bilgä の語尾の a とは見えない．

E12, äl: テキンは [yäk] と推測するが (GOT, p. 258), それほどのスペースはなく，1 文字だけ l が見える．

E12, tegit: サモイロヴィチ，テキン， C / T ともに tegin とするが (K / S, p. 104; GOT, p. 258; C / T, p. 22), 明らかに t と見える．

E12, bädizin bädizätti olurttï: テキンは「彼らは彫像を彫らせ，それらを立てた (They (also) had sculptures sculptured and had them erected)」と訳すが (GOT, p. 295), C / T は「彼らは（墓室を）飾った．彼らは彼を（その中に）置いた (They had (the tomb chamber) decorated. They laid him (in it))」と訳す (C / T, p. 30). このイフ=ホショートゥ遺蹟には浅く鳳凰や獅子が浮き彫りされた石槨があるが，また石像（人間のほかに羊と獅子を含む）も 10 体以上ある．従って bädiz を石槨の装

飾とみなすこともできるが，石像と解釈することも可能である．クリャシュトルヌィはエルデネ=マンダルⅤ号遺蹟の石槨に刻まれた刻まれた短い碑文の中の bädiz を死者本人の石像と解釈している (Кляшторный 1978a)．その石槨には鳳凰や獅子の浮彫はなく，単純な亀甲紋が刻まれているだけであり，この場合 bädiz は石槨のそばにある座像をさすと見る方が自然であろう．

S1, tegin: サモイロヴィチとマロフはこの前に äki(?) と補うが (K / S, p. 26; PDPMK, p. 28), k だけで äki と復元するのは無理である．テキンは [. . .y]äk と復元するが (GOT, p. 258), これは多くの可能性のうちの 1 つにすぎない．

S1, čorïŋ: この前を C / T は ta[r]d[uš ?küli] と復元するが (C / T, pp. 20, 22), T と D の間に R が入る余地はないように見える．

S2, quvurap: サモイロヴィチは B と R の間に判読できない 1 文字があると考え (K / S, p. 104), テキンは qobsarïp と補った (GOT, p. 258)．これに対し C / T は B と R の間に W を補い， quvurap とする (C / T, p. 22)．たしかにその間は 1 文字分あいているが，もともと石の割れ目があったために当初から文字がなかったとも考えられる．もちろん，この語は普通には quvra- である．

S4: サモイロヴィチはこの行にいくつかの文字の存在を認め， m. BWŋ . . . .T. . . と翻字し (K / S, p. 104), マロフ，テキンも同様である (PDPMK, pp. 27-28; GOT, p. 258)．これに対し， C / T はこの行の存在を認めていない．しかし他の行よりは小さいものの，文字がいくつか認められる．ただし現状ではサモイロヴィチらとは異なり， TWQ の 3 文字が見える．

W Horizontal, čor: この前に C / T は [kü]li とするが (C / T, p. 22), 現状では読めない．

W Horizontal, etip anta tutdï: C / T はこれとはまったく異なり，biti[g] bi[ti]dim とするが (C / T, p. 22), とてもそのようには見えない．他の研究者はこの行を読んでいない．

テス碑文　Tes Inscription

大澤　孝　(Takashi ŌSAWA)

調査場所：モンゴル科学アカデミー歴史研究所（ウランバートル）の裏庭の倉庫.

調査日時： 1996 年 8 月 12～13 日；1997 年 9 月 16 日，19 日.

調査者：森安，片山，大澤，松田，松川，松井，オチル，ボルド，バットルガ.

調査方法： 1996 年時点では各自が写真とビデオ撮影を行う．またメジャーで碑文の寸法や行間幅などを計測する．また森安とオチルは拓本を 2 部採取する． 1997 年時点では大澤は前年の拓本では読みとりにくい箇所について，白石とバットルガの協力を得て南面を採拓するが，天候不順もあり，うまく取れなかった．その後，大澤は， 1996 年採取の拓本や写真に基づく碑文模写をもとに，その判読不能文字を中心に，ボルドと共同で原碑について確認作業を行った.

碑文の現況：碑文は赤みがかった花崗岩塊，文字が右から左へ移行してゆく方向に碑文を横倒しにした際，向かって左側は本来の碑文下端部にあたる．その先端には一部が壊れたほぞが見られ，かつては亀趺の背中にあるほぞ穴に差し込まれていたに相違ない．一方，向かって右側は古くから折られた跡が窺われ，その先がどれほどの長さがあったかは不明である． 4 面全体に文字銘文，ほぞに近い箇所にタムガが刻まれている．シネウス碑文にもタムガは南面下端の末尾に刻まれていることから，テス碑文の場合も，タムガのある面が南面とみなされている．碑文は西面→北面→東面→南面という順番に読まれる．碑文断片の全長 75 cm, 広い方の西面と東面の幅 32～33 cm, 狭い方の北面と南面の幅 19.5～25.5 cm, 基底のホゾの長さは約 11 cm である．銘文は文字の残存が確認されるのは 21 行あるが，タムガのある隅上部は原形を留めぬほど損傷・摩滅が激しいが，本来は同じ幅を持つ北面部には 5 行があったことを想起するならば，本来はここにも銘文が彫られていたと考えられる．そうなると南面の最後部 1 行を含めて全部で 22 行あったことになる．文字の深さは約 3～4 mm, 文字の高さは約 3.5～5 cm．末尾にタムガが刻まれている．文字とタムガはタリアト碑文やシネウス碑文と類似している．各刻面の寸法や罫線の幅については **Plate 10a,** また拓本・写真による銘文の筆写コピーは **Plate 10b** を参照のこと.

碑文のスケッチ・復元図・写真：碑文北面の模写は Шинэхүү 1980, p. 37; (Болд, p. 113 はその複写）に掲載された．各面の文字の模写は Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхүү 1980, pp. 38-40; Кляшторный 1983, pp. 79-80; Klyashtorny 1985, pp. 142-143, figs. 5-6; Klyaştornyj 1986, p. 155 を参照のこと．なお上記クリャシュトルヌイの 3 論文の模写についてはいずれも同一の模写からの複写である．それ故，本報告で彼の模写に言及する場合には Klyashtorny 1985 の英文版を利用する事とした．また碑文の写真は Klyashtorny 1985, figs. 1-4bを参照.

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト=ペテルブルグ支部；モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部.

考察または解説：

（1）発見の経緯： 1915 年にウラジミルツォフが西北蒙古調査旅行においてテス河上流で何らかの碑文情報を入手するが，その時の調査報告は今なお未刊である． 1976 年に蒙ソ歴史文化合同調査班（クリャシュトルヌイ，ハルジャウバイ，オチル等）がテス河上流域[1]の遺蹟調査において地元の T. ツェデフから碑文情報を入手．テス河左岸，ノゴン=トルゴイという丘の近くで，ルーン文字で覆われた碑文の下部断片を発見．テス碑文と通称される (cf. Кляшторный 1977, p. 588; Klyashtorny 1985, pp. 138-141)．碑文は広い平地に，半分が地下に埋まった状態で横たわっていた．残りの上部断片や亀趺は 1976～1977, 1980～1982 年の調査にもかかわらず，現在もなお未発見のままである．碑文は 1976 年に歴史研究所に移管される.

（2）シネフーは本碑文断片が発見された場所はクリャシュトルヌィが考えたように，ノゴン=トルゴイに立てられたのではなく，発見地から北へ 5 km ほどいった所のアブドラント (Абдрант) という地点にあったと記す (Шинэхүү 1980, p. 36; Болд, pp. 113-114)．その理由として，碑文が発見されたノゴン=トルゴイには墓らしい遺蹟や遺物が見あたらないことや，碑文その他の断片やそれを支えた亀趺が何ら見つかっていないということが挙げられる．それに対して，アブドラントには一定の埋葬方法に見られる伝統様式の側面模様としてヤギが彫られた平たい板石や多くの石囲い，これを取り巻く周溝と土塁（深さ 70 cm, 幅 2 m 余り）があり，そこから西北 10 km 行った場所であるハルツァグトという山の東方には大きなヘレクスル，またその東側の深い谷間口の上には 1 体の石人，そこから東方に 15 km ほどの地点には 1 つの墓があるというからである．大澤はこの点について，諸説を紹介したことがある（大澤　1996b）．また碑文を発見した調査班に加わっていたオチル自身に大澤が質問した（1996 年 8 月 31 日）際，シネフーは，テス碑文断片が発見後に一旦保管されていたフブスゴル博物館でこうした情報を得たに過ぎず，彼自身は現地調査をした訳ではないという返答を得た．東ウイグル可汗国期の墓地に石人が立てられていた例を知らないこと，また大澤によれば本遺蹟は第 2 代ウイグル可汗の記念碑と考えられ，同一人物の記念碑たるタリアト碑文やシネウス碑文の建造地点には石人がないことな

---

[1] フブスゴル県，サンギン=ダライ湖（標高 2250 m）に近いテス河源頭～ジュグディ湖の北側，地殻盆地から河の流出する地点まで，東西 170～180 km, 南北 40～50 km の範囲という．なお，ここでジュグディというのは，ジュグナイの誤りであろう.

どから見て，大澤はシネフー説を支持しない．

（3）なおオチルは，原所在地はアブドラントではないにしろ，発見されたノゴン＝トルゴイ以外の地点に本碑文は立てられていたという見解にある．何故なら彼らが本碑文断片を発見した時，現地の住人が馬つなぎの一方の端の柱石として使っていたからである．またそこには碑文の断片らしきものや亀趺が一切見つかっていないからである．今後，碑文の建造当初の地については再調査する必要があろう．

（4）本碑文の配列順としては，ハルジャウバイ (Харжаубай 1978, pp. 118-124) は東面 (Klyashtorny 1985, p. 142 の全行数風に書けば L.17 → L.12) →南面 (L.21 → L.18) →西面 (L.6 → L.1) →北面 (L.11 → L.7) という順序で読み，シネフー (Шинэхγγ 1980, pp. 38-41, 57) はタムガのある箇所を碑文冒頭とみなし，北面 (L11 → L.7) →東面 (L.17 → L.12) →南面 (L.21 → L.18) →西面 (L.6 → L.1) の順番で，各自が模写・転写・モンゴル語訳を行っている．しかし，クリャシュトルヌィはタムガは末尾で，南に刻まれたとみて西面 (L.1 → L.6) →北面 (L.7 → L.11) →東面 (L.12 → L.17) →南面 (L.18 → L.22) の順に読んでいる (Кляшторный 1983, pp. 87-89; Klyashtorny 1985, p. 152-154; Klyaştorniy 1986, pp. 165-168)．さらにテキン (Tekin 1988, p. 112) もこの読みを支持する．なお検討の余地はあるが，本報告では大澤もこの読み順に従って読んで置きたい．

（5）上述の研究者たちは，南面を4行からなるとみなし，本碑文の全行数を 20 行か 21 行としている．しかし磨滅しているとはいえ，南面第4行（全行数順では第 21 行目）の最後の単語によって文章が完結していない．従って大澤は，次の行すなわち第5行を想定し，全行数は 22 行あったと考える．

（6）クリャシュトルヌィはパレオグラフィー的観点から本碑文の字体を，ウイグル時代の他のルーン文字碑文の字体と比較した表を掲載している (Klyashtorny 1985, p. 152-154)．その中で彼はテス碑文の nt の文字について，○ の中に点が2つある形で提示している．しかし我々の拓本では ○ の中に点が3つあるものも確認されるので，この点は訂正される必要があろう．

（7）本碑文は本来の形状から半分に折られたほぞのある下部断片であり，現在行方不明の上部断片に何文字が刻まれていたかは不明である．それ故，以下の碑文の翻字・転写では，断裂部の不明な文字数を [x] で表示する．その際，本碑文断片の冒頭の切断部は平行線に直角にではなく，やや斜めに折られているため，各面の [x] 表示を行う際には各面で，最も冒頭の字句がよく残っているとみなされる行を基準にした．即ち，西面では第4行目，北面では第5行目，東面では第6行目，南面では第2行目をそれぞれの基準におき，これらの前に [x] をおき，その行以外の冒頭のえぐれた箇所には推定される文字数を [x + α] の形で示した．また，各行の末尾には欠けたり磨滅した箇所もままみられる．こうした欠損した箇所も前後の行での文字数と比較してスラッシュで表示しておいた．なお各面とも前行と次行の間には相当の文字が欠けているので，文章は連続せず，内容的にも必ずしも連続している訳ではないことを予めお断りしておく．

参考文献： Кляшторный 1977, pp. 588-589; Харжаубай / Очир 1977, p. 75; Харжаубай 1978, pp. 117-124; Шинэхγγ 1980, pp. 36-41, 56-57; Кляшторный 1983, pp. 76-90; Klyashtorny 1985, p. 137-156, figs. 1-4b; Klyaştorniy 1986, pp. 151-171; Tekin 1988, pp. 111-118; Bazin 1994, pp. 193-203; Róna-Tas 1986, pp. 53-63; Róna-Tas 1982, pp. 349-390; Болд, pp. 113-117; OTWF, p. 277, 325, 360; Tekin 1994, pp. 244-281; 大澤 1996b, pp. 99-100; Berta 1994, 49-56.

テキスト・翻訳　Text and Translation

以下，翻字 (Transliteration) はボルドとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は大澤の責任で提出する．

翻字・転写　Transliteration and Transcription

W1　[x]/ / / /

Tes Inscription

N2 [x+2]:W L R m s:N ŋ l i:ü č y ü z:Y i L:l T W T m s:nč p:B W D N i / / /
[x+2] olurmïš anïŋ eli üč yüz yïl el tutmïš ančïp bodunï / / / / / /

N3 [x]m s:B W z oq B š i N:Q z a:W č z ük ü l:k a T L G N:t ük a B R(m)[s]
[x]-mïš boz oq bašïn aqïza učuz kölkä atlïγïn tökä barmïš

N4 [x][b](d)i b r s l:Q D R:Q š R:nt a:B R m s:W L B W D N m:k ŋ k r s d(a)
[x] äbdi bärsil qadïr qasar anta barmïš ol bodunïm käŋkäräsdä

N5 [x][ö ŋ]r a:T B G č Q a:B(z L N m) š:W Y G W R:Q G N:(T W uq):W L R m s:y t m s:Y i L r(m)[s]
[x] öŋrä tavγačqa bazlanmïš uyγur qaγan toq olurmïš yetmiš yïl ärmiš

E1 [x+1]D(a)t ŋ r d a:. . . . . .:W Y G R:Q G N:W L R m (s)
[x+1] -dä täŋridä / / / / / / / / / / uyγur qaγan olurmïš

E2 [x+1](Q)G n:r m s:Q G N:/ R(i) k i r m s:nt a:D N:ü d k n č:Q G N r m [s]
[x+1] qaγan ärmiš qaγan / / / / / eki ärmiš anta adïn ödkünč qaγan ärmiš

E3 [x+1](ü)n:ü č n:W T z:[T](T r) l(t). . . .T T D i:nč p:Y š i t g d[i]
[x+1] ün üčün otuz tatar / / / / / / / / / /-dï ančïp yasï tägdi

E4 [x]t(ŋ r)[i](d a):B W L(m)[s]:l t[m s b l g a](Q)G N m:W L R T i:l T U T(D)[i]
[x] täŋridä bolmïš el etmiš [bilgä] qaγanïm olurtï el tutdï

E5 [x]a:/ / / / b l g a s n ü č (n):(ö)ŋ r(a)[k ü]n T W G š Q D Q i B W D(N)/ /
[x]/ / / / / bilgäsin üčün öŋrä kün tuγsïqdaqï bodun / / / /

E6 [x](B) W L Q G:i Y a:B š p:W L R(t)[i] / / nč p / y r g y g[t]d i(T)/ /
[x] bulaqïγ ïya basïp olurtï / / ančïp / / yerig yäg(ät)di / / / / /

S1 [x]. . . . . B G(ü)č n . i:Y W . . . . i:k ü l:b(g)b . i r ./ / / /
[x]/ köl bäg / / / / / / / / / / /

S2 [x][t]z g:Q š R uQ W R G:uQ W nt i:č i T:t i k d i ü r g n:Y R T D i:Y(Y)/ / /
[x] tezig qasar qurïγ qontï čït tikdi örgin yaratdï / / / / / /

S3 [x]:l s r:l g r u:uQ W nt i:b l g u s i n:b i t g i n:B W W R T i:B W Y R T D i:
[x] älsär ilgärü qontï bälgüsin bitigin bu urtï bu yaratdï

S4 [x](uQ)Q / / / / / / . č . . . . p:T uQ z B (W)Y R (uQ) . . G i:W Y G R m s T Y .
[x]/ toquz buyruq / / / / / / / uyγurmïš tay / / /

S5 [x]/ / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

poured into the Lake Učuz with his (i.e. Boz-Oqs') cavalry.

N4 (the number of letters unknown) I heard that tribes of Äbdi, Bärsil, Qadïr and Qasar went away from there. Those people of mine, in the land of Käŋgäräs

N5 (the number of letters unknown) I heard that formely they (i.e. Uyγur Qaγans) were reconciled to China. I heard that they reigned satisfactorily for seventy years .

E1 (the number of letters unknown) I heard that in / / / , Täŋridä / / / / / / / / / / / / / / / Uyγur Qaγan sat on the throne. / / / / / / / / / / / / / / /

E1 (the number of letters unknown) で，テングリデ=/////////////////////////=ウイグル可汗が即位したという．/////////////??

E2 (the number of letters unknown) 可汗であったという．可汗////は2人であったという．彼（真の可汗）の他に，偽の可汗がいたという．

E3 (the number of letters unknown) のために，30 姓タタール/////////////＊＊＊した．それから彼は致命傷を負った．

E4 (the number of letters unknown) 我がテングリデ=ボルミシュ=エル=エトミシュ［=ビルゲ］可汗が即位した．国を保持した．

E5 (the number of letters unknown) その賢明さゆえに，東方の，日の生まれる地の部民//////////////////////////////////////

E6 (the number of letters unknown) ブラク（謀落；謀刺）族を圧して支配した．/////そうして//////// の地を向上させた（または平穏にした）

S1 (the number of letters unknown)/////////////////////////キョル=ベグ//

S2 (the number of letters unknown) テズ河で，カサル族の西方で，彼は宿営した．彼は柵を立てた．玉座を彼は造った．//////////////////

S3 (the number of letters unknown) エルセル（族？），東方で彼は宿営した．彼は彼の標識を，彼の碑文を，これを彫り，これを造った．

S4 (the number of letters unknown)/////////// 9人のブイルク，彼の///// ウイグル族だったという．タイ//////////////////////////////////////

S5 (the number of letters unknown)/// タムガ

訳注

W4, aγïntïrtï: Klyashtorny 1985, p. 152 は本箇所を aγïnturtï と転写するが，前から第3母音に相当する文字は碑文拓本にはなく，転写方法から見ても円唇母音 u を補うべきではなく，狭母音 i を補うべきである．この語はルーン文字碑文には在証できない．それ故クリャシュトルヌイは，本単語がクマン語に在証できることをあげ，さらに 17 世紀のアブル=ガーズィ=バハードゥル=ハンの『トルクメン族の系譜 (*Šejere-i Terākime*)』の用例に対するコノノフの訳注を引用しつつ，この語が即位儀式の中で，次期可汗候補が白いフェルトに乗せられて回転させられる行為を指し示すものと考え「即位する (to be enthroned)」の意に解した (Klyashtorny 1985, p. 154)．しかしクリャシュトルヌイが同語形の参照例として挙げたクマン語の動詞 aγïndïr-の用例としては「彼は私を山に登らせた (mengi tavγa aγïndïrdï)」しかなく，動詞 aγïn-「登る，上がる (yükselmek)」に使役語尾 -dïr- の付いた形であり (Grønbech 1942, p. 29)，クリャシュトルヌイのいうように「即位する」という行為に対して使用されたかどうかは不明である．大澤は，ここでは字義通り「持ち上げる」と取って，「可汗が即位した」の意味に転用された可能性を含めておく．ここでの動詞語尾は3人称単数形であるが，複数形の簡略形と取らないと，意味不明となる．「彼ら」とは可汗配下の部民を指す．

W4, tutulmïš: クリャシュトルヌイは彼の碑文模写 (Klyashtorny 1985, fig, 5) で T W T uq D a と写して，tuttuqda と転写し，「支配した時」(Klyashtorny 1985, p. 152-153) と訳出するが，我々の拓本からは tutulmïš と判読できる．動詞 tut-「捕まえる，保持する」に介入母音の -u-, 受け身形成語尾 -l-, 完了形の -mïš が付いた形で，「捕まえられたという」と訳せよう．これだけでは可汗が敵方に捕まったと解するとみるのが常識的ではある．しかし本字句が「即位した」ことを意味する直前の字句に関係するのであれば，キョル=テギン碑文東面第 11 行目，ビルゲ可汗東面第 10 行目における Täŋri töpäsintä tutïp yügärü kötürmïš ärinč「テングリは彼らの脳天でつかまえて，上の方へ持ち上げたのだ」というように「テングリ」によって「つかまえられて」即位させられた際の表現と見なすことも可能であろう (cf. 護 1992, pp. 347-356)．ただ前後の文脈がなお不明なので，大澤は今のところ，直訳しておく．

W4, taqïγu yïl: クリャシュトルヌイの碑文模写 (Fig. 5) では，taqïγu の前の語の語頭の k の後は記されていないが，我々の拓本からは前舌円唇母音 ü の文字が確認される．またクリャシュトルヌイはその後の文字の損傷数を 7 ～ 8 文字と記すが，我々の拓本では約 3 文字分のスペースしかない．さらにクリャシュトルヌイの碑文模写 (Fig. 5) では損傷部分の後の文字を γ 字で始めているが，我々の拓本からは母音の i 字が判読できる．またクリャシュトルヌイは yïl の後に qa を補うが，我々の拓本からは 2 点の綴字記号が確認される．本箇所は本碑文の記述年代を知る上で重要な十二支獣紀年が記された唯一の箇所であり，綴りの上から taqïγu yïl「鶏年」と復元可能である．クリャシュトルヌイはこの年を西暦 757 年と見る (Klyashtorny 1985, p. 144) が，大澤は本碑文の建造年を 750 年と見る立場（大澤 1996b）から，745 年と解する．また taqïγu の直前は 1 文字分のスペースがあるが，現段階では復元できない．

W5, -miš: ハルジャウバイ，及びシネフーの模写では i とのみ写している (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхүү 1980, p. 40). クリャシュトルヌイの碑文模写 (Fig. 5) では l t m s:と写しているが，我々の拓本では冒頭部はかなり摩滅して判読できず，辛うじて s 字が見えるに過ぎない．またその後の 2 点の綴字記号は確認できない．大澤は，この -miš の用法については，前後の文体が -ti 過去で終わっていることからみて，文末の動詞語尾のそれではなく，後ろの名詞 Qaγan を修飾する形容詞的用法とみて，「～した所の」というように解釈しておきたい．

W5, yasï tägip učdï: クリャシュトルヌイは yasï tägip učdï を「死んで，（魂は）飛び去った」と訳す (Klyashtorny 1985, p. 153). もちろん，彼の如く本字句を「死ぬ」を意味する yas täg- と uč- からなる動詞の並列用法 (verbal binary) とみることは可能であろう．しかし yas は "death, destruction" の以外に "damage, harm, destruction" をも意味することから (ED, p. 973), yasï tägip を直訳すれば「彼の損失（損傷，破壊）が至って」，つまり「彼は損失を被って」という意になる．なお，オグズ語の yas は，カラハン朝文献においては「死ぬ」を意味するときに yas bol- の表現で使用されること (cf. CTD II, p. 231), また yasï tägip の後に高位の人物が「死ぬ」場合に使用される uč- （魂が飛翔する）が使用されていることから見て，大澤は本処の yasï tägip を「死に至るほどの損傷を被って」という意味に取った．

W6, olurtï: クリャシュトルヌイは W 字を補って，直後の文字を L と読んでいる．我々の拓本では彼が L と読んだ文字はむしろ B の字形に見える．その前には 2 点の分離記号にような斑点が確認されなくもない．しかしそのように bartï「彼は行った」と解するには，古代トルコ語での動詞 bar- は後ろに過去動詞をとる際には -ti ではなく -di が接続する綴字法 (GOT, p. 188) から逸脱していて，疑問である．事実ここでの B に見える字は本碑文の同じ B 字に比べると，やや小さすぎるようである．こうした難点から，大澤はむしろ，クリャシュトルヌイが想定したように L 字の下端の先が丸くなったと考え，クリャシュトルヌイの読みに従った．

W6, oγlï tarduš yabγu tölis čad olurtï: 主語である oγlï は単数形であるが，意味としては複数扱いであり，「彼の息子達の（2 人のうち）一人はタルドゥシュ=ヤブグに，他の一人がテリス=チャド（i.e.シャド）に就いた」の意味である．なお Klyashtorny 1985, pp. 145-146 はこの記載を第 3 代目の可汗が即位した 759 年の際の出来事と考えているようであるが，大澤は本碑文が 750 年に建造されたという見解から，ここの記載はシネウス碑文東面第 7 行目の 749 年における息子 2 人へのヤブグとシャドを与えた箇所に相当すると考えている．

N1, täŋri: ハルジャウバイ，シネフー，クリャシュトルヌイの模写ではいずれも ü ŋ r ä と写している (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхүү 1980, p. 40; Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5). また転写では öŋrä, 翻訳では「以前に」とする．しかし我々の拓本では彼らが ü と読んだ冒頭の文字は右側のストロークが上に曲がっているようには見えず，また最後の文字も a の下側の跳ねた部分が判読できず，i と見える．täŋri qïlïntuqda は文字通り訳せば，「天が創られた時に」となり，キョル=テギン碑文東面第 1 行目（ビルゲ可汗碑文東面第 2 行目）にある有名な字句，即ち üzä kök täŋri asra yaγïz yer qïlïntuqda「上には蒼き天，下には褐色の大地が創られた時に」の字句を想起せしめる．

N1, bök uluγ qaγan: この bök をめぐってのクリャシュトルヌイの読みとそれ以前の読みの問題点はTekin 1988, pp. 112-113 に詳しい．クリャシュトルヌイの模写 (Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5) でも，我々の拓本でも b ü ük と判読できる．クリャシュトルヌイは転写の際，この語を bükü と読み，この可汗をウイグル第 3 代目の牟羽可汗に比定する根拠として挙げている．しかし通常，ルーン文字では母音＋子音の 2 音字が単語の末尾にくる場合は閉音節として表記される．つまり，本例でいえば，bük / bök / äbük のいずれでしか転写できず，クリャシュトルヌイの転写は支持できない．さらに本語は uluγ と共に qaγan の形容語たるべき意味を持たねばならず，この条件に見合うものとしては本来，「高い」を意味する bök がよい．なお CTD II, p. 215 では bök の説明として "Name for the falling of the knucle on the back in the game" とあり，ゲーム名として使用されているが，その起源は指関節（踝）の隆起部に由来するようである．というのも bök から派生した böksäg は「（女性の）胸，胸元」(CTD I, p. 355) を意味し，böktir が「山中での固くて押し下げられた場所」(CTD I, p. 342) を意味する事からもわかるように「高い」「隆起した」意味と関係を持つことが知られるからである（現代キルギズ語の bök は「丘，高さ」を意味する．VWTD, p. 1693）．以上より大澤はテキンの解した如く「高い；崇高な」という意味に解しておきたい．

N2, anïŋ: Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 では b ï ŋ と写され，転写で bïŋ と記されて，「千」と訳している．しかし我々の拓本からは既に Tekin 1985, p. 113 がクリャシュトルヌイの写真から推測していたように，冒頭の文字は b ではなく n と判読でき anïŋ「彼の，それの」と読むべきことが明らかになった．

N3, boz oq bašïn aqïza učuz kölkä atlïγïn tökä barmïš: 本箇所はタリアト碑文東面第 2 行目の箇所に比定できる．Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 の模写では köl の後の文字が k i と写されているが，我々の拓本からは k ä と翻字できる．また Klyashtorny 1985, pp. 152-153 では buzuq bašïn qïza učuz kül eki atlïγïn tükä barmïş と転写して，「ブズク族の首領によって反抗しつつ，（彼らの部民は？）潰えて，（彼らの部民は）小さなキョルと 2 人の貴顕によって，潰えた」と訳すが，彼の読みには Tekin 1985, pp. 113-114 が不十分と見て，批判している．まずクリャシュトルヌイは冒頭から 3 番目の qïza と転写するが，第一音節の狭母音 i は翻字にないことからすれば，qïza とは読めない．これはテキンの述べたように，「流れる」を意味する動詞語幹 aq- に介入子音の i ＋動詞の使役形を形成する語尾 -z ＋副動詞語尾 -a からなる aqïza と転写して「流しつつ」と見るべきと考える．なお動詞 aq- は本義の「流れる (to flow)」という意味から転じて，"to raid" 「進軍する；突撃する」や「襲う」の意で使用される (ED, p. 77b). またこの使役形 aqït- はキョル=テギン碑文北面第 8

行目やトニュクク第一碑文北面第11行目にもその使用例があるように，戦闘場面では "to send out (a party) to raid" (ED, p. 81a); "to order to march; let raid" (GOT, p. 300); "angreifen " (Berta 1994, p. 50) すなわち「侵入する；急襲する」，または「侵入させる；急襲させる」の意で，主に軍事用語として使用される．本碑文の aqïz- も同じく使役形であることから同様の意味になるが，ここでは「急襲させる」の意味にとった．次に tükä という語をクリャシュトルヌイは動詞語幹 tük-＋副動詞 -ä と考えているが，実は動詞語幹自体が tükä- であり，このままでは文法的に不十分で，支持できない．ここは「注ぐ」を意味する動詞語幹 tök- に副動詞の -a が付いた形と見るべきであろう．この動詞はキュリ=チョル碑文東面第５行でも在証できる．また翻字部分で今回確認された köl の後の２点の綴字記号を挟んだ後の kä については，管見では類例が確認されないが，k ä を独立させても意味が不明なため，köl に続くと見て kölkä と転写しておきたい．さらに boz oq bašïn の -ïn は，ルーン文字で i 字が示され，その後に後舌系の n が刻まれていることから，３人称所有語尾に具格語尾 n が付いた形とみて，「ボズ=オク部族の首領でもって」と訳すことができる．なお３人称所有語尾に接続する文字が後舌系の n ならば，これは対格語尾であるとされる (GOT, p. 59)．また atlïγïn の -ïn は i 字が刻まれていないためか，テキンはこの n 字を対格語尾とみて「彼（＝敵）の騎兵たちを」と訳した (Tekin 1988, pp. 113-114) が，ここではその後の n 字も後舌系で記されていることから，大澤は具格語尾の共格的用法 (GOT, p. 137; Кононов 1980, p. 159) ととり，「その（＝ボズ=オク部族の）騎兵たちと共に」と訳しておく．なお boz oq 族は，11 世紀のオグズ=ナーメ (Oγuz name) にも，オグズ系部族集団の名称として確認できる (Róna-Tas 1986, p. 58).

N4, [äb]di bärsil qadïr qasar: Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 では d i b r s l と写され，冒頭の文字 d 字を読み，第３字と第４字の間には分離記号はない．我々の拓本では d 字は確認できない．ただここは４つの部族名が連記されている．タリアト碑文東面第２行にも qadïr, qasar, äbdi（または bädi），bärsil, yatïz, oγuz とオグズ系諸族の名が列挙されているが，問題の箇所は äbdi（または bädi）に対応するものと考えられる．なお Róna-Tas 1982, pp. 366-368 ではタリアト碑文での上述の部族名について，bädi（または äbdi）を *äbdal すなわち「エフタル」に比定し，qadïr を *aqadïr に比定している．Róna-Tas 1986, p. 58 も参照．また qasar を８世紀以降，イスラム史料などからカスピ海方面から黒海北岸方面で活動したハザール族の東方での一集団と見なす見解も提出されているが (Róna-Tas 1982, pp. 368-376; Róna-Tas 1986, pp. 57-60; Bazin 1994, pp. 196-203), 大澤はオグズ系の部族と考え，ハザール族に比定する見解には与しない．

N4, käŋkäräsdä: Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 の模写では，最後の文字は i と写されているが，ハルジャウバイとシネフーの模写 (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 40) では a と示されている．我々の拓本では縦のストロークははっきり見えるが，その右上と左下にも微かに横線が判読できる．それ故，ここはテキンが指摘したように前２者の模写を支持することができる (Tekin 1988, pp. 114-115). クリャシュトルヌイは当箇所を käŋ kärišdi と転写し，「広く（甚だしく），互いに争った」と訳している (Klyashtorny 1985, pp. 152-154). 彼は käŋ を "enmity, hatred, ill will" を意味する根拠として Кононов 1980, p. 182 での見解を挙げている．そこでは「両者間で不和を生む」という意味の動詞語幹 keŋšür- / kiŋšür- が käŋ から派生したというのがその理由である．一方，これと同じ見解をかつて示したテキンは，käŋ には「敵意」などの意味がないとして自説を訂正し，本処の käŋkäräs を部族名とした (Tekin 1988, pp. 114). なお，käŋkäräs 族はキョル=テギン碑文東面第 39 行目にもその名が見え，８世紀前半にはシル河方面に本拠をおいていたことが知られる．なおこのケンゲレス族を käŋk（部族名，地名）＋ är（人）＋ -äs（複数語尾）とみて，テュルク系の「カングリ族」に比定する説 (cf. Kljashtorny 1964, pp. 163-179) もある．

N5, tavγačqa bazlanmïš: クリャシュトルヌイは tavγačqa qïza sïnmïš と転写して「彼らはタブガチに反乱を起こして，破られた」と訳す (Klyashtorny 1985, pp. 152-153). Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 の模写では第２語以下の箇所は ïk z š N m š と写されているが，我々の拓本からは B z L N m š と判読できる．bazlan- の語構成は「平和，平和な」または「服属した，服属者」(ED, p. 388a; GOT, p. 310) を意味する名詞・形容詞 baz ＋名詞から動詞を形成する語尾 -la＋受け身形成語尾 -n である（但し OTWF, p. 511 では -lan それ自体を名詞から動詞を形成する接尾辞として独立させるべきと主張する）．ルーン文字碑文では初出の動詞 bazlan- を，テキンは後者の「服属」という意味から派生した動詞とみて，「～に服属する」の意味にとった (Tekin 1988, p. 115). この読みについてエルダルは "pacified, i.e. peaceable or subjugated" と両義があること，またウイグル文献での用例から「～と互いに平和にする」という意味があることから，動詞 ba- を "to bind" が原義であるみたテズジャン説 (cf. Tezcan 1982) を引きつつ (OTWF, p. 325),「中国の下位の同盟国となった」と訳した (OTWF, p. 511). ところが，テキンは最近，baz という単語を zetacizm 的観点から広くテュルク諸語にその意味を探り，bazlan- がアゼルバイジャン語やテュルクメン語にみられる barïš- に対応するものの，その基幹動詞で「結ぶ」という意味の ba- は長母音であるのに対して，カルルク方言での bazlan- の基幹動詞 ba- は短母音であることから，その語根たる baz は「平和，平和な，平静さ」を意味であり，別系統であると述べ，問題の bazlan- を「～と友好的になる (to make friends)」の意であると論じた (Tekin 1994, pp. 261-262). この見解に立てば，「服属した」という意味は二次的な意味となり，「中国と友好的になった」と訳すことも可能かもしれない．

N5, toq olurmïš yetmiš yïl ärmiš: ハルジャウバイとシネフーの模写 (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 40) には冒頭の語は T W uQ と写されているが，Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 の模写には W N:Y i L: と写されている．我々の拓本からは本箇所は上半分が欠損しているとはいえ，このスペースにクリャシュトルヌイが補った５文字を刻むには狭すぎる．ましてやその読みの最大の障害は末尾文字が uQ に特有の↓の鏃の下端がはっきりと浮き出ていることにある．

また冒頭の文字も後舌のT の下部の丸い形が確認される．このことは直接碑文を調査した際にも他のメンバーと共に確認した．それ故，大澤はハルジャウバイやシネフーの模写にある toq を正しいと考え，“full, satiated” (ED, p. 464) から「満ち足りて」というように副詞的に訳出しておきたい． toq の用例としては，トニュクク碑文第一碑南面第1行に，käyik yiyü tabïšγan yäyü olur ärtimiz. bodun boγuzï toq ärti.「野獣を食べつつ，兎を食べつつ，我等は暮らしていた．部民の腹[1]は満たされた」を挙げ得る．おそらく時のウイグル可汗は中国と友好関係を保つことで，衣食に窮することなく支配したことを述べた箇所であろう．

E2, qaγan ärmiš: Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 の模写では，冒頭の箇所は空白にされている．しかし，我々の拓本からはγN: と判読でき，ここは間違いなく qaγan と復元できる．

E2, qaγan / / / eki ärmiš: QγN: とk i の間について，ハルジャウバイの模写ではY: を入れているのに対し，シネフー，クリャシュトルヌィの模写では約3～4字分の空白箇所となっている (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 39; Klyashtorny 1985, pp. 142, fig. 5)．しかしハルジャウバイはその転写で，qaγan ay eki ärmiš としつつも，その翻訳箇所では「可汗は2人いた」と翻訳するが (Харжаубай 1978, pp. 119, 122), 語法的にみても支持できない．他方，クリャシュトルヌィもこの空白部の後の k i を eki と読んだが，疑問符を付している (Klyashtorny 1985, pp. 153)．それは直前の文字次第では読み方が変わることを予期しての処置であったことを意味する．ただクリャシュトルヌィの読みを批判したテキンでさえも，この eki を躊躇なく採用して ... qaγan eki ärmiš と転写して，「可汗は ... 2人いた」と翻訳している (Tekin 1988, p. 116)．これも直前の空白箇所が読まれないことを前提としての話である．我々の拓本からはその場所の文字の判読は容易でないとはいえ，冒頭には約1文字分のスペースがあり，その後には R とi （または a ）らしき2文字が確認される．あるいは W を補えば， urï （息子）と読めないこともないが，今は保留しておく．なお本文の主語たる人物名は，現在未発見の本碑文の前半部の断片に記されていたのであろうが，今は不明である．ただ前後の文脈として後継候補が可汗として名乗りを上げたものの，彼の他に可汗候補たるライバルがいたことを述べた箇所と推察する．

E2, anta adïn: クリャシュトルヌィはNT:DN を antadan と転写して「それから」と訳す (Klyashtorny 1985, pp. 152-153). しかし我々の拓本からは T と D の間に分離記号が確認されることや， 既にテキンが批判した如く (Tekin 1988, p. 116), クリャシュトルヌィの解釈は不適当であり，ここは anta adïn と転写すべきである．この形はカラハン朝期のトルコ語文献に使用されており， “other than that, besides, further more” の意味を持つ (ED, p. 60b; Tekin 1988, p. 116). 「それ以外に，その他，その上」と訳せる．

E2, ödkünč qaγan ärmiš: Klyashtorny 1985, pp. 152-153 では öd känč qaγan ärmiš と転写し， öd känč をウイグル第3代目の牟羽可汗が即位する前の幼名で漢文史料にみられる移地健 *i-d'i g'i̯ān < *Idikän に比定する (Klyashtorny 1985, p. 155). しかしこれは音韻的にも不適切であり，既にテキンが批判したように (Tekin 1988, p. 115-116) 単なるこじつけ以外の何物でもない[2]．ここは本来 “to imitate” を意味する ödkün- (ED, p. 52a) に名詞形成語尾 -č がついた形であり， “false, fake” を意味する．さらにクリャシュトルヌィは ärmiš を “to become” と訳しているが，そのような意味はなく “to be” の意味しかない．テキンはこうした批判の上に立って，先の qaγan / / / eki ärmiš anta adïn の語も含めて当該箇所を「可汗は2人いた．その上， （彼らの一人は）偽りの可汗であった」と訳している．またエルダルもクリャシュトルヌィの転写と翻訳は誤りであり，テキンの批判を正当とみて彼自身は「彼は別の可汗，偽者であった」もしくは「彼（真の可汗）とは別に，彼は偽りの可汗であった」と訳出している (OTWF, p. 277). 大澤もテキン及びエルダル説に依拠しつつ，そのように解釈した．

E3, ün üčün otuz tatar / / / / / / / / / / dï: Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 の模写からは冒頭部の ü n: の文字は写されていない．我々の拓本からははっきりと確認できる．言わずもがなであるが，これは理由・原因の機能を持つ後置詞 üčün の前に来る単語に付された対格語尾である．次に otuz と分離記号の後の箇所についてはハルジャウバイやシネフー，クリャシュトルヌィの模写ではいずれも空白とされ，転写部では3～5文字分入るとみている (Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 ,p.153). しかし我々の拓本では， otuz の後に不明な1文字の後，後舌系T字と後舌系R の残画が辛うじて読みとれる．またその後にはLTの2文字が見え，空白が2文字，そして後舌系の T, 1字の空白を挟んで，TTDi と続いている．以上の残画現況から大澤は otuz の後に tatar と復元したい．なお最後は動詞過去の語尾 -di がみられることから何らかの動詞語幹が想定されるが，現在の所，成案はない．なお最後の TTDi の文字について，ハルジャウバイやシネフー，クリャシュトルヌィの模写ではいずれもTとTの間にW を挿入しているが我々の拓本からは確認できない．

E5, bilgäsin üčün: ハルジャウバイやシネフー，クリャシュトルヌィの模写では g と s の間の文字が ü と記されている (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 40; Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5)．しかし既にテキンが指摘したように，その後には「東方の部民を」というフレーズが続くことからみて，おそらくは征服したことを述べたくだりであることからすれば，そのような司令官としての資質があったからこそという理由の字句こそが相応しく，その意味では bilgäsin üčün こそが適当である (Tekin 1988, p. 116)．我々の拓本でも一見，前舌系の u のように右上端には鍵型のストロークが見えるが，それは通常の u の形に比べ不釣り合いなほど小さく，逆に縦線の左下端には左に跳ねた点が確認できるので

---

(1) boγuz は通常「喉」と訳されるが，これを「腹」と解釈することについては，森安 1991, p. 69.

(2) また，牟羽可汗の幼名「移地健」については，森安 (1991, p. 194) が yitigän「北斗七星」に比定する案を提出している．

a 字と見なせよう．

E6, Bulaqïγ: ハルジャウバイやシネフーの模写では冒頭の文字は Y W L L G と記されている (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 38)．一方クリャシュトルヌィは模写では B W L ïq G と写し， bolqïγ と転写した (Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5; p. 153)．こうした中でテキンはクリャシュトルヌィの読みがトルコ語に在証されない形であることから賛成できないとして，先のハルジャウバイやシネフーの模写に信頼を置いて， yolluγ と転写さるべきこと，そしてこの人物をタリアト碑文東面第 1 行にあるウイグル可汗の名前に比定できると主張する (Tekin 1988, pp. 116-117)．しかし我々の拓本からは語頭文字は下部が半円を描いていることが窺え，後舌の B の残画であることが確認できる．またクリャシュトルヌィは第 4 字を ïQ と読んだが，上部の三角形の一辺が見ず，従えない．むしろ縦のストロークの左側には，横上に一本線が入っているのが確かめられる．こうした状況から大澤は Bulaqïγ と転写できるとみる．

この Bulaq という語は CTD I, p. 291 にテュルク諸族の 1 つと記される．また， Ḥudūd al-'Ālam (tr. Minorsky 1982, p. 96) にはヤグマ族の構成部族の 1 つとしてみえる．これは『新唐書』巻 217 下・葛邏禄伝で，カルルク族を構成する 3 部族の 1 つ，謀落・謀剌に比定できる．本処はウイグルがカルルク族を攻撃して服属させた事件と関連づけることができよう．

E6, ïya basïp: ハルジャウバイは模写では i Y s B š p と読み，ïyasï basïp と転写して，前者を「その末裔」または「君主」と訳し (Харжаубай 1978, pp. 118-119, pp. 122-123), シネフーは模写では i Y a:B š p と読み，ïyasï だけ転写して「君主」と訳しているものの，後の語を転写し忘れている (Шинэхγγ 1980, p. 38, 41)．クリャシュトルヌィは模写では a Y a:B š i と読み，aya bašï と転写し，「称賛しつつ」と訳している (Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5, pp. 153-154)．しかしハルジャウバイやシネフーの転写は s 字の後に刻まれていない 3 人称所有語尾 +i を付すという通常の語法則から逸脱するもので，従いがたい．一方，クリャシュトルヌィの読みについても，最初の語が彼の考えた如く動詞語幹＋副動詞の語構成ならば ay- + -a という形が想定されるが， ay- には称賛するという意味はない．「称賛する」ならば aya- であり，何も副動詞語尾が付されていないのに，彼のような訳語は不適切である．こうした諸点からテキンは交替案として 2 つの語は「抑圧する」を表現する verbal binary とみて，ウイグル文献での例を引用しつつ， ïya basïp と転写すべきことを主張した．我々の拓本からは i Ya:B š p と転写されるので，大澤もテキンの読みを採用した．

E6, olurtï: ハルジャウバイやシネフーの模写では W L R m s と写され (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 38), 一方クリャシュトルヌィは模写では W L R T m s と写しているのに，転写部では olurtï と別の形で読んでいる．我々の拓本では W L R T までしか確認できない．しかしもしクリャシュトルヌィの模写の通りであれば， olurtmïš と転写され，「支配させた」という意味になるが，先にあるyolluγなる人物が可汗であれば，使役形はそぐわないであろう．それ故，現時点で大澤は olurtï と転写しておきたい．

E6, yerig yäg(ät)di: この箇所は，文字が断続的に破損または摩滅していて，極めて判読困難な箇所である．クリャシュトルヌィはこの箇所を空白としているが，ハルジャウバイ及びシネフーは模写で y r g y r s b i と写し (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 38), yerig yersäbi と転写して，「土地を遊牧した」（ハルジャウバイ）「（非常に），恐れつつ，教育した」（シネフー）と翻訳している．我々の拓本からは yerig の前に z の文字の残画が窺えそうであるが，今は保留しておく．また我々の拓本では yerig の後については判読困難であるが，ハルジャウバイやシネフーが b とみた文字は確かに B とも e とも判読可能である．大澤は下部の文字が重なる箇所が当初から刻まれた部分と考え，これを d 字とみて，これを含む箇所を y g[t]d i と転写して， "to get better, to make better, improve" を意味する動詞 yägät- の過去形とみたが，文字の輪郭が崩れていて推測の域を出ない．

S1, kül bäg b / / ir / / / / / /: 本行は他の行に比して 3.5 cm ほどの界線幅の中に他の行よりも細かな文字で刻まれている．さらに，下端部は碑文の隅にあたるため丸く削られて摩滅が激しく，判読は容易ではない．ハルジャウバイの模写では本行での文字は ..... ü ..... b W B ŋ ..... Q G N i k ü l b i g n i r .... と写され，またシネフーの模写でも同様に Q G N i:k ü l:b i g n i r と写されている (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 38)．クリャシュトルヌィの模写では k ü l:b i g:b l g a Q G N と写されている (Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5)．我々の拓本からはハルジャウバイが転写した Q G N を kül bäg の字句の直前に読むことはできないし，またクリャシュトルヌィが転写したbilgä qaγan の字句も確認できそうにない．なおクリャシュトルヌィは kül bäg をウイグル可汗国の初代可汗の名前に比定するが，前後の文字が明らかでない現状ではその当否は不明といわざるを得ない．

S2, tezig qasar qurïγ qontï: ハルジャウバイは冒頭の z g を写していないが，シネフーやクリャシュトルヌィの模写では写されている (Харжаубай 1978, p. 118; Шинэхγγ 1980, p. 38; Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5)．クリャシュトルヌィはこの字句には触れずに qasar quruγ を qasar qoruγ と転写し，これがシネウス碑文東面第 8 行目の qasar qordan の字句に関係するであろうことを述べて，地名とみて，「カサル=コルグで宿営した」と読んだ (Klyashtorny 1985, pp. 153-155)．これに対してテキン (Tekin 1988, pp. 117-118) は qordanの読みをクローソンが qurïdïn「西方で」と読み直した (ED, p. 645a) ことを受けて，シネウス碑文の字句についてもクリャシュトルヌィの読みより， qasar qurïdïn 「カサルの西方で」と読んだ方がよいとする．またシネウス碑文の同上箇所には tez bašï anta qasar qurïdïn örgin anta etitdim というように tez bašï「テズ河源頭」という地名が含まれ，それに続く字句の中ではシネウス碑文そのものではない別の碑文がそこに建造されたことが記されている．つまり本箇所はシネウス碑文の虎年（西暦 750 年）に述べられた記事に対応させられる (cf. 大澤

1996b). ここから本冒頭の字句は tezig と復元することが可能となる．その場合，本碑文の tezig と qurïγ はシネウス碑文の tez bašï と qurïdïn に対応する．通常，動詞語幹の qon- は "to settle, to drop, to settle down" (ED, p. 632), "sich niederlassen, ver weilen; kon-, yerleš-, dur-" (ATG, p. 358), "to stop or settle somewhere" (OTWF, p. 238) とあるように，通常は「置く」という意味の動詞語幹 qo- に再帰形を形成する接尾辞の -n- が付いた形で自動詞「宿る，落ち着く，座す」を意味する．その際には前には行為の場所が示されるのが常である．そうすると，その前の名詞には場所そのものか，名詞に与位格語尾の -kä / -qa もしくは位奪格語尾の -dä/-da が付く形が想定され，そのような形での用例が諸文献にも確認されている (ED, p. 632b). この場合の動詞 qon- は自動詞の意味である．しかしルーン文字碑文では上記以外に対格語尾 -ïγ / -ig が付く例（トニュクク碑文南面第 10 行目， Ötükän yerig qonmïš「オテュケンの地で宿営した」）なども知られている．この場合，動詞 qon- は「～を置く (to settle)」 (GOT, p. 346) という意味の他動詞として解されている（南西テュルク方言の qoy- に対応する）．上の例でいえば直訳すれば「ウテュケンの地を（自己の下に）置いた」となろう．こうした観点からすれば，テス碑文では tezig と qurïγ には対格語尾が付されていることから「テズ河を，カサルの西方を（自己の下に）彼は置いた」と直訳でき，転じて「テズ河で，カサルの西方で，彼は宿営した」と訳すことは可能と考える．なお大澤は本行の qasar を本碑文北面第 4 行に列挙された中にみられる qasar と同じ部族，またはその一派と考えている．

S3, älsär: 冒頭字の前には 2 点からなる分離記号が見えるので，ここは älsär 以外に読みようがない．クリャシュトルヌィ (Klyashtorny 1985, pp. 153-155) は疑問符を付しながらも älsär を地名とみて，後に続く ilgärü qontï と共に「東方で，エルセルで，宿営した」と訳している．大澤は，前行 (S2) で柵や玉座を設置した場所を示す際，その直前に qasar という部族名が記されていることから，本処の älsär も部族名であり，後続する部族の標識や碑文を作った場所を示すべく記されたと考える．またアブル=ガーズィー=バハードゥル=シャーの『トルクメン族の系譜 (*Šejere-i Terākime*)』では，オグズ部族に関連して ärsär という部族名が挙げられる．あるいは本処の älsär は ärsär の誤刻かも知れないが，今のところ推測の域を出ない．

S3, bälgüsin bitigin bu urtï bu yaratdï: 通常ならば bu bälgüsin urtï bu bitigin yaratdï と綴られる所であるが，ここは碑文とタムガを指す bu という指示代名詞を効果的に後ろに配することで独特のリズムが生まれており，一種の強調構文と見ることができよう．こうした用法は英雄叙事詩の文章にみられるものである．

S4, toquz buyruq: 本行は，特に前半部で文字の上半分が著しく破損・摩滅しており，判読は困難である． Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 ではこの行の冒頭から約 10 字目以降を l g / / R: と写しているが，我々の拓本からは支持されない．またクリャシュトルヌィはその後の文字を 4 ～ 5 文字欠の後， G uQ と転写しているが，我々の拓本からでは 2 文字の空白の後に， G i と見えているが，今のところ成案はない．

S4, uyγurmïš tay: Klyashtorny 1985, p. 142, fig. 5 では tay の前が 2 点からなる分離記号があるとみているが，我々の拓本では一見 uQ と読めそうな形にみえる．しかし Q では意味が通らない．鏃の箇所の右側にでた線は，実はルーン文字 m の斜め上から延びた線と見えるので，ここでは L か， s の残画とみなせよう．しかし， L では全く意味をなさないので，ここは s ととっておいた．またその後の tay は漢語の「大」からトルコ語に借用されたもので，一種の称号または人名要素として頻繁に使用されている (cf. tay säŋün, tay bilgä totoq, etc.). この後には称号や人名が続くことが期待されるが，後にはスペースがない．それ故これに続く箇所は，今や最下段のタムガを除いて完全に欠けてしまっている次の行（第 5 行目）冒頭に刻まれていたと考えられる．

タリアト碑文　Tariat Inscription

片山章雄　(Akio KATAYAMA)

調査場所：モンゴル科学アカデミー歴史研究所（ウランバートル）の倉庫・裏庭．亀趺は歴史研究所の建物入口から，前側の駐車スペースをはさんで向かいの芝生上にある．

調査日時： 1996年8月12～13日，9月4日；1997年9月15～16日．

調査者：森安，林，片山，大澤，松田，松川，松井，オチル，ボルド，バットルガ．

調査方法・作業内容： 1996年は，各自が碑文断片及び採拓中の碑文断片を写真とビデオ撮影を行い，またメジャーで各断片の寸法などを計測する．この碑文の拓本採取が今回の調査の拓本の最初であったが，皆で協力して3断片の各4面を2部ずつ採拓，亀趺も文字部分を同様に採拓した． 1997 年は，片山・ボルドが拓本と作成テキストからの読み合わせ時に疑問と考えた箇所を中心に，再度碑文を確認した．

碑文の現況：碑石はやや白っぽい（花崗岩か？）．碑身はほぼ等大の3断片となっている．各面の各行は碑石の上部（第1断片）・中部（第2断片）・下部（第3断片）へと進む．下部断片の下方には亀趺に入るべきほぞがある．拓本は公表されていないが，かつての複数の写真からすると，表面は少しばかり破損が進行しているようである．亀趺についても写真があり，現在は研究所前という自由に見学できる位置に放置されているが，亀の後部にある銘文はよく読める．

碑文のスケッチ・写真・復元図：碑石本体の比較的鮮明な写真は一部分が Nowgorodowa 1980 に，やや鮮明度が落ちるがほぼ全部が Klyashtorny 1982 にある．後者は片山 1994 に複製が含まれる．比較的忠実な西面の模写スケッチがШинэхγγ 1975 にあり，上記 Klyashtorny の写真から起こした模写ともども片山 1994 に所収．亀趺部分の写真は Сэр-Оджав 1970, Zieme 1972, Шинэхγγ 1975, Nowgorodowa 1980 などにある．

遺蹟の景観：タリアト碑文が発見されたタリアト遺蹟（アルハンガイ県のタリアト=ソム）については，初年度すなわち 1996 年の行動記録の8月 27 日（火）～28 日（水）の記述を参照．またKlyashtorny 1982, pp. 336-337 に記述， p. 350 に関係写真がある．

遺蹟の図面：管見の限り見当たらない．

拓本所蔵機関：モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部，他（？）

考察：タリアト遺蹟については1996年度の行動記録（森安担当）を参照．碑文の読みに関しては「テキストと翻訳」の項を参照．なお，テキスト全部を掲げた研究者のうち， Шинэхγγ 以来，Klyashtorny らは西面から北・東・南面の順に読み， Tekin 1983 の提唱以後，片山や現在のボルドは東面から南・西・北面の順に読んでいる． Tekin の読み順を Klyashtorny 1985 は批判しているが，今回の報告書では東面を冒頭とする立場をとった．なお，碑文の東面および南面はシネウス碑文と関係する記述があり，内容も歴史的なので注もある程度付したが，西・北面は当時のウイグル可汗国の情勢を伝えるものながら参照記事に乏しく，今後一層の研究が期待される．本テキストの不十分な点については後考を待ちたい．

参考文献： Сэр-Оджав 1970; Zieme 1972; Шинэхγγ 1975; Nowgorodowa 1980; Шинэхγγ 1980; Klyashtornyj 1980; Айдаров 1981; Bazin 1982; Klyashtorny 1982; Tekin 1982; Tekin 1983; 片山 1984; 谷 1984; Sertkaya 1991; 川崎 1993; 片山 1994, etc.

テキスト・翻訳　Text and Translation

このテキストはビチェース=プロジェクトにより 1996 ・ 1997 年度に採取した2部の拓本を底本として作成した．モンゴル側担当者ボルドとの共同作業では碑石を再度確認し， Шинэхγγ 1975 の模写テキストおよび Klyashtorny 1982 の写真なども勘案・援用したが，さらに一部には日本側トルコ班各氏の指摘も含んでいる．

翻字と転写　Transliteration and Transcription

E1　//////////////////////////////////////#/////////////////////////////////. (L uQ š)/ Y W L G Q G N:/
/ / /[B W]m i N:Q G N:ü č Q G N W L R m s:k i y ü z Y i L:W L R m š
//////////////////////////////////////#/////////////////////////////////// yollïγ qaγan / # / / /
bumïn qaγan üč qaγan olurmïš eki yüz yïl olurmïš

E2　//////////////////////////////////////#/////////////////////////////////.:Q z a:B R m s:W č #[z
ük ü](l)k a T L G N t ük a:B R m s:Q D R:Q š R:b d i b r s l:Y T z W G z
//////////////////////////////////////#/////////////////////////////////aqïza barmïš učuz #
kölkä atlïγïn tökä barmïš qadïr qasar äbdi bärsil yatïz oγuz

E3　//////////////////////////////////////#/////////////////////////////////a č ü m:p a m:s k # z W N
Y i L W L R m s:ü t ük n l i ü g r s l i:k n R a:W R uQ N:ü g z d a
//////////////////////////////////////#/////////////////////////////////äčüm apam säkiz # on yïl

olurmiš ötükän eli ögräs eli ekin ara orqun ögüzdä

E4 ////////////////////////////////////#////////////////////////////////[y t]m s Y i L W L R m #[s]////Y i L B R m s:T m N ü z a k ü ük t ŋ r i:š R a:Y G z:y r:Y N a:

////////////////////////////////////#////////////////////////////////[yet]miš yïl olurmiš #////yïl barmiš atïmïn üzä kök täŋri asra yaγïz yer yana

E5 ////////////////////////////////////#////////////////////////////////nt R T nt m:s k #[z W T z]Y š m a:Y i L N:Y i L Q a t ü r ük:l n nt a:B W L G D m:nt a:R T T D(m)

////////////////////////////////////#////////////////////////////////-ntar atantïm säkiz # otuz yašïma yïlan yïlqa türük elin anta bulγadïm anta artatdïm

E6 ////////////////////////////////////#////////////////////////////////(G N):Y m š D i:B i ŋ a #[Y W]R i D m:W z m š t g n W D R G nt a:Y W R i Y W R:t d i:N i L G L t d[i]

////////////////////////////////////#////////////////////////////////[atlï?]γïn yamašdï bïŋa # yorïtdïm ozmiš tegin udarγanta yorïyur tedi anï alγïl tedi

E7 ////////////////////////////////////#////////////////////////////////[k](ü m)r T G D /(Y)R ü g z d a:[W#č]T W G L G(t)ü r ük B W D N Q a:nt a y t nč Y:t ü r t:y g r m i k a

////////////////////////////////////#////////////////////////////////kömür taγda yar ögüzdä üč # tuγlïγ türük bodunqa anta yetinč ay tört yegirmikä

E8（第２断片の途中から行が存在し後半１/３から判読可能）

//////////////////nt a:T W Q T R T m:Q N #///nt a:Y uQ B W lt i:t ü r ük:B W D N G nt a:č g r t m:nt a:Y N a

//////////////////anta toŋtartïm qan[ïn # altïm?] anta yoq boltï türük bodunïγ anta ičgärtim anta yana

E9（第２断片の後半１/４から行が存在し第３断片の途中から判読可能）

//////#/...[Wz]m s:t //(n):(Q N)B W LT i:uQ W ny Y i L ïQ a:Y W R i D m

//////#/////ozmiš tegin qan boltï qony yïlïqa yorïdïm

S1 //[n]t i////////////////////////////////#//b č n Y i L ïQ a Y[W # R i D m]////////////////////:s ü ŋ s d m nt a š nč D m Q N i N nt a

[ekin]ti////////////////////////////////#//bečin yïlïqa y[orïdïm?] #/

////////////////////////süŋüšdim anta sančdïm qanïn anta

S2 T W T D m////////////////////////#////////////////////////////////T Q i G W:Y i L[iQ # a]Y W R i D m:Y i L L D m:b s nč Y:ü č y g r m i k a:Q L š D i

tutdïm/////////////////////////#////////////////////////////////taqïγu yïlïqa # yorïdïm yïlladïm bešinč ay üč yegirmikä qalïšdï

S3 s ü ŋ s d[m]////////////////////////#/////////:i č g r p i g d r b ü l[k]////////b n:nt a k s r a #[i]T Y i L ïQ a:ü č Q R L uQ:Y B L Q š Q N p:t z a B R D i:Q W R Y a W N uQ a

süŋüšd[im?]////////////////////////#///////////ičgärip igdir bölük /////////anta kesrä # ït yïlïqa üč qarluq yavlaq saqïnïp täzä bardï qurïya on oqqa

S4 k i r t i:nt a////////////////////#//ü č[Q R L uQ]:L G z N Y i L Q a:T uQ z T[T](R)//////T uQ z B W Y R uQ[b]i[s]s ŋ ü t:Q R a B W D N:T W R Y N:Q ŋ m Q N Q a:ü t n t i:č ü p a T i

kirti anta/////////////////////#//üč qarluq laγzïn yïlqa toquz tatar//////toquz buyruq beš säŋüt qara bodun turuyïn qaŋïm qanqa ötünti äčü apa atï

S5 B R t d i.../////////////////////#nt a:Y B G W:T D i nt a k s r a k ü s g ü Y L ïQ a s i n l g d a k ü č Q R a B W D[N#T]m s s i n s z d a k ü č Q R a š W B r m s Q R a B W D N:T W R Y N:Q G N:

bar tedi//////////////////////////#anta yabγu atadï anta kesrä küsgü yïlïqa sin äligdä küč qara bodun # temiš sin sizdä küč qara suv ärmiš qara bodun turuyïn qaγan

S6 T D i:t ŋ r i d a B W L m š:l t m s:b l g a Q[# G]N:T D i:l b l g a:Q T W N:T D i:Q G N:T N p:Q T W N T N p ü t ük n:W R T W š[i # nt]a[š](ü ŋ)z B š[Q]N...B š k d n i n:ü r g i n:B W nt a:t i d m

atadï täŋridä bolmiš el etmiš bilgä qaγan # atadï el bilgä qatun atadï qaγan atanïp qatun atanïp ötükän ortusïnta # aš öŋüz baš qan [ïduq] baš kedinin örgin bunta etitdim

W1 t ŋ r i d a:B W L m š:l t m s b l g a:Q G N:l b l g a:Q T #[N Q]G N T G:Q T W N T G T N p:ü t ük n k d n W č i nt a:t z B š i nt a ü r g #[n]/////////////nt a:Y R T T D m:B R š Y i L Q a Y i L N Y i L Q a:k i Y i L

täŋridä bolmiš el etmiš bilgä qaγan el bilgä qatun # qaγan atïγ qatun atïγ atanïp ötükän kedin učïnta tez bašïnta örgin # [anta etitdim? čït?] anta yaratïtdïm bars yïlqa yïlan yïlqa eki yïl

W2 Y Y L D m:W L W Y i L ïQ a:ü t ük n:W R T W š i nt a:š ü ŋ z:B # š[Q]N(i)D uQ[B ṣ]k d n i nt a Y Y L D m:ü r g i n:B W

nt a Y R T D m:č i T B W nt a T[uQ # T]D m:B i ŋ Y i L i ïQ:t ü m n k ü n l k:b t g m n:b l g ü m n:B W nt a
yayladïm ulu yïlïqa ötükän ortusïnta aš öŋüz baš # qan ïduq baš kedinintä yayladïm örgin bunta yaratïtdïm čït bunta
toqïtdïm # bïŋ yïllïq tümän künlik bitigimin bälgümin bunta

W3 Y š i T š Q a:Y R T D m:T W L uQ W:T š Q a T uQ(i)T D m:ü z a:# [k]ü k t ŋ r i Y[R L]Q D uQ ü č[n š R a Y G]z y r:[i g t
ük]ü č n:l m n t ü r ü m n:t n t #[m]ü ŋ r a k ü n T W G š Q D Q i:B W D N:k s r a:Y T W G š Q D Q i:B W D N
yasï tašqa yaratïtdïm tolqu tašqa toqïtdïm üzä # kök täŋri yarlïqaduq üčün asra yaγïz yer igittük üčün elimin törümin etintim
öŋrä kün tuγsïqdaqï bodun kesrä ay tuγsïqdaqï bodun

W4 t ü r t B W L ŋ D Q i:B W D N:i / / ü č b r ü r:Y G m:b ü l # / Y uQ B / / / / / / / / / k n R a i L G m T R G[L]G m s k z s l ŋ a
W R uQ N:T W G L a:s b ï #[n]:t l d ü Q R γ a:B W R G W:W L y r m n:š W B m N:Q W N R k ü č r b n:
tört buluŋdaqï bodun i[š k]üč berür yaγïm böl[ük?]# yoq b[oltï?] / / / / / / / / / ekin ara ïlaγïm tarïγlaγïm säkiz säläŋä orqun
toγla säbin # tälädü qaraγa buγu ol yerimin suvïmïn qonar köčär bän

W5 Y Y L G m:ü t ük n Q W z i k d n W č i:t z B š i:ü ŋ d n i Q #[ny]Y:ük ü n y:b z / / / / / / L G m:ü t ük n:/ r i:W N G i T R / /
s ü y:Y G:B W D N Q / # / / N G i:b r i g r ü:W č i lt W N:y i s:k d n W č i k ü g m n:l i g r ü:W č i k ü l t
yaylaγïm ötükän quzï kedin učï tez bašï öŋdüni qanγuy # künüy bäz-? / / / / / / -laγïm ötükän [yi]ri onγï tar[qan?] süy
yaγ<i> bodunq-? # [qaγa?]nγï birigärü učï altun yiš kedin učï kögmän iligärü učï költ<i?>

W6 t ŋ r i d a:B W L m s:l t m s:b l g a:Q N m:ič r k i[B W]D N i:lt m s #[B]W Y R uQ:B š i i N nč W B G a T R[Q N]W L G B
W Y R uQ T uQ W z / / L m s b l g a:T Y s ŋ ü n:[T Y]# / b s y z:B š i k ü l g W ŋ i ü z i N nč W:b s y ü z:B š i:W L G ü z
i:N nč W
täŋridä bolmiš el etmiš bilgä qanïm ičräki bodunï altmïš # buyruq bašï ïnanču baγa tarqan uluγ buyruq toquz [bo?]lmïš
bilgä tay säŋün tay-? # beš yüz bašï külüg oŋï öz ïnanču beš yüz bašï uluγ öz ïnanču

W7 W R ŋ W:y ü z:B š i W L G W R ŋ W:t ü l s b g l r W G[L]i:B i ŋ B š[i]# / / / / / / / r n:T R D W š b g l r[W]G[l]i B i ŋ B š
i:T R D W š k ü l g r(n)#:i š B R a š:b s B i ŋ r:B š i:L p i š B R a s ŋ ü n Y G L Q R
uruŋu yüz bašï uluγ uruŋu tölis bäglär oγlï bïŋ bašï # / / / / / / / ärän tarduš bäglär oγlï bïŋ bašï tarduš külüg ärän # ïšbaras
beš bïŋ är bašï alp ïšbara säŋün yaγlaqar

W8（第２断片の後半１/４から行が存在）
/ / / / . uQ / / / / / / / # W .:T W Q z y ü z:r:B š i T W Y Q N:W L G:T R Q N:B uQ W G:B i ŋ a
/ / / / / / / / / / / / / / / # toquz yüz är bašï tuyqun uluγ tarqan buquγ bïŋa

W9（第３断片から行が存在）
/ / / / / B W D N i:B i ŋ a Q G s:T č uQ B W D N i:B i ŋ a
/ / / / / bodunï bïŋa qaγas atačuq bodunï bïŋa

N1 t ŋ r m:Q N m t k / / / l g:T / # / / / / / / / / / / / / / / / / / / L G č i g s i:Q nč W L p b l g a:č i g[s i]/ / / / / #
/ / / / / / Q N R . . W G z . . . i y ü z s ŋ ü t:b i r t ü m n:B W D N:Q z G nt i
täŋrim qanïm tik-/ / / elig t-/ / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

n:W z[l ü]ŋ r k n

yarluqadï bayïrqu tarduš bilgä tarqan # qutluγ yaγma tavγač suγdaq bašï biligä säŋün uzal öŋ irkin

Tortoise

B W N i Y R T G m a b ük a T W T m

bunï yaratïγma bökä tutam

Translation

E1 ////////////////// I heard that Yollïγ Qaγan, [****Qaγan,] Bumïn Qaγan, (these) three Qaγans had reigned. I heard that they reigned for two hundred years.

E2 ////////////////// I heard that he (or they) let **** raid and he (or they) poured into the lake Učuz (Uchuz) with the cavalry. Qadïr, Qašar, Äbdi (or Bädi), Bärsil, Yatïz and Oγuz (tribes)

E3 ////////////////// I heard that my ancestors had reigned for eighty years. The land of Ötükän and the land of Ögräs (Ögräš), between these two (lands), around the Orqun (Orkhon) river

E4 ////////// for seventy years [they] had reigned, then **** years passed. By my name the Blue Heaven above and the Brown Earth below ****ed again.

E5 ////////// I was given the title of ****ntar. At my age of twenty eight, in the Serpent Year (A.D. 741), then I disturbed the realm of the Türüks, then I destroyed (it).

E6 ////// he (or they) patched up with [the cavalry?].I made the bïŋa (an army consisting of a thousand soldiers or an advance guard) march on. "Ozmïš tegin is marching from Udaryan," he said, "You! capture him," he said.

E7 // at the Kömür mountain and by the Yar river, against the Türük people with three standards, on the 14th of the 7th month, then

E8 ////////////// there I overturned (Türük or Türük people), [and captured?] the Qan.There he died. There I subjugated the Türük people. Then again and

E9 /////// Ozmïš tegin became the (Türük) Qan. In the Sheep Year (A.D. 743) I marched out.

S1 The second [battle?] // In the Monkey Year (A.D. 744), [I marched out?] /////////// I fought and then defeated (them). There I

S2 captured their Qan. ////////////////////////////////////// In the Hen Year (A.D. 745), I marched out, I spent the year (there). On the 13th of the 5th month, they uprose.

S3 [I?] fought. ////////////////////////// After subjugating Bölük, the Igdir sub-tribe /////// Afterwards in the Dog Year (A.D. 746), the Üč-Qarluq ("Three-Qarluqs") indulged in hostile thoughts and ran away. In the west they entered the land of

S4 the On-Oq ("Ten-Arrows", i.e. Western Türüks). Then /////////////// the Üč-Qarluq, in the Pig Year(A.D. 747), Toquz-Tatar ("Nine-Tatars") ///// The nine buyruqs, the five generals and common people stood up and entreated my father, the Qan. "There exists the name of ancestors!,"

S5 they said /////////////// then he gave the title of yabγu. Afterwards in the Rat Year (A.D. 748), "The graves are in your hand. —The strong common people said. The graves are belong to you. There has been the powerful Qara-suv." The common people stood up and gave (me) the title of Qaγan

S6 and named (me) Täŋridä Bolmïš El Etmïš Bilgä Qaγan. They appointed (my wife named) El Bilgä Qatun. After the appointment as qaγan and qatun, I had my throne set up here at the center of the Ötükän, to the west of the river-head area(s) of Aš-Öŋüz and Qan-İduq.

W1 (I,) Täŋridä Bolmïš El Etmïš Bilgä Qaγan and (my wife) El Bilgä Qatun, being appointed as qaγan and qatun, [had my] throne [set up], then I had [my stockade?] built there at the western end of the Ötükän, in the river-head area of Tez. In the Tiger Year (A.D. 750) and in the Serpent Year (A.D. 753), during these two years,

W2 I spent the summers (there). In the Dragon Year (A.D. 752), I spent the summer (here) at the center of the Ötükän, to the west of the river-head area(s) of Aš-Öŋüz and Qan-İduq. Here I had my throne set up. Here I had my stockade driven (into the ground). Here I had my monumental record and sign which would last one thousand years and ten thousand days

W3 inscribed on the flat stone, engraved around the plump stone. Since the Blue Heaven above was granting and the Brown Earth below nourishing, I myself organized my state and my institutions. The peoples in the east where the sun is born, the peoples in the west where the moon is born,

W4 and the peoples in the four quarters are contributing (me) their works and services. My enemy Böl[ük?] has disappeared(?). //////// my grasslands and my fields between the two, the Eight-Säläŋäs, Orqun, Toγla, Säbin, Tälädü, Qaraγa, Buryu.

These lands and waters of mine are inhabited and nomadized on by me.

W5 My summer pastures are (located) to the north of Ötükän. Its Western end is the river-head area of the Tez, its eastern (end) is the Qanyuy and the Künüy .../ / / / / / My **** is (situated) Ötükän. Its northern (end) is the Onγï Tar[qan?] Süy, belonging to the people [and Qaγan?] of the enemy. Its southern end is Altun mountains, its western end is the Kögmän mountains, and its eastern end is Költ‹i?›.

W6 I, Täŋridä Bolmïš El Etmiš Bilgä Qan have 60 people at my court. The head of the buyruqs is Ïnanču Baγa Tarqan. The Grand buyruq is Toquz Bolmiš Bilgä Tay Säŋün. **** is Külüg Oŋï, a leader of five hundred (soldiers). The öz ïnanču is Uluγ Öz Ïnanču, a leader of five hundred (soldiers).

W7 The uruŋu is Uluγ Uruŋu, a leader of one hundred (soldiers). Sons of the Tölis bägs, leaders of the bïŋ, / / / / / / / / soldiers. Sons of the Tarduš bägs, leaders of the bïŋ, (and) the famous soldiers of the Tarduš. The ïšbaras is Alp Ïšbara Säŋün Yaγlaqar, a leader of the five thousand soldiers.

W8 / / / / / / / **** is Tuyqun Uluγ Tarqan Buquγ bïŋa, a leader of nine hundred soldiers.

W9 / / / / bïŋa of **** people; bïŋa of Qaγas Atačuq people.

N1 My Heaven, my Qan / / / state /-lïγ Čigši, Aqïnču Alp Bilgä Čigši / / / / / / / / / the Qan / / Oγuzs(,) He captured [six?] hundred generals and ten thousand men.

N2 My Heavenly Qan's notables are Toquz-T[atar] / / / / / / / / / buyruqs / / / / / / generals, people of bïŋ- / / / / / When inscribing this (stone) (together) with my princes, [Qaγas?-] Atačuq and Bägzäkär Čigši Bïla Baγa Tarqan, the head(s) of watching men, had three hundred watching men stand for my Qan.

N3 My Heaven, my Qan's son is / (his) ****-uq is the people of Az Sïpa Tay Säŋün. The Toŋras, *d(?), ***-ïq baš, the Kay, the Aba-baš, the Three-Qarluqs; these tribes belong to the Yabγu.

N4 My Heaven, my Qan's son is / / / / / / / / / / / / / / (his) qutluγ is Udurγan / / / / / / / / is the people of Čabïš Säŋün. The Nine-Bayïrqus, the Aq-baš, / / the Basmïls, the Nine-Tatars; these tribes belongs to the Čad.

N5 / / / / / / / / / / / / He who inscribed and built this (stone) is / / / / Qutluγ Tarqan Säŋün / / / / two official creditors of the Yaγma / / ****ed the reputations and the fame of the peoples. Qutluγ Bilgä Säŋün and Qutluγ Tarqan Säŋün, these two men are brothers-in-low(?).

N6 gave the orders. Bilgä Tarqan Qutluγ of ~~Bay Irqu~~ Bayïrqu, Tarduš and Biligä Säŋün Uzal Öŋ Irkin of Yaγma, the head of Tabγač (Tang, China, Chinese) and Soγdaq (Sogdiana, Sogdians).

Tortoise

He who inscribed this (stone) is Bökä Tutam.

和訳

E1 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

E9　（第２断片の後半１/４から行が存在し第３断片の途中から判読可能）/////////////オズミシュ=テギンが（突厥の）カンになった．羊の年（743年）に，私は進軍した．

S1　［２］回目の［戦い？］//猿の年（744年）に［私は進軍した？］/////////////私は戦った．そこで私は勝った．彼らのカンをそこで

S2　私は捕えた．//鶏の年（745年）に，私は出軍した．１年を過ごした．５月13日に，彼らは蜂起した．

S3　［私は？］戦った．//////////////////////////////征服して，イグディル族のボリュク////////その後犬の年（746年）に，三姓カルルクは敵意を抱いて逃げて行った．西の方，オン=オク族（の地域）に

S4　竄入した．そこで//////////////////////三姓カルルクは豚の年（747年）に，九姓タタール//////９人のブイルクと５人の将軍と平民は立ち上がって私の父，可汗に懇願した．「祖先の名声が

S5　ある」と彼（ら）は言った．//////////////////そこでヤブグ（葉護）に彼が任命した．その後鼠の年（748年）に，「墓は手中だ．力強き平民は言ったという．墓は汝にある．力強きカラ=スヴがあった」（と）平民は立ち上がって可汗の

S6　名を（私に）与えた．テングリデ=ボルミシュ=エル=エトミシュ=ビルゲ可汗と名付けた．（妻を）エル=ビルゲ=カトゥンと名付けた．可汗に名付けられ，カトゥンに名付けられ，オテュケンの中央で，アシュ=オンギュズの河源地帯とカン=イドゥクの河源地帯の西で，私はここに玉座を造らせた．

W1　テングリデ=ボルミシュ=エル=エトミシュ=ビルゲ可汗，エル=ビルゲ=カトゥン，可汗の名を，カトゥンの名を名付けられて，オテュケンの西の端，テズの河源地帯で，玉座を［そこで私は造らせた（？）．墻柵を（？）］そこで私は建てさせた．虎の年（750年）に，蛇の年（753年）に，両年，

W2　私は（そこで）夏営した．龍の年（752　年）に，オテュケンの中央で，アシュ=オンギュズの河源地帯とカン=イドゥクの河源地帯の西で，私は夏営した．玉座をここで私は建てせた．墻柵をここで私は打ち立てさせた．千年万日まで続く私の碑文と標識とを，ここで

W3　平らな石にて，私は作らせた．丸々とした石にて，私は彫らせた．上に蒼き天が恵んだために，下に褐色の地が育んだために，私の国を，私の法を，独力で組織した．東には日の昇るところの民，西には月が昇るところの民，

W4　四隅なる民が労力を捧げつつある．我が敵ボリ［ユク？］は亡くな［った？］////////// ２つの間にある私の草地，私の耕地，８セレンゲ，オルホン，トグラ，セビン，テレデュ，カラガ，ブルグ．それらの私の地と私の水とを，住地とし，遊牧している．私は．

W5　私の夏営地はオテュケンの北側．（その）西の端はテズの河源地帯，（その）東の端はカニュイ・キュニュイの？?//////私の＊＊はオテュケン．その北側はオンギ=タル［カン？］=スュイ，敵の部民，［可汗？］の所属である．（その）南の端はアルトゥン山（金山），（その）西の端はキョグメン，（その）東の端はキョル［ティ？］．

W6　我がテングリデ=ボルミシュ=エル=エトミシュ=ビルゲ=カンの宮廷臣民は 60　人である．ブイルクの長はイナンチュ=バガ=タルカン．大ブイルクはトクズ=［ボ？］ルミシュ=ビルゲ=タイ=センギュン．＊＊＊＊は五百人の長であるキュリュグ=オンギ．オズ=イナンチュは五百人の長であるウルグ=オズ=イナンチュ．

W7　ウルングは百人の長である大ウルング．テリスのベグ（貴人）たちの息子，千人隊長（または前衛部隊長）///////// 兵士たち．タルドゥシュのベグ（貴人）たちの息子，千人隊長（または前衛部隊長），タルドゥシュの高名な兵士たち．イシュバラスは五千人の兵士の長であるアルプ=イシュバラ=センギュン=ヤグラカル．

W8　（第２断片の後半１/４から行が存在）//// ＊＊＊＊は九百人の兵士の長であるトゥイクン=ウルグ=タルカン=ブクグ=ブンガ．

W9　（第３断片から行が存在）/// ＊＊＊＊の民のブンガ，カガス=アタチュクの民のブンガ．

N1　我が天，我がカン///国を？////////////////////////////////////＊＊ルグ=チグシ，アクンチュ=アルプ=ビルゲ=チグシ/////////カン//オグズ（，？）［六？］百人の将軍，１万人の民を彼は得た．

N2　天なる我がカンの名士は，トクズ=タ［タール］////////ブイルク/////将軍たち，ブンガ/////の民．我がテギンたちもて（ともに）これを書く時，我がカンのために，哨兵長である［カガス=？］アタチュク，ベグゼケル=チグシ=ビラ=バガ=タルカンは300の哨兵を立たせた．

N3　我が天，我がカンの息子は//の＊＊ル（？）クは，アズ=スィパ=タイ=センギュンの部民．トングラ，＊デ（？），＊＊イク=バシュ，カイ，アバ=バシュ，三姓カルルク．これらの部民はヤブグの部民である．

N4　我が天，我がカンの息子は///////////////の［クトゥルグ］はウドゥルガン////はチャビシュ=センギュン

の部民．9バイルク，アク=バシュ，///バスミル，トクズ=タタール．これらの部民はチャドの部民である．

N5 ////////////書いたのは，これを作ったのは////クトゥルグ=タルカン=［センギ］ュン///部民の名を，名望を，ヤグマの債権徴収官２人////クトゥルグ=ビルゲ=センギュンとクトゥルグ=タルカン=センギュン，その２人は義兄弟（？）である．

N6 （第２断片の後半1/2から行が存在）が命令した．バイルクでタルドゥシュのビルゲ=タルカン=クトゥルグ，ヤグマでタブガチ（中国，唐）・ソグドの長のビリゲ=センギュン=ウザル=オング=イルキン．

Tortoise

これを造ったのはボケ=トゥタム．

訳注

ここでは先行研究中の各説との違いをいちいち注記することは，あまりに煩瑣になるので，行なわない． Шинэхγγ 1975, Klyshtorny 1982, Tekin 1983 などで逐次進展した解釈が提出されていると考えられる箇所は．碑石・拓本との検討を経て注記せずに採用したことをお断りしておく．

E2, aqïza barmïš učuz kölkä atlïγïn tökä barmïš: この手前の部分は bodun あるいは bodunï とされてきたが，この部分自体が Шинэхγγ 1975, pp. 81, etc.; Klyashtorny 1982, p. 342; Tekin 1983, p. 46 とは異なった解釈に到達した．これまでの諸氏のテキストにおいて指摘されなかったことであるが，この箇所はテス碑文 N3 とほぼ同文で対応することは確実と考えられる．そうすると bodun あるいは bodunï とされてきた手前の部分も，現在の碑石や拓本からは確認できないが， bašin だった可能性が高い． Tekin 1988, pp. 113-114 の解釈を改善した今回の大澤担当のテス碑文の注を参照のこと． aqïza は aq-ï-z-aで，aq は ED, p. 77 参照．

E2, qadïr qasar äbdi bärsil: この部族名列挙と考えられる部分は，対応するテス碑文 N3 では順が [äb]di bärsil qadïr qasar と逆転している．４つの部族名と考えられるが， qadïr qasar と äbdi bärsil というように，２つ単位で何かのまとまりや密接な関係があるかもしれない．さらに äbdi を bädi と読み， qa-, qa-, bä-, bä- という，固有名詞の語頭音が一致するような列挙の可能性を考えるべきかもしれない．

E3, ötükän eli ögräs eli: この部分，特に ögräs （あるいは ögräš か）については，森安担当のシネウス碑文の対応箇所 N2 に付された注の新解釈および森安・吉田 1998, pp. 137-138 参照．

E4, [yet]miš yïl olurmïš: これまで判読されなかった yetmiš の m s の部分は，碑文と拓本の観察からかろうじて痕跡が確認され， y t は確認困難であるが， -miš を語尾にもつ数詞は altmïš ~ altmiš と yetmiš しかなく，テス碑文 N5 に uyγur qaγan toq olurmïš yetmiš yïl ärmiš とあることから yetmiš が推測可能となろう． olurmïš の箇所はこれまで W L R nt a すなわち oluranta (Шинэхγγ 1975, pp. 82-83), olurïnta (Klyashtorny 1982,p.342), olur‹mïš› anta (Tekin 1983, p. 46) などと読まれてきた．確かに碑石が現状よりも良好な状態だった時の写真 (Nowgorodowa 1980, p. 235; Klyashtorny 1982, p. 360) から R の次の１文字だけを判断すれば，それはntのようにも見える．しかし次の行E5で近い位置に２つ確認されるntの文字は，かなり小さな円の輪郭をもっているので，この箇所は m の右半分が残り左半分が欠損したものと推測することも十分に可能であろう．したがってここは素直に W L R m[s] と考えておく．

E5, -ntar: 不明の官職名．暫定的に Tekin 1983, p. 53 に従っておく．動詞 ata-, atan- の例はこの碑文の他の箇所に７例あるが， W1 の atïγ atanïp 以外は ata-, atan- の前に官職名がきている．

E6, [atlï?]γïn yamašdï bïŋa yorïtdïm: G の手前は Шинэхγγ 1975, pp. 63, 84 では T L としており，それによって Шинэхγγ も Klyashtorny 1982, p. 343; Tekin 1983, p. 46 も atlïγïn としているのであるが， T の手前が一切不明である以上，可能性は高くても atlïγïn と断定することはできない．したがって転写・訳に？を付した．動詞 yamaš- については Tekin 1983, p. 53 および ED, pp. 939, 934 参照． bïŋa については Berta 1995 に立ち入った検討があるが，その当否については後考に待ちたい． yorïtdïm の箇所は，これまで yorïdï すなわち Y W R i D i とされてきたが，碑石・拓本から Y W R i D m と判読できそうである．したがって yorïdïm となるが，これは yorï(t)dïm の (t) を省略した表記であろう．トニュクク第１碑文 N1 の sü yorïtdïm の例，および本碑文 W1 の Y R T T D m, W2 の Y R T D m がともに yaratïtdïm と転写されるべきことも参照．

E7, kömür taγda: この箇所の前後はシネウス碑文 N8 と同文であり，手前には Шинэхγγ 以来 i r t m:Q R a Q W m:š m s k g r d a: が読まれている．現在の碑石・拓本からは明瞭に確認できないが，そのように読むことは可能であろう．

E8, toŋtartïm qan[ïn altïm?]: 従来は toqïtartïm, toqïtïrtïm, toqtartïm などと読まれてきたが， Q とされた箇所は ŋ に破損が加わったとも解釈できる． ED, p. 518 の意味と OTWF, pp. 737-738 & n. 463 の指摘から toŋtartïm とするのが妥当と考える． qan の直後は破断部で， Klyashtorny 1982, p. 343 は５文字分不明とし， Tekin 1983, p. 46 は？を付さずに断定補充している．碑文の観察からは２～３文字，おそらく３文字と判断されるが， i N lt m だと４文字， i N L T m だと５文字になる．破断部の長さと文字の大きさから若干躊躇するので？を付しておいた．

S1, [ekin]ti: 文の冒頭の１語の部分しか見えないが，手前の E9 の文との関係から考えれば，シネウス碑文N9と同文で対応していた可能性が高いので ekinti が推測される．ただ Шинэхγγ 1975, pp. 63, 87のルーン文字書き起こしテキストで

は..k n t iとしており，シネウスN9ではk i n t iとなっている．したがってテキストは[i k n]t i か[k i n]t i のいずれかだったのであろう．

S2, qalïšdï: Шинэхγγ 1975, p. 88 では qalïšdï, Klyashtorny 1982, p.343 ではaqlašdï, Tekin 1983, pp. 47, 54 では qalïšdï とし，OTWF, p. 558 も qalïšdï とする．意味的にも Tekin; OTWF に従うべきと考えた．

S3, igdir bölük: この igdir がカーシュガリーに現れるオグズ族の1氏族名（と同音）であることはTekin 1983, p. 54 が指摘している．CTD, p. 102 併照．bölük も同書中の氏族名の列挙中に見えるので同様と考えられる．

S3, anta kesrä: この手前に b n が見え，Шинэхγγ 1975, p. 89 が anta と合わせて bänintä としているのは問題外としても，Klyashtorny 1982, p. 343; Tekin 1983, p. 47 はともに bän としている．しかし両者とも訳出せず，後者の glossary にもない．bän と断定するには無理があるということか．なお，anta kesrä＋....yïl の例はタリアト S5, シネウス N10, N12 にあるが，いずれも文頭部分である．また，シネウスE10の män の注も参照．

S4, beš sänüt: Шинэхγγ 1975, p. 90; Klyashtorny 1982, p. 343 では iŋ, Tekin 1983, p. 47 では [b]ï[ŋ] とされたが，OTWF, p. 78 の [b]e[š] がよいと考える．

S4, turuyïn: 動詞 tur- に，Tekin 1983, p. 54 のように gerundial suffix が付されたものと解釈しておく．また GOT, pp. 183-184 参照．OTWF, p. 78 は turayïn として同様に訳す．-ayïn/-äyin が付された自発命令と考えられる可能性もあるが，その場合はトニュクク碑文の4例，キョル=テギン碑文の2例，シネウス碑文の2例 (E5,E10) のように，Y i n ~ Y i N/y i n と i を表記するのであろう．GOT, p. 187 参照．この箇所は GOT, pp. 183-184 の指示箇所のように i の表示がない．

S5, sin äligdä küč qara bodun temiš sin sizdä küč qara suv ärmiš: sin は墓であろう．ED, p. 832 の sïn の項と Tekin 1983, pp. 54-55 を考慮して暫定的に解釈しておく．この部分の文章は手前の「鼠の年（748 年）に」と直後の「平民は立ち上がって・・・」に挟まれており，しかもこの部分は二分されて対になっているような調子なので，ほぼそのような構造を示した Шинэхγγ 1975, p. 91-92; Klyashtorny 1982, p. 345 を再考し，älig を「手」と解釈したを後者を改変して試訳を提出した．後者では B W D N と t m š の間に3～2文字あるというが，この破断部はほとんど B W D N t m š の文字が繋がる程度と考えられる．Klyashtorny 1982, p. 365 の写真も併照．なお，この部分に関しては，Sertkaya 1991 が対になった文の構造を，各文中における倒置表現を想定しながら議論している．しかし，上記の1つ目の küč だけを köč とし，qara bodun を挟んで köč it-「遊牧移動していく」で成句とする考え方は，現時点では採用を躊躇する．

W1, anta etitdim? čït?: この部分の推定は Tekin 1983, pp. 47, 56 による．欠損部分の文字数は，Klyashtorny 1982, p. 341 では約 14 文字としているが，碑文や拓本の観察からそれよりわずかに少ないと考えた．それにしても1～2文字の差があるかもしれない．その当否については区切り記号 (:) の有無も影響するし，etitdim の表記が Tekin の推定では S6 に依拠してか t t d m となっており，シネウス碑文 E8 では i t t d m となっていることも影響する．

W2, yaratïtdïm: E6 の注を参照．

W3, tolqu: Шинэхγγ 1975, p. 68; Klyashtorny 1980, p. 92 の tolqu という転写と解釈を批判して Tekin 1983, pp. 47, 56 では tulquu と翻字し，単語としては p. 66 のように tulqu, すなわち single-piece の意と解釈する．Klyashtorny の「重い」というような意味か，DTS, p. 573 の「しっかりした」「丸々肥えた」というような意味か，あるいは Tekin の解釈がよいのか，なお疑問を残しておきたい．ただこの石が，本碑では直前にあり，シネウス碑文にも同表現で出てくる「平らな石」，すなわち碑文そのものと同一なのか，それともその石とは別で対になった表現と考え「標識」をタムガと解釈すれば，タリアトの場合はタムガは亀趺にあるので，この問題の石は亀趺を指すのか，重要なところである．今のところは Шинэхγγ; Klyashtorny の転写と上記の可能性から「丸々とした」と訳しておいた．

W3, igittük: Tekin 1983, p. 56 参照．補足すれば，テキストが i g t ük となっているのは igit (< igid) +tük で tt が t(t) となったためであろう．GOT, pp. 47-48 参照．

W4, ïlaγïm tarïγlaγïm: Шинэхγγ 1975, p. 69; Klyashtorny 1982, p. 341 では ïlγïm, Tekin 1983, pp. 47, 57 では ïlγam としているが，次の tarïγlaγïm から考えて ïlaγïm と考えておく．ï と tarïγ, tarïγlaγ については ED, pp. 1, 537-538, 541-542; 森安 1991, pp. 51-52 を参照．

W5, yaylaγïm: 先の tarïγlaγ は ED, p. 541 によれば *tarïγla- の Dev.N. とされている．したがって yaylaγ も同様で，少し後の今回のテキストで L G m とある部分も，-laγïm として整合性を考えたい．

W5, -laγïm: 前注参照．Шинэхγγ 1975, p. 70 では i č L G m, すなわち ïč alγïm とする．Klyashtorny 1982, p. 341 は čalγïm, Tekin 1983, pp. 47, 63 は ič ïlγam とする．なお，Tekin の ič ïlγam は，i č L G m からは通常では不可能と考えられる．今回のテキストでは手前が確かに i č であるのか，よく確認できなかったが，もし影響が大きい Шинэхγγ 1975, p. 70 のルーン文字テキストの i č の，特に č を疑って考えれば，その部分を含め [Q]i š L（キョル=テギン碑文 N8）か ïQ i š L（ビルゲ可汗碑文 E31）を，単語全体では qïšlaγïm「私の冬営地」を想定することが可能か否か，意味的には検討に値いしよう．

W6, tay-?: Шинэхγγ 1975, p. 71 のルーン文字テキストでは W ŋ i, すなわち oŋï とし，Tekin 1983, p. 47 も同様だが，Klyashtorny 1982, p. 341 では tutuq とし次の語を baš と読む．現在の碑文の観察と拓本からは T Y / のように見えるが，有効な解釈があるわけではない．ただしこの行の文章構造は訳文のようになっていると考えられるので，この部分には官職名・官称号のような単語が入るのであろう．

W6, ïnanču: i と N の間に区切り記号 (:) があるように見えるが，この行の前の 2 箇所からそれを無視して ïnanču として問題ないと考える．

N2, tegitimin: tegit は tegin の複数， -im は 1 人称所有語尾で問題ないが， -in は Tekin 1983 では "together with" (p. 51) とし， instrumental に解釈しているようである (p. 59)．これに関しては OTWF, p. 78, n. 102 も参照． instrumental を「で」，「もて」のように訳すだけでなく，「（と）ともに」のような意味合いを込めた方が相応しい場合の例として，トニュクク第 2 碑文 E3 の qaγanïmin sü eltdimiz (GOT, pp. 137, 253)〔あるいは後半部分を sülätdimiz / sü elitdimiz とする．OTWF, pp. 445, 786 参照〕，すなわち「私の可汗とともに，軍隊を私たちは出した」がある．身分・地位が上位である者を示す語に instrumental を付す場合は「（と）ともに」とした方がよいと考えられる．

N2, bägzäkär: Шинэхγγ 1975, p. 75 では bägzäk är, Klyashtorny 1982, p. 342 では begzik er, Tekin 1983, p. 47 では bägzäkär とするが， OTWF, p. 392 では bäg と「z k r の čigši」と分けて解釈している．

N2, turdï: Tekin 1983, p. 59 は turutdï とするが， OTWF, pp. 392-393, nn. 456, 754 から， tur- の causative は turgur- と解し，この箇所は turdï との指摘を採用した．

N3, bodunï: この箇所および N4 の途中の bodunï を， Tekin 1983, pp. 51, 52 では手前の säŋün で一度切れるものとし，「その部民は」として次につなげているが，双方の文末や他の bodunï の例からして「・・・センギュンの部民．」と考え，次の列挙はその内容か別の並列か，いずれとも解釈できる不明確さを残した方が直訳に近いと考えた．

N3, baš: この 1 文字で表記されたルーン文字の音価，およびその語としての転写については，今回のテキストで十分に納得できる解釈を提出できていない． Шинэхγγ 1975, p. 76; Klyashtorny 1982, p. 342; Tekin 1983, p. 48 その他をそのまま踏襲しただけである．

N4, basmil: Шинэхγγ 1975, p. 77 のルーン文字テキストは b š m š とするが， Tekin 1983, p. 48 のように b š m l であろうことは碑石・拓本からほぼ確実であり，最後の l が L でないこともシネウス碑文 W2 に例がある．

N4, čad: オルホンの諸碑文やシネウス碑文に見える šad が，このタリアト碑文とテス碑文では čad となっている．

N5, alumčisi: 後半の母音が後舌になっている問題があるが，さしあたり Tekin 1983, p. 60 および ED, p. 146 を参照．

シネウス遺蹟・碑文　Site and Inscription of Šine-Usu

森安孝夫　(Takao MORIYASU)

調査場所：サイハン=ソムのモゴイン=シネウス．実際にはサイハン=ソムとハイルハン=ソムの境界付近にある．我々はハイルハン=ソムの宿舎より，ジープで 40～50 分かけて現地に到着．北緯 48 度 32 分，東経 102 度 12 分． Aalto 1966, p. 15; MSSP, p. 59 に概略地図あり．

調査日時： 1996 年 8 月 30 日～ 9 月 1 日；1997 年 8 月 24～25 日

調査者：森安，松田，林，吉田，片山，大澤，松川，松井，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：碑文の上にテントをかぶせて採拓． 1996 年に拓本を 2 セット， 1997 年にも 1 セット作成．各年度とも大阪大学に拓本 1 セットずつを将来．あとの 1 セットはウランバートルの歴史研究所に保管．全面の写真は林が撮影，ビデオは森安が撮影．部分的には各自が撮影．採拓にも撮影にも，重い碑身を大勢で転がした． 1997 年度は森安とバットルガが採拓中の墨入れ前の状態で，テキストのチェック作業．遺蹟全体については巻尺による簡単な計測と撮影のみ．碑身と亀趺については丁寧に計測．

遺蹟の現況：各辺が約 50 m の正方形の低い土塁の中に円形の積石塚がある．土塁の内側に浅い周溝がある．南側に門があったらしく，土塁も周溝も切れている．土塁と塚は元はもっと高かったはずである．塚は地表から 1～1.5 m の高さまでゴロ石が積み上げられている．その中央には大きな盗掘穴があり，その窪みの深さは 1.9 m．積石塚はシヴェート=オラーンのそれより小さいが，一つ一つの石は逆にこちらの方が大きく，一抱えほどの大きさの石が目立つ．塚は四角い土塁の中央にあったのではなく，南側の門の方に偏っている．積石塚と土塁との間の東北寄りの空間に，石碑と亀趺が横たわっている．

遺蹟の景観：この遺蹟は，東西 1.5～2 km, 南北 4～5 km と思われる小さい盆地状草原の，中央部の南寄りのところにある．この盆地状草原全体は緩やかな斜面をなしており，シネウス湖の方（低い方）以外の三方はきわめて低い丘に囲まれている．これらの丘は草のみで覆われ，樹木はない．もう一方の，湖の向こうの遠くてやや高い山には森林あり．そこには 1996 年 8 月 31 日に初雪が降った．あちこちにゲルが 2 ～ 3 家族分ずつ点在している．ハイルハンとシネウスとの間には似たような規模の小盆地状草原がいくつもあるが，シネウスのはとりわけ形がよい．周囲の丘には古い遺蹟らしいものは何もない．

遺蹟の図面： MSSP, p. 59; Войтов 1996, p. 38. MSSP, p. 59 にある図面を借用し，それに我々の計測結果を記入した (**Plate 11a**).

碑文の現況：碑石はやや赤っぽい花崗岩のようである．碑身は従来の報告通り 2 つに折れている．上部の三分の一を小断片，下部の三分の二を大断片と呼ぶことにする．かつて碑文を支えていた基台は，頭は欠けているが，亀甲の紋様と 4 本の足は残っているれっきとした亀趺である．ただし亀趺の出来栄えは，同じウイグル第 2 代可汗の碑文であるタリアト碑文の亀趺と同程度で，後世のモンゴル時代のそれにはるかに見劣りするばかりか，先行する第二突厥可汗国時代のキョル=テギン碑文のものにも劣る．あえていえば，突厥第一可汗国時代のブグト碑文の亀趺程度にプリミティブである．碑身のサイズについてはスケッチに細かく記入した．文字の彫りは浅くはないが，それほど深いわけでもない．ラムシュテットが調査した時点と比較して，碑文の風化がわずかながら進んだようである．

碑文のスケッチ・復元図・写真：片山がラムシュテットの写真を基に，スケッチを作成．そこに我々の計測値を記入した (**Plate 11d**). かつてサンクト=ペテルブルグに，コトヴィチ作成のスケッチ（テキストの模写？）があったという (cf. Tryjarski 1981, pp. 348-349).

拓本所蔵機関：フィンランド，フィノ=ウゴール協会 (SUS 2.20, ラムシュテット＆パルシ採取分，cf. Aalto 1971, p. 106; Halén 1978, p. 99); ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト=ペテルブルグ支所（ラムシュテット採取分，cf. Kljaštornyj 1988, p. 75）；モンゴル科学アカデミー言語文学研究所 (cf. Болд 1990, p. 64); モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部．

考察：本碑文はラムシュテットによって初めて紹介され，写真とともにテキストとドイツ語訳が発表されたものであるが，その段階で既に相当の研究水準に達していた．その後，オルクン，王静如，マロフ，アイダロフらも現代トルコ語・中国語・ロシア語の全訳を発表したが，テキスト部分についてはオリジナルな研究とはいえないようである．その理由の一端は，ラムシュテットが拓本を掲載しなかったことにあろう．クローソンもその古代テュルク語辞書 (ED) の中でこの碑文からの引用を豊富に行なっているが，やはり拓本がなかったために苦労したようである．その意味で，今回我々が採取した拓本と，それに依拠する初めての和訳・英訳は，これからの学界を大いに裨益するはずである．ただし，今世紀初めも今も，碑文がよく残っているのは小断片の北面と大断片の東面，比較的よく残っているのは小断片の東面・南面と大断片の南面であり，全体としては約半分が読み取れるに過ぎない．そのためしばしば文脈を追うことさえ困難である．にもかかわらず，その情報量は決して小さくはない．とくに同じ東ウイグル可汗国第 2 代の葛勒可汗（磨延啜）の紀功碑であるタリアト碑文並びにテス碑文と相互に補完し合うことによって，ラムシュテットの時よりも「読み」を進めることができる．新しい「読み」や解釈については，訳注を参照せよ．

参考文献：Ramstedt 1913; Рамстедт 1914; ETY I, pp. 161-186; 王静如 1938; Ögel 1951; PDPMK, pp.30-44; Убрятова / Базылхан 1963; Айдаров 1971, pp. 339-352; ED; Bazin 1982; Болд 1990, pp. 61-68（宇野伸浩・岡洋樹による和訳あり：片山 1994, pp. 28-35）; SCMT, pp. 221-227; 川崎 1993; 片山 1994; Berta 1994; Berta 1995.

テキスト・翻訳　Text and Translation of Šine-Usu Inscription

このテキストは Ramstedt 1913 の写真とテキスト，及び 1996 年・ 1997 年度ビチェース=プロジェクトにより採拓した３部の日本式拓本（２部大阪大学文学部所蔵，１部モンゴル科学アカデミー歴史研究所所蔵）を底本にして，新たに作成した翻字と転写である．さらにここには，現地において実際に碑文を調査し，採拓中の墨入れ前に，森安とバットルガが判読した結果も反映されている．

翻字と転写　Transliteration and Transcription

N1（上部がやや狭い碑石の形状により，最上部のテキストなし）

t ŋ r i[d a B W](L m)s l t m s b l g a Q G N:(b) # / / /

N11（冒頭に２文字分のスペースあり）

ü č Q R L uQ:Y B L Q š Q N p:t z a:B R D i:Q W R Y a:W N uQ a:k i r t i:L G # (z)i N:Y i L Q a:T[W Q z T T R]/ / / /

š:b l t r i n t(a):(nt)[a](Y)Y L D m:ü r g n:nt a:Y R T T D m:č i T nt a:T uQ i T D m:B i ŋ Y i L L Q:t ü m n:k ü n l k:b i t g m n:b l g ü m n nt a:Y š i T š Q a:

bešinč ayqa tägi / / / / / / / / / / / / / / / / -qa / / / / / baš / / # / / aš öŋüz bašï anta ïduq baš kedintä yavaš toquš bältirintä anta yayladïm örgin anta yaratïtdïm čït anta toqïtdïm bïŋ yïllïq tümän künlük bitigimin bälgümin anta yasï tašqa

E10 Y R T T D m T W . . . / # / / / / / / / / / / / / / N y m a:Y R m(T)Q Y G i(D)/ /(k l)m s:ü r ŋ[b]g g Q R a[Q]W L uQ G:N i W L R m s:Q i R Q z:T p a:r i D m s:s i z T š ïQ ŋ:č i k g T š G R ŋ:t i m s:m n T š ïQ Y i N:t i m s:k ü r B W D Q L i D a:

yaratïtdïm / # / / / / / / / ymä yaramat? / / / / / kälmiš ürüŋ bägig qara qulluqïγ anï olurmïš qïrqïz tapa är ïdmïš siz tašïqïŋ čikig tašïγïrï ŋ temiš män tašïqayïn temiš kör bod qal ïda

E11 Q B š L m:t i m s:ü t / t i m s . . . . . # / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

S8 b i r y g r m[i nč Y]/ / / / / / / / / / / / / / / / . D(m). . . / W . . B W D N # [ŋ a k]i r t m:i r l ü n t a:T L Q(m)nt a:y t d m š N W Q i:T B G č D Q i:W G z:t ü r ük:T[š Q]m s:nt a:Q T L m(š):nt a:b g l[r]/ / / / / / / / / / / / / / / /

bay balïq yapïtï bertim

W6 . i / y l W / . . / / / / . / / / / i / / / / / / / / / / / / / / / m / / / / / / / / / / / / # / / / / / / / / / / / / / / / / / / T W(G i n)/ / / / / / / / / / :Q B š(p):k l t i . . n / / / / / / / / / / / / / / / / b i r W T(z)Q a / / / / / / / / / / / / / / / / / / / . . / / / / . . / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

739), one ***ed peacefully / / / / / / / / / / / / / / / / / to the country of the Türüks. There / / / / / / / / / / / / / / / / /

and beat (them) at Üč-Birkü in the river-head area of Käyrä. Half the people

E7 surrendered (to me) and half the people entered [into] *****. I turned back from there and dismounted (to settle down). I spent the winter on the north side of the Ötükän (mountains). I got rid of the enemy and became free. I gave my two sons the title of *yabγu* and *šad*. I sent them to the people of the Tarduš-section and of the Tölis-section (as their leaders). So much for that, now in the Tiger Year (A.D. 750), I marched towards the Čiks. On the 14th day of the 2nd month, I beat (them) at the (riverside of) Käm.

E8 [On the ***th day] of the same month, / / / / / / / / / / / I had (my) throne set up there at the river-head area of the Tez and to the west of Qasar. I had a stockade driven into the ground. In summer, I settled there for the summer. I fixed the frontier (of my realm) there. I had my sign and memorial record inscribed there. So much for that, in the autumn of that year, I marched eastwards. I compelled the Tatars to inquiry.

E9 Until the 5th month of the Hare Year (A.D. 751), /-Baš, / / / Ïduq-Baš at the river-head area of Aš Öŋüz, in the west, at the confluence of the Yavaš and Toquš (rivers), there I spent the summer. I had (my) throne set up there. I had a stockade driven into the ground. I had my monumental record and sign inscribed on a flat stone there.

E10 / and I heard that they came / / / / / / / / I heard that he settled white (noble) Bägs and black (common) slaves down. I heard that he sent a man (as messenger) to the Qïrqïz and said, "You, set out and bring out the Čiks! Then I will set out myself." I heard that he said, "Look! Keep your body (or your clan?)!

E11 Let's assemble in the forest." / I heard that he said / on the 9th day, I marched with my army. I sent to the Čiks a regiment of a thousand men with **** Totoq as (their) commander. I sent a few people (as messengers) to the land of his comrade (*eši*). I said, "Look! (or, Obey me!)" I heard that the Qïrqïz Qan / / / / / / / / / / / / / / / / / / / on the north side of the Kögmän (mountains).

E12 I heard that he sent his reconnoitring soldiers to the land of the comrade. I heard that my men made a surprise attack on his reconnoitring soldiers there and captured a soldier who informs: "***** men came to his (Qïrqïz's) Qan.

S1 (But) the Qarluqs did not come to the comrade (or, they did not come to the comrade of the Qarluqs)." (Thus) he said. The men / / / / / the Qarluqs / I crossed the Ärtiš river at the pool(?, or pond?) of the river-head area of Arqar by a raft of reeds whose lower side (was supported) by the men. On the 18th day of the 11th month, I met *****. There I beat the (troop of) Three-Qarluqs (situated) around the river Bolču.

S2 I turned back from there and dismounted (to settle down). My regiment of a thousand men came driving the Čik people. / / / / / / / / / / I made the summer camp within(?) my stockade of(?, or built at?) the river-head area of Tez. I fixed the frontier (of my dominions) there. I nominated *totoq*s for the Čik people and there presented (them with the titles of) *išbara*s and *tarqan*s. / the men came.

S3 They saw from the mountain *** near the lake Qazluq. They came saying, "The enemy(?) is ***ing." On the 15th day, / / / / / / / I (and my army?) assembled at the lake Tayγan. I sent a secretary (or a tent-maker as entourage) from there. / / / / / / / / / / Passing over Qara-Yotalqan, they brought (them). [I] marched out to meet (them). / / / / / / / / / / / / / / / / / / /

/////////////////////////

S9 my army /// three /////////////////////////////////////// 500 lightly-armoured(?) infantries, separately one or two at a time, came (to me). The heaven-god and the earth-god deigned to declare that the people were my male and female slaves. There I defeated (them). //

S10 There the people submitted (to me). ////////////////////////////// They ran away and entered into the (land of) the Qarluqs. Having turned back from there and dismounted, I had the throne of the realm set up at the confluence of the Orqun and Balïqlïγ (rivers). //

S11 // On the 20th day of the 11th month, at Suqaq-Yulï in the east of Qara-Buluq, the *totoq* of Čigil //

S12 ////////////////////////// making [my army?] cross over Toγuryu ////////////////////// I defeated (them). The Qarluqs and the Basmïls ////////// being alive //

W1 they came. //// the Qarluqs //

Extra b

/////////////////////////////////////// the beer (acc.)/ ////////////////// I ***ed. Thus /////////// so many inscriptions (acc.) /////////////

Extra c

/// I was the [army] commander. /////////// I *****ed one thousand horses and ten thousand sheep ///// I defeated (them). // I dismounted (to settle down). ///////////

Extra d

////// I *****ed and brought.

和訳

N1 テングリデ=ボルミシュ（天より生まれた）エル=エトミシュ（国を建てた）ビルゲ（賢い）可汗//////////// // テリス (?) // //

N11 三姓カルルクは敵意を抱いて（私の支配下から）逃げて行った．西の方，オン=オク族（十箭すなわちもとの西突厥）（の地域）に竄入した．豚歳（747 年）に，ト［クズ=タタール族］////////////

向けて千人隊を派遣した．彼の同盟者の土地に向けて私は少数の人を（使者として）派遣した．「見よ！（または，従え！）」と私は言った．キルギスのカンはキョグメン（曲漫山）の北側で

E12 ////////////////////////////// したという．彼は自分の偵察隊を同盟者の土地へ送ったという．その偵察隊を私の部下がそこで急襲し，情報提供者を捕まえたという．「彼ら（キルギス）のカンに向けて

S1 ＊＊＊＊人が来た．カルルク族は彼の同盟者のもとへは来なかった（または，彼らはカルルク族の同盟者のもとへは来なかった）．」と彼（情報提供者）は言った．男たち////// カルルク族// エルティシュ河を，アルカルの河源地帯の湖沼 (?)，そこにて男たちが葦の下側で（支える）筏に乗せられて，私は渡河した．11 月 18 日に，私は＊＊＊に遭遇した．［ボ］ルチュ河にいた三姓カルルク族を私は

S2 そこにて打ち負かした．そこから私は引き返して，下馬した（居を落ち着けた）．チクの民を私の千人隊が駆り立てて来た．////////////////////////// テズの河源地帯の (?) 私の墻柵を私は夏営地とした．私はそこに国境を設定した．私はチクの民に都督を任命した．私はイシュバラやタルカン（の称号）をそこで賜与した．// 人が来た．カズルク湖付近の

S3 ＊＊＊山から彼らは見た．「敵(?)が＊＊＊している．」と言いつつ彼らは来た．15日に，//////////// ［タイ］ガン湖に私は集合した．秘書（あるいは帳幕設営人）をそこから私は派遣した．////////////////////// カラ=ヨタルカンを越えて連れてきた．［私は］迎えに出た．//

W1 彼らは来た．////// カルルク族 ////////////

// 麦酒を ////////////////////////////////// 私は＊＊＊した．こうして碑文を ///////////////

Extra-c

///// 私は［軍隊の］長であった．//////////////////// 千（頭の）馬と（万匹の）羊を私は ////////////// 私は勝った．// 私は下馬した．///////////////////

Extra-d

//////////// 私は＊＊＊した．私はもたらした．

訳注

ここで先行の全訳（上記「考察」を参照）との違いをいちいち注記することは，あまりに煩瑣になるので，行なわない．また本碑文の内容を漢籍史料と比較検討した歴史学的研究として，王静如 1938, 羽田亨「唐代回鶻史の研究」（羽田 1957, pp. 157-324），川崎 1993, 片山章雄「シネ=ウス碑文における「748 年」」（片山 1994, pp. 10-14），石見清裕・北條祐英「ウイグル初期（744-750 年）の碑文史料と漢文史料」（片山 1994, pp. 15-21）などがあるが，これらに取り上げられた点をいちいち指摘することも，ごく一部の例外を除き省略する．

N1, täŋridä bolmïš el etmiš bilgä qaγan: täŋridä bolmïš なる成句については，護 1967 に対する村山七郎の書評（『東洋学報』50-4, 1968, pp. 139-140）中に異論があるにもかかわらず，護を含む先学の考えに従って「天より生まれた」と訳したい．確かにbol-の原義は村山の主張するように状態の変化を示す「成る」であって，「生まれる」ではない．実際，古トルコ語で「生まれる」を意味する語としては tuγ- がある．しかし，bol- の反対表現である yoq bol- 「なくなる，存在しなくなる，滅亡する」は，目の前からいなくなる状態をいうのであって，その反対は目の前に現われることと考えてよかろう．天からやって来て目の前に現われ，存在するようになる状態を指して「生まれる」と翻訳してもなんら不都合ではあるまい．cf. ED, p. 331; Klyashtorny 1982, p. 343; SCMT, p. 222. ところでこの人物は，東ウイグル可汗国第 2 代登里囉没蜜施頡翳德蜜施毗伽可汗，すなわち葛勒可汗（磨延啜）を指す．その在位は 748～759 年．磨延啜が正式に可汗として即位するのは，タリアト碑文 S5-S6 より判明した通り 748 年であるが，漢文史料とシネウス碑文の双方から確認されるように初代可汗は 747 年に亡くなっている (cf. 羽田 1957, p. 182) から，実権はその時から握っていたはずで，漢文史料もその事を反映している (cf. 片山 1994, pp. 18-19). なお，この人物がシネウス碑文の主人公であるから，この冒頭部に碑文のタイトルがあったことは疑いない．

N2, ögräš eli ekin ara: ögräš はラムシュテット以来 täg(i)räs(i) と読まれてきたもので，クローソンは tägrä-si 「その周辺」かと考えた (ED, p. 485b). これと平行する表現を持つタリアト碑文が学界に初めて紹介された時も，その紹介者のシネフーは E3 の対応箇所を同様に読んだ (Шинэхγγ 1975, p. 82). Tekin 1983 (Tariat), p. 46 でもやはり tägräs としている．さらに 1974～1975 年にシネウス碑文を実際に調査したクリャシュトルヌイもこの語を tägräsi と読み，ラムシュテットが不明とした部分を含め全体を ötükän eli tägräsi eli ekinti olurmïš とし，タリアト碑文 E3 の対応箇所を ötükän eli tägräsi eli ekinti (and not ekin ara) とすべきことを主張した (Klyashtorny 1985 (Tes), pp. 148-149). ただし Klyashtorny 1982 (Terkhin), p. 342 では ötükän eli tägiräs eli ekin ara としていた．いずれにせよ我々がシネウス・タリアト両碑文を精査したところでは，tägräsi ではなく ögräš であり，ekinti ではなく ekin ara であった．確かにシネウス碑文では表面の風化が進んでいて読みにくいが，タリアト碑文の対応箇所は明瞭に読みとれ，ögräš と ekin ara であることに一点の疑いもない．なお，el は i と 1 の 2 文字でも 1 の 1 文字のみでも表記されるので，シネウス碑文では ögräši eli とも読めるが，タリアト碑文の書き方と比較すればやはり ögräš eli と読む方が妥当であろう．

N2, ermiš barmïš: cf. ED, p. 194a.

N3, su- //// -nta qalmïšï bodun on uyγur toquz oγuz üzä yüz yïl # [olurup?]: ラムシュテットがここを「［ある河の流域］に留まった民衆が十姓ウイグルと九姓オグズの上に百年間支配して」と訳す (pp. 12-13) のに対し，ハミルトンはバザンの意見も容れて，「［セレンガ？］河の流域に留まった者（を含む）人々たるオン=ウイグルがトクズ=オグズの上に百年間支配して」と訳した (Hamilton 1962, pp. 39, 59). しかし私は qalmïšï の -ï に着目し，ここまでが文の主語と考え (cf. GOT, p. 179),「［ある場所］に留まった（あるいは生き残った）者が民衆であるオン=ウイグルとトクズ=オグズの上に百年間［支配して？］」と解釈することにする．ある場所に留まった（あるいは生き残った）者とはおそらく葛勒可汗（磨延啜）の直接の祖先になるウイグルのヤグラカル氏族，すなわち十姓ウイグルの中の支配氏族，ないしはヤグラカル氏出身の貴人たちを指すのではなかろうか． olurup は現在の残画がその読みと矛盾しないことを確認することさえ不可能である．なお，トクズ=オグズ（九姓オグズ，九姓鉄勒）とウイグルの関係については片山 1981 を参照．

N4, altï otuz yašïma:「私の 26 歳の時に」を西暦「739 年に」当てる根拠は，同じく葛勒可汗（磨延啜）の記念碑であるタリアト碑文 E5 に「私の 28 歳の時に，蛇歳に」とあり，その蛇歳が西暦 741 年（辛巳）に比定されるからである．

N4, türük qaγan čïq: ラムシュテットが本文 (p. 13) で t ö r . . . B č Q と翻字し，注 (p. 44) で t ü r k Q i B č Q (Türk

Qïbčaq) と読む可能性を示唆したところを，私はこのように復元する．実はこの部分にキプチャク (Qïbčaq ~ Qïpčaq) という民族集団名が読みとれるか否かは，トルコ学のみならずユーラシア史全体の大問題である．もしその読みが正しければこの名前が史上に現れる最初の史料になるからである．クリャシュトルヌィによれば，ラムシュテット自身はその翌年の論文では信念をもって Qïbčaq と読んだが，慎重なバルトリド・ペリオ・ミノルスキーらはキプチャク族に関する論文やコメントの中でいずれもこれを無視したという (Kljaštornyj 1988a, p. 74)．その一方で，トルコ文献学者のマロフらは，この読みを踏襲してきた．クリャシュトルヌィは，サンクト=ペテルブルグに所蔵されるラムシュテット拓本では č Q の 2 文字しか判読できなかったが，自身が 1974～75 年にモンゴルの学者シネフーと共に行なった現地調査によって，2 人は前半の türk に全く疑問の余地がないこと，さらに後半も [qï]bčaq と読めることを確信したといい (Kljaštornyj 1988a, p. 75)，一文をものしている．しかしながら私はこの読みにも，それを補強するために展開した同氏の議論にも従うことはできない．同氏らが [qï]bčaq 即ち翻字に直せば [Q i] B č Q と読む所を，我々は (Q)[G](N:)č Q と読む．即ち語頭の Q では一致するが，3 文字目の B と N は異なっている．しかしルーン文字では後舌の B と N が共に右に膨らむ弓形のストロークを持っているのであり，文字が欠けている場合には混同されやすいのである．私は，後に黒海沿岸にまで進出するペチェネーグ族さえまだバルハシ湖の東方にいた (cf. 森安 1977, pp. 30, 32) この時代に，キプチャク族がそれよりさらに東にいたなどと信ずることは到底できない．バルトリド・ペリオ・ミノルスキーらも 8 世紀中葉のウイグルのシネウス碑文の冒頭部にいきなりキプチャク族が現われるのは不自然と考えたが故に，ラムシュテットの提案を無視したのであろう．私は，問題の箇所を含む一文を türük qaγan čïq älig yïl olurmïš と復元し，「突厥の可汗（たち）が丸々 50 年間（ウイグルに先行してモンゴリアを）支配していたという」と解釈する．いうまでもなくそれは突厥第一可汗国がオルホン河畔に本拠を置いて，モンゴリアを約 50 年間支配していたことを指すに違いない．前行の「オルホン河」は，やや離れてはいるが，おそらくこちらの文脈にかかるのであろう．

N5, yana ////: 従来の tüšdi は読み取れない．yana の後には 3 文字分のスペースしかなく，その後の i とあわせた 4 文字で tüšdi と復元するのは不可能である．

N5, bilgä: 冒頭の b は墨いれが下手で明瞭でないが，拓本の凹凸ではっきり見える．この Köl Bilgä Qaγan は東ウイグル可汗国初代闕毗伽可汗すなわち骨力裴羅を指す．在位 744～747 年．

N6, bïŋa: デルファーはこれを，従来の通説のような「千人隊」の意にとらず，「前衛部隊」の意味にとるべきであると主張する．その根拠のひとつとして，直前にある öŋrä に着目し，これを通説のような「東に」ではなく「前方に・先に」と解釈し，özümin öŋrä bïŋa bašï ïdtï を "mich selbst schickte er als Vorhutfühler voraus(!)" と解釈する (TMEN, IV, p. 86)．ベルタはこの説を取り上げて再検討する短い論文を発表した (Berta 1995)．その行論はやや乱れていて論旨を追いにくいが，結局は従来通りの説に落ち着いている．

N6, käyrädä öŋdün: öŋdün は普通には「東に，東へ」の意であるが，ここではすぐ前にある öŋrä「東方へ」との関係を考慮し，敢えて「ケイレに東から」と解釈しておきたい．あるいは öŋrä を「前方へ」と解し，ここを「ケイレから東に」とすべきかもしれない．

N6, yantačïmda: 破断部を挟んでいるために，ラムシュテットが yandač....da と読み，マロフが yantačï と読み，その後もこのいずれかが踏襲されてきたところである．しかし原碑文を精査したところ，č の次の文字は i ではあり得なかった．私はこれを Y nt č # (m)D a と復元・翻字し，yantačïmda と転写する．すなわち動詞 yan-「戻る」の未来分詞形に一人称単数の所有語尾と位格の格語尾が付いたものとみなし，それを「私が戻ってくるであろう（ような・はずの・べき）時に」と解釈するのである．それでうまく文脈はつながるし，文法的にも問題ないと思うが，ただ同時代の用例を未だ見出し得ていない．

N7, birlä: 拓本からは birlä と読むのは困難だが，文脈からはそうするしかなさそう．しかし l はむしろ nt に見える．即ち / / nt a に見える．そして nt の前の字には縦の 1 本棒が見えるので s, i などかもしれない．

N8, qara qum ašmïš: ラムシュテットは ašmïš を終止形とみたが，バザンは後ろの「三纛突厥の民」にかかる連体形とみる．文法的にはいずれも可能であるが，ここではバザン説に従う．「カラ=クムを越えた」ということが，漠北から漠南への移動，すなわちモンゴリア本土からゴビ砂漠を渡って内モンゴリアの大草原地帯に移ることを意味するととる点では，私もバザンや谷の考え (Bazin 1982; 谷 1984) に賛成である．カラ=クムについては，欧米人が引用するチェグレーディの研究 (Czeglédy 1962) 以前に，既に我国の岩佐の研究がある（岩佐 1936, pp. 106-119）．岩佐論文の当該箇所を一読すれば，740 年代に入ってウイグル・バスミル・カルルク三部連合のクーデタに遭って漠北の本拠地を追われた突厥が，そもそもの突厥復興（突厥第二可汗国発祥）の地である漠南に活路を求めた様子が理解できよう．

N8, kögär, kömür taγ, yar ögüz: この 3 つの地名を漠南の内モンゴリアに求めようとするバザンの考え (Bazin 1982) は納得できるが，実際のバザンの比定にはかなり無理や見落としがあり，賛成できない．例えば kömür taγ「炭山」を黄河北岸の「黒山」に比定するが，契丹勃興に関係あるそのものずばりの「炭山」について検討していない．

N8, üč tuγlïγ türük bodun: 谷はこの「三纛突厥の民」を当時の漢文史料に見える突厥の「右廂」部かと考えている（谷 1984, pp. 11-12）．なお，タリアト碑文 E7 にある平行表現によれば，この直後に anta yetinč ay tört yegirmikä「そこで 7 月 14 日に」という語句が続いている．

N9, ozmïš tegin qan bolmïš: タリアト碑文 E9 の平行表現では bolmïš の部分が boltï となっている．

N9, altïnč ay: ラムシュテットは aŋ ilki ay 「最初の月＝正月」と読み，オルクン (ETY) ・王静如 (1938) ・マロフ (PDPMK) ・アイダロフ (Айдаров 1971) のテキストでも全てこれに従っている．さらにこの箇所を部分的に引用した羽田 1957, p. 185 およびバザン SCMT, p. 224 もこの読みを積極的に支持している．しかし 2 つに割れている碑文の上部断片末尾の süŋüs の後には 1 文字分，下部断片の上端の ay の前にも 1 文字分で，両単語の間には 2 文字分のスペースしかなく，ŋ l k i という 4 文字分を必要とする aŋ ilki が入る余地はない．ay「月」の前に 2 文字くるだけで月名になるのは，aram ay 「正月」の R m か altïnč ay 「6 月」の lt nč のいずれかの場合だけである．現地で碑石を精査したところ，上部断片の末端には lt の右半分が残っているのが見えた．ラムシュテットの写真にはそれほどよく出ていないが，我々の撮影した写真ではかなり明白であるし，ビチェースの他のメンバーにも確認してもらった．lt と R とは書き方によってはその右半分が酷似した形になり得るが，シネウス碑文ではそうではなく，かつまた古代トルコ語に aram ay が現われるのは，これまで知られている限りではもっと後からである．従ってここは「6 月」と復元するのが正しいであろう．

N11: 冒頭に 2 文字分のスペースがあるのは，石が堅くて彫れなかったところらしい．テキストは連続している．

N11, toquz [tatar]: この復元はタリアト碑文 S4 との比較によるが，ほとんど疑問の余地はない．

N11, tay bilgä totoq: tay bilgä の部分は拓本にはよく出なかったが，ビチェースの複数のメンバーが実際に確認した．この tay bilgä totoq は E5 にも現われ，両者が同一人物であり，九姓オグズを構成するバユルク部の「大毗伽都督」として漢籍に見えていることを発見したのは王静如である，王静如 1938, p. 14, cf. 小野川 1943, p. 361（別刷では p. 113）．

N12: 行頭を示すラインは，先に彫られたタムガのヒゲが延びてきているため，他の行より少しだけ下がっている．さらに 3 文字分のスペースがあるのは，石が堅くて彫れなかったところらしい．テキストとしては連続している．

N12, yabγu atadï: 拓本にはよく出なかったが，ビチェースの複数のメンバーが実際に碑石を見て確認した．

N12, küsgü yïlqa: ラムシュテット以来，誤解されてきた部分であるが，片山章雄らの研究グループが正しい読みに気付き，それを 1994 年に発表した（片山 1994, p. 12）．ただし 1978～79 年度に森安が参加していたパリ高等研究学院のバザン＝ゼミでは，既に同じ結論に達していた．ラムシュテットのテキストでは文字にかなり欠損があるように思われるが，片山が指摘したように，実際にはラムシュテット自身が付載したシネウス碑文の写真からも，文字はほぼ完全に読みとれるのである．もちろん，我々はこの点を現地でも確認したのであり，疑問の余地は全くない．

E1, bir yaŋïqa: 日付としての bir yaŋïqa 「1 日に」は新しく読めた部分である．ラムシュテット以来誰もこう読んでいないが，文字の残画と，すぐ後に eki yaŋïqa 「2 日に」が現われる文脈とから，ほぼ間違いない．

E1, kün [artatïlmïš?] tün ö[cü]rilmiš: ここはラムシュテット以来の読みと全く異なる．kün 「日中，昼」と tün 「夜，夜中」の読みはほぼ確実であり，かつ前後には単純な過去ないし完了の終止形がきている文脈で，-miš を伝聞過去とみなすのは，どうにもすわりが悪い．むしろこれを地名ビュケグックにかかる完了の連体形とみなすべきと考え，残画と矛盾しない語を探した上で推測したものである．

E1, kün tuγuru: OTWF, p. 730 でエルダルはこの表現を "throughout the day" と解すべきであると主張するが，前後の文脈はやはり従来の解釈を支持すると思う．

E3, yaŋïqa: または otuzqa.

E3, qïzïn qoduzïn: cf. Bazin / Hamilton 1979.

E4, körä: ED, p. 957a の指摘どおり，yürä は körä の誤りだったことを確認．

E4, . . . č i: ラムシュテットは -či の前に W を読んでいるので，現地に赴く前は Y G W č i すなわち ayγučï とでも復元できるかと思っていたが，原碑を実見したところ，それは不可能であった．-či の前の部分の 3 文字のうち 1 文字目は s, ŋ, 2 文字目は t, ük, ny, up / op, 3 文字目は W, k, y, Y, N, nč のいずれかであるらしい．

E4, čär[ig]lädi: ラムシュテットは č r[g]#[i t]d i (čärig itdi) と読んだが，下部断片の上端の d の前には 1 文字分のスペースしかなく，しかもその文字は t ではなく，l か š のいずれかである．čärig を動詞化した čäriglä- と読んでおきたい．この語は古代トルコ語にはいまだ在証されていないが，チャガタイ語には「軍隊を導く」という意味で在証されている，cf. VWTD III, p. 1967-1968. ここでは仮に「軍隊を展開する」と解釈しておいた．

E4, yazï qïltïm: 「私は平定した」と訳したのは，yazï を yasï とみなしたから．cf. ED, p. 984b: 'and scatterd them (?)'.

E5, tay bilgä totoq: N11, tay bilgä totoq の項を参照．

E6, yaγïn: ベルタはこれを yaγï の Comitative （共格・随格）とみなして「敵と共にその首領が進軍してきた」と訳している (Berta 1995, p. 10). 私もそれに従う．この Comitative は普通には具格に含まれるものである (cf. GOT, p. 137, 2°).

E6, qatï: クローソンはこの qat- を① "to mix; to add to" ではなく② "to be hard, firm, tough" で解釈するが (ED, pp. 594-595), 私は逆であろうと思う．因みにバザンはここを "je me heurtai encore aux Tatar" (SCMT, p. 226) と訳している．

E7, irin: ir は yïr / yir と同じ語で，「北」を意味する．cf. ED, p. 954b.

E7, bošunïldïm: ED, p. 383a の bošun- の項では bošunladïm と読むが，従えない．

E8, ol ay: ラムシュテットは ol yïl と推定している．どちらも可能である．

E8, tez bašï anta: 1981 年 3 月 17 日付けの森安への個人的書簡の中でバザン教授は，ラムシュテットが ･･･z bašï anta としか判読できなかったこの箇所を tez bašïnta と復元し，この場所をテス碑文のテスに比定する考えを示された．我々は現地で (t)i z 即ち Tez と読めることを確認した．S2 も参照せよ．

E8, qasar qurïdïn: クローソンは，ラムシュテットが aqsïraq ordu と読んだのを退け，ラムシュテットが注で示唆した別解を少しだけ修正してこのように読んだ (ED, pp. 95b, 645a), cf. Klyashtorny 1982, p. 340. この Qasar が杜環『経行記』の記事に見える突厥の可薩部であるはずはないが，タリアト碑文 E2 の atlïγïn tökä barmïš qadïr qasar äbdi bärsil, テス碑文 N3-4 の atlïγïn tökä barmïš ..... äbdi bärsil qadïr qasar と比較して，別の集団名であった可能性は高い．なお，大澤によるテス碑文の訳注 S2, tezig qasar qurïγ qontï の項を参照．

E8, čït: 行動記録 1996 年 8 月 28 日の条を参照．

E9, ///// baš //: ラムシュテットの推測では ö[tükän yïš ba]šï an[ta] であるが，我々にはこうは読めなかった．

E10, kälmiš: (k l)m s とみなしたが， (b l)m s または (b r)m s にも見える．

E10, ürüŋ bägig qara qulluqïγ: この箇所はラムシュテットも推定復元しているところであるが，我々もほぼこれに近く読むことができた．ただし大きく違うのは，ラムシュテットが B W L uQ G (buluqïγ) と推定したところを，新たに [Q]W L uQ G 即ち qulluqïγ と読み，全体を「白い（高貴な）ベグ」と「黒い（卑しい）奴隷」という対立する集団概念の組み合せと解釈する点である．「ベグ」ないし「貴族」という支配者集団と，「平民」ないし「奴隷」という被支配者集団とが対立概念として組み合わされて表現されることは内陸アジアの遊牧社会では珍しくないし，さらに両者を白と黒の対立で象徴することもモンゴル遊牧民の間でよく知られている事実である．シネウス碑文と時代的に近いキルギスのイェニセイ銘文に見える ürüŋüm qaram 「私の白いものと私の黒いもの」という表現に対し，マロフやクローソンは，これを「家畜」とみなしている (cf. Малов 1952, pp. 30, 81-82; ED, pp. 643b-644a) が，シネウス碑文の新しい読みは，その解釈にも変更をせまることになろう．なぜならシネウス碑文のこの箇所を含む続きには「白い（高貴な）ベグと黒い（卑しい）奴隷を彼は住まわせたという．彼はキルギス族の方へ人を（使者として）派遣したという」とあり，これはキルギスないしその周囲の民族集団に関わる表現と思われるからである．

E10, män: 1 人称単数主格の代名詞であるが， bän でないことに注意． E12 & S9 にも属格の mäniŋ がある．一方，より古い形の bän は， E4, S4 (2 times), S6, extra-b, extra-c (2 times) に見える．突厥碑文では，トニュクク碑文とキュリ=チョル碑文には bän のみが，キョル=テギン碑文とビルゲ可汗碑文に män のみが現われるのに，ウイグル初期のシネウス碑文に両者が並出するのは興味深い現象である．ちなみにラムシュテットは N1 にも bän を読み取るが，当該箇所に残っているのは文字 b のみであり，また文脈からも確実とはいえないので，我々は採らなかった．

E11, totoq bašïn: ベルタと同じく -ïn を Comitative （随格・共格）とみなすが， baš については人名構成要素ではなく普通名詞「隊長・頭」とみて，「トトク（都督）を隊長として；トトク（都督）を先頭に」と解釈する．

E12, yälmäsin: ベルタはこの行に 2 回見える yälmäsin について，前者を従来通りに対格とみなしながら，後者を Comitative （随格・共格）とみなし，「その（キルギスの）偵察隊と共に私の部下（ウイグル軍人）をそこで急襲し，情報提供者となし，（私の部下を捕虜として）彼ら（キルギス）のカンに向けて［連れていった］」と解釈する， cf. Berta 1995, p. 10, n. 5. おそらくそれは，本文が伝聞過去形 -mïš で終わっているので，「私の部下」が主語ではおかしいと考え，それを目的語と解釈したいがためであろう．しかしこの解釈には従いがたい．

E12, basmïš: この -mïš の表記法は，テキンのいう母音調和の例外法則 (GOT, pp. 59-62) にはずれている．本碑文でもほとんどの場合はその例外法則に従って，後舌語であっても前舌系の m s で表記されるが，ここを含め 5 回 (S5 & S7, barmïš; S8, qatïlmïš; Extra-a, bamïš) だけ m š と表記される．

S1, tošï: ラムシュテットは tušï とする．語源・語義不詳．文脈から仮に「湖沼」と訳しておく．

S1, är qamïš altïn yanta sallap käčdim: ここは är qamïš を地名とみるラムシュテットより，むしろそれを「男たち，兵士たち」並びに「葦」の意味にとるクローソンの考え (ED, p. 131a) に近いが，それでも全体の解釈はかなり異なる．

S1, bolču: トニュクク碑文第 35 行目参照．現在のイルティシュ河上流にある同名の河か？

S2, tez bašï: ラムシュテットが t s z と判読していた語は，正しくは t i z である．周知のように s と i とはよく似ていて，保存状態の悪い碑文面では判別がきわめて困難である． E8 とその注を参照せよ．

S2, čïtïmïn: čïtïmïn の -n は前舌である．後舌語に 1 人称語尾と前舌の +n が付いているのであるから，テキン文法書の法則 (GOT, p. 59; cf. Кононов 1980, p. 159) に従うなら，この +n は具格（ないし共格）ではなく対格と考えねばならない．後続の動詞 yayla- 「夏営する」は普通は自動詞であるが，ここでは敢えて「を夏営地とする」と他動詞的に解釈しておきたい．

S2, at: ラムシュテットの翻字では T の 1 文字を抜かしている．従って転写もしていない．その後の諸家もそれに追従するが，間違いなく T 字の残画が存在するので，at と読むべきである． OTWF, p. 78 では ber- なので "supply" と英訳しているが，正しくは at ber- なので "nominate" と訳さねばならない．

S3, bidigüči: クローソンは bitigüči "scribe, secretary" と同じとする (ED, p. 304). 私も一応それに従うが，äv edgüči 「テント作り，帳幕設営人」という役職名の可汗側近である可能性もあるのではないかと考えている．

S5, altïnč ay beš(?) otuzqa: altïnč ay beš は新読部分である．ただし beš は bir かもしれない．

S6, (Y G)R W Y G R D Q N: W Y G R は N3 の W Y G W R と同じで uyγur と読むことも可能であるが，それでは文脈が分からない．疑問のままにしておく．

S7, yarïšda: ここと S7 のヤリシュ (yarïš) は，トニュクク碑文の第 31, 36 行目に現われるヤリシュ平原 (yarïš yazï) と同

じか．そのヤリシュ平原ならアルタイ方面でボルチュ河にも近かったはず．

S9, bir eki sašïp: bir eki を biriki とまとめて読み，saš- を sač- とは別の単語 (cf. ED, p. 856b) とみて，「ひとつになって驚いて (Being united and startled）」と解釈すべきかもしれない．

S10, balïqlïγ: オルホン河 (Orqun) と合流するバリクリク河 (Balïqlïγ) を，ラムシュテットは，モンゴル語ハルハ方言で「魚の豊富な」という意味を持つ Džármānt'ē の訛った現在のジルマントゥ Džirmantu = Джирмант（ジルマンタイ Джирмантай ・ジャルマンタイ）河であると提唱し，田坂はさらにそれを清代の漢籍に見える朱爾馬台河ないし済爾瑪台河に比定し，羽田も同じ結論を繰り返している (Ramstedt 1913, p. 60; 田坂 1941, p. 201; 羽田 1957, p. 200)．古ウイグル語の balïq は「魚」という意味（偶然にも「城郭」の balïq と同音異義語であるので注意），-lïγ はモンゴル語の -tu / -tai と同じ所有を表わす接尾辞であるから，ラムシュテットの言う通りであればなんら問題はないが，手元のモンゴル語辞書では「魚」という意味を持つ jïrma(n) ~ jarma(n) という語を探すことはできなかった．一般にはモンゴル語で「魚」をいう語は jïγasu ~ zaγas である．敢えて探せば「魚の卵」の意味を持つ jïrmaγai がある．もしラムシュテット説が正しければ，現代のジルマントゥ（ジルマンタイ・ジャルマンタイ）河は確かにカラ=バルガスンの西南のホトントの方から北流してオルホン河に合流しており，カラ=バルガスンは両河に囲まれた場所にあるから，葛勒可汗（磨延啜）がオルホンとバリクリクとの合流点に造営させたという「国の玉座」の地がここであることに疑問の余地はなかろう[1]．さらに編年体の文脈からみて，その造営が 752 年ないし 753 年にかかることも確実である（田坂 1941, p. 199 は 753 年とし，羽田 1958, p. 200 は 751～754 年のいずれかとする）．しかるに田坂 (p. 201) が，örgin 「玉座」と balïq 「城郭・都城」とはあくまで別物との立場から，この年にはまだこの地に都城はなく，従って葛勒可汗（磨延啜）の父の初代可汗（裴羅）の時には都城はおろか宮殿さえなく，あったのは牙帳すなわちテントにすぎないと断言し，羽田 (1957, pp. 200-201) もほぼそれと同様の見方をするのは承認できない．我々はむしろ，つい最近公表された「大唐安西阿史夫人壁記」の考察により，この地にはウイグル可汗国成立以前に既に唐朝によって都護城 (Toγo-balïq) という城郭が建設されていたとの結論に至っている．石見・森安 1998, pp. 109-110 参照．

W: 西面は他の三面に比べて行の長さが長く，かつ文字は小さいので，翻字の分量が他の約 1.5 倍になる．

W1, barïp: B R i を ED, p. 543b では B R P と読んでいる．文字 i と p がよく似ていることから来た発想であり，私もそれに従う．

W2, yaqaγaru: 「国境まで」．これは新しく読んだ箇所である．ここにいう国境とは，E8 と S2 とに「私はそこに国境を設定した」とあるものと同じはずである．もちろんこの時代に現代的な意味での国境という概念があるわけはないが，当時もそれなりの領土意識はあったらしい．

W2, basmïl: S4 では B š m i L, S7, S12 では B š m L であるが，ここでは B š m l とあって -l の部分には前舌文字 l が使われている．タリアト碑文 N4 にも同様の例がある．単なる誤刻であろうか．

W3, oγlïn: -n の部分には前舌文字 n が使われている．後舌語に，明記された 3 人称語尾 i と前舌の +n が付いているのであるから，この +n が対格であることは，テキン文法書にいう母音調和の例外法則 (GOT, pp. 59-62; cf. Кононов 1980, p. 159) 通りである．同じような現象が以下の W4, qïzïn; W6, tuγïn でも見られ，さらに 1 人称命令形については W5, yazmayïn, yaŋïlmayïn で見られる．ただしテキン自身がいうように，この例外法則は突厥時代の特徴であって，ウイグルではむしろ母音調和の大原則に従う方が多い．もちろん本碑文でもそうなっており，その実例はテキンが列挙している 8 例 (GOT, p. 61) 以外に，N5, bodunïmïn (B W D N m N) がある．にもかかわらずその例外法則が本碑文の終わりの方になってやや集中して現われるのは，何か特別の理由があるのであろうか．

W3, -ki bodun: eki bodun 「2 つの人々」と -däki bodun 「～にいる人々」のいずれか決めかねる．bodun の後には G か m のどちらかの残画が見える．

W3, äviŋä ettim: Berta 1995, p. 12, n. 14 ではこの前舌語 äviŋä を後舌語 bïŋa と同じであるとみなし，かつ前舌語 ettim までも後舌語 ïdtïm と読み換えることを提案する．しかしここは次の行にも 2 回 äv 「テント，帳幕；家」が現われる文脈であるから，敢えてそのような解釈をする必要はないであろう．

W4, qïzïn: -n の部分には前舌文字 n が使われている．ただし翻字は ïQ i z n であって ïQ i z i n ではない．先行語が数詞の「2」であるからだろうか．W3, oγlïn の項参照．

W5, yazmayïn, yaŋïlmayïn: -mayïn の n の部分には 2 回とも前舌文字 n が使われており，トルコ語の母音調和の大原則からははずれている．しかしこれも上の W3, oγlïn の項で見たのと同じく，テキン文法書にいう突厥時代の母音調和の例外法則には合致している．

W5, yïčä boltï: ラムシュテットが ičikmädi 「服属しなかった」と読んだ部分を，このように読み変えた．

W5, suγdaq tavγačqa säläŋädä bay balïq yapïtï bertim: この一文に対しこれまで我が国では一般に，757年，葛勒可汗

---

[1] なお，『元史』巻 2・太宗本紀，6 年甲午 (1234) 秋の条に，太宗オゴデイの行営地としてダラン=ダバス（答闌答八思 < mong. Dalan-Dabaa(s)）と並記される「八里里」は，古トルコ語 Balïqlïγ の漢字音写と考えられる．本報告書「モンゴル時代遺蹟・碑文現況」において松田孝一が指摘するように，オゴデイ～モンケ時代のモンゴル皇帝はオルホン河・オンギ河の流域に沿って季節移動しており，この八里里 < Balïqlïγ もこの領域に含まれていた蓋然性は高い．おそらく本シネウス碑文の Balïqlïγ と同地であろう［以上，松井］．

が領土内の「ソグド人・中国人に命じて」一都市を建設させたのであると解釈されてきた，cf.『北アジア史（新版）』（世界各国史 12），山川出版社，1981, p. 121（護雅夫担当）．suγdaq tavγač に付いている与格語尾 -qa は，使役文の中では使役される者を表すから，文法的にこの解釈で問題はない．にもかかわらずクローソンは ED, p. 872b において "so I had Bay Balïk built on the Selenga for travelling Sogdians and Chinese" と訳している．"travelling" という訳語は，原文の š W(G D)Q = suγdaq の前の . . č g(n) を köčgün / köčgän "migratory, transitory" (ED, p. 697a) ととるからである．もしこの復元が正しければ，「定住しないで移動しているソグド人・中国人」とはソグド人や漢人の商人と考えて間違いなかろう．恐らくクローソンは，ソグド人や漢人の商人が土木建設に従事するのはいささか無理と考えて，上のような解釈をしたのであろう．ただしこの復元は絶対ではない．いずれにせよ，実際のありようは，遊牧騎馬民族国家を内側から支える道具・武器の職人や商人や通訳，さらには穀物を生産する農民，場合によっては政治顧問や宗教者をも含むソグド人・中国人を住まわせるために，都城建設の技術を持つソグド人・中国人の設計技師・土木職人らに命じて，都市を建設させたに違いない．

W6, tuγïn: -n の部分には前舌文字 n が使われている．W3, oγlïn の項参照．

W9, tümän: t ü m N とあって -n の部分には後舌文字 N が使われている．

バイバリク遺蹟　Site of Bay-Baliq

林　俊雄・白石典之・松田孝一
(Toshio HAYASHI / Noriyuki SHIRAISHI / Kōichi MATSUDA)

1997年度の調査（林　俊雄）

調査場所：ボルガン=アイマクのホタグ=ウンドゥル=ソムから西へ 11 km, 車で 20 分弱．セレンゲ河の北岸．北緯49度23分，東経102度33分． Aalto 1966, p. 18 に概略地図あり．

調査日時： 1997年8月21日．

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：デジタル=メジャーで四壁の長さを計測．瓦とレンガの破片採集．石獅子のスケッチと計測 (**Plates 12d, 12e**)．聞き取り調査．

遺蹟の現況：最も残存状態の良い遺蹟の北壁と東壁の一部は厚さ 3～4 m, 高さ 7 m ほどの版築の壁がよく残っているが (**Plate 12c**), それ以外の部分は完全に崩れてなだらかに盛り上がる土塁状を呈している．よく残っている部分には補強用の木材が朽ちて空洞となった孔が水平に列をなしている．城壁の尾根筋の長さを測ったところ，北・西・南壁は 238 m, 東壁は 234 m であった．より正確には後掲の白石報告を参照．

城内の中心よりやや南東寄りに方形の基壇があり，現在は寺院が建てられている．基壇の東側に瓦・レンガの破片が積み上げられている．これは 1980 年代のフデャコフらの発掘調査のときに集められたものであろう．ただし，後述するように，ここには近世の寺院址があったために，ウイグル時代のものと近世のものとが混在している．赤く彩色された鳳凰形の装飾瓦のように明らかに近世に属すると分かるものもあるが，単純なものは区別がむずかしい．

基壇の南東には円形の低い高まりがある．これも何らかの建物の基壇であるかもしれない．方形基壇のほぼ真南に城壁の切れ目があり，ここに城門があったと思われる．切れ目のすぐ西側に円形の花崗岩製の礎石が2つ並んで置かれており，フデャコフはこれらを城門の扉の木柱の礎石とみなしている (Худяков 1990, p. 86).

南壁から南，つまり河の方に 750 m ほど行くと，1辺 140 m 前後のほぼ正方形の低い土塁がある．位置関係から見て同時代の可能性が高い．

なお白石によると，航空写真ではこの遺蹟の西方にさらに大きな都城址が見えるという．後掲の白石報告を参照．

遺蹟の景観：森安担当「行動記録」1997年8月21日の条参照．

考察： 7 m という壁の高さは本来の高さに近いと思われる．カラ=バルガスンの城壁も現状で高さ 7 m ほどである．しかしカラ=バルガスンでは四壁ともによく残っているのに対し，ここでは全体の2割弱しか残っていない．今回同行したモンゴル側のオチルは，現存する壁の部分だけ造ったところで中止されたのではないか，すなわち未完成だったのではないかという考えを述べたが，版築の技法では全体的に少しずつ高くしていくので，一部分だけ先に高くするというのは不自然である．林の考えでは，人為的に壊された可能性が高い．土地の古老の話ではこの城内には 1930 年代まで9棟からなる寺院があったという．これらの建物を建設するときに土壁の材料として城壁の土を削り取ったということは十分に考えられる．城壁下部はほぼ同じ高さで削り取られており，オチルはこれについても人為的に採られたものであろうとの見解を述べた．

この遺蹟は 1982, 1986 年にロシアの考古学者フデャコフによって調査された．彼の計測では1辺は 260 m で，我々の計測よりもやや長い．彼の提出した図では北壁に2つの張り出しがあるが，現状では，それらは図面に表わせないほどわずかなものである (**Plate 12c**)．なお，彼はトゥヴァにあるウイグル時代のものと思われる城塞址とプランが似ていることを指摘している (Худяков 1990, p. 85)．これは確かにその通りであろう．

【以下，松田孝一の補筆】

バイバリクは，ウイグル時代に建設され，その時代の都市遺蹟として考察されているが，白石の報告に見られるように，契丹時代の築城技術の特徴も有しており，より後世においても利用・修築されたことが技術面から推測される．この城址の利用や存在は，『元史』・『元文類』の文献史料や，地図『混一疆理歴代國都之圖』にも明記されており，都市としての活動はモンゴル時代にも及ぶ．

『元文類』巻 42 ・玉工の条によれば，クビライは中統2年 (1261) に，カラコルム（和林）・バイバリク（白八里）をはじめいくつかの地域から，金や玉・瑪瑙などの細工職人 3000 余戸を大都（当時はまだ大都はなく，金代以来の中都城のみが存在）に移動させるよう命令している．また『元史』巻6・世祖本紀によれば，4年後の至元2年 (1265) 春正月癸酉にも，同様の移動命令が出されている．この記事では，バイバリク（百八里）のみならず，モンゴル西北のチンカイ=バルガスン（鎮海）さらに現在のトゥヴァのイェニセイ河沿いのケムケムジュート（謙謙州）の者をも対象としている[1]．1261 年時点では，中都など中国方面を本拠としていたクビライは，モンゴル高原に本拠をおくアリク=ブ

---

[1] 『元文類』と『元史』の記事がそれぞれの紀年通りに別々の記事なのか，それとも本来は同一の記事を，『元文類』と『元史』のどちらかが誤って紀年したものなのかは，疑問が残るところであるが，後考を俟ちたい．

ケとの帝位継承戦争において，アリク=ブケを一旦キルギス方面へ駆逐して優位に立っていた．そして 1265 年の前年にアリク=ブケを降服させている．おそらくクビライは，皇帝として，自らの宮廷装置整備の必要から，金・玉・瑪瑙などの特別な技術者集団をモンゴル各地から集めたものと思われる．このクビライ政権樹立初期の命令によって，バイバリクがモンゴル時代においてもモンゴル高原の都市として存在していたことが知られる．しかも，宮廷装置たる諸種の工芸製品を作成する工房・工場がバイバリクに存在したことも明白である．『元史』では西北部のチンカイ=バルガスンなどと並記される一方，『元文類』ではバイバリクが首都カラコルムに次ぐ地名としてただ1つ具体的に言及されていることは，バイバリクが上記のような技術者集団の集住する都市の代表的存在であったことを示している．モンゴル政権下でのバイバリクの重要性が想定される．

参考文献： Худяков 1990, pp. 84-89.

1998 年度の調査（白石典之）

調査場所：北緯 49 度 22～24 分，東経 102 度 31～34 分．

調査日時： 1998 年 5 月 21～24 日．

調査者：白石，バヤル，バットルガ．

調査方法：測量調査，光波測距器 (Pentax PCS-225) 使用．各土城の図面を三次元座標（コーディネイト=メジャーメント）法にて作製後，相互の位置関係をトラバース法により補正．

遺蹟の現況：土城がアルスラン=トルゴイという比高 6 m の丘の南に 3 カ所確認できた．丘の東南に位置し，版築の高い壁があり，内部に寺院のある城を第 1 城，その南約 800 m の小城を第 2 城，さらに丘の西南の城を第 3 城とする．その 3 つの城の内容は次のようである．

1）第 1 城（ビーブラク）

位置：土城の中心から，磁北に対して 60 度西 1170 m にアルスラン=トルゴイの南頂上，比高は 9 m.

規模：土城の 4 つの角の最頂点を結ぶ（以下の土城も同じ）．

北壁長さ 235 m, 幅 12～17 m, 版築部高さ 7 m, 土壁部高さ 3 m.

西壁長さ 234 m, 幅 14 m, 土壁高さ 4.5 m．方向は磁北に対して北 2 度東.

東壁長さ 231 m, 幅 18 m, 版築部高さ 6.5 m, 土壁部高さ 2.5 m.

南壁長さ 239 m, 幅 16 m, 土壁高さ 3.5 m.

遺物：契丹（遼）の櫛目文灰色陶器，清代の銅銭（嘉慶通宝）．ウイグルの遺物は無し．内部に玄武岩製の石獅子 3 体あり．

2）第 2 城（ボル=トルゴイ）

位置：土城の中心から第 1 城の中心をみると，北 2 度東 950 m, 比高は 6 m.

規模：北壁長さ 140 m, 幅 22 m, 土壁高さ 1.4 m.

西壁長さ 145 m, 幅 25 m, 高さ 1.7 m.

東壁長さ 145 m, 幅 20 m, 高さ 1.1 m．中央に門と思われる建物あり，幅 40 m, 高さ 2.8 m．方向は磁北に対して 4 度東.

南壁長さ 135 m, 幅15 m（中央に門あり，幅 32 m），高さ 1.3 m.

遺物：ウイグル時代のスタンプ文灰色陶器，瓦，レンガが多数出土．レンガの幅 13.5 cm, 厚さ 6.0 cm（カラ=バルガスンで多いのは幅 17.0 ×厚さ 6.0 cm）．

3） 第 3 城（アルスラン=ウード）

位置：中心からアルスラン=トルゴイをみると，北 22 度東 1050 m, 比高 9 m.

規模：北壁長さ 322 m, 幅 10 m, 土壁高さ 0.4 m.

西壁長さ 318 m, 幅 20 m, 高さ 0.9 m, 張り出し有り．方向は磁北に対して 4 度東.

東壁長さ 345 m, 幅 15 m, 高さ 0.5 m, 張り出し有り.

南壁長さ 305 m, 幅 15 m, 高さ 0.6 m.

遺物：ウイグルのスタンプ文褐色土器，契丹（遼）の櫛目文灰色陶器，宋代鈞窯磁器，茶緑釉甕，白磁，瓦が出土.

遺蹟の図面：白石担当．1000 分の 1 の縮尺， 1 m コンタで作製 **(Plates 12a, 12b)**.

聞き取り調査：ドルジスレン古老からの聞き取り．第 1 城の石獅子 3 体は， 1997 年の「行動記録」に記されているようにアルスラン=トルゴイにあったのではなく，アルスラン=ウード（第 3 城）の東壁上にある「オンマニ」の石碑の脇に建てられていたという．現在，ウランバートルの国立歴史民族博物館にある石獅子 2 体は，ペルレーによればアルスラン=トルゴイにあったとあるが，ドルジスレンは知らないとのことであった．とにかく，この付近には玄武岩製の獅子像が 5 体あったということになる．

考察：それぞれの土城の規模をみると，唐尺（1 尺= 29.6 cm）が使用されていた可能性が指摘できる．第 1 城では 800 尺 (237 m), 第 2 城では 500 尺 (148 m), 第 3 城では 1100 尺 (326 m) ということになる．これら 3 城は中国の建築技術により造られたものと想定できる．

さらに，３城の位置関係を調べてみる．アルスラン＝トルゴイの南頂上を起点として東西南北に唐里（１里＝　1800尺＝ 533 m）の升目を作り，土城の位置をあらわすと，第１城の中心は頂上から東に唐２里，南に１里いったところに位置し，また，第２城の中心は頂上から東に２里，南に２里半の位置に，さらに，第３城の中心は頂上から西に１里，南に２里のところにあることがわかった．このことは，３城がアルスラン＝トルゴイを起点とする唐里で作られた升目の中に，計画性をもって配置されていたことを示している．つまり，これらの３城は何らかの有機的な関係で結ばれているのである．３城の同時存在の可能性を示唆している．ここでも唐里という中国の技術の存在がうかがえる．

しかし，遺物から判断すると，第２・３城は明らかにウイグルの土城であるが，第１城がウイグルの土城であるかどうかの結論は出せない．ただ，便所用に掘り下げた穴の壁面を観察すると，深さ１ｍに及んで，昔の生活面が何枚も重なっているのが確認できた．今後の調査でウイグル期の文化層が見つかる可能性も否定できない．

第１城の版築の壁の造りはウイグルのカラ＝バルカスン宮城に類似しているが，これは契丹の土城にもみられる．壁の構造が時代決定の根拠になるかどうかは，いまのところ判断が難しい．第１城の城壁上面の状況を比較すると，西，南にはもともと高い土壁があり，のちに壊されたとは言えない．同じように北と東だけに版築の高い壁をもつ土城は，トール河流域の契丹土城にもみられる．むしろ，もとから無かった可能性を議論すべきだと考えている．このように第１城には契丹土城の特徴が強くみられるが，これはウイグルの城が再利用されたとも考えられるので，ウイグル築城を否定するものではない．付け加えておくと，契丹の遺蹟としては第１城はモンゴル高原で最も北に位置している．

以上のようにまだまだ解決しなければならない課題は多いが，この３城がバラバラではなく，同じ計画のもとに造られていること，そのうち第２・３城からはウイグルの土器が出ていることから考えて，第１城もまたウイグル時代に築城されたと想定しておきたい．

これまで漠然と信じられていたように土城は１つではなく，３つであるということが明らかになったことは重要である．現在，バイバリク（ビーブラク）の名前は第１城にのみ残っているが，この３城がひとつのコンプレックスとして，ウイグル時代にバイバリク（富貴城）を形成していた可能性も考えてみるべきであろう．

カラ=バルガスン宮城と都市遺址　Palace and City of Qara-Balgasun

林　俊雄・森安孝夫
(Toshio HAYASHI / Takao MORIYASU)

調査場所：アルハンガイ=アイマク，ホトント=ソム，オルホン河の西岸にある．南のハルホリン市からジープで約1時間．北緯47度24～26分，東経102度38～39分．

調査日時：1996年8月25日；1997年8月30～31日，9月3日．

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：デジタル=メジャーで長さを測量．宮城の高さは人間が腕を上に伸ばして巻尺を水平に張ることを繰り返して測る．各自が写真・ビデオ撮影．瓦・レンガの採集とレンガの計測．ヘリコプターで空中撮影．

遺蹟の現況・図面・考察：宮城は四壁ともに高さ7m前後までよく残っている．モンゴルに現存する各時代の遺蹟を通じて見ても，版築の土壁でこれほどよく残っている例を我々は知らない．ラドロフが，隣接する市街区域と比べて城壁の残りがはるかによいので，市街区域はウイグル時代だが城塞（我々のいう宮城）は時代がずっと新しくモンゴル帝国のモンケ時代(1251～59)であろうと推測(Радлов 1892a, pp. 4, 6; cf. Клеменц 1895, p. 51)したくなった気持ちがわかる．

これまでに宮城の平面図は1891年に調査したラドロフ(Atlas, pl. XXVII), 1949年のキセリョフ(Киселев 1957, pl. 1), 1979年のフデャコフ(Худяков 1982, p. 87; Худяков 1990, p. 85)によって発表されているが，年代が古い図ほど信頼性が高いように思われる（**Plates 13a, 13b** 参照）．例えば，宮城の北壁と南壁にそって塔が列をなしているが，フデャコフは南壁にそって版築の塔が列をなしていると記すのみで(Худяков 1990, p. 85), 北壁にそって塔があるとは書いておらず，彼の図にも記載されていない．また彼は宮城はプランが正方形で600×600 mであると記しているが(Худяков 1982, p. 87; Худяков 1990, p. 84), ラドロフの指揮下で調査したクレメンツの報告によれば北壁が448 m, 西壁が350 m, 南壁が478 m, 東壁が341 mの長方形であり(Клеменц 1895, pp. 50-51), 我々の2度に亘る簡略な測量でも北壁424 m（1回目は423 m），西壁335 m（1回目も同じ），南壁413 m（1回目は418 m），東壁337 m（1回目は342 m）である．

ラドロフが城塞と市街区域とは時代が違うと判断したのに対し，キセリョフは市街区域から出土する陶器と城塞および城塞内の東南隅の「内城 (цитадель)」から出土する陶器とが同じであることに基づいて，市街区域だけでなく宮城もウイグル時代に属すると解釈した(Киселев 1957, p. 94). 残念ながらその陶器の図は発表されていないが，彼が宮城内の「内城」と中央部の「宮殿」から発掘した軒丸瓦の瓦当は明らかに唐代の蓮華紋瓦当である(Киселев 1959, p. 167, fig. 6). しかし今回我々が探索した限りでは，紋様のある瓦当を発見することはできなかった．他遺蹟との比較のために完形のレンガ（磚）を探し求めたが，見つけられなかった．我々が採集したレンガの厚さは5.0 cm（2点），5.2 cm（1点），5.3 cm（2点），5.8 cm（1点），6.0 cm（1点），6.1 cm（1点），6.5 cm（2点），7.0 cm（1点），9.5 cm（1点）と実に様々であったが，これらはおそらく厚さ5 cm, 6 cm, 6.5 cm, 7 cm, 9.5 cmの5つのグループに分けられるのであろう．このうち厚さ6.5 cmのものは横幅が17 cm, 縦の長さは不明ながら34 cm以上，厚さ7 cmのものは横幅が20 cm, 縦の長さは不明であった．

北・西・南壁の外側には壕の跡が緑の濃い帯となって残っている（森安担当「行動記録」も参照）．

城壁および内部のひときわ高い土塔（我々の計測では高さ13 m）には横木の朽ちた跡である水平の孔が多数あいている．クレメンツはこれらの横木を，壁面にベランダあるいはバルコニーを取り付けるためのものだったと考えている(Клеменц 1895, p. 51)．ラドロフは初めは単に版築の補強用とみなしていた(Радлов 1892a, p. 6)が，Atlas第1分冊のpl. XXIX に対する第2分冊の補遺ではクレメンツと同じ考えに至っている．しかし我々の考えでは，これはやはり補強用である．

内部の高い塔状の造営物について，ラドロフはこれを仏教のパゴダとみなしたが(Радлов 1892a, p. 6; cf. Клеменц 1895, p. 51), その考えはもはや過去のものである．キセリョフは「見張り塔 (сторожебая башня)」とみなし(Киселев 1957, p. 94), フデャコフもそれを踏襲しているが(Худяков 1982, p. 87; 1990, p. 85), まだ確証はない．天山北麓のビシュバリク（北庭）城内にも同じような高い土塔がある．我々は，この上には，タミーム=イブン=バフルが伝えるようなはるか彼方からも望むことのできた「黄金のテント（可汗の宮帳）」(cf. Minorsky 1948, pp. 283, 295, 299; 森安 1979, p. 218)が建てられていた可能性が最も高いと考えている．

この塔のすぐ東に低い基壇があり，キセリョフはここに宮殿があったと考えた．瓦やレンガが集中していることから見て，「宮殿」とまで言えるかどうかはともかく，かなり立派な建物があったことは想像される．東南隅の一段と高い独立した部分（我々の計測では高さ12 m）についてはキセリョフらは「内城」としているが，ここからもやはり蓮華紋の瓦当が出土しているので，ここにも「宮殿」があった可能性はある．なおラドロフは都城全体を「宮殿」と呼んでいる．

東壁に城門があったことは誰もが認めているが，西壁の大きな突出部については言及が少ない．しかしこれが甕城（馬出し）であることは疑いない．ここには内側にも壁が造られている．外に向かって開く大門は城にとって最も危険な個

所であり，防御施設も厳重にするものである．大門の外側にさらに壁を造って二重にする例は広く見られので，ここにも門があったはずである．

北壁と南壁の外側に列をなす小さな塔については，その役割が明かではない．ラドロフやクレメンツはこれをスブルガン（仏塔）とみなしたが (Радлов 1892a, p. 6; Клеменц 1895, pp. 49, 52), 我々はその考えには到底従えない．

本隊による平面図は林が作成 **(Plate 13a)**.

遺蹟の調査：森安担当「行動記録」参照．さらに参考として掲げた「カラ=バルガスンに関する旧来の報告」を参照．

遺蹟の写真：Heikel 1892, pl. 44; Atlas, pls. XXVII-XXIX

参考文献：Радлов 1892a, pp. 4-6; Atlas, pls. XXVII-XXIX （この解説は第1分冊のものより，第2分冊にある補遺の方が詳しい）; Клеменц 1895, pp. 48-59; Киселев 1957, pp. 93-95; Киселев 1959, pp. 166-168; Пэрлээ 1961, pp. 49-51; Худяков 1982; Худяков 1990, pp. 84-85.

参考　カラ=バルガスンに関する旧来の報告（林　俊雄・訳）

（1）ラドロフの報告 (Радлов 1892a, pp. 4-6)

ウゲイ=ノール(Угей-нор) から35ヴェルスター(37km) 弱の距離のところにあるカラ=バルガスン遺蹟に到着すると，我々は壮大な方形の土塁の真中にキャンプを設営し，（1891年7月15日から）7月28日までそこに留まった．カラ=バルガスン遺蹟は2つのグループからなっている：（1）オルホン河から遠い西側にあるウイグル（と突厥？）の古代都市の遺蹟，そして（2）オルホン河に近い東側にあるモンゴル=ハーンの宮殿址．両者の間には，乱暴にこなごなに打ち砕かれた花崗岩からなる巨大な石碑の残りがある．この石碑は，漢文碑文の検討からわかったように，8世紀後半に中国の皇帝によって「九姓回鶻の可汗 Aj-den-li-lo-gu-mo-mi-shi-khe-joj-lu[1] の非軍事面での賢明な勇敢さと軍事面での非凡な功績（を称えて）」立てられた．石碑は，幅180cm, 長さ200cm, 厚さ90cm[2]の花崗岩の板石から作られている．この板石はライオンの形をした花崗岩の台座に据えられていた．板石の上には半円形の装飾が据えられていた．その装飾は6匹の龍によって形作られ，龍の真中の両面には題記のための五角形の平面があった．その上には円形の帯を伴う石の球が取り付けられていた．板石の片面には漢字とウイグル文字[3]による碑文があり，もう一方の面には，ミヌシンスク地区とイェニセイ河上流域ではじめて発見されたいわゆるルーン状文字による碑文があった．

碑文のある板石は，すでに私が述べたように，粉々に割られていた．大きな3つの断片にはほぼ全部の漢文碑文とほぼ半分のウイグル文字碑文が残されていた．その他の小さな断片（そのうち4つは我々によって地中から掘り出された）には，ウイグル文字碑文の下半分の一部が刻まれていた．この部分の題記面はほぼ完全に風化しており，ルーン状文字碑文のうち残っていたのはわずかに題記面と4つの小さな断片だけであった．大きな断片（複数）の裏面ではルーン状文字碑文は3～4文字を除いてまったく摩滅している．カラ=バルガスンに滞在していたあいだじゅう私はもっぱらこの碑文の拓本とりに従事していた．拓本とりは大変な作業であった．というのは石の表面はひどく風化しており，さらに多くの個所が石灰で覆われており，その除去が大仕事だったからである．

ヤドリンツェフ氏がペテルブルグに運んできた漢文碑文のある石の2つの断片とはおそらくこの石碑に属するのではなく，かつて同じところにあった別の石碑の残りであろう[4].

ウイグルの都市遺蹟は長さ8ヴェルスター (8.5 km) に及ぶ広大な面積を占めており，そこには大小さまざまな一連の丘や街路の列，溝あるいは壕，土塁が見られ，どこでも瓦や煉瓦（せん）の破片や平らに削られた花崗岩の板石（小さな石碑の台座）などが散乱している．しかし入念に調査したにもかかわらず，碑文のある板石は見つからなかった．数カ所で行なった発掘は地中にある板石を引き上げる程度のもので，それ以外の発掘は我々の道具では無理だった．

石碑から東へ150歩のところにモンゴルの宮殿の遺蹟がある．遺蹟は，版築からなる壮大な土塁で囲まれている．版築は木の梁で補強されている．土塁には2つの門があり，そのうち1つはオルホン河の方を向いており，もう1つはジルマンタイ Джирмантай 河の方を向いている．ジルマンタイ河は遺蹟から北へ3ヴェルスター (3.2 km) のところを流れている．土塁の内側には版築の巨大な塔の基礎が残っていた．その高さは回りを囲む壁の高さ2の倍に達する．基礎の残りは今では円錐台形をしており，　deresun（草？）が生えている．その円錐台形から塔の中央部が柱状に出ており,その上の平らなところは直径約4サージェン (8.5 m) である．塔の中心部はあまりに侵食されているため，横の裂け目や洞穴状の穴によって壊された玄武岩の柱（複数）から成り立っているかのように見える．そのどこでも磚の層と版築の層とを見分けることができる．版築の層はかつては木の梁の列で補強されていた．今でも数サージェン毎に水平にどの方角にもある．塔のほかに土塁の内側には一連の建物の跡が見られ，土塁の外側では，都市に向いた方の側に壕がみとめ

---

(1) 訳者注：これは「愛登里囉汨没蜜施合毗伽」の読み誤りであろう．

(2) 訳者注：これらの数値が正しくないことについては，本報告書のカラ=バルガスン碑文の報告を参照．

(3) 訳者注：後に Müller 1909 によってソグド文字であると断定された．

(4) 訳者注：そうではなく，やはりカラ=バルガスン碑文の断片であることが，ラドロフの Atlas, pl. XXXIV に対する第2分冊の補遺で明言されている．

られ，壕のすぐ外に小さな塔（おそらくスブルガンのあと）が並んでいる．

この遺蹟から受ける全体的な印象では，宮殿の部分は都市そのものの遺蹟よりもはるかに後世のものであろうと思われる．

5層の巨大なパゴダのこの遺蹟は，1256年にモンケ=ハーンによって造営されたのではないかと私は考えている．

すべての遺蹟の正確な記述は，7月 28 日まで残っていたクレメンツ氏によって作成された．私の息子とドゥーディン氏は協力して写真をとり，図を描いた．シチェゴレフ大尉はこのときオルホン河谷の一部の半機械測量を行ない，その後カラ=バルガスンの平面図の測量を行なった．

（2）クレメンツの報告 (Клеменц 1895a, pp. 48-59)

カラ=バルガスン

トイテン=トロゴイ Тойтен-Тологой から南では土地が変わる．ステップは乾燥した平原から草の豊かな平原にと移行する．地平線にはジルマンタイ左岸にそって伸びる山並みが見え，南には森林に覆われた高い山脈が見え，南東にはオルホン左岸ぞいの山並みがみとめられる．東方にだけは平らなステップが見られ，カラ=バルガスンに近づくとようやくコクシン=オルホンの右岸にそって伸びる丘の列がみとめられる．トイテン=トロゴイから 15 ヴェルスター (16 km) 道を行くと，カラ=バルガスンの黒い壁が見えてくる．ククシン=オルホン右岸の高いところからは，40 ヴェルスター (43 km) 離れていてもその壁を見ることができる．この遺蹟はジルマンタイ河とオルホン河との間にある．オルホンからバルガスンの最も近い遺構までの距離は 2 ヴェルスター (2.1 km), ジルマンタイからの距離は 1.5 ヴェルスター (1.6 km) である．かつては両河の河床はもっとバルガスンの近くを通っていた．これらの流路は人工の溝だったのではないかと考えられた．しかしこれらの干上がった水路の特徴そのものがこの考えとは一致しない．これらの水路は蛇行しており，岸の斜面は一様ではなく，これらの旧河床がところどころで現実の河床と合わさっているのをみとめることができる．現在のジルマンタイはバルガスンから南西へ 12 ヴェルスター (12.8 km) のところで狭い谷から出て，その左岸は山にくっついている．カラ=バルガスンのステップは西と南西方向ではまったく乾燥しており，小石とロームで覆われている．北，東，南東は沼沢の多い草原で囲まれている．その草原を，南の方にある山々から発した様々な小河が流れている．雨の多い夏にはこの沼沢地を越えることはほとんど不可能であり，ぬかるんだ小道がオルホンに通じている．この広大な草原は昔から遊牧民の関心を惹いてきた．そこで我々が大規模な集落址に出会うのは驚くに当たらない．カラ=バルガスンの遺蹟は北東から南西の方向に長く，その距離は 5.5 ヴェルスター (5.9 km) に達し,東南東から西北西にかけては 2.5 ヴェルスター (2.7 km) である．これらの数字からみて，この遺蹟がモンケ=ハーンのカラコルムということはまずありえないと思われる．というのは，その目撃者であったルブルクの言葉によれば，それは「フランスの国王陛下のサン=ドゥニよりも小さ」かったからである．

かつての建物の大多数のうち，残っているのはわずかに土塁，小石の堆積，そしてそこここに見られる板石，磚あるいは瓦のかけらである．ほぼ完全に残っていたのは，版築の高い城壁で囲まれた遺構群，すなわち狭い意味でのカラ=バルガスンそのものだけである．我々はそこから開始して，それを主建築と呼ぶことにしよう．

建築を囲む土塁は東南東から西北西の方向に長い．それはほぼ正確な長方形をなし，西北西に突出部をもつ．この突出部はまた別の土塁で囲まれ，完結したやや長い四角形をなしている．壁を挟んでこの四角形と反対の内側に高い突出部があり，この突出部と向き合って内部に高い塔がある．東南東を向いた壁には門の跡が見られ，南のコーナーには壁よりも高い四角形の土塁がある．南東（南西の間違いか？ 林）の壁にそって 7（8の間違いか？ 林）基，北西（北東か？）の壁にそって 6 基の小さな版築の造営物スブルガンがある[1]．囲いの内側には十字に交差する土塁が見られる．版築で造られた外側の土塁すなわち城壁は，高さが3.5サージェン(7.5m)である．土塁の頂部はかなり侵食されている．頂部の幅はおおむね1.5～2サージェン(3.2～4.3m)である．しかし，とりわけ西壁と北壁の上には，何らかの必要があって当初設けられたのであろうが，頂部が広げられたところがある．壁の傾斜は一様ではない．北壁と西壁は内側の傾斜が急である．南壁は外側の傾斜も急である．その他の斜面は傾斜が緩やかであるが，近づいてよく見ると，それが土を盛り上げただけの土塁ではなく，版築で造られていたのが崩れて堆積したものであることがわかる．このような傾斜の違いはもともとはなかったのであろう．違いが生じたのは，気象上の影響が出やすいかどうか，また造り方が堅牢であったかどうかということのせいであろう．土の中には砂が多いが，壁のどこにでも見られる褪せた白色からわかるように，石灰も少々混入している．それは人為的に土の中に石灰を混入したものではなくて，おそらく土そのものに本来少量の石灰が含まれていたからであろう．

壁の北，東，南側は浅い壕で囲まれている．壕の外に版築の造営物の遺構が立っていた．それではかいつまんでカラ=バルガスンについて記述していこう．

東南東から西北西に伸びる壁は頂部ではかって 224 サージェン (478 m) である．内側の斜面の幅は 6 サージェン (12.8 m), 外側の幅は 10 サージェン (21.3 m) であるので，頂部の平均的な幅を合わせると全体で 17.5 サージェン (37.3 m) とい

---

(1) 訳者注：ここで「南東の壁にそって7基」というのはおそらく南西に8基の誤り，また「北西の壁」というのは北東の誤りであろう．

うことになる．壁の頂部は3ヶ所で幅が広くなっており，幅3～4サージェン (6.4～8.5 m) の広がりをなしている．この壁の高さは3～3.5 サージェン (6.4～7.5 m) である．この壁はあまり侵食されておらず，壁の上部から5～7フィート (152～213 cm) の高さの部分はまったく垂直で，深い横穴があいている．それより下では緩やかな斜面が始まる．この壁の南のコーナーには，壁に接した土塁で囲まれた四角形の空間がある．この土塁の各辺の長さは 36 サージェン (76.8 m) と 42 サージェン (89.6 m) である．土塁は壁よりも 1.5 サージェン (3.2 m) 低い．土塁には起伏があり，壁とほぼ同じ高さの隆起が盛り上がっている．この土塁の内側の空間のレベルは土塁を挟んで反対側のレベルよりも1サージェン (2.1 m) 高い．しかし土塁の内側の空間には傾斜の緩やかな穴やくぼみがある．この四角形の内側には2つの面が外壁に接してもう1つのもっと高い四角形がある．その各辺は 28 サージェン (59.8 m) と 28 サージェンである．この壁の高さは大きな四角形の壁の高さの2倍ある．カラ=バルガスンを遠く北の方から見ると，外壁の長く黒っぽい帯が見え，その上に西には内部の塔の頂きと南隅に高いコーナーの造営物が見える．このコーナーの四角い塔（ここでは塔と呼んでおく）の内側は，全面的に壁の頂部まで版築で覆われている．

このコーナーの塔の壁は，多くの個所で馬であがれるほどに壊されている．

東南壁の中ほどに幅6サージェン (12.8 m) の門があった．門のところはレベルがやや高くなり，ごく低い土塁をなしている．そこでは壁の頂部はかなり壊されている．頂部にはいくつかの隆起がある．壁のふもとから隆起の頂点までの高さは4サージェン (8.5 m) に達する．この壁全体の長さは頂部で測って 160 サージェン (341.4 m) である．

北壁の長さは頂部で測って 210 サージェン (448.1 m) である．最も高いところは高さが4サージェン (8.5 m) に達する．壁の両隅と中ほど3ヶ所に拡大したところが残っていた．既に述べたように，壁の内側の斜面がきわめて急で，ほとんど垂直であり，横に裂け目が入っている．このような版築の壁には，黄土層の堆積とまったく同じように，縦方向に裂ける力が著しく発達している．壁の全体の幅はそこでは 14 サージェン (29.9 m) に達する．

西壁は頂部で測って 164 サージェン (350 m) である．壁の長さの差異は測量結果では全体としてかなり大きいが,目で見る限りではほとんど目立たない．というのは壁がきわめて厚く，その残っている頂部も不規則な形をしているからである．片方の隅から 60 サージェン (128 m), もう片方から 65 サージェン (138.7 m) のところに，壁に接して特別の囲いがある．囲いは高さ3サージェン (6.4 m) の緩やかな土塁で囲まれている．この土塁はどこにも版築の痕跡がみとめられない．内側の空間はでこぼこしている．そこに残っている土の堆積から見て，そこは土塁によっていくつかの区画に分けられていたと推定される．

この壁から内側に長方形の版築の基壇が出ている．その高さは5サージェン (10.7 m), 長さ 18 サージェン (38.4 m), 幅 12 サージェン (25.6 m) であった．土塁の斜面はきわめて急である．

この突出部から内側に6サージェン (12.8 m) のところに高い造営物が盛り上がっている．これを調査団長［＝ラドロフ］は 1256 年にモンケ=ハーンによって築かれた5層の宮殿を伴うパゴダの遺構とみなす考えに傾いている．オルホン調査団のアトラスに載せられたこの遺構の図がそれについて十分な知識を与えてくれているので，私としてはそれについて若干の細かい点を報告するだけにとどめよう．その高さは最もよく残っているところで6サージェン(12.8m)ある．それは外壁と同様に版築で造られている．それには水平の深い裂け目がたくさんあり，その南側はやや崩れて前に傾いていた．塔の北側と西側は草で覆われ，南側と東側は深い穴だらけである．水の流れが弱かったところでは，水の流れは石灰を含む土と混じり，垂直の壁にそって流れ下り，つららのように固まった．数カ所では壁全体が蛇のようにくねって御互いに交差しあったごく細い紐の網目で覆われているが，それは水の滴りの作用の明らかな結果である．

塔全体にはおそらく中国の磚が張られていたであろう．そのことは，磚の破片が塔のまわりのいたるところに散らばっていることから証明される．磚は灰色で焼成はあまい．塔の遺構の上部付近には穴の列が見られるが，それを私は当初土中の鳥の巣と考えたが，規則正しく並んでいる穴を眺めているうちに私はそのうちの1つにカラマツの丸太がよく残っているのを発見した．このことから我々は，これらの穴が塔のまわりにベランダあるいはバルコニーを付けるための補強用の丸太であると考えることができる．このようなバルコニーの補強方法はモンゴリアでは今日でも使われている．磚については，その寸法を明らかにすることができないほどにその断片が少ないということに私は気が付いている．若干の磚に私は，トラ河畔のツァガン=バルガスンの磚に見られるのと同じような接着溶液のあとを見出した．この塔のふもとから南東方向に低くなる平らな狭くなる土塁が続き，いったんくびれて，城内の中央に四角形の小さな基壇をもつ高い建物が連結している．後者に我々はくぼみを見つけたが，これはおそらく排水管の残りであろう．完全に土でうずまった管の中に板石の残りがあったが，これは管に張られていたものである．発掘を行なうことができなかったために，この施設が何であったのかという問題を解決することはできなかった．

壁にそって低い土塁が伸び，ところどころでそれにまた土塁が直角に交差しており，1つ1つの建物あるいは部屋の遺構のように思われる．草の茂った平らな土塁のほかには何も遺構は見られない．これらの土塁の規模と配置はまったく正確に平面図に示されている．それらについては，最も大きな部屋（複数）は門の近くにあったと指摘するだけにとどめよう．そこにはおそらく，ここに独立した区画をもつ権利がなくて集団で暮らしていた最下級の使用人たちが集中していたのであろう．我々は1つの土塁を切断して地山まで発掘することができたが，そこでは砂と土，小石のほかには何も発見されなかった．

すでに述べたように，南壁にそって小さな土の造営物の遺構が見られる．そのうちよく残っているものを観察したと

ころ，それらは2×3サージェン (4.3 × 6.4 m) の方形の基礎をもつ土造りのスブルガンであることがわかった．それらの高さはおそらく約2サージェンであったろう．これらの遺構は，この城壁で囲まれた遺蹟がかつては仏教寺院であったことを示す明白で争う余地のない証拠となっている．このようなスブルガンの遺構は，北壁ぞいにも見られる．これらの遺構から我々はカラ=バルガスンの主建築が北方に仏教が浸透してからあとの時代，すなわち古代モンゴル時代に属すると結論づけることができる．カラ=バルガスン近くの現在知られている石碑にはモンゴル文字の碑文は1つもない．現在知られているのは漢字，ルーン文字，ウイグル文字だけで，モンゴル文字はない．私がもっと重要であると思うもう1つの事実，すなわち，今日のモンゴリアで聖なる文字であるチベット文字が完全に欠如しているということも，指摘しなければならない．もしカラ=バルガスンの建築が仏教寺院あるいはより正確にはクビライ以前の古仏教寺院であるならば，仏教がチベットを経由してモンゴリアに入ってきたと仮定することができるであろうか．チベットの僧侶がどこかにあの有名な文句オン=マニを石に残さなかったと考えることができるであろうか．私の知る限り，クビライ以前にモンゴリアに仏教が広まったという問題は疑問の余地がない．どのようなルートでここに浸透したのかということについては，東洋史の専門家に判断をゆだねたい．

カラ=バルガスンの都市の遺構

カラ=バルガスンで最もよく残っている建築遺構は仏教時代のものであると断言できるのに対し，その他の遺構については私はこのような考えはもっていない．今のところ，都市の遺構を何らかの特定の時代，あるいは全体としてある1つの時代のものとする点については，我々には語る資格がない．遺構の残りが悪くて際立った残り方をせず，土地が遊牧民にも半遊牧民にも魅力的であるので，様々な時代に中国に侵入を行なった多種多様な民族がそこにとどまり集落を造ることができた．しかしこのような判断は，ルーン文字とウイグル文字，漢字が刻まれた石碑には当てはまらない．そのコピーはオルホン調査団のアトラスの第1冊に載せられており，そのほかに石碑の復元図はフィンランド地理学協会の刊行物 *Inscriptions d'Orkhon* にある．これらの石は調査団長の予備報告に列挙されている．

カラ=バルガスンの都市の遺構を部分ごとに述べていくことにしよう．

城壁で囲まれた主建築の門と向い合って東南東に25サージェン (53.4 m) 離れて，何らかの造営物を示す土塁の列（複数）がある．土塁は低く，4フィート (122 cm) 盛り上がっている．土塁遺構群の全体の大きさは，東南東から西北西にかけて 120 サージェン (256.1 m), 南南西から北北東にかけて 200 サージェン (426.8 m), すなわち面積は 200 × 120 = 24000 平方サージェン (109,303 m^2) である．この空間の中央を占めているのは土塁で囲まれた長方形で， 120 × 60 = 7200 平方サージェン (32,794 m^2) である．主建築の門と向い合って土塁の西壁と東壁に門あるいは通路がある．この長方形は，北と南を多かれ少なかれ土塁の交差する列ではさまれている．北の部分は大きさが様々な12の区画に仕切られている．中央の長方形の南側には22サージェン (46.9 m) 離れてもう1本土塁が伸びている．この土塁にはまたいくつかの完結しない土塁が付いている．この遺構全体を囲む土塁のうち切れ目がないのは北側と東側である．南側と西側では完結しない土塁がまっすぐに出ている．これより先，オルホンの方には，何も遺構はない．我々が「中央の長方形」と呼ぶ場所はおそらく内庭であり，その両側に部屋が配されていたのであろう．

主建築のすぐ北には遺構はごくわずかしかない．主建築から 0.5 ヴェルスター (534 m) のところを，南西から北東に長さ 300 サージェン (610 m) にわたって低い土塁が伸び，それから長さ 50～70 サージェン (107～149 m) の土塁が横に出ている．この長い土塁に対して 18 サージェン (38 m) 離れて平行にもう1本の約 120 サージェン (256 m) と短い土塁が伸びている．その列からも横に小さい土塁（複数）が出ている．さらに遠く北と北西に1ヴェルスター (1067 m) 離れて，何ら完結した形をなさない土塁の残り（複数）が伸びている．全体として北にある遺構には何らかの未完成さが感じられる．そこには都市住民の最貧困層がいたにちがいない．そこにはきわめて低い土塁のほかには何らの遺構も見られない．

西北西には，小さな方形の土塁の遺構（複数）を越えて，主建築から約1ヴェルスター離れると，雑草の生い茂った高い土塁の列を見出す．土塁は高さが2.5アルシン (178 cm) まであり，コーナーでは1サージェン (213 cm) にも達する．そこには明らかに何らかの堅牢な建物があったのであろう．というのは土塁の中には磚の破片や円筒形の中国の瓦の断片が見られるからである．土塁で囲まれた中の空間は，外側よりもかなり高い．これらのよく残った高い土塁で囲まれた空間は，長さが 145 サージェン (309 m), 幅が 130 サージェン (277 m) である．主建築に向いた面には小通路で分けられた2つの小部屋のあとが見られ，その背後では建物全体が3つの細長い部屋に分けられている．この建物よりさらに西には先の土塁とほぼ同じながさの土塁が見られるが，はるかに低く，囲まれた内部の空間には明瞭な仕切りの痕跡あるいは何らかの別の細かい点は見られない．

上記の土塁の遺構から南西には狭く長い平坦な帯状の空間が伸びており，これは一方を切れ目のない土塁で区切られ，他方は正方形と長方形の土塁で囲まれた遺構で区切られている．これはきっと通りと横町の遺構であろう．北東から南西に走る建物の間のスペースを私は通りと呼び，それに交わる通路を横町と呼ぶことにしよう．私はこれらの南北方向あるいは東西方向に細長い空間の短さと位置とからみてこれらの用語を使っているだけであって，南北方向の通りの方が東西方向の横町よりも幅広くて長いことを示そうと思っているわけではない．

主建築の南西には都市の遺構の主要部分がある．そこには最も多く住民が集中していた．主建築のまわりの広場から南南西の方向に，最も幅広い大通りが伸びている．その長さは 225 ヴェルスター (2400 m) で，幅は約 35 サージェン (75

m) である．東側の広場に接した部分では，通りは個々の方形の土塁で区切られ，それらの土塁の中には有名なカラコルム碑文の刻まれた石碑（複数）も立っている[1]．さらに明瞭な土塁が切れ目なく1ヴェルスターと370サージェン (1067 + 790 m) にわたって伸びている．この通りの続きをそれ以上探求することはできなかった．おそらくそれは小さな広場に出て，その広場の付近には一連の建物が個々のグループをなして無秩序にひしめいていたのであろう．都市のこの南部については，またあらためて述べることにしよう．

この幅広い通りは西側が長い土塁によって区切られている．その土塁は370サージェン (790 m) のところで東北東から西南西に伸びる横町によって途切れる．その横町は1.5ヴェルスター (1600 m) 以上の長さがある．この横町には420サージェン (896 m) のところで南南西から通りが出ており，480サージェン (1024 m) のところで北北東から通りが出ているが，そのことはすでに述べた．主建築近くの広場の南側，大通りの西側，横町の北側，西の通りの東側にある空間は，四方を土塁で閉ざされている．その空間は，西部に突出部をもつ四角形で，200,000平方サージェンあるいは9.8平方ヴェルスターを占めている．これは，我々の考えでは，都市の1区画そのものであった．我々はそれを第1区画と呼ぶことにしよう．大通りにそって区切る土塁には第1区画の内側に通じる門あるいは出入り口はなかった．その代わり横町の方から3つ，西の通りから1つの出入り口があった．おそらくこの第1区画は南北方向の土塁あるいは壁によって2つの部分に分かれていたらしい．ただしこの土塁あるいは壁は，大通りに接した東の土塁や西の大きな土塁よりも小さい．この仕切り壁には北端に1つ通り抜けられる出入り口があった．大きめの建物はつねに大通りに面していたとする我々が確認した理解にもかかわらず，第1区画の東半部には大きくて高く完結した土塁は見られない．そこにあるのは，外壁に接した3つの閉ざされていない土塁と，区画の広場の中の不規則な形の1つの閉ざされていない土塁，そしてこの空間にわずかにそれとわかる程度の様々な遺構だけである．それに対して区画の西半部には，まず東北隅に広い入口の間をもつ4つの部分に分けられた細長い建物があった．区画を分ける区切り壁に接して2つの建物があった．しかし最も大きな造営物は横町と西の通りの交わるコーナーにあった．その土塁は長さが175サージェン (373 m) で，幅が120サージェン (256 m) であった．この空間全体が1つの建物によって占められていたとはとても納得しがたい．それとは反対に，この空間は横町から通じる3番目の出入り口と並んでおり，西の通りから通じる出入り口から近いので，おそらくこの空間にそって細く曲がったあるいは壊された横町が伸び，第1区画の中のまた別の小区画が土塁で囲まれていたのではなかろうか．人数の多いモンゴルの寺院や，東洋のよく残っている都市遺蹟や現存する都市に見られる狭くて不規則な横町は，このような推定が許容されることを示している．このおおきな四角形は内部が土塁によって2つの大きな敷地に分けられ，その2つがさらにいくつかの小さな敷地に分けられていた．ウルガやウリャスタイ，エルデニ=ゾーのようなモンゴリアの新しい定住集落の現存する見本から古い都市の遺構を判断することができるとするならば，この土塁は全体を囲む囲いにすぎず，その中にいくつかの泥造りあるいは木造の建物があったと推定することができよう．この横町をさらに西へ進むと，両側にはずっと小さいが明瞭な土塁の遺構が続いている．

西の通りのコーナーから250サージェン (534 m) のところでこの横町はまったく折あしくも大通りや西の通りと平行に走る長いが低い土塁によってさえぎられる．横町から北に伸びる土塁の両側にばらばらに7個の花崗岩の石を発見したが，それらには碑文どころか装飾も細工もない．さらに西へ進むと，いま言及した土塁から70サージェン (149 m) のところに，それと平行に，しかしそれより高い土塁が走っている．その先には完結しないその他の土塁があるので，この横町はまず古い低い土塁によってさえぎられ，それから高い土塁に突き当たっていた．このような配置の不都合さはすぐ目に付き，この場所には後世に人が住み着き，プランが変更されたのではないかという考えが思わず頭に浮かぶ．この横町を私は比較的新しいと考えている．騎乗することがほとんどの人々にとって，横切ってさえぎる低い土塁は道路作りの障害とはなり得ず，越えることが困難な長い土塁は横町と比較してもっと新しい時期の造営であろう．横町から南には，大通りにそって，西側を南から横町に出る広い通りによって区切られた第2の区画があった．さらに南と西にある部分はあえて区画と呼ぼうとは思わない．というのは，それらの部分にはほとんどまったく脈絡のない土塁の遺構があるだけで，完全な形をもっているものはないからである．第2区画は横町のコーナーから大通りの端まで伸びている．横町からは内側に2つの入口が通じており，そのうちの1つは完全な路地を形成している．第2区画を西側で区切る通りの端は明らかではない．横町への出口から225サージェン (480 m) のところでそれを探求することは困難となり，それより先では土塁によって形成されるはずの線が崩れて完全なカオスと平らな空き地の中に消え，その空き地にはもはや何らの泥造りの仕事はみとめられない．第2区画の北部には，土塁で囲まれた6つの敷地がみとめられる．しかしそれらの形は内側にも外側にも土塁の突出や付け足しによって変えられている．そこでは土塁そのものは明らかにみとめられるものの，第1区画や大きな遺構のすぐ西側にある都市の部分の土塁ほど広くも高くもない．土塁の上のところどころには磚の破片や中国の瓦の断片が落ちていた．そこで我々は花崗岩の板石を4点発見したが，そのうち2点は大通りの土塁の上にあった．しかしそれらには何らの細工の痕跡もみとめられなかった．第1の横町のコーナーから1ヴェルスター (1067 m) のところに西北西に長い土塁が伸びている．それを第2区画の南の境界線とみなさなければならない．第2区画のほぼ真ん中に第1の横町と平行に，大通りには達しないが，土塁に挟まれた何らかの細長い空間が伸びている．これはかつては貫通するまっすぐな横町であったが，その後東側に建物ができ，出口のない通路になって

---

[1] 訳者注：これは九姓回鶻碑のことであろう．

しまったのであろうと思われる．土塁と遺構の数の点では，第2区画は第1区画をはるかに上回っている．その代わりそこにははるかに小さい四角形や増築が見出される．このことは，そこに第1区画よりも裕福ではない住民がひしめいていたということを示しているかのようである．

大通りから南には，土塁の遺構がエルデニ=ゾーに至る道路まで伸びている．そこでは遺構はまったく混沌としており，あらゆる方向に伸び，まったく突然に草原に消えている．そこには湾曲した土塁が見られはじめるが，その土木上の意味を解明することは難しい．

大通りから東にはあたかも未完成であるかのような完結しない土塁の列が見られる．その大部分はきわめて低く，偏平で，ほとんど識別しがたい．主建築に近いこの通りを区切る土塁が始まるところにのみ，かなり形のはっきりとした遺構が見られる．それは長さ 90 サージェン (192 m), 幅 60 サージェン (128 m) の方形の土塁で囲まれ，南に小さな突出部をもち，その内側には砂と土からなる2つの細長い小山があり，その上に磚の破片が見られる．

さらに北には長さ 225 サージェン (480 m), 幅 125 サージェン (267 m) の低い土塁で囲まれた空間がある．外壁に接して土塁の内側には四角形の土塁からなる一連の細かいマス目がある．同じくこの土塁の内側には，漢文，ルーン文字，ウイグル語の碑文をもつ7個の石がある．うち4個は土塁の端の近くにあり，3個はそれらから東へ 100 サージェン (213 m) 離れている．石はすべて灰色がかった粒の大きい花崗岩からできている．石から主建築の外壁までの距離は 220 サージェン (469 m) である．これらの石は，調査団長の予備報告においてもまたアトラスのための解説テキストにおいてもリストアップされ，詳しく記述されているので，同じ記述を繰り返すのは余計なことと考える．

主建築から南東へ4ヴェルスター (4.3 km), 大通りの土塁の末端から東へ 2.5 ヴェルスター (2.7 km), 都市南部の土塁の最後の痕跡から 300 サージェン (640 m), オルホンにそって伸びる沼沢地の境近くに古墳のような形の人工の小山が2つあり，そこには加工されていない花崗岩の板石（複数）がある．そこから東へ 50 サージェン (107 m) のところに1辺 10 サージェン (21 m) の平らな土盛りがあり，その上に版築の建物の遺構がある．その基礎は1辺が 4.5 サージェン (9.6 m) で，わずかに西壁の一部だけが残っていた．その外観と構造とから見ると，それは主建築のまわりにあるスブルガンの遺構にきわめてよく似ている．

カラ=バルガスン遺蹟の概観を終えるにあたって，私は都市の様々な部分の記述のさいに述べた考えを繰り返しておきたい．アカデミー会員ラドロフは，主建築の遺構は古い Kholin （和林）の遺蹟にモンゴル人によって築かれた宮殿址であると考えている．スブルガンの遺構（複数）があることは我々にこの宮殿が世俗的役割を終えたあと寺院に変えられたことを示していると，私には思われる．都市の土塁の遺構をさらに検討すると，都市は少なくとも2度造りかえられたという結論に私は達する．したがってこの遺蹟は少なくとも3つの時期，すなわち古い時期，ウイグル期，より新しいモンゴル期（ただしモンゴル人がウイグル文字とより新しいモンゴル文字とを使っていて，スブルガンと仏教寺院（複数）が築かれた時期）にまたがると私には思われる．ルーン文字の石碑については，私にはどのような推測も述べる資格はない．この文字は唐代の貨幣や鏡，闕特勤の石碑に知られている．おそらくこの文字は縦書きのウイグル文字と同時に使われていたのであろう．それではカラ=バルガスン周辺の遺蹟について少し述べておこう．

ジェルマンタイ河にそって下り，カラ=バルガスンから西へ9ヴェルスター (9.6 km) の，河の左岸に，四角形の土塁がある．それは長さが 70 サージェン (149 m) で幅が 40 サージェン (85 m) である．土塁はまったく偏平で，その直前にまで近づかないと見分けがつかないほど低い．ジェルマンタイにそってさかのぼり，カラ=バルガスンから8ヴェルスター (8.5 km), Beisykhure （貝子廟か？ 林）の手前4ヴェルスター (4.3 km) の，河の左岸の頁岩の崖に，ヤドリンツェフとともに，枝分かれのない長い角をもつ4匹の動物を表した図を発見した．4匹ともすべて頭を右に向けている．

オルホンにそってさかのぼり，カラ=バルガスンから 15 ヴェルスター (16 km) の河の左岸の，小河が流れ込む地点の近くに，私は横たわった板石，孔のあいた円筒形の石，地面に差し込まれた上が丸くなった板石を発見した．その板石には漢文碑文が大きくはっきりと彫られていた．碑文の拓本をとるための道具をこの時には私はもっていなかった．そのほかに，碑文はヤドリンツェフによってその第1次調査の時に拓本がとられたという話も私に伝えられていた．しかしここに私のとった写真からコピーを引用することは難しくないので，ここにそれを示そう．板石の高さは 8.5 チェートヴェルチ (153 cm), 幅は5ヴェルショーク (22 cm) である．［以下，碑文のみ引用］

水平方向に「示青立朔方」，垂直方向に「大清屯区処」．

（3）ヤドリンツェフの日誌 (Ядринцев 1901, pp. 18-20)

（7月） 16 日にカラ=バルガスンには到達せず，オルホン河畔に宿泊した．エルデニ=ゾーとカラ=バルガスンとの間の河谷で，我々は多くの "bulo" すなわち脱穀用の花崗岩製の回転石に注意を向けた．それは 23 個あり，かつてモンゴル人の耕作地であった畑にころがっていた．

7月 17 日に我々はカラ=バルガスンに調査団が到着したことを知った．我々は N. P. Levin やその他の人とともに我々の宿泊地から前進した．我々はカラ=バルガスンから 15 ヴェルスター (16 km) のところにいた．そこで途中我々の注意をひいたのは外見が鉱滓（かなくそ）のような石である．我々がそれを調べてみると，私はこのような石から1つのケレクスルができていることを発見した．ケレクスルはそこに露頭した溶岩から造られていた．溶岩はオルホンにおいてもオンギンにおいても1本の帯となって露頭しており，それから墓地が造られていた．しかしだからと言って，この黒

い石からカラ=コルム 黒い石の堆積 という名称が生まれたと決め付けようとは思わないが.

7月 17 日 12 時半，カラ=バルガスンに我々の調査班を見つけると，我々は馬をギャロップで飛ばして，喜んで仲間と団長に挨拶した．調査団員たちはその前日に，ウルガから 20 日間をかけて Ugej-nor を通り過ぎて，到着していたのである．

この打ち捨てられたカラ=バルガスン，これは明らかにされたようにウイグルのカラコルムであるが，今やこの周辺に調査団の注意が集中したのである．

我々は遺蹟そのものの中に活気あふれる陣営を現出させた．土塁の間にテントが広げられ，団長の丸テントが立てられ，他方にはコサックのテント，台所テントが立てられ，たき火があかあかと燃え，馬とラクダがつながれていた．我々は我が家にいるかのようにくつろいでいた．おそらくこの打ち捨てられて荒涼とした遺蹟が， 13 世紀以来これほどの活気を味わったことはなかったであろう．7～8世紀の強大な可汗たちの宮殿，数世紀を経てモンゴル時代の大事件が起こった場所に，客となったのである．ここで私が思い出すのは，我々の半遊牧的な生活のときの我々の会話である．おもしろい雑談の中で，アジアの古代史に対する我々の尊敬すべき団長の関心は我々の注意をひき，それから時には活気のある雑談はヨーロッパの出来事へと移っていった．

毎朝我々は土塁を越え，ウイグル文，漢文，ルーン文字テュルク文の残る巨大な割れた花崗岩のオベリスクのまわりで活気あふれる作業を行なった．拓本をとり，図を描き，写真を撮った．

時には好奇心をもつモンゴル人がやってきたり，エルデニ=ゾーへ行く巡礼たちが立ち止まっていったり，あるいは調査団の到着と調査団への便宜供与とに関する北京からの命令書をもったモンゴル人の族長たちが訪問しに来た．やってきた官員たちは我々のもとで友好的なもてなしとごちそうを享受したにもかかわらず，モンゴル人たちは我々の生活を鋭く観察していた．歴史に対する知的関心は，半ば未開な状態にとどまって祖先の功業や栄光に関する記憶を失ってしまったこの種族には，無縁のものであった．彼らは我々が拓本をとっていた石碑にも無関心であった．その後モンゴル当局はコショ=ツァイダムでの発掘の試みに際して妨害すら行なった．モンゴル人を不安にさせず，彼らに疑念を生じさせないように，カラ=バルガスンでは発掘は行なわなかった．我々は碑文を写し取り，遺蹟を記述する作業を行なったのである．ただ私は，かつて掘り返されたいくつかの穴を観察したことを語っておかなければならない．私はそれらの穴の中に磚や版築の壁の遺構，建築に関係する木の残り，アラバスターの建築装飾，漆喰の残り，建物の崩壊や火災を示す多くの炭や燃えさしを見出した．

瓦や磚，花崗岩の板や礎石が多数あることは，土塁の中のこの宮殿と建物が広壮であったことを物語っている．

カラ=バルガスンは石碑から判断してウイグルのブク=ハーンの首都であったことが現在調査団によって明らかに認められているので，この建設に関する考え方を確認するためにもいつかここで発掘を行ないたいものだ．今回の調査団はそのような作業を行なう手段をもっていない．モンゴル人が侵略してウイグルの首都を占領したことは疑いがない．そのことについては多くの史料が物語っており，ここにはおそらくモンゴル人の宮殿，あるいは寺院，建物も建設されたのであろう．（モンケ=ハーンのときに5層のパゴダが建設されたことについては尊敬すべき我が調査団長も言及されているが）カラ=バルガスンの歴史的意義とそのエルデニ=ゾーとの関係については，より詳細な歴史的資料から解釈される．

オルホン，カラ=バルガスンへの我々の第1次調査のときに，その周辺を回り，円形に広がった土塁を見て，広大な都市の痕跡が残っている面積を過大評価しているのではないかと危惧していた．しかし今では測量技師が指摘しているように，都市は少なくとも長さが8ヴェルスター (8.5 km) に達することを認めなければならない．我々の測量技師の言うところによれば，土塁と壕を詳細に測量するには数ヶ月かかるであろうという．調査して回った結果，様々な方向に走る土塁が少なくとも 30 本数えられ，正方形の土塁の囲いも12 基数えられた．いくつかのマウンドは 200 歩や 300 歩に達した（原注：我々は最初の旅行のときに，土塁の遺構と住居址はカラ=バルガスンから北と西へ遠くまで伸びており，エルデニ=オーラの山麓に中国人の集落址があることを確認した）．

そこに滞在しているときに，我々はクレメンツとともにカラ=バルガスン周辺を回り，私は Бейсен-Хуре 廟の対岸のジェルマンタイ河畔にある石の拓本をとることを任された．

この石碑の近くのジェルマンタイ河畔の岩に，我々は先史時代に属するヤギの図が刻まれたものを発見した．カラ=バルガスン周辺の草原をあちこち回ったさいに1つの石人を発見したことも言及しておこう．

カラ=バルガスン周辺の様々な遺蹟，たとえばツァガン=ノール南方の墓地，トイテン建築址やまた，ウゲイ=ノールのタイジン=チョローのような建築址は，もちろん様々な歴史上の時代におかなければならない．そしてオルホン河谷に滞在して，私はあらためてここには歴史・地理学的研究のために広範な領域が広がっており，カラコルムの北や南にもいくつかの宮殿や都市があることがわかった．

カラ=バルガスンのキャンプに我々は7月 28 日まで滞在した．そこで今後の我々のルートの計画が検討され，私は調査団長から南へ，つまり南ハンガイ，オンギン河， Таца-Гол と Туин-Гол へ向かって，途上の墓やまた旅行者の話からハンガイ斜面のゴビとの境にあるという石碑や廃墟を探索するようにという指示を受けた．［以下略］

（4）コトヴィチの報告 (Котвич 1914, p. VI)

発掘は主としてオルホンのカラ=バルガスンで7月 17 日から8月 10 日まで行なわれた．都市遺蹟では2つの主要なタイプのマウンドが5基発掘された．1つは正方形のマウンドで，より堅牢な寺院あるいは一般的に公共の建物の遺構と思われ，もう1つは細長い建物で，個人家屋の遺構と思われる．いたるところに激しい火災の跡がみとめられたが，この火災によって都市も城塞も滅んだのであろう．建物は基礎が版築で，縦と横に梁が入っていた．これらの梁は大部分が半ば朽ちた状態で残っていた．より堅牢な建物は瓦葺きであり，瓦の破片は正方形のマウンドの表面にすら大量に見られる．木材は上部構造や連結部で大きな役割を果たしていた．ところどころに赤や黄色で彩色された漆喰の残りが見られる．正方形のマウンドの四隅には多くの四角い板石（城塞では円錐形の装飾がある）が見られるが，これは明らかに木柱の礎石の役を果たしていたのであろう．完形品はほとんど発見されていない．瓦や磚でさえ壊れている．いたるところに大量の骨（羊と部分的に馬）があり，鉄・銅の塊や，未焼成の土器（一部には紋様がある）の破片もかなり多い．細長いマウンドでは中国の貨幣が3点発見された．2点は開元 (714～741) の年号をもち，1点は五銖銭である．

城塞の門の前には，壊された中国語=ウイグル語の石碑と思われる痕跡が発見された．

（5）キセリョフの報告 (Киселев 1957, pp. 93-95)

ウイグル可汗国の時代に関してはクレメンツとラドロフのおかげでより明白な状況が明らかとなっている．それは，エルデニ=ゾー寺院から北へ 15 km，オルホン河上流にあるカラ=バルガスン，ウイグル可汗国の首都の調査と関連した資料である．1949 年にそこで発掘が行なわれ，都市と城のプランがより正確にされた（図1）[1]．

カラ=バルガスンはオルホン左岸にあり（かつてはオルホン河はおそらくその城壁に迫っていたであろう），面積 25 km^2 に達する巨大な都市である．アトラスに載せられているきわめて不正確な平面図では，その中央部だけが示されているにすぎない．都市が実際にどれほどであったかを示すには，城の長さが隣接する園を含めてほぼ 1 km に達するということを述べれば十分である．城の南西に位置する特別の土塁で囲まれた都市中心部の広さは1×1 km に相当する．さらに遠ざかると，より人口の稀薄な街区があり，都市の外壁の外側には，広々とした園圃がある．

ラドロフ，ヤドリンツェフ，クレメンツは内城と城を建設したのはモンケ=ハーンであり，ウイグルの可汗たちの首都の廃墟であるのは都市だけであると考えた．それはまったく正しくない見解である．

1949 年の発掘の結果，内城，城，都市からの出土品には差異がないことがわかった（とりわけ，都市から採集された陶器と，内城・城から出土した陶器とは，まったく同一種類であった）．

城はただプランが大きかっただけではない．その城壁は今でも 10 m の高さがあり，内城の防壁は 12 m にも達する．城の中央には草原よりも 14 m も盛り上がった楼閣望楼がある．

城の中には発掘によって宮殿の建物が発見されたが，それは美しい瓦当をもつ瓦で豪華に装飾されていた．これらの紋様は唐代後期に典型的なものである．城の東南隅を占める内城の頂部での予備発掘の結果，そこには暖房施設，漆喰塗りの壁，美術的に装飾された青銅板が張られた扉のある数階建ての建物があったことがわかった．この建物の瓦は宮殿の瓦やまた扉の紋様とも類似しており，唐代に属する．

城の門を出るとオルホンに向かって園が伸びており，そのうち正確に碁盤の目のように区切られた区画が残っていた．

城のまわりを大きな塔のような形の堡塁が囲んでいた．

都市のプランを一見して明らかとなることは，それが城と内城の存在を考慮して建設されたということである．内城に接する東北隅では都市の城壁線上に，長方形のくぼみがある．このくぼみは軍事的な目的で意図的に造られたものである（城のまわりの近くには人が住むことは許されなかった．そこは空き地であり，一種の障害物となっていた）．

城，内城，都市中央部のほかに，カラ=バルガスンには神殿の区画がある．それは城の南側にあり，都市の東に接する区画で，おそらくウイグルの可汗たちがまつられていたのであろう．おそらくそこには彼らの廟があったのであろう．というのはまさしくそこに，ウイグル王家の可汗のうちの1人のものであるウイグル文・漢文・オルホン文（古テュルク文）で碑文が刻まれた有名な石碑が打ち砕かれた状態で発見されたからである．

都市そのものはどのようであったろうか．今のところわずかに1戸だけ調査することができた．この家からは内城や城と同じ陶器が出土した．そこで我々が蝋，銅板，青銅のインゴットを発見したことから判断すると，この家はおそらく金属加工職人の家であったろう．蝋は明らかに蝋型を作るさいに使われたものであろう．上記の内城の扉の装飾はこの方法で作られていた．

都市は火災に遭っていた．我々が調査したところではどこでも（城，内城，神殿区画，都市街区），はなはだしい火災の層が発見された．この火災はもちろんウイグル可汗国を征服したイェニセイ=キルギズがこの都市を破壊した（840 年頃）ことと結び付けなければならない．廃墟の中で発見された武宗の貨幣（840 年）も，これと同じ年代に属する．

キルギズは都市を徹底的に破壊したようである．1つのきわめて明白な細かい点に注目してみよう．都市内やまたその周辺の農耕地域では，ほとんどどの家にも製粉用の臼あるいは碾き臼があった．これらすべての碾き臼や臼も，ウイグル可汗たちの石柱が壊されていたのと同様に，打ち壊されていた．火災のあと，カラ=バルガスンは復興されなかっ

---

[1] 訳者注：「エルデニ=ゾー寺院から北へ 15 km」という数値は不正確である．また 1949 年に発掘した城とは，ラドロフらのいう城塞，我々のいう宮城である．

た．ただモンゴル時代の陶器片が散見されるだけである．

カラ=バルガスンおよびその城や内城のプランとの類似から，その他の一連の都市も，おそらく同じウイグル時代に属すると決定することができる．そのようなものとしては，タイジン=チュロ，トイテン=トロゴイや，ブキニチ Д. Д. Букинич がセレンガとオルホン流域で調査したその他の一連の都市があげられる (С. В. Киселев, Монголия в древности. *Известия АН СССР*, Серия истории и философии, т. IV, 1947, pp. 370-371)．それらすべての特徴は，定住地であること，都市の周囲に農地があること，手工業が存在すること，そしてカラ=バルガスンで発見されたものと類似する押し型紋様のあるオリジナルな陶器が発見されることである（この陶器はモンゴリアの外では「キルギズの壷」という名前で広く知られている）．

カラ=バルガスン碑文　Qara-Balgasun Inscription

森安孝夫・吉田　豊・片山章雄
(Takao MORIYASU / Yutaka YOSHIDA / Akio KATAYAMA)

調査場所：①：ホトント=ソムの文化センター．北緯 47 度 21 分東経 102 度 27 分．
調査日時：1997 年 8 月 28 日．
調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．
調査方法：断片 1 個を確認，各自ビデオ・写真，計測．後に No.19 とする．
計測結果：

Heikel 1892, pl. 49 に記入

今回撮影の写真（吉田報告 Mortice の頁も参照）

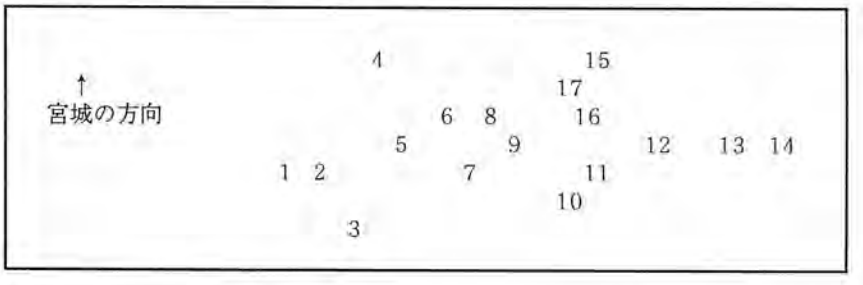
考察：この断片は Heikel 1892, pls. 48-49 に写真があり，Atlas, pl. XXX-1 の一部と pl. XXX-5 に模写がある．今回，置いてあった状態から横倒しにしてその底部を確認したことによって，この部分が碑身（碑文部分）から割れた断片ではなく，碑身の石とは別造りの石でその上部に碑頭として乗せられていた部分の断片であることが確認された［片山・吉田］．

調査場所：②：ハルホリンから車で約 1 時間のカラ=バルガスン都市址内の北緯 47 度 25 分，東経 102 度 39 分の地点．アルハンガイ=アイマクのホトント=ソムに属す．碑文断片はカラ=バルガスン宮城の東南の隅から南南西へ 500 m ほどのところに散在している．

調査日時：1996 年 8 月 25 日；1997 年 8 月 30～31 日，9 月 3 日．

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バットルガ．

調査方法：1996 年には片山が断片の大半をスケッチ，一部を計測し，仮 No. を付して配置図面をノートに記入．断片は合計 17 個．この時の各断片の位置を右図に示す．各自ビデオ・写真撮影．バットルガはルーン文字断片（右図の No. 12）の拓本を採る．



1997 年には，碑文断片のすべてに No. 1 から No. 17 の番号をふり（昨年の片山番号を正式に採用），各自ビデオ・写真撮影．森安・林はポラロイドでも撮影．この段階で西の方にあった文字のない断片も石質から同碑文の断片と推測，断片群のある場所に移動させて No. 18 とし，一部を計測した．また，碑頭（螭首）のルーン文字の額のある断片を除く文字断片全部を 2 セットづつ採拓．断片の接合 (Nos. 10 & 13, 16 & 17) と撮影．上部碑頭の大断片 No. 16 を横倒しにしてその底部を確認．また亀趺と思われる No. 1 を再確認した．さらに碑文を再構成するために必要な数値を計測した．

なお碑頭の部分は 2 つの断片があり，小さい方の 1 つは遺蹟に近いホトント=ソムの文化センターに保管されているので，それを No. 19 とした．

碑文の現況：巨大な碑文は，1891 年にロシア帝国科学アカデミーから派遣されたラドロフ隊が訪れたとき，既にばらばらになっていた (Радлов 1892a, pp. 4-5)．李文田の『和林金石録』の録文の状態とラドロフの Atlas とを比べてみると，1889 年にロシアのヤドリンツェフ，1890 年にフィンランドのヘイケルが訪れたときも同じだったはずである．

1908 年に大谷探検隊の野村栄三郎が現地を訪れた時には 37 個あったという（野村 1937, p. 467）．今回の調査に先立つ森安の予備調査（1994 年）の段階で，それらの断片の内の比較的大きな断片で漢文を含むものが存在していないことが確認されていた．そのうちの 2 点 (Atlas, pls. XXXIV-2 & 3) は，ラドロフ探検隊のヤドリンツェフがサンクト=ペテルブルグへ持ち去ったことが， Atlas, pl. XXXIV に対する第 2 分冊の補遺より明らかである．従って従来知られていた断片のかなり多くのものについては，再調査することができない．特に大断片がほとんど消失しているのは誠に遺憾である．その一方で今回，従来発表されていないソグド文のある小断片 (No. 10) を発見できたことは幸いであった．現存する 19 断片のうち，ホトントの博物館にある 1 個を除き， 18 断片が 19 世紀末の再発見時とほとんど同じ場所にある．

元来は極めて丁寧に磨き上げられていた碑文の表面は，現在残っているもので見る限り，前世紀とほとんど変わらないように見える．ただし例外は No. 6 の断片で，碑文面にコケが生え相当に痛んでいるため， Atlas の拓本と比べると比較にならないほど文字は読めない．酸性雨のため，今後もっと風化が進む懸念がある．

碑文の計測値については単純ではないので「碑文のスケッチ・復元図・写真」および「考察」の各項，さらに **Plates 14a, 14b, 14l, 14m, 14n** などを参照せよ．

また，次頁には，ヘイケルや Atlas の図版の番号，京大及び立命館大学に分蔵される拓本番号，並びにソグド語を含む断片の吉田の番号（これは Hansen 1930 の番号と同じ）の対応表(1)・(2)を提出する．野村のスケッチについても参考のために並記する．

碑文のスケッチ・復元図・写真：ヘイケルの推定復元図（Heikel 1892, pp. X-XI の間に挿入）が有名であり，実によくできているが，現在ではこれをそのまま踏襲するわけにはいかない．特に碑身の縦横の長さのバランスと礎石部の形状とには問題がある． Atlas 第 2 分冊の補遺によれば，ラドロフの復元図 (Atlas, pl. XXX-1) は編集段階で乱れがあったということで，やや残念である．6 匹の龍が彫られていた碑頭部すなわち螭首についてはヘイケル図の外，ラドロフの図 (Atlas, pls. XXX-1 & 4) も役に立つが，これらの図ではいまひとつ分かりにくかった 6 匹の龍の相対的位置関係が，今回のバヤルのスケッチによって明らかになるであろう **(Plate 14p)**.

かなり大きな帯状の周縁を持つ球形の石（直径 61 cm, 周縁部はそれよりさらに 7～8 cm せり出す，高さ 64 cm, 周縁より上の高さ 30 cm）は一体何を表わし，何処に使用されていたのか一見しただけでは分からないが，ヘイケル・ラドロフ両者ともそれを碑頭の上に載っていたものとして復元している．その根拠はおそらく碑頭の上端中央部にわずかながら「へこみ」があることであろう．その正否については保留せざるを得ない．しかし本碑文の内容がきわめてマニ教的であることは今や明らかであるので，もし碑頭の上にさらにこのような帯状の縁を持つ球形の石が載っていたとしたら，それはマニないしマニ教高僧の象徴である帽子 (cf. Le Coq 1913, pl. 1; 森安 1991, pl. XVII-b; 森安 1997, pp. 53-54, pls. III-IV) を表現したものと考えられるのではなかろうか．あるいはそれを，その形状から，マニ教にとってやはり重要な意味を持つ日月ないし日輪とみるむきもあるかもしれないが，帯状の縁のあたりには花模様が陰刻されている (Atlas, pl. XXXV-3) ので，そのような見方は無理であろう．逆にこの事実は，ルコックがトゥルファンのマニ教寺院址Kから将来した壁画の中のマニ教高僧の帽子に花模様があったことと符合するのではなかろうか．

我々は今回，礎石部についての推定復原図 **(Plate 14q)**, 碑身本体については計測結果に基づく数値を記入した模式図 **(Plate 14a)**, 碑頭についてはバヤルによるスケッチを基にした模式図に数値を記入したもの **(Plate 14m)** の 3 種を掲げ，ヘイケル図を修正するよすがとしたい．

写真については次を参照．ド=ラコストのものも今となっては貴重である． Heikel 1892, pls. 45-63; Atlas, pls. XXX-XXXV; De Lacoste 1911, pls. 15, 17; 野村 1937, pp. 465-468.

拓本所蔵機関：サンクト=ペテルブルグ，アジア博物館 (cf. Hansen 1930, p. 4); パリ，アジア協会（ド=ラコスト採取．ただしロシア隊がサンクト=ペテルブルグに将来した 2 断片の分は含まれない）；北京図書館善本部（戦備庫，善拓 274「回鶻毗伽可汗（聖文神武）碑」）；北京，中央民族大学図書館；京都大学総合博物館＋立命館大学文学部；モンゴル国科学アカデミー歴史学研究所（ごく一部のみ）；大阪大学文学部（ごく一部のみ）．

考察：もともと本碑文は 3 種の文字の書かれた碑身本体と，礎石にあたる亀趺と，碑額を含む碑頭部と，さらにヘイケル・ラドロフ説に依拠すれば，碑頭の上に載ると思しき球形の円頂部との 4 部から構成されていた．石質は，京都大学の石坂恭一教授の分析によれば，ピンク色のカリ長石が最も多く，石英と斜長石はほぼ等量の粗粒黒雲母花崗岩である．確かに見た目にもピンク色がかっている．

我々の新編号の No. 7 の断片にはソグド語面が 2 面（正面 No. 7a, 側面 No. 7b），ウイグル語面が 1 面 (No. 7c) あり，碑文の正面と裏面さらには側面を残している．どの面も既に拓本が発表されていたが，相互の関係については十分注意が払われてこなかった（野村 1937, p. 468 に不十分な記述があるのみ）．このことは森安の予備調査によって明らかにされたこと (cf. 吉田 1995, p. 28) であり，これによって碑身の厚さが 70 cm 前後であることが判明し[1]，ソグド文面が従来考えられていたよりもはるかに長いことが初めて認識された．

碑文を構成する主要な断片が失われているために，今回の調査で多くの新発見を期待することはできない．調査の主

---

[1] Радлов 1892a, pp. 4-5 で 90 cm, ATIM, Band 1, Lieferung 3, p. 283 で 1 アルシン 6 ヴェルショーク≒ 98 cm としていたのは全くの誤りである．

断片 No. 対照表

(1) Atlas 図版との対照表

Atlas	記　述	Bichees	Heikel	野村	京大・立命	吉田・Hansen	北京図書館
XXX-3	碑頭上の球状物体	15	45				
XXXV-3	同上のレリーフ						
XXX-4	碑頭の本体	16	46, 47	468			
	同上の破片	17	46, 47				
XXX-5	碑頭の小断片（在ホトント）	19	48				
XXXV-4	同上底部のレリーフ						
XXXV-1	ルーン面碑額	16		466			
XXXV-2	漢文・ソグド面碑額	16				title	有
XXX-6	亀趺中央ホゾ穴の一部	1	63				
XXX-7	亀趺本体の一部（大）		57?				
XXX-3	亀趺本体の一部（小）						
XXXI	漢文面上部	8	53, 56下	465	京大		有
XXXI	漢文面中段		54, 56上	465	京大		有
XXXII-1	ソグド面上部・漢文面上部右端		58, 59, 60	467	京大	Fr. 1	有
XXXII-2	ソグド面中段	6		466	立命2	Fr. 2	有
XXXII-3	漢文右端・ソグド面左端中段	9a		466	立命2	Fr. 3	有
	同上のルーン面（文字破損）	9b					
XXXIII-4	漢文右端・ソグド面左端中段			467	立命12	Fr. 4	有
XXXIII-2	ソグド面中段	7a	61	468	立命8, 10, 11	Fr. 6	有
XXXIII-3	ソグド面下端	13		466		Fr. 7	有
XXXIII-4	ソグド側面	7b	57	468	立命9	Fr. 9	有
XXXIII-5	ソグド面（位置不明）					Fr. 8	
	ソグド面下端 XXXIII-3 と接合	10a					
	同上のルーン面・無文字	10b					
XXXIV-1	漢文下段上部		55		京大		有
XXXIV-2	漢文下段下部						
XXXIV-3	漢文下段下部右端						
	漢文正面・位置不明	5			立命1		
	ルーン面（ソグド面の一部・位置不明）					Fr. 10	
XXXV-5	ルーン面（ソグド面上部の裏）						
XXXV-6	ルーン面（XXXIII-2, 4 と同じ石）	7c	51	468	立命7		
XXXV-7	ルーン面・位置不明	14	52	466			
XXXV-8	ルーン面・位置不明	12	50	466	立命6		
XXXV-9	ルーン面・位置不明		52	466	立命5		
XXXV-10	位置不明						
XXXV-11	位置不明						
XXXV-12	位置不明						
XXXV-13	位置不明						

※ pl. XXXIV-2 & 3 は，ヤドリンツェフがサンクト=ペテルブルグへ将来したので，多分どこかの博物館に収蔵されているであろう．この他に写真等がない Fr. Paris がある (cf. Chavannes / Pelliot 1913, p. 178).

眼は碑文を復元するための計測や，構成部分（主に亀趺と碑頭）の確認作業ということになる．漢文面・ソグド面・ルーン面の行数の復元にあたっては，現地での実測値ならびに京都大学と立命館大学に分蔵される本碑文拓本の計測値とを参考にしている．これらから碑文の各面の行数を推測すると次の通りである：

・漢文面（正面中央より左側面まで）：34 行．縦書き．正面 19 行（実数）＋面取りされた部分 1 行（実数）＋側面 14 行（推定）．推定の根拠は拓本の漢文は 10 行で 44～46 cm あるから．

・ソグド面（正面中央より右側面まで）：45行．縦書き．正面27行（推定）＋面取りされた部分 1 行（推定）＋側面 17 行（推定）．推定の根拠は拓本のソグド文は行間が，正面では 3 cm 強，側面では 3.5～4 cm あるから．ラドロフは正面を 31 行と推定している (ATIM, Band 1, Lieferung 3, p. 283）が，おそらく我々と行間の数値の見積もり方が違うのであろう．

・ルーン面（反対正面全体）：行数，最大で 116 行程度（下記参照）．横書き．1 行に 70～75 文字程度（語

(2) ビチェース番号による対照表

Bichees	Atlas	記　述	Heikel	野村	京大・立命	吉田・Hansen	北京図書館
1	XXX-6	亀趺中央ホゾ穴の一部	63				
2							
3		丸みあり					
4		丸みあり					
5		漢文正面・位置不明			立命1		
6	XXXII-2	ソグド面中段		466	立命2	Fr. 2	有
7a	XXXIII-2	ソグド面中段	61	468	立命8, 10, 11	Fr. 6	有
7b	XXXIII-4	ソグド側面	57	468	立命9	Fr. 9	有
7c	XXXV-6	ルーン面	51	468	立命7		
8	XXXI	漢文面上部	53, 56下	465	京大		有
9a	XXXII-3	漢文右端・ソグド面左端中段		466	立命2	Fr. 3	有
9b		同上のルーン面（文字破損）					
10a		ソグド面下端，No. 13 と接合					
10b		同上のルーン面・無文字					
11							
12	XXXV-8	ルーン面・位置不明	50	466	立命6		
13	XXXIII-3	ソグド面下端		466		Fr. 7	有
14	XXXV-7	ルーン面・位置不明	52	466			
15	XXX-3	碑頭上の球状物体	45				
	XXXV-3	同上のレリーフ					
16	XXX-4	碑頭の本体	46, 47	468			
	XXXV-4	同上底部のレリーフ					
16	XXXV-1	ルーン面碑額		466			
16	XXXV-2	漢文・ソグド面碑額				title	有
17		同上の破片	46, 47				
18							
19	XXX-5	碑頭の小断片（在ホトント）	48				

※ No. 8 は最も大きな石の右上方のごく一部である．ある段階でこの部分が割れてしまったらしい．
※ No. 9b には本来ルーン文字があったはずであるが，現在は表面が痛んでいて，1 文字も残っていない．
※ Nos. 10a, 10b は以下に考察するように，従来は碑文の上端を構成する断片であると考えられていたらしい．今回，碑文の下端を構成する No. 13 と接合することが発見され，正しい位置に復元することができるようになった．

と語を区切る記号：も含む）．推定の根拠は 20 cm の中に 8 ～ 9 文字が入っているから．

碑身の高さは不明である[1]．ただし碑身の幅が 176 cm であることは判明している[2]ので，かりに横と縦の比率が 1：2 であったとすると，高さは 352 cm になる．この高さであれば，漢文の 1 行の文字数は 78 文字程度であったと考えられる．その推定の根拠は，拓本の漢文は縦 10 文字で約 45 cm あることである．因みに ATIM, ibid., p. 285 では漢字 1 文字分のスペースは 1 ヴェルショーク≒4.445 cm 四方であるといっており，我々の数値と一致する．一般に利用されている Schlegel 1896 及び羽田 1957 のテキストでは 1 行に 75 文字を復元している．しかしながら断片 No. 5 は，拓本のとれる平らな漢文面の横幅は 61.5 cm しかないが，石全体の横幅が 73～74 cm あるので，最大幅が 71 cm しかない側面に収まりきらず，従って側面ではなく正面に属することにならざるをえない．しかもその断片には，平らな漢文面で 13 行分の幅があり，1 行で確実に 7 文字以上残っている．これは既に知られている断片の 46～49 文字目に設定されている空白部[3]か最下段かのいずれかに置かざるを得ない．もし断片 No. 5 が全体の 46 文字目以下に納まるとしたら少なくと

---

(1) ラドロフは Радлов 1892a, pp. 4-5 で 200 cm とし，ATIM, ibid., p. 283 で 4 アルシン 12 ヴェルショーク≒ 338 cm とするが，前者は何かの間違いである．

(2) Радлов 1892a, p. 5 で 180 cm とし，ATIM, ibid., p. 283 で 2 アルシン 8 ヴェルショーク≒ 178 cm とするのを，我々の測定結果に基づき修正する．

(3) 上段の大断片と中段の大断片とは漢文面第 8 行目で接続しているため，各行の 1 文字目から 45 文字目までは確実に復元できる．問題はその下に来る中小断片の相対的位置であり，シュレーゲルは Heikel 1892, pl. 55 = Atlas, pl.XXXIV-1 にあるテキストの最上端

も3文字以上長くなって78文字以上，もし最下段に来るとしたら7文字以上長くなって82文字以上と見積もらなければならない[1]．仮に1行に80文字あったと想定すると碑身の高さは360 cm程度になる．

参考：No. 5断片（1行目から19行目までのどこに入るべきか不明）

この断片はヘイケル・ラドロフ・シュレーゲルらには知られていなかったが，王国維・羅振玉には知られており，また北京中央民族学院 (cf. 程溯洛 1994, p. 106) や立命館大学所蔵拓本にも含まれている．

*01　□□
*02　□□□
*03　□□□□□
*04　□□□□□□□
*05　□□□□□□□
*06　□□□□□□□
*07　□□□□□□□
*08　□□□□□□□
*09　□□□□□□
*10　□天□□□少
*11　□□□□~~孤~~ → 狐
*12　□山以為
*13　進部

「進」は「庭」かもしれない．

碑身本体の高さが360 cmであったとすると，ルーン文字の行は124行程度入る．その根拠はルーン文字の行間の平均が2.9 cmあることである．ところでラドロフの報告 (ATIM, Band 1, Lieferung 3, p. 291) によると，碑額とルーン文の第1行との間には3～4ヴェルショーク（13 cm弱～18 cm強）の空白があるという．しかしどうやってラドロフはこのような空白部を見つけ得たのであろうか．おおいに疑問である．一方，今回，我々は初めて断片No. 10のソグド文と断片No. 13のソグド文とがぴたりと接合することを発見した．その結果，断片No. 10の大部分を構成する大きなホゾは，碑身の上端で碑頭を受けるためのホゾではなくて，下端で基台（我々は亀趺と考える）に填め込まれていたホゾであることが判明した．No. 10bはソグド文を持つNo. 10a面の裏にあたり，本来ルーン文字があるはずの面である．表面は平滑で破損が見られないので，もとから文字が刻まれていなかったことが分かる．つまりルーン面の下方には文字が刻まれず，空白のスペースがあったのである．どうやら，ラドロフは，この断片No. 10のホゾを碑身上端のホゾとみなし，ルーン面の冒頭に空白部があったと誤解したようである．実際，ルーン文字面No. 10bの底部からの高さは23.5 cm（その下にホゾがある）だが，表面が傷んでいない部分の高さは確かに3～4ヴェルショークである．しかし表面が痛んでいない部分は23.5 cmあるうちの上方に相当するから，23.5 cmの全体を空白部とみなすべきである．我々の計算ではそれは8行分に当たる．空白部はもっと上方にまで及んでいた可能性があるから，結局，ルーン面は最大で116行程度であったことになる．因みに，Chavannes / Pelliot 1913, p. 178で言及する同碑文ソグド面の上端の小断片とは，我々の断片No. 10と同じものであろう．

碑頭は高さ130～133 cm + 16～17 cm（この16～17 cmは碑頭部の下端にある碑身との接合部で整形してある部分の高さ），推定の横幅222 cm, 厚さ72.5 cm.

次に表裏両面にある碑額について記述する．碑額は両方とも，長方形の上に平たい二等辺三角形が載った「圭」字形の五角形である．比較的残存状態の良いルーン面の碑額には，幸い二等辺三角形の頂点部と長方形の左辺が残っており，左辺から中央までがちょうど30 cmあるので，本来の横幅は60 cmと復元できる．またその高さは，二等辺三角形の高さが実測で19 cm, 長方形の部分の高さが推定で54 cmであるので，全体としては73 cm前後となろう．文字があるのは

を50文字目に設定し，王国維本・羽田本もそれに従っている．確かに，第11行目と第17行目の文脈に着目し，本碑の漢文に4字から成る句作りが多いことを考慮すれば，そこに最低4文字分は必要であり，シュレーゲルの想定は一応承認されよう．しかし，そこにもっと多くのスペースがあったとしても，矛盾は生じないのである．

[1] 羽田本はシュレーゲル本を底本にしたため，1行75文字になっているが，羽田自身はこれでは短すぎることを見抜いていた（羽田 1957, pp. 314-317）．その最大の根拠は第4代の合骨咄禄毗伽可汗（すなわち頓莫賀達干）の入るべきスペースについての考証である．それは十分首肯に足るもので，たしかに最低80字はないと不都合が生じるのである．実は王国維本でも80文字目まで空白のスペースを作っていた．ただし，羽田が第7代の懐信可汗と第8代の保義可汗との間にもう一人可汗がいたはずであるとして論じているのは誤りである．懐信から保義へは直結するのであって，従来その間にもう一人いるとみなされてきた可汗が実在しないことは，既に山田信夫によって論証されている（山田 1951）．

長方形の部分だけで，二等辺三角形の内部には花模様の陰刻がある．多分，ソグド文・漢文面の碑額も同様であったろう．横書きで5行，毎行7文字ずつ現存しているルーン文字の碑題について，かつてラドロフ (ATIM, Band 1, Lieferung 3, pp. 291-292) は右側すなわち各行の冒頭には1字分欠けており，下端には1行文の脱落があるとしてテキストの復元を行ない，オルクン (ETY I, p. 85) もそれに追従した．その後，2行目冒頭の1字をŋではなくYと修正してayと読み改める以外，大枠はラドロフ説が定説化していたが，我々が正確に計測した結果，現存5行の下には1行ではなく4行分の脱落があったはずであることが判明した．それゆえ，そこの文章はラドロフ (ATIM, ibid.) の考えたような簡潔な体言止めではなく，ソグド語の碑題と同じような長い文章の形になっていたに違いない．そのソグド語の碑題が，ソグド語本文の1行目冒頭の文と同じであったことは， Atlas, pl. XXXV-2 に掲載された碑額の拓本写真より判読される4行のソグド文との比較により，ハンセンが明らかにした通りである (cf. Hansen 1930, p. 8)．碑額と本文1行目冒頭とが一致するという点では，漢文面も同様であり，本文1行目冒頭の 24 文字「九姓迴鶻愛登／里囉汨没蜜施／合毗伽可汗聖／文神武碑并序」が4行に分けて刻まれていたと考えられる．実際，アトラスの拓本写真では，碑額1行目末尾に「登」が見えるだけでなく，その前に「愛」の下側の残画が見え，2行目末尾には「施」の右半分の残画が見えている．従って，ソグド文・漢文面については碑額もちょうど半分ずつ使われており，右側にソグド文が4行，左側に漢文が4行あったことは疑いない． Atlas, pl. XXX-5 は Atlas, pl. XXX-1 に復元されている通りの位置に来る碑頭の一部であり，碑額の左下端が僅かに残存していることが注目される．ここが漢文碑題の最終第4行目の下端であったに違いない．

最後に亀趺と思われる断片について補記する．ヘイケルの推定復元図では礎石部は幾何学紋様になっている．一方，ラドロフはこれをライオン型とみたのである (Радлов 1892a, p. 5; ATIM, Band 1, Lieferung 3, p. 283) が，説得力はない．因みにラドロフは Atlas, pl. XXX-5 の解説の方でも同じ考えを表明しているが，ここで Atlas, pl. XXX-5 とあるのは Atlas, pl. XXX-7 のミスプリであることが，第2分冊の補遺より分かる．片山と林はやはり本碑文の礎石部は亀趺であったと考える．現在行方不明の足のある一部は Heikel 1892, pl. 62 に写真， Atlas, pl. XXX-2 にスケッチ， pl. XXX-7 に写真があるが，前者の巻尺の目盛から台座を含めた亀趺の高さを推測すると，約85cmと考えられる．現存の No. 1 は Heikel 1892, pl. 63 に亀甲紋部分を正面とした写真があり，また Atlas, pl. XXX-6 にもスケッチがある．今回， No. 1 の観察により，亀趺の背筋のカーブが確認され，それと 90 度の角度で，碑文を受けるホゾの一部や亀甲紋の長軸が推定された．ところが，野村栄三郎のスケッチ（野村 1937, p. 468）では，前記の行方不明の断片の上部の亀甲紋とホゾの端を含む側面スケッチがあるので，これらを合わせると，不明の断片に対する No. 1 のおよその位置関係が推定されるのである（野村作成図と片山作成 **Plate 14q** とを比較参照）．

なお森安担当「行動記録」には，以上の記述に含まれないところも多いので参照せよ．

碑文を読むためには，写真よりも拓本の方がはるかに有利である．現在，拓本を所蔵している機関は上記の通りである．その他に大谷探検隊の野村栄三郎が採拓したものがあったはずであるが (cf. 野村 1937, p. 467; 羽田 1957, p. 310), 現在行方不明である．一方，パリにはかつてド=ラコストが作成した拓本（実際にはいわゆる拓本ではなく，碑面に紙を押し込んで型をとったもので，鏡を使わないと読めないもの）がある．ハミルトンによれば，これは比較的質の良い資料で，文字を読む作業は大変ではあるが，ラドロフの拓本より多くの情報が得られる場合があるようである．ド=ラコストの拓本に関する情報は， Hamilton 1990, pp. 125-133 に見られる．解読には原碑を直接見たり写真を撮るより，拓本の方が優れているとはいえ，本碑文の拓本はどこでも貴重本扱いで容易に接することができない．例えば北京図書館にあるものは戦備庫に保管されているため，いちいち館長のサインが必要である．そればかりでなく，たとえ接することができてもあまりに巨大なため，読む作業がきわめて困難である．一般にはラドロフの Atlas に掲載された拓本の縮小写真が最も利用しやすい．ただしあくまで原拓の写真版を使用すべきであって，ラドロフの修正 (Retouch) 版に依拠するのは危険である．

ルーン文面とソグド文面に関して，今回，本報告書でテキストを提出するのは，我々が拓本を採ることができた断片に限られる．ただし現在の保存状況でテキストを作成すれば，従来発表されているテキストより情報量が少ないものになってしまう．それ故，ここではラドロフの拓本写真と今回とった拓本の2つを参照してテキストを作ることにした．ルーン文字で書かれた部分がウイグル語であって，ヘイケルやラドロフの報告書でウイグル文と説明されていたものは実はソグド文字ソグド語である．このような重大な誤りを正したのは，ミューラーであった (Müller 1909)．ルーン文字は8世紀前半（どんなに早くても7世紀末）の突厥第二可汗国の諸碑文で使われ始め，東ウイグル可汗国第2代葛勒可汗（磨延啜，在位 747～759 年）の諸碑文でも踏襲されているが，この両者の書体と本カラ=バルガスン碑文のルーン文字書体とではかなり大きな違いがある．この差異に気付いたのはトムセンであるが，森安はその歴史的背景にまで考察を及ぼし，そこにマニ教の影響を認めている（森安 1997, pp. 58-65）．

漢文面に関しては，現地にはごくわずかしか残っていないので，今回の報告書に含める意義は薄い．これまでの移録文と森安が見ることの出来た拓本とを比較検討した結果により，最も信頼できるテキストを，近い将来，別に提出したい．翻訳については，シュレーゲルの独訳が最もよく使われるが，その訳に誤りの多いことは既にペリオ・ハロウン・羽田らの指摘する通りであり，マの現代トルコ語訳もオゲルが手厳しく批判している．最新テキストを公表する際に，それに依拠した英訳ないしは仏訳を付けるつもりである．

参考文献：無名氏（撰）『和林金石録』（実際は李文田の撰，『靈鵜閣叢書』所収）；Heikel 1892, pp. XI-XIII, XXVIII-

XXXVIII, pls. 44-63; Радлов 1892a, pp. 4-5; Atlas, pls. XXX-XXXV; ATIM, Band 1, Lieferung 3, pp. 283-298; Schlegel 1896; Chavannes 1897; Müller 1909; Chavannes / Pelliot 1913, pp. 177-199; 王国維「唐回鶻毗伽可汗聖文神武碑圖」（宣統己未年＝1919年作成），『古石圖録』（上海・廣倉學窘印行『芸術叢編』）所収; 王国維「九姓廻鶻可汗碑跋」『観堂集林』巻20; 石田 1925, pp. 167-171 ＝石田 1973, pp. 293-297); 李文田（撰）羅振玉（校定）『和林金石録』 1929 （『石刻史料新編』第2集，15, 台北，新文豊出版公司，1979, pp. 11465-469）; Hansen 1930; ETY I, pp. 85, 96; ETY II, pp. 31-54; 野村 1937, pp. 465-469; Henning 1938, p. 550 ff.; 羽田 1957, pp. 303-324; 羽田 1958, pp. 39-43; 吉田 1988; Hamilton 1990; Yoshida 1990; 程溯洛 1994; 薛宗正 1997.

ソグド面テキスト・翻訳（吉田　豊）　**Sogdian Part of Qara-Balgasun Inscription (Yutaka YOSHIDA)**

従来の研究としては Müller 1909; Hansen 1930; 吉田 1988; Hamilton 1990; Yoshida 1990 があげられる.

以下のテキストでは各断片の中での行と，碑文全体の中での行を同時に与えてある．すなわち No. 6 の 1 / 4 は，この断片では第 1 行で，碑文全体では第 4 行に当たることを示す．碑文の側面からの断片 No. 7b では，碑文全体における行数は推測でしか分からないので， 1/*35 のように，後者には * をつけて不確定であることを示した.

No. 6 = Yoshida Fr 2

Text

1/4	]+ 'xš'w(')[nh
2/5	p]yl-k' x'γ'n [
3/6	]+ wm't (cywy)δ 'xš['w'nh
4/7	kw](l pyl-)k' x'γ'n (tn)p'r p'(r)[ycw
5/8	]wxs pr (prn) ZY prnxwntkyh +[
6/9	](k)w 'sp'δy pr'yw (ypwrγ)+++'s(tn)w s'r x[rt
7/10	](s)t'kw '(s)p('δy pr'yw) mδy ('wy)t(w)k'n z-'yh[
8/11	](')'try swc('y) δynh β(γ)y (mr)m'ny δ(ynh p)tcxš(δ)['
9/12	]ptkryt ZKwy xr(t)k++(k)w (n)'m (z)-'y(h) s't ''try (s)[wγt-
10/13	](k)ynw wm't (Z)Y 's++++y (γrβ) 'xš'wncykw (')rk(h) +[
11/14	]ty pr RBkw p[tz-'n] ZY γrβ'ky'kyh γny ZY mrt('ny-)'(kh)[
12/15	Z](Y) mrt'nyh s'(r) L' p(t)+++nty ZY δynh γrβ'kyh [
13/16	M](N) ''z-y m(rts'r) MN s't 'yδ'yty yxwst'y ZY 'ny'z-'nk[
14/17	'xš](y)-wn'k wm't ky pr y'kwβ βr'yšt'k 'xšnyrkw xyp[δ
15/18	x]ypδ δsty' pr (wy)sprδ p'š'y rtšy 'xš'w'nh ''st w'r'kw ZY +[
16/19	'x]š'w'nh (xwty) pty-cxš rtms 'δry xrl-wγt n'βt MN γnt'k +[
17/20	twrky]š xwβ x'γ-'n ky pr δs' p'δ 'δry twrkyš 'xš'w'nδ'r wm't ZY +[
18/21	]+ 'wt'kcykt xm'yr ZY 'xš'w'nδ'r s'r prm'nh βr'šy wyš'nt [
19/22	]'xšy-wn'k prw c'δr 'wt'kt wyptm'ky γr'n δynmyncw (p)[ts'k
20/23	'βc'np]δy xr'mty L' wm't pts'r c'nkw βγy 'xšy-wn'k[
21/24	]c'δr ctβ'r kyr'n p[

Translation

1/4	... ... kingdom ... ...
2/5	... ... Bilgä Qaghan ... ...
3/6	... ... was ... from that kingdom ... ...
4/7	... ... Kül Bilgä Qaghan abandoned (his) body (= died) ... ...
5/8	... ... he ***ed in respect of (his) majesty and fortune ... ...
6/9	... ... together with the army he [wen]t to ***stan (unidentified place name) ... ...
7/10	... ... together with the *** army, here in the land of Ötükän ... ...
8/11	... ... (in stead of?) fire-burning religion (you) accept God(like) Mār Mānī's religion ... ...
9/12	... ... [he burnt] idols at the place named Xartak***ku, all in the fire ... ...
10/13	... ... he was ... and ... he [accomplished] many works of kingdom ... ...
11/14	... ... in respect of much knowledge and wisdom (and in respect of) ability and manliness ... ...
12/15	... ... in respect of [ability] and manliness he was not ... and the religious knowledge ... ...
13/16	... ... since (his) birth he was distinguished and was different from all the (other) people ... ...
14/17	... ... he was a ruler who [provided] himself with the characteristics of Angel Jakob ... ...

15/18 ... ... he threw away [the enemy] by his hands everywhere and took the kingdom (which became) empty and ... ...
16/19 ... ... he himself accepted the kingdom. Again, the people of Three Qarluqs ... from the evil [Tibetan people] ... ...
17/20 ... ... the king of [Türge]š (people), the Qaghan, who was a ruler of the "Ten-Arrows Three Türgeš (people)" and ... ...
18/21 ... ... he sent orders to the local amīrs and rulers. They ... ...
19/22 ... ... the ruler (established?) a measureless and grand religious m[onument] ... ...
20/23 ... ... he did not proceed [from the wor]ld. When the god(like) ruler ... ...
21/24 ... ... downwards to the four directions ... ...

和訳

1/4 ・・・王国・・・
2/5 ・・・ビルゲ可汗・・・
3/6 ・・・であった．その王国から・・・
4/7 ・・・キョル=ビルゲ可汗は身体を棄てた（=死んだ）・・・
5/8 ・・・栄光と幸運において＊＊＊した・・・
6/9 ・・・＊＊＊の軍隊とともに＊＊＊スタンに行った・・・
7/10 ・・・＊＊＊の軍隊とともにここオチュケンの地に・・・
8/11 ・・・あなたがたは，火を燃やす宗教［のかわりに］神であるマール=マーニーの宗教を受け入れなさい・・・
9/12 ・・・偶像を＊＊＊という名前の土地ですべて火の中に［燃やした］・・・
10/13 ・・・であった．そして＊＊＊多くの国家的仕事を［行った］・・・
11/14 ・・・偉大な知識と智恵で，技倆と男らしさで・・・
12/15 ・・・［技量］と男らしさで［劣る］ことなく，宗教の智恵で・・・
13/16 ・・・誕生以来すべての人たちとは区別され違って［いた］・・・
14/17 ・・・（彼は）天使ヤコブの特徴でわが身を［飾る？］王で・・・
15/18 ・・・自らの手で至る所に投げ棄て，王国を奪取し空に・・・
16/19 ・・・王国を自ら受け取った．そしてまた三姓葛邏禄は悪い［チベット］から・・・
17/20 ・・・［トゥルギ］シュ王（である）可汗は十箭三姓突騎施の支配者であった・・・
18/21 ・・・各地のアミールと支配者に命令を送った．彼らは・・・
19/22 ・・・支配者は下の地方で計り知れないほど偉大な宗教の秩序（あるいは建造物か？）を・・・
20/23 ・・・［可汗はこの世から］出発していなかった（=まだ死んでいなかった）．それから神である支配者（=可汗）は・・・
21/24 ・・・下で四方に・・・

No. 7a = Yoshida Fr 6

Text

1/10](t) ctβ'r pt(šm')[r
2/11 š]m'xw L' ptcγt kwnδ(')[
3/12]++++ (c'δr) c'nkw βγy (mry) nyw(rw)'n mwz-'k(')[
4/13](tn)p('r) p'(ry)cw tnkryδ' p(wlmy)s kwl-[k p]yl-k' x['γ'n
5/14]šyr xwpw ZY pts'γty z-γtw δ['r]t ZY wyδp'[t
6/15](Z)Y m(rt'n)yh MN s't ''z-(')yty (yx)[w](st)['y
7/16] ZY cntr pr δynh cywyδ p't mr[x]w[
8/17]y nβ'nt w'št nβyr'k +m+(r)[
9/18](ty)n x(')γ-'ny β'try(n)cw ++w++[
10/19 γ](r)β pr(wr)t'kw xw(p)[w
11/20]+'m' x'γ-'n +++[
12/21 n](γ)'wš'kt [
13/22 pt](s)'r m[
14/23](δ)['r](t)[

Translation

1/10 ... ... four (in) number ... ...

2/11 ... ... you cannot accept [the religion] ... ...
3/12 ... ... downwards. When god(like) Možak (named) Newruwân ... ...
4/13 ... ... [When] he (= the Qaghan) abandoned (his) body (= died), Tängridä Bolïmïs Bilgä Qaghan [succeeded] ... ...
5/14 ... ... he held [the kingdom] very well and in order. Then ... ...
6/15 ... ... [in respect of his ability] and manliness [he was] distinguished from all the noblemen ... ...
7/16 ... ... [outside in respect of state] and inside in respect of religion. Because right up to ... ...
8/17 ... ... he stood beside ... as a consultant. *** ... ...
9/18 ... ... he oppressed the Qaghan of ***... ... ...
10/19 ... ... many times well ... ...
11/20 ... ... *** Qaghan ... ...
12/21 ... ... auditors ... ...
13/22 ... ... afterwards ... ...
14/23 ... ... has ...ed ... ...

和訳

1/10 ・・・数にして４つの・・・
2/11 ・・・あなたがたは（この）宗教を受け入れることができない・・・
3/12 ・・・下の方へ．神であるネウ=ルワーン慕闍・・・
4/13 ・・・［可汗が］身体を棄てた（＝死んだ）とき，テングリデ=ボルミス=ビルゲ可汗が跡を継いだ・・・
5/14 ・・・彼は［王国を］とても良く整った状態で保持した．そのとき・・・
6/15 ・・・［技倆］と男らしさにおいてすべての自由人たちから区別されていた・・・
7/16 ・・・［外側では国家に関して］内側では宗教に関して．なぜならまさに・・・
8/17 ・・・彼は＊＊＊のそばで相談役であった．・・・
9/18 ・・・彼は＊＊＊可汗を圧迫した・・・
10/19 ・・・何度も・・・
11/20 ・・・＊＊＊可汗・・・
12/21 ・・・聴者たち・・・
13/22 ・・・それから・・・
14/23 ・・・彼は＊＊＊した・・・

No. 7b = Yoshida Fr 9

Text

1/*32]+++[
2/*33](βγ)y (ZY) δyn(h)[
3/*34]+++ (pr)'yw γr'n (yp)['k
4/*35]'sp(t)'kw prβ'yr(')t[
5/*36](n)y ZY γr'm'kw γrβ z-(ynt)[ ]++[
6/*37]+ w'nkw pr RBkw γrβ'ky'kh cntr δynh ZY[
7/*38]++++(t) ypγw mγ-wnw t'z-'yk'n'k 'xš'w'nh[
8/*39]+ ZY šyrn'm pr ctβ'r kyr'n wyδβ'xs w'nkw ZY (w)+[
9/*40](w)βyw ZY ms ctβ'r kyr'nw 'xš'w'nty (š)[
10/*41]''l-pw pyl-k' x'γ'n [
11/*42](k)y mδy 'skw'nt[
12/*43]+ m+[

Translation

1/*32 ... ...
2/*33 ... ... God and the religion ... ...
3/*34 ... ... together with ... great anger ... ...
4/*35 ... ... (so that) he might explain (it) completely ... ...
5/*36 ... ... and wealth and many [weapons?] ... ...
6/*37 ... ... thus with great wisdom as regards to religion within and ... ...
7/*38 ... ... Yabghu ... the whole Islamic dominion ... ...

8/*39 ... ... and (his) fame spread in the four directions so that ... ...
9/*40 ... ... both in the four directions as well, kingdoms ... ...
10/*41 ... ... Alp Bilgä Qaghan ... ...
11/*42 ... ... who are staying here ... ...
12/*43 ... ...

和訳

1/*32 ・・・
2/*33 ・・・神と宗教・・・
3/*34 ・・・とともに大きな怒り・・・
4/*35 ・・・彼が（それを）完全に説明するように・・・
5/*36 ・・・そして富と多くの［武器？］・・・
6/*37 ・・・かくして内側では宗教に関する偉大な智恵によって・・・
7/*38 ・・・葉護はすべての大食の国を・・・
8/*39 ・・・そして（彼の）名声は四方に広まったので，・・・
9/*40 ・・・四方においても，国々・・・
10/*41 ・・・アルプ=ビルゲ可汗・・・
11/*42 ・・・ここに留まっているところの・・・
12/*43 ・・・

No. 9 = Yoshida Fr 3

Text

1] B L A N K 'k(r)+(t)[
2]+wl tykyn 'wk'[
3]++l 'wk' BLANK[
4]t 'wt(s)['r
5]++++[

Translation

1 ... ... *** ... ...
2 ... ... Köl Tigin Ügä ... ...
3 ... ... ***l Ügä ... ...
4 ... ... from ... ...

和訳

・・・＊＊＊・・・
・・・キョル=テギン=ウゲ・・・
・・・＊＊＊ル=ウゲ・・・
・・・から・・・

Nos. 10a + 13 (= Yoshida Fr 7)

Text

10a 1/12](n)'ynty
2/13 c'n]kw
3/14]
13 1/15]x(y)
2/16](k)['r]'k +++nw c'nkw
3/17]y w'δy nysty L' wm't pr
4/18]+ ZY krt'k δβr'ntskwnw rtms γrβ
5/19](t)δ'rt 'rt'wty ZY n(γ)'wš'kty γr'n wrcy-'w'kw
6/20](y) '[n](β)'nt 'nβrz-kr w'sty rtms pr mγ-wn t'z-yk'n'y
7/21](m)wmyn xm'yr prm MN prnxwnt'kw 'xšy-wn'k
8/22]tδ'rt ZY ZKwy mγ-wnw 'xš'w'nyh pr [ ]
9/23]++++[ ]

Translation

10a 1/12 ... ... [the spread] of ***s [was without interference] ... ...
2/13 ... ... when [Qutluγ Bilgä Qaghan proceeded from the world] ... ...
3/14 ... ...
13 1/15 ... ...
2/16 ... ...when ... ...
3/17 ... ... he was not seated on the throne. With ... ...
4/18 ... ... They are giving religious ceremony(?). Also many [times] ... ...
5/19 ... ... he **ed (and) [he established] great peace for the electi and auditors ... ...
6/20 ... ... he appointed ... as an Anvarzkar attached to ... Again in the whole Islamic [dominion] ... ...
7/21 ... ... up to Mumin Amīr (= Khalif) for [fear] of the fortunate sovereign ... ...
8/22 ... ... he ***ed and in the whole kingdom with ... ...
9/23 ... ...

和訳

10a 1/12 ・・・＊＊＊の［普及は遮断されることがなかった］・・・
2/13 ・・・［クトゥルグ=ビルゲ可汗がこの世を去った］とき・・・
3/14 ・・・
13 1/15 ・・・
2/16 ・・・したとき・・・
3/17 ・・・彼は玉座に就いていなかった．＊＊＊で・・・
4/18 ・・・彼らは宗教儀式（？）を与えている．また何［度も］・・・
5/19 ・・・彼は＊＊＊した．そしてマニ教僧侶と聴者たちに大きな安寧を［与えた］・・・
6/20 ・・・彼は＊＊＊を＊＊＊に付随したアンヴァルズカルに任命した．再び大食の国で・・・
7/21 ・・・ムミン=アミール（=カリフ）に至るまで，幸運なる支配者に対する［畏敬］から・・・
8/22 ・・・彼は＊＊＊した．そして全領土で＊＊＊で・・・
9/23 ・・・

ルーン面テキスト・翻訳（森安孝夫）　Runic Part of Qara-Balgasun Inscription (Takao MORIYASU)

従来のテキストとしてはラドロフによるもの (ATIM, Band 1, Lieferung 3, pp. 291-297) と，それをやや修正したオルクンのもの (ETY I, pp. 85, 96; ETY II, pp. 31-39) があるだけである．しかも，あまりに断片的なので翻訳は付けられておらず，前者に語彙集があるのみである．

以下，翻字 (Transliteration) はバットルガとの共同成果であるが，転写 (Transcription) と翻訳は森安の責任で提出する．

碑額　Title in the Frontispiece

	Transliteration	Transcription
1	[B]W tŋ r i k n	bu täŋrikän
2	[Y] tŋ r i d a Q	[ay] täŋridä q-
3	[W]T B W L m s L	ut bulmïš al-
4	[p]b i l g a tŋ	p bilgä täŋ-
5	[r](i W Y G W R)Q	ri uyγur qa-
6	[G N]/ / / / /	γan / / / / / /
7	/ / / / / / / /	/ / / / / / / /
8	/ / / / / / / /	/ / / / / / / /
9	/ /[b i t d m z]	/ / [bitidimiz]

Translation

[We have written] this [inscription in commemoration of] the god-like Uyγur Täŋri Qaγan (entitled) Ay Täŋridä Qut Bulmïš Alp Bilgä.

和訳

この主君アイ=テングリデ=クト=ブルミシュ=アルプ=ビルゲという（称号の）神なるウイグルの可汗［を称える碑文を / / / / / / / / / / 我々は書いた．］

訳注

ラドロフやオルクンはこの碑題を漢文面の碑題と同じように体言止めで復元したが，それは正しくなく，ソグド文のように主語・述語のある文章の形に復元すべき事については，上記の「考察」を参照せよ．

ソグド面第1行の碑題「この ay täŋridä qut bulmïš alp bilgä （という名の）神なるウイグルの可汗を称える記念碑を［我々は］書いた」（吉田 1988, pp. 32, 37），並びに漢文面第1行目の碑題「九姓迴鶻愛登里囉汨没蜜施合毗伽可汗聖文神武碑并序」と比較するならば，このルーン面の碑額の2行目冒頭に欠けている1文字が Y であり，それを ay と読むべきであることに，全く疑問の余地はない．であれば，その前にくる täŋrikän は称号の一部ではなく，それと切り離されるべきもので，以下の称号全体にかかる修飾語（形容詞）であるか，以下との同格語（名詞）のいずれかと考えられる． täŋrikän の意味については，おおまかにみて2つの解釈がある．かつての "sacred, divine" とする解釈にクローソンは納得せず，これを "devout, pious" (ED, p. 525) であるとしたが，ハミルトンはこれに反論を加えて再びかつての考えを支持し，これを君主・主君・支配者ないしそれに近い人の尊称と考えている (MOTH, pp. 51, 253). 私は基本的にハミルトン説に賛成である．

ところでソグド文の方で「神なるウイグルの可汗」と訳されている原文は βγγ 'wyγwr x'γ-'n であり，これは語順からみてウイグル文の täŋri uyγur qaγan に相当すると考えるのが自然である．そうであれば，ウイグル語の täŋri がソグド語の βγγ に対応することになる．ハンセンやスミルノヴァは既にそのように考えていた．しかるにリフシツがそれに反論し，ブグト碑文やテュルギシュのコイン銘文やカラ=バルガスン碑文に見られるソグド語の βγγ は「主君・主人」であって，決して「神・天」ではないと主張した．テュルギシュのコイン銘文を扱った護の論文は，リフシツ説に敬意を払いすぎたため論旨がいささか紛糾しているが，結局は護もリフシツ説を退け，コイン銘文の βγγ twrkyš x'γ-'n を「天の（または神なる）テュルギシュ可汗」と解しているのである（護 1992, pp. 189-195）．もはやリフシツ説に固執する必要はなく，本碑文ソグド語面の βγγ 'wyγwr x'γ-'n もウイグル語面の täŋri uyγur qaγan も均しく「神なるウイグル可汗」と訳してよい．

ではもとに戻って täŋrikän は一体どう訳すべきか．後続の称号全体にかけて「神聖な」という形容詞にとるべきか，それとも「神なるウイグル可汗」と同格の名詞ととるべきか． täŋrikän の用例を見る限り，やはりほとんどの場合は名詞として使用されており，しかも「我々の」という所有語尾を持っている例が多いのである．それゆえ，私はここでもこれを名詞ととり，ソグド語でも本来「神・天」を意味する βγγ が「主君・主人」に転用されていったように，古代トルコ語でも täŋri「天・神」が täŋrikän という派生語の形で「主君・主人」の意に転用されたものと考えたい．

No. 7c

	Transliteration	**Transcription**
1	/////// a //////////////	//////////////////////
2	/////// k i:s ///////////	//////////////////////
3	///// W G i:Q m(G)/ //////////	////////// qamaγ ////////
4	/////// i r:i l i n /////////	//////// elin-///////////
5	/////// Q a:N W G W š[k] //////	////// -qa nuγošak ///////
6	////////// :r g m a:i //////	/////// ärigmä //////////
7	//////// k i d a:y i g //////	/////// -kidä yeg[irmi?] ///
8	//// /[i](l)g r ü(:)k ü n:T W G š W Q ///	///// ilgärü kün tuγsuq ///
9	//// /:i s d p:Y ŋ i L Y W:W L . ///	///// ešidip yaŋïlayu //////
10	/// k i r ü:k ü n:B T š i Q //////	/// kerü kün batsïq /////
11	/////// l k / . a:(y)/ ////////	//////////////////////
12	/////// d i n B R a nč ////////	////// dinavaranč ///////
13	////////////// :y //////////	//////////////////////
14	////////////// /(m)/ ////////	//////////////////////

	Translation	**和訳**
1	//////////////////////	//////////////////////////
2	//////////////////////	//////////////////////////
3	////////// all //////////////	////////// 全ての //////////
4	//////// his country //////////	////////// 彼の国 //////////
5	//////// Manichaean auditors ///////	//////// マニ教信者 //////////
6	//////////////////////	//////////////////////////
7	////////////// twenty? ////	////////////////// 20 ? ///
8	///// eastwards towards the sunrise ///	////// 東方，太陽の生まれる方 ///

9	///// hearing /////, renewing ////////	////// 聞いて，新たにしつつ //////
10	/// westwards towards the sunset /////	/// 西方，太陽の沈む方 /////
11	//////////////////////////	//////////////////////////
12	////// Manichaean female priest //////	////// マニ教尼僧 //////////
13	//////////////////////////	//////////////////////////
14	//////////////////////////	//////////////////////////

訳注

No. 7c-5, nuγošak: 我々の拓本では N W //// のみ，立命館拓本でも N W G /// までしか見えないが， Atlas, pl. XXXV-6（その右端の図版）では N W G W š / と見える．ラドロフは Anuγuš アヌグシュという人名か何かだろうというが，全くの誤解である．オルクンは5文字目を š ではなく r と読む (ETY II, p. 38) が，それも正しくない．漢文・ソグド文の内容から知られる本碑文のマニ教的性格，さらに漢文面第 22 行に「聴士」とあり，ソグド文第 19 行と第 21 行に nγ'wš'k「聴者・聴衆」とあることを考慮すれば，これが N W G W š[k] = nuγošak であることが推測される．マニ教で一般信徒を指す「聴衆」という術語はマニ文字やウイグル文字では nγošak と書かれ，ルーン文字でも N G W š k と書かれているからである．実はこの点には早くにトムセンが気付き，ハンセンもそれに言及している (Thomsen 1910, pp. 300-301, footnote; Hansen 1930, p. 39)．しかしながら彼らの時点で知られていたのは，あくまで，普通には nïγošak と転写される形であって，まだ nuγošak という形は在証されておらず，推定に留まっていた．しかし今や，ルーン文字で N W G W š[k] と表記された例がわずか1つではあるが他にも見つかっているので (cf. 森安 1997, pp. 46, 49), かつての推定は確定したのである．後続の円唇母音に引きずられて， nï- が nu- に変化したに違いない．

No. 7c-6, ärigmä: 動詞 är- "to be" に連体形を作る活用語尾 -gmä が付いた形であろうか．あるいは ärigimä と転写して，ärig "advice" (ED, p. 221) に1人称所有語尾 +m と与格語尾 +ä が付いた形とみなすべきであろうか．

No. 7c-12, dinavaranč: 前舌系文字と後舌系文字とが混じっていたこともあり，従来明解のなかった箇所である．ルーン文字文献で前舌系文字と後舌系文字とが混じっている場合，それはほとんど例外なく外来語と考えてよい．そして今回，私はこれがソグド語の δyn'βr (δēnāβar) 「マニ教僧侶」の女性形 δyn'βr'nc (δēnāβaranc) と全く同じ形をしていることに気付いた．これは東方マニ教会の公用語の1つであったパルチア語の dēnāβar （中世ペルシア語では dēnāwar）からソグド語に入り，そしてソグド語で女性形を形成する接尾辞 -'nc が付き，さらにウイグル語に借用されたマニ教専門用語に違いない．中世イラン語におけるこれらの語の本来の意味は「宗教を持つ者，信心深い人」であるが，東方マニ教会では「選ばれた者，純善人」と同義のマニ教僧侶を指す語として使われた (cf. Chavannes / Pelliot 1911, pp. 554-555; W. Sundermann, "Dīnāvarīya", in *Encyclopaedia Iranica*, VII-4, 1995, pp. 418-419; Sundermann 1997, p. 127)．おそらくここの dinavaranč の直前には男性形の dinavar があり，両者相俟って「マニ僧」全体を指したのであろう．そしてそれは表現としては漢文面第 10 行の「慕闍の徒衆」や第 22 行の「僧徒」に当たるに相違なかろう．これらの「徒衆」と「僧徒」については，既にシャヴァンヌ・ペリオが一般信徒ではなくマニ教僧侶であるとみなしていた (Chavannes / Pelliot 1913, p. 196)．本断片 No. 7 の全体の中の位置を考慮すれば， No. 7c に残されたウイグル語テキストは，漢文テキスト第 19～22 行目に対応する可能性がある．ただし断定はできない．

ところで，このウイグル語形に，マニ教徒が使用した3種の中世イラン語のうちソグド語にしかない接尾辞が付いている事実は，ウイグルにマニ教を伝えたのがソグド人であったとする見方を傍証する．実際， 9 世紀に書かれたと推定されるソグド語のある書簡に δyn'βr'nc (δēnāβaranc) 「マニ教尼僧」という語が在証されている (cf. Sundermann 1984, p. 305)．このような語がカラ=バルガスン碑文の中に，ウイグル語を含む古代トルコ語文献の実例として初めて発見された意義は決して小さくない[1]．

No. 12

	Transliteration	**Transcription**
1	/// T N:Y R T /////	/// atïn (or -tün) yarat-/ //////
2	/// .(t)/ /:d i n ////	////// <u>din[avar?]</u> ///

---

[1] この dinavaranč をはじめ，今回私が新たに読んだいくつかのマニ教用語について，念のためパリのハミルトン氏とベルリンのツィーメ氏とに問い合わせたところ，次のような返事をいただいた．いずれも貴重な情報で，両氏に深く感謝する．1998 年8月4日，ハミルトンより "I have just checked my decipherment of the Runic texts of the Qara Balgassun inscription which I noted in the early 60's based mainly on my readings of the estampages of Bouillane de Lacoste. I find that, like you, I also read aftadan (in Radloff's p. 293, l. 7). In my b, l. 5 (Radloff's l. 3), I read nughosh., and in my l. 12 (Radloff's l. 10) I read dinvranch, which no doubt represents dinavaranch as you suggest."; 1998 年8月21日，ツィーメより "As mentioned earlier, the term dinavaranch appears in an unpublished Manichaean text of Berlin collection with 6 broken lines: U 248 verso (?) line 5 after a sentence mark (:) dinavaranch, (line 6) [....] ishlädi. As their is no further context, is is difficult to judge to which text it belongs, but as on the recto (?) side there is a name which might be Julia, it seems to me that it belongs to a kind of "church history", but I am not sure about it. In formerly edited texts the term does not appear."

3	/ / / (m)/ / /:D N(Q)[a]/ / / /	/ / / / / / / / adïnqa / / / /
4	/ / /:t(ŋ)[r]i:m r:(N)/ / / /	/ / / täŋri mar n-///////////
5	/ / / .:t ü r ü n:Y Y / / /	/ / / / törün yay-/ / /
6	/ / / / ü n:y m a:Q W . / / /	/ / / / / / yemä / / / / /
7	/ / / / /:B T a D N:a T / / /	/ / / / aftadan ata-/ / /
8	/ / / /(r)g i n t a:i n / / /	/ / / [ö]rgintä? in-/ / /
9	/ /[b i]r l a:W L W G:/ / /	/ / birlä uluγ / / / /
10	/ / / / k i:u g r nč / / / / /	/ / /-ki ögrünč / / / / /
11	/ / / / i:Q m G:/ / / / / /	/ / / / / qamaγ / / / / / / /
12	/ / / / D i:nt a[:]/ / / / / /	/ / / / / / / anta / / / / / /
13	/ / / / R a nč:/ / / / / / / /	/ [dinava]ranč / / / / / / / /

Translation

1 / / / / / / make him famous (or, make from) / / / / / / / / /
2 / / / / / / / / / / / [Manichaean priest?] / / / / / / /
3 / / / / / / / / / / / / / to the other / / / / /
4 / / / / / / god-like Mar N-////////
5 / / / / / / / by the law / / / / / / / / / / / /
6 / / / / / / / / / / and / / / / / / / /
7 / / / / / / nominate an aftadan (Manichaean bishop) / / / /
8 / / / / / / at (or from) the throne? / / / / / / / / /
9 / / / / with big (or great) / / / / / / /
10 / / / / / / / / joy (or joyful) / / / / / / /
11 / / / / / / / / / all / / / / / / / / / / /
12 / / / / / / / / / / / there / / / / / / / / /
13 / / / [Manichaean female priest] / / / / / / / / / / / /

和訳

1 / / / / / / その名声を作る（または，～から作る）/ / / / / / / / / / / /
2 / / / / / / / / / / / / / / ［マニ教僧侶？］/ / / / / / / / /
3 / / / / / / / / / / / / / / / / / その他のものに / / / / / /
4 / / / / / / / 神聖なマール=N-//////// / / / / / /
5 / / / / / / / / / 法でもって / / / / / / / / / / /
6 / / / / / / / / / / / また / / / / / / / / /
7 / / / / / / アフタダンに任命 / / / /
8 / / / / / / 玉座？にて（または，より）/ / / / / / / / / /
9 / / / / と一緒に大きな / / / / / / /
10 / / / / / / / / / / 喜び / / / / / / / / /
11 / / / / / / / / / / / / 全て / / / / / / / / / / / / / / /
12 / / / / / / / / / / / / / / / そこにて / / / / / / / / / / / /
13 / / / / ［マニ教尼僧］/ / / / / / / / / / / / / / / /

訳注

No. 12-2, din[avar?] & No. 12-13, [dinava]ranč: 上記の No. 7c-12, dinavaranč に対する注を参照．din[avar?] はもしかしたら din[dar?] かもしれないが，意味は同じである．この din[avar?] / din[dar?] の直前の語をラドロフは täŋri と復元しているが，スペースからみてそれは無理のようである．

No. 12-4, täŋri mar n-////////: mar の -r は前舌の文字で書かれている．この読みは絶対ではないが，直前に täŋri があるので，そのように推測できる． mar はアラム語 mry / mr (mār) から入ったマニ教用語で，元来「（我が）主」を意味する (cf. Boyce 1977, p. 57) が，ウイグルのマニ教会では第1位モジャ・第2位アフタダン・第3位マヒスタクという高位聖職者 (cf. 森安 1991, pp. 71-72) の称号の構成要素となっていた． mar の読みには早くにバングが気付いただけでなく (Bang 1909, p. 417; cf. Hansen 1930, p. 13), さらに彼はこの täŋri mar n-//////// を，本碑文とほぼ同時代のトゥルファン文書 T.II.D. 173a[2] に見えるテングリ=マル=ニウマニ=マヒスタクなる人物 (cf. 森安 1979, p. 216) に比定している．この比定は魅力的ではあるが，まだ情報が余りに少ない時だからこそできた大胆なもので，倉卒には従えない．一方，護は，バン

グ説を知らず，不確実であると断りながらも，ソグド面の βγy m'rm'ny を täŋri mar [mani] に対応させている（護 1992, p. 193）．ただしこの箇所の täŋri mar の直後は，やはりバングがヘイケル本の写真から読んだように N 字の残画らしく，少なくとも m 字ではないので，残念ながらそれを「神なるマール=マーニー」と復元し，この断片をソグド文第 10～11 行の牟羽可汗の記事 (cf. 吉田 1988, pp. 33, 38) と対応させることはできない．吉田によれば，我々の断片 No. 7a のソグド文 3 行目（本体の 12 行目）に βγy (mry) nyw(rw)'n mwz-'k(') とあるので，むしろこれと比較すべきかもしれない．因みに，10 世紀の敦煌出土ウイグル文書には，täŋri mar 号，ないし mar 号を持つマニ高僧が何人も在証される (cf. MOTH, texte 7; 森安 1991, p. 200)．

No. 12-7, aftadan: ラドロフはこの箇所を全く誤読して bta adïn としており (ATIM, Band 1, Lieferung 3, p. 293), オルクンも改善案を出していない (ETY II, p. 37)．しかし正しくは aftadan（> chin. 拂多誕．マニ教教団第 2 位の高僧アフタダン，cf. 石田 1925, p. 162 ＝石田 1973, p. 289; 森安 1991, p. 71) と読まねばならない．ルーン文字文献の中にこの語が在証されるのはこれで 2 度目である (cf. 森安 1997, p. 46, L4 & p. 50, note)．

吉田によれば，この語はソグド面にも現われるが，そのソグド文のある断片はまだ全体の中における位置が決定していないので，残念ながらルーン文字断片の方も相対的位置は決められない．しかし両断片が内容的に対応することはほぼ確実だろう．

以下は吉田のコメントである．吉田は，カラ=バルガスン碑文のルーン文字面（ウイグル語）に aftadan，ソグド面に 'βt'δ'nyh が現われることについて，次のように推定している．ウイグルの牟羽可汗がマニ教に改宗してから，この碑文が建立されるまでのある時期に，オルドゥ=バリクの都にアフタダン（拂多誕）が座するマニ教会が設置された．そのことを記録した部分が，この部分である．どちらの断片も碑文の中の本来の位置を確定することができないが，比較的に保存の良い漢文面を参考にすれば，後半にあったことは間違いないであろう．現在碑文の断片が散在している所に，碑文が本来立っていたのなら，この場所は宮城から 500 m ほど離れた所にある．碑文のそばにあった建物はマニ教の寺院であって，その敷地のどこかに碑文が建てられ，その寺院にアフタダンの座があったのではないだろうか．

No. 14

	Transliteration	**Transcription**
1	/ / / / / / / / m Q a / / / / / / / / / /	/ / / / / / / /-mqa / / / / / / / /
2	/ / / / / / . i D G š:z / / / / / / / / /	/ / / / / / / / / / / / / / / / / / / /
3	/ / / / / / Q i N:Q ny u: / / / / / / / /	/ / / / / /-qïn qanyu / / / / / /
4	/ / / / / y m a:b i z:W . / / / / / / / /	/ / / / / yemä biz / / / / / / / /
5	/ / / / / k ü č l ü g:B W L T W / / / / /	/ / / / / küčlüg boltu / / / / /
6	/ / / / m z:W L W R G š z:b i l(g)[a]/ / /	/ / / /-miz ol uruγsuz bilgä / / /
7	/ / / (m)z Q a:(Q W)R Q(W)N W:Y N W:i N nč L G:/ / /	/ / /-mïzqa qorqunu yanu ïnančlïγ / / /
8	/ / / (i)r:k i:D Q / / / / :m g k s i z n:b / / / /	/ / bir? eki / / / / / / ämgäksizin / / / /
9	/ / / R m Q:Q W N W š m Q:T R T š m Q:/ / / /	/ / /-rmaq qunušmaq tartïšmaq / / / /
10	/ / / ü:š N:(i č)g ü n:(m ŋ)/ / / / / / / / / /	/ / / / ašïn ičgün maŋa? / / / / / /

Translation

1 / / / / / / / / to my / / / / / / / / / / /
2 /
3 / / / / / / / / / what (or which) / / / / / / / / /
4 / / / / / / / and we / / / / / / / / / / / / / /
5 / / / / / / / became powerful / / / / / / /
6 / / / / / / / / / / that seedless (not well-born), wise / / / /
7 / / / being afraid of our / / / /, trustworthy / / / /
8 / / one? or two / / / / / / / / without pain / / / / /
9 / / /-ing, robbing and fighting one another / / / / /
10 / / / / / food and drink to me? / / / / / / / / / /

和訳

1 / / / / / / / / / 私の / / / / / に対し / / / / / / / / / / / /
2 /
3 / / / / / / / / / / / / 何（または，どの）/ / / / / / / / / / / / / / /
4 / / / / / / / / また私たち / / / / / / / / / / / / / / / / / /
5 / / / / / / / / 力強くなった / / / / / / / / / / / / / / /

6 ////////////あの貴種ではない，賢い////
7 ///私たちの//////////に恐れを抱き，信頼に値する////
8 //一？・二の/////////苦痛のない///////
9 ///～すること，奪い合うこと，闘争すること///////
10 ///////食料と飲料を，私に？//////////////